

まつ 松 元 遺 跡
い 井 手 口 遺 跡
つか 塚 原 遺 跡

東九州自動車道建設（西都～清武間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

2001. 3

宮崎県埋蔵文化財センター

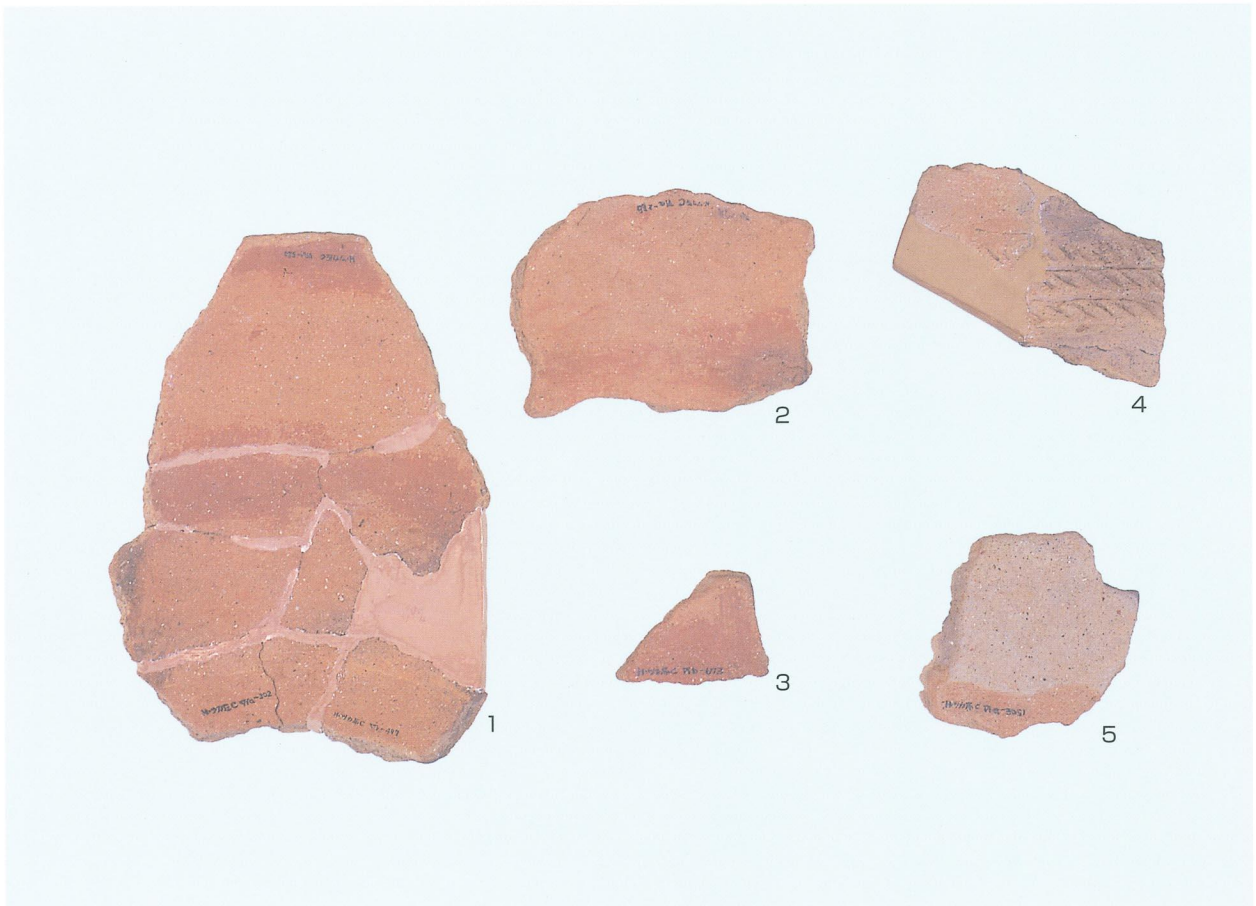
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第44集

まつ 松 元 遺 跡
い 井 手 口 遺 跡
つか 塚 原 遺 跡

東九州自動車道建設（西都～清武間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

2001. 3

宮崎県埋蔵文化財センター



塚原遺跡出土の赤彩土品



塚原遺跡出土の軽石製品

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道西都～清武間建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成7年度から10年度にかけて実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設（西都～清武間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第Ⅷ集であります。

本書に掲載した国富町所在の松元遺跡、井手口遺跡、塚原遺跡は、平成8年から平成9年にかけて発掘調査を行ったものです。この中の塚原遺跡では縄文時代草創期の赤彩のある隆帯文土器や丸ノミ形石斧と敲打具の埋納遺物の出土やこの時期のものと推定される石列の検出、また、古墳時代前期の円墳が発見されるなど注目された遺跡であります。井手口遺跡では、事前の自然科学分析で水田跡の存在が予想されておりましたのでその検出に努めましたが、旧河道以外の遺構は検出されませんでした。しかしながら調査結果は古代以後の水田跡の存在を彷彿させるものでした。松元遺跡では出土量は少ないながらも縄文早期中頃から後半の遺物が2地区でそれぞれ出土するなど、今後、遺物研究をする上で好資料であります。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例 言

1. 本書は、東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した東諸県郡国富町所在の松元遺跡、井手口遺跡、塚原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 現地での実測等の記録は、各遺跡担当の調査員が行った。
4. 本書で使用した遺構・遺物等写真については各遺跡担当の調査員が撮影し、空中写真については(株)スカイサーベイに委託した。
5. 水田跡探査および稲の収量等の算出のための自然科学分析を(株)古環境研究所に委託し、塚原遺跡の水田跡の土壌分析については、綾有機農業研究所（前宮崎県総合農業試験場）有村玄洋氏に依頼した。その内容については、結果の概要のみを掲載している。結果の詳細については当センターへ問い合わせ願いたい。
6. 塚原遺跡の調査にあたって、水田跡の調査については奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長 工楽善通先生、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所調査研究部次長 栗田克己先生、主任調査研究員 矢田勝先生、古墳の調査については宮崎大学教授 柳沢一男先生、出土石器については別府大学教授 橘昌信先生の指導をうけた。
7. 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、遺物実測、トレースは整理作業員の協力を得て各遺跡担当の調査員が行った。
8. 土層断面及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）で、その他は磁北（M. N.と表示）である。
10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SA…竪穴住居、竪穴遺構 SB…掘立柱建物跡 SC…土坑、土壇
SE…溝状遺構 SI…集石遺構
11. 本書の執筆は各遺跡担当の調査員のほか、第四編の第三章第2節 出土石器、第四章の石器についての考察は藤木聡が、第四章の赤色顔料についての考察は竹井眞知子が執筆した。また、石器石材分類表は松田清孝が作成した。編集は面高哲郎、竹井眞知子が行った。
12. 出土遺物その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第一編 はじめに	1
第Ⅰ章 調査に至る経緯	3
第Ⅱ章 調査の組織	3
第Ⅲ章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第二編 松元遺跡	7
第Ⅰ章 遺跡の概要	9
第1節 遺跡周辺の地形と調査区の設定	9
第2節 遺跡の基本層序	9
第3節 調査の概要	9
第Ⅱ章 調査の記録	13
第1節 旧石器時代の遺構と遺物	13
1 遺構	13
2 遺物	15
第2節 縄文時代の遺構と遺物	18
1 遺構	18
2 遺物	35
(1) 土器	35
(2) 石器	50
第3節 弥生時代の遺構と遺物	58
1 遺構と遺物	58
2 包含層の遺物	58
第4節 古墳時代の遺構と遺物	62
1 遺構と遺物	62
2 包含層の遺物	63
第5節 時期不明の遺構	63
第6節 自然科学分析調査	72
1 土層とテフラ	72
2 植物珪酸体分析	75
第Ⅲ章 まとめ	80
第三編 井手口遺跡	95
第Ⅰ章 遺跡の概要	97
第1節 遺跡周辺の地形と調査区の設定	97
第2節 遺跡の基本層序	97
第3節 調査の経過と概要	99
第Ⅱ章 調査の記録	100
第1節 水田跡の調査	100
第2節 自然流路の調査	103
第3節 遺物包含層と出土遺物	111
第Ⅲ章 自然科学分析調査	120
第Ⅳ章 まとめ	124
第四編 塚原遺跡	135
第Ⅰ章 遺跡の概要	137
第1節 遺跡周辺の地形と調査区の設定	137

第2節 遺跡の基本層序	138
第3節 調査の概要	139
第II章 A・B・D地区の調査	143
第1節 A地区	143
1 遺構と遺物	143
2 包含層の遺物	146
第2節 B地区	150
1 遺構と遺物	150
2 包含層の遺物	152
3 自然科学分析調査	159
(1) 塚原遺跡土壌調査	159
(2) B地区におけるプラント・オパール分析	161
第3節 D地区	164
第III章 C地区の調査	168
第1節 旧石器時代の遺構	168
第2節 縄文時代草創期の遺構と遺物	168
1 遺構と遺物	168
2 包含層出土の土器	173
3 出土石器	183
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物	216
1 遺構と遺物	217
2 包含層の遺物	222
第4節 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物	224
1 遺構と遺物	225
2 包含層の遺物	229
第5節 古墳時代の遺構と遺物	234
1 遺構	234
第6節 その他の遺構と遺物	240
第IV章 まとめ	241
第1節 検出遺構について	241
第2節 出土石器	243
第3節 赤色土器	246

挿 図 目 次

第一編 はじめに

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図	5
--------------------------	---

第二編 松元遺跡

第1図 松元遺跡 遺跡周辺の地形と調査区設定図	10
第2図 松元遺跡 土層図	11
第3図 松元遺跡 遺構分布図	12
第4図 松元遺跡 A・C地区の旧石器時代遺構・遺物分布図	13
第5図 松元遺跡 礫群実測図	14
第6図 松元遺跡 旧石器実測図(1)	16

第7図	松元遺跡	旧石器実測図(2)	17
第8図	松元遺跡	A・C地区の縄文時代早期遺構分布図	18
第9図	松元遺跡	集石遺構実測図(1)	23
第10図	松元遺跡	集石遺構実測図(2)	24
第11図	松元遺跡	集石遺構実測図(3)	25
第12図	松元遺跡	集石遺構実測図(4)	26
第13図	松元遺跡	集石遺構実測図(5)	27
第14図	松元遺跡	集石遺構実測図(6)	28
第15図	松元遺跡	集石遺構実測図(7)	29
第16図	松元遺跡	集石遺構実測図(8)	30
第17図	松元遺跡	集石遺構実測図(9)	31
第18図	松元遺跡	集石遺構実測図(10)	32
第19図	松元遺跡	集石遺構実測図(11)	33
第20図	松元遺跡	集石遺構実測図(12)	34
第21図	松元遺跡	A・C地区の縄文時代早期遺物分布図	36
第22図	松元遺跡	縄文土器実測図(1)	38
第23図	松元遺跡	縄文土器実測図(2)	39
第24図	松元遺跡	縄文土器実測図(3)	40
第25図	松元遺跡	縄文土器実測図(4)	41
第26図	松元遺跡	縄文土器実測図(5)	42
第27図	松元遺跡	縄文土器実測図(6)	43
第28図	松元遺跡	縄文土器実測図(7)	44
第29図	松元遺跡	縄文土器実測図(8)	49
第30図	松元遺跡	石器実測図(1)	52
第31図	松元遺跡	石器実測図(2)	53
第32図	松元遺跡	石器実測図(3)	54
第33図	松元遺跡	石器実測図(4)	55
第34図	松元遺跡	石器実測図(5)	56
第35図	松元遺跡	SA2遺構実測図と出土遺物実測図	59
第36図	松元遺跡	SA2遺構出土遺物及びその他弥生土器実測図	60
第37図	松元遺跡	SA1遺構実測図と出土遺物実測図	64
第38図	松元遺跡	SA1及びSA3出土遺物実測図	65
第39図	松元遺跡	SA3遺構と出土遺物実測図	66
第40図	松元遺跡	SA4遺構とSA3・4出土遺物実測図	67
第41図	松元遺跡	その他古墳時代の遺物	68
第42図	松元遺跡	土坑実測図	71
第43図	松元遺跡	各グリッド土層柱状図	74
第44図	松元遺跡	T-1における植物珪酸体分析結果	78
第45図	松元遺跡	T-5、6における植物珪酸体分析結果	79
第三編 井手口遺跡			
第1図	井手口遺跡	基本土層模式図	97
第2図	井手口遺跡	周辺地形図	98
第3図	井手口遺跡	調査区グリッド配置図	100
第4図	井手口遺跡	中央トレンチ南壁(B区北辺)土層断面実測図	101
第5図	井手口遺跡	サブトレンチ土層断面実測図	101

第6図	井手口遺跡	自然流路A・B・C遺構配置図	104
第7図	井手口遺跡	自然流路A・B土層断面実測図	105
第8図	井手口遺跡	自然流路C土層断面および出土遺物実測図	105
第9図	井手口遺跡	自然流路A・B出土遺物実測図(1)	107
第10図	井手口遺跡	自然流路A・B出土遺物実測図(2)	108
第11図	井手口遺跡	自然流路A・B出土遺物実測図(3)	109
第12図	井手口遺跡	包含層および自然流路出土石器実測図	110
第13図	井手口遺跡	包含層出土遺物実測図(1)	112
第14図	井手口遺跡	包含層出土遺物実測図(2)	113
第15図	井手口遺跡	包含層出土遺物実測図(3)	114
第16図	井手口遺跡	各地点の土層模式柱状図とプラント・オパール分析結果(1)	122
第17図	井手口遺跡	各地点の土層模式柱状図とプラント・オパール分析結果(2)	123
第四編 塚原遺跡			
第1図	塚原遺跡	遺跡周辺の地形と調査区設定図	137
第2図	塚原遺跡	C地区の土層図	142
第3図	塚原遺跡	A地区の土層図及び第Ⅲ層の遺構分布図	144
第4図	塚原遺跡	杭実測図及びA地区出土遺物実測図	145
第5図	塚原遺跡	A地区第Ⅳ-b層面遺構分布図と土層図	147
第6図	塚原遺跡	A地区SE2流木等出土状況実測図	148
第7図	塚原遺跡	SE2出土遺物実測図	149
第8図	塚原遺跡	B地区遺構分布図と土層図	151
第9図	塚原遺跡	B地区堰跡実測図	153
第10図	塚原遺跡	B地区堰跡出土木器実測図	154
第11図	塚原遺跡	B地区堰跡出土土器実測図	155
第12図	塚原遺跡	B地区包含層出土遺物実測図(1)	156
第13図	塚原遺跡	B地区包含層出土遺物実測図(2)	157
第14図	塚原遺跡	B地区土壌柱状図	159
第15図	塚原遺跡	B地区土壌断面概略図	160
第16図	塚原遺跡	B地区23-Eにおけるプラント・オパール分析結果	162
第17図	塚原遺跡	D地区土層図	164
第18図	塚原遺跡	D地区包含層出土遺物実測図(1)	165
第19図	塚原遺跡	D地区包含層出土遺物実測図(2)	166
第20図	塚原遺跡	C地区縄文草創期遺構・土器分布図	169
第21図	塚原遺跡	SI12及び出土遺物実測図	170
第22図	塚原遺跡	SI13実測図	171
第23図	塚原遺跡	石列及び土層、出土遺物実測図	172
第24図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(1)	175
第25図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(2)	176
第26図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(3)	177
第27図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(4)	178
第28図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(5)	179
第29図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(6)	180
第30図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(7)	181
第31図	塚原遺跡	包含層出土草創期土器実測図(8)	182
第32図	塚原遺跡	出土石器実測図(1)	186

第33図	塚原遺跡	出土石器実測図 (2)	187
第34図	塚原遺跡	出土石器実測図 (3)	188
第35図	塚原遺跡	出土石器実測図 (4)	189
第36図	塚原遺跡	出土石器実測図 (5)	190
第37図	塚原遺跡	出土石器実測図 (6)	191
第38図	塚原遺跡	出土石器実測図 (7)	192
第39図	塚原遺跡	出土石器実測図 (8)	193
第40図	塚原遺跡	出土石器実測図 (9)	194
第41図	塚原遺跡	出土石器実測図 (10)	195
第42図	塚原遺跡	出土石器実測図 (11)	196
第43図	塚原遺跡	出土石器実測図 (12)	197
第44図	塚原遺跡	出土石器実測図 (13)	198
第45図	塚原遺跡	出土石器実測図 (14)	199
第46図	塚原遺跡	出土石器実測図 (15)	200
第47図	塚原遺跡	出土石器実測図 (16)	201
第48図	塚原遺跡	出土石器実測図 (17)	202
第49図	塚原遺跡	出土石器実測図 (18)	203
第50図	塚原遺跡	出土石器実測図 (19)	204
第51図	塚原遺跡	出土石器実測図 (20)	205
第52図	塚原遺跡	出土石器実測図 (21)	206
第53図	塚原遺跡	出土石器実測図 (22)	207
第54図	塚原遺跡	出土石器実測図 (23)	208
第55図	塚原遺跡	C地区縄文早期遺構分布図	216
第56図	塚原遺跡	S I 1、3、4及び出土遺物実測図	219
第57図	塚原遺跡	S I 5～8及び出土遺物実測図	220
第58図	塚原遺跡	S I 9～11及び出土遺物実測図	221
第59図	塚原遺跡	包含層出土早期土器実測図	223
第60図	塚原遺跡	C地区弥生時代及びその他遺構分布図	224
第61図	塚原遺跡	S C 1及び出土遺物実測図	225
第62図	塚原遺跡	S C 2、3、7及び出土遺物実測図	227
第63図	塚原遺跡	S 5及び出土遺物実測図	230
第64図	塚原遺跡	S C 5、6、8及び出土遺物実測図	231
第65図	塚原遺跡	包含層出土弥生土器実測図 (1)	232
第66図	塚原遺跡	包含層出土弥生土器実測図 (2)	233
第67図	塚原遺跡	C地区古墳実測図	235
第68図	塚原遺跡	古墳土層実測図	236
第69図	塚原遺跡	古墳主体部実測図	238
第70図	塚原遺跡	古墳出土遺物実測図	239
第71図	塚原遺跡	その他遺構実測図	240
第72図	塚原遺跡	C地区における石斧製作	244
第73図		蛍光X線等による分析の結果	247

目 次

第二編 松元遺跡

第1表	松元遺跡	出土石器計測表(1)	17
第2表	松元遺跡	出土土器観察表(1)	45
第3表	松元遺跡	出土土器観察表(2)	46
第4表	松元遺跡	出土土器観察表(3)	47
第5表	松元遺跡	出土土器観察表(4)	48
第6表	松元遺跡	出土石器計測表(2)	57
第7表	松元遺跡	出土土器観察表(5)	61
第8表	松元遺跡	出土土器観察表(6)	69
第9表	松元遺跡	出土土器観察表(7)	70
第10表	松元遺跡	T-6のテフラ検出分析結果	74
第11表	松元遺跡	屈折率測定結果	74
第12表	松元遺跡	における植物珪酸体分析結果	78
第13表	縄文土器分類別分布状況表		80
第14表	石鏃分類別分布状況表		81

第三編 井手口遺跡

第1表	井手口遺跡	出土遺物観察表(1)	115
第2表	井手口遺跡	出土遺物観察表(2)	116
第3表	井手口遺跡	出土遺物観察表(3)	117
第4表	井手口遺跡	出土遺物観察表(4)	118
第5表	井手口遺跡	出土遺物観察表(5)	119
第6表	井手口遺跡	におけるイネのプラント・オパールの検出状況	121
第7表	井手口遺跡	におけるプラント・オパール分析結果表	122

第四編 塚原遺跡

第1表	塚原遺跡A地区	出土遺物観察表	145
第2表	塚原遺跡A地区	出土木器観察表	149
第3表	塚原遺跡B地区	堰周辺出土木器観察表	154
第4表	塚原遺跡B地区	堰周辺出土遺物観察表	155
第5表	塚原遺跡B地区	出土遺物観察表	158
第6表	塚原遺跡B地区	におけるプラント・オパール分析結果表	163
第7表	塚原遺跡B地区	出土遺物観察表	167
第8表	接合資料A類	の概要	185
第9表	塚原遺跡C地区	石器計測表	209
第10表	石器石材	分類表	212
第11表	流紋岩	の分類基準(新)	214
第12表	石器石材	分類表(流紋岩系)(旧)	215
第13表	塚原遺跡C地区	出土石器の石材層別傾向表	243

第一編 はじめに

第Ⅰ章 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年2月に基本計画がなされ、平成3年12月には西都～清武間が整備計画路線となっている。この西都～清武間は、平成5年11月に建設大臣から日本道路公団へ施工命令が出され、公団では平成6年度から事業に着手している。その間、県教育委員会文化課では、平成3年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工による影響部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成7年度は文化課直営で、平成8年度からは宮崎県総合博物館から分離・独立した宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

国富町大字木脇・大字塚原周辺では、事前の分布調査で確認されている松元遺跡、井手口遺跡、木脇遺跡の一部が路線にかかっている。その後の分布で塚原遺跡の所在する台地の東裾の緩斜面で遺物の散布が確認され、また、沖積地については水田跡が所在する可能性があったので、試掘調査を実施して遺構の所在の有無の確認を行うことにした。試掘調査の結果、沖積地において古代から中世の時期と推定される水田跡が確認されたので、塚原遺跡の範囲をこの部分まで拡大している。また、台地の南東の突端部は塚原遺跡の範囲には含まれていなかったが、樹木伐採後の試掘調査の結果、遺構・遺物が検出されたのでこの部分も塚原遺跡として発掘調査を実施した。

松元遺跡、井手口遺跡についても事前に確認調査を実施しており、その結果から遺跡の推定範囲のほぼ全域発掘調査を実施している。これらの遺跡の調査期間及び調査面積は下記のとおりである。

松元遺跡	平成8年11月14日～平成9年9月8日	11,400m ²
井手口遺跡	平成8年5月8日～平成9年1月23日	8,000m ²
塚原遺跡	平成8年9月17日～平成9年10月22日	6,500m ²

第Ⅱ章 調査の組織

松元遺跡、井手口遺跡、塚原遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教 育 長	田原直廣 (平成8年度)	岩切重厚 (平成9年度)
	笹山竹義 (平成10～12年度)	
文 化 課 長	江崎富治 (平成8年度)	仲田俊彦 (平成9～11年度)
	黒岩正博 (平成12年度)	
埋蔵文化財係長	面高哲郎 (平成8年度)	北郷泰道 (平成9～11年度)
	石川悦雄 (平成12年度)	
調 整 担 当	主査 永友良典 (平成8年度)	主査 柳田宏一 (平成9年度)
	主任主事 重山郁子 (平成10～11年度)	主事 飯田博之 (平成12年度)

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	藤本健一 (平成8・9年度)	田中 守 (平成10・11年度)
	矢野 剛 (平成12年度)	

副 参 事 木幡文夫 (平成 8 年度)
 副 所 長 岩永哲夫 (平成 8・9・12年度) 江口京子 (平成11年度)
 菊池茂仁 (平成12年度)
 調査第一課長 面高哲郎 (平成12年度)
 調査第一係長 岩永哲夫 (平成 8 年度兼務) 面高哲郎 (平成 9～12年度)
 調 整 担 当 主 事 飯田博之 (平成 8 年度) 主 査 菅付和樹 (平成 9～11年度)
 主査 倉永英季 (平成12年度)

〈調査担当〉

塚原遺跡

主任主事・主査 松原宗一 (平成 8～10年度) 主 査 園田和宏 (平成 8～10年度)
 係 長 面高哲郎 (平成 9～12年度) 調査員 釜瀬明宏 (平成 8 年度)

井手口遺跡

主 査 江田 誠 (平成 8～10年度) 主任主事 竹井眞知子 (平成 9～12年度)

松元遺跡

主任主事 柳田益宏 (平成 8～10年度)

第Ⅲ章 遺跡の位置と歴史的環境

宮崎県のほぼ中央部には九州山地を背にし、東に日向灘を望む直角三角形の宮崎平野と呼称される洪積台地が存在しており、この台地は、東流する小丸川、一ツ瀬川、大淀川などによって分断されている。分断された台地は小河川によって浸食・開析され大小の台地が形成されている。各々の台地上には160mほどを最高位にして東に向かって20～30mほどの段差をもって低くなっていく段丘面があり、その段丘面は「旧茶臼原面」、「茶臼原面」、「三財原面」、「新田原面」などと呼ばれている。宮崎県内ではこのような台地を西都原、新田原、六ノ原などのように「ばる」とよばれている。やや規模の大きい台地は、西都市・新富町、高鍋町を中心とした宮崎平野の中央部に多く見られる。

宮崎平野の南部、大淀川及びその支流本庄川沿いにおいては、河川による浸食・開析が著しく谷が樹枝状に入り組んだ丘陵地や丘陵性台地などが見られ、また、台地は小規模なものが多い。河川により浸食された低地は、現在、水田として利用されている沖積地となっている。

今回、東九州自動車道建設に伴って発掘調査した塚原遺跡、木脇遺跡、井手口遺跡、松元遺跡は、大淀川と本庄川が合流する北の台地上或いは沖積地に立地し、行政的には宮崎市大字岩知野に隣接した東諸県郡国富町大字塚原、大字木花に所在している。

調査地周辺の遺跡の分布状況に目を向けると、現在、確認されている遺跡は台地上中心であり、発掘調査も台地中心である。沖積地においては発掘調査例が少ないため、遺跡の内容などに不明な点は多い。分布調査などの結果からは、沖積地内の微高地や自然堤防などにおいては弥生時代以降の遺跡が確認されているが、弥生時代の遺跡は多くはない。近年の調査地周辺の発掘調査の成果を見ると、沖積地においては古墳時代以降の水田跡が宮崎市町屋敷遺跡、同市平田迫遺跡が発掘調査され、丘陵あるいは台地などの裾に展開する幅の狭い緩斜面や段丘上、自然堤防に立地する高岡町八見遺跡、宮崎市井尻遺



- | | | | | | | |
|---------------|------------|-----------|-------------|-----------|----------|----------|
| 1 塚原遺跡 | 2 木脇遺跡 | 3 井手口遺跡 | 4 松元遺跡 | 5 本庄遺跡 | 6 宮王丸遺跡 | 7 上ノ原遺跡 |
| 8 堂ヶ峰遺跡 | 9 桑鶴遺跡 | 10 木脇古墳群 | 11 木脇城跡 | 12 上岩知野遺跡 | 13 柿木原遺跡 | |
| 14 柿木原地下式横穴墓群 | 15 祇園町墓地遺跡 | 16 中尾遺跡 | 17 金剛寺原第2遺跡 | 18 上野遺跡 | | |
| 19 瓜生野小学校校庭遺跡 | 20 (竹下)横穴墓 | 21 小谷遺跡 | 22 花見新田遺跡 | 23 上三生江遺跡 | | |
| 24 三生江遺跡 | 25 桑木遺跡 | 26 矢越遺跡 | 27 真道遺跡 | 28 野間遺跡 | 29 城ヶ峰遺跡 | 30 町屋敷遺跡 |
| 31 倉岡村古墳 | 32 中別府遺跡 | 33 倉岡第2遺跡 | 34 倉岡遺跡 | 35 龍泉寺遺跡 | 36 柿迫遺跡 | |
| 37 糸原遺跡 | 38 前向遺跡 | 39 戸森遺跡 | 40 倉岡城跡 | 41 八兒遺跡 | 42 迫内遺跡 | 43 友尻遺跡 |
| 44 白糸城跡 | 45 井尻遺跡 | 46 深田遺跡 | 47 生目古墳群 | 48 石ノ迫遺跡 | 49 跡江貝塚 | 50 真越遺跡 |

第1図 遺跡の位置及び周辺遺跡分布図

跡、同市深田遺跡などの調査で古代の以降が検出される例が多くなっている。

調査地周辺で発掘調査された遺跡はそれほど多くはないが、調査された遺跡から周辺遺跡状況を見ると、旧石器時代の遺跡は、国富町木脇遺跡、宮崎市金剛寺原第2遺跡などではA T上位でナイフ形石器などが出土している。縄文時代の遺跡は、草創期の隆帯文土器が木脇遺跡で出土している。早期の遺跡は、木脇遺跡、宮崎市上岩知野遺跡、金剛寺原第2遺跡、同市柿迫遺跡で集石遺構などが検出され、平成2年度、国富町教育委員会が発掘調査を実施した塚原台地の南から東にかけての縁辺部では押型文土器、手向山式土器が出土している。宮崎市倉岡第2遺跡で後期の綾式土器、また、倉岡第2遺跡、柿迫遺跡では晩期の孔列文土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、国富町上ノ原遺跡、塚原遺跡、倉岡第2遺跡、宮崎市石ノ迫遺跡が調査されている。塚原遺跡の南縁辺部では中期後葉から後期の集落跡、東縁辺部は後期の集落跡で南北の傾斜地でV字溝が確認されている。石ノ迫遺跡は中期中葉から後期後葉の集落跡で、後期初頭から後葉にかけては環濠集落が営まれていたと考えられている。また、遺跡では2段掘りの土壇群が検出されており、これは弥生終末の集落廃絶後に造営されたものと考えられている。上ノ原遺跡では瀬戸内地方の中期末の矢羽透の高坏を模倣した土器や中溝式土器が出土し、倉岡第2遺跡でもほぼ同時期の土器が出土している。

古墳時代の遺跡のなかで古墳の分布状況についてふれると、塚原台地では、台地南縁辺部に木脇古墳群（円墳17基）、西縁辺部では長方板革綴短甲等を出土した木脇塚原地下式横穴墓A号が所在し、また、平成2年度の町の調査の際にも地下式横穴墓が1基、今回の調査地、東2mの位置には、長径15.0m、短径9.7m、高さ1.7mほどを測る、円墳と言うよりは張出部をもつ円墳の観のある古墳が所在している。周辺に目をやると、沖積地を挟んだ北東台地上の上岩知野遺跡内には円墳から構成される瓜生野古墳群や柿木原地下式横穴墓群、台地南東3km、大淀川を挟んだ対岸の台地上には、古墳前期の首長墓が存在する生目古墳群が所在し、西約2kmには前方後円墳や円墳、地下式横穴墓などから構成されている本庄古墳群などが所在している。また、南2km、本庄川を挟んだ対岸の丘陵上などには倉岡村古墳群が所在している。その南の迫内遺跡では丘陵上で前期末頃の円墳や後期の横穴墓が発掘調査によって発見されている。

調査地周辺には多数の古墳が所在しているが、集落の調査例は少なく、木脇遺跡、倉岡第2遺跡、八見遺跡などがあるのみで少なく、その時期は中期以降のものである。

古代の遺跡は、先述したように少ない。八見遺跡では胡洲鏡、銅鈴が副葬された土壇が、井尻遺跡、深田遺跡、木脇遺跡では集落跡が調査されている。

中世の遺跡についても調査例は少なく、柿迫遺跡で城館跡、中別府遺跡で集落跡の一部が調査され、町屋敷遺跡では水田跡が調査されているのみである。周辺には木脇城跡、倉岡城跡、白糸城跡などが所在し、宮王丸遺跡には城館跡が所在している。

調査地周辺には多数の遺跡は所在しているが、調査例が多くはないため詳細は不明な点が多く今後の調査に期待されるところが多い。

第二編 松元遺跡

第 I 章 遺跡の概要

第 1 節 遺跡周辺の地形と調査区の設定

本遺跡は、東西を河川によって開析され、南北に延びた洪積台地上に立地している。当台地は、宮崎層群の上に段丘礫層がのり、その上に第 3 オレンジ下の褐色ローム以上の日向ローム層に覆われている（西都原面に相当する）。標高約 57m を最高位にして、東ないし南に向かって低くなっており、南端付近の標高は約 50m を測る。東西眼下の谷には小河川が南流し、台地縁辺は急崖となっている。沖積地との比高差は約 30m である。東側の谷下に湧水点も確認されている。

台地上には時期不詳の土器片の散布があり、平成 8 年 9 月 24・25 日の 2 日、確認調査を実施した。7カ所のトレンチを設定し調査したところ、アカホヤ直下の褐色土から黒曜石片 1 点、黒曜石製の石鏃 1 点、石斧 1 点が出土した。地形から台地全面が遺跡の範囲と推定されたので、路線にかかる台地上の西縁辺全域を調査対象とした。

本調査は、平成 8 年 10 月 14 日から平成 9 年 9 月 5 日までの間実施した。調査対象地は南北に細長かったため、本調査実施にあたっては、調査区を南から A 地区、B 地区、C 地区に分けて設定し、グリッドは、国土座標に合わせて 10m のグリッドを東西方向に西から A～M、南北方向を北から 4～23 に区分して設定した。

第 2 節 遺跡の基本層序

遺跡の基本層序は、右記のとおりで県央地区の層序と概ね同じである。Ⅵ層は黒色斑状を含む暗褐色土、Ⅶ層は 15,000 年前の小林軽石のブロックを多く含む暗褐色土（15,000 年前）である。層の残存状況は、調査区によって耕作の影響などにより異なっており、基本層序が残存しているのは、第Ⅳ層アカホヤが谷状に堆積していた B 地区のみである。包含層は、第Ⅱ層、第Ⅲ層が弥生、古墳時代、第Ⅴ層が縄文早期、第Ⅵ層～第Ⅷ層が旧石器時代である。

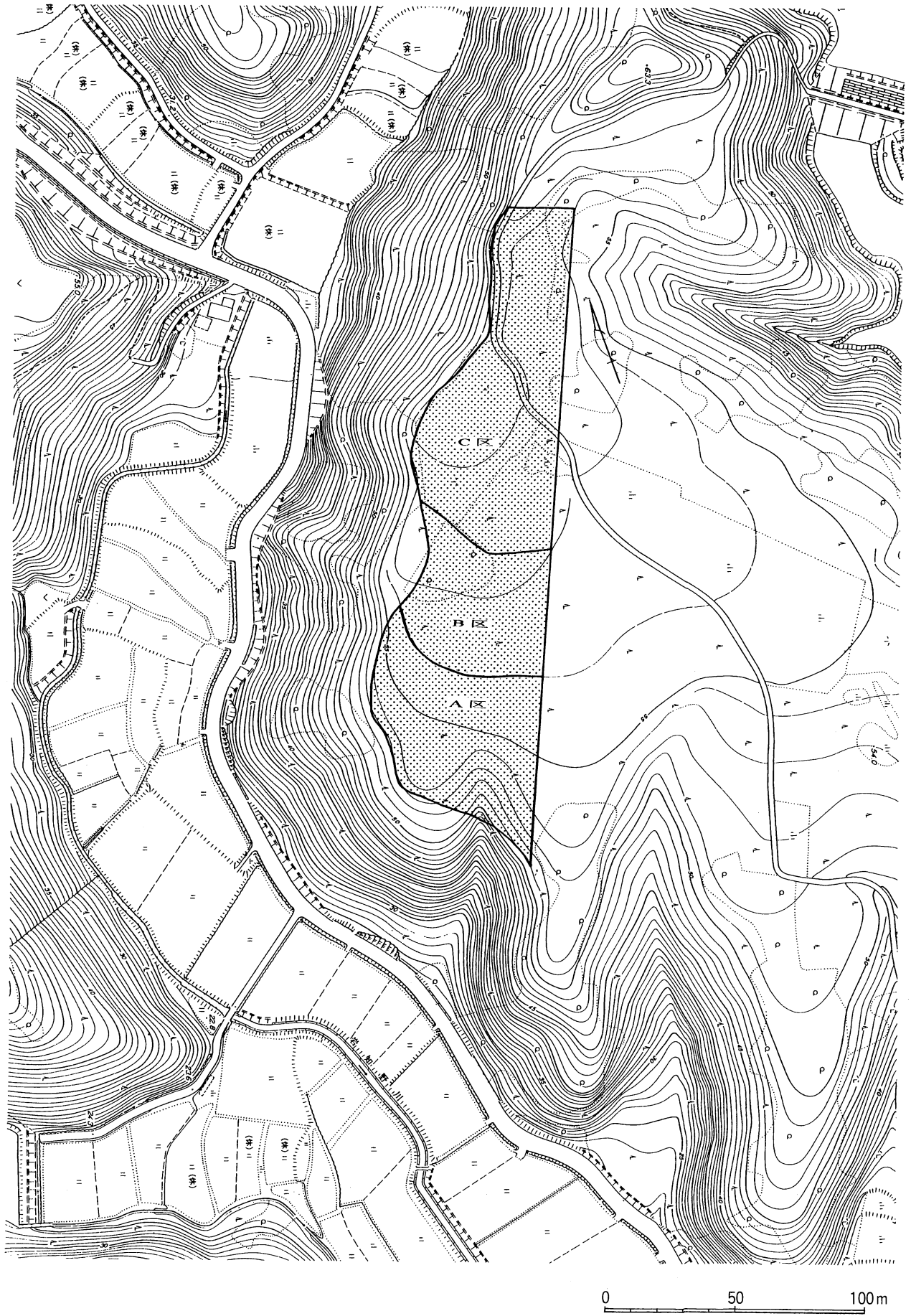
第Ⅰ層	表土
第Ⅱ層	黒色土
第Ⅲ層	褐色土
第Ⅳ層	アカホヤ
第Ⅴ層	褐色土
第Ⅵ層	若干暗い褐色土
第Ⅶ層	小林軽石混りの暗褐色土
第Ⅷ層	褐色土混りの暗褐色土
第Ⅸ層	若干暗い褐色土
第Ⅹ層	黄色がかった褐色土
第Ⅺ層	暗灰褐色砂質土
第Ⅻ層	A T

基本層序

第 3 節 調査の概要

調査は、重機の搬入ができなかったため、南側急斜面を掘削し、搬入路を確保することから着手した。調査区全体は、山林であったため、木材切り出しの際の残木等に覆われ、また、その下には杉の切り株が多数あったため、人力で除去する作業を行った。

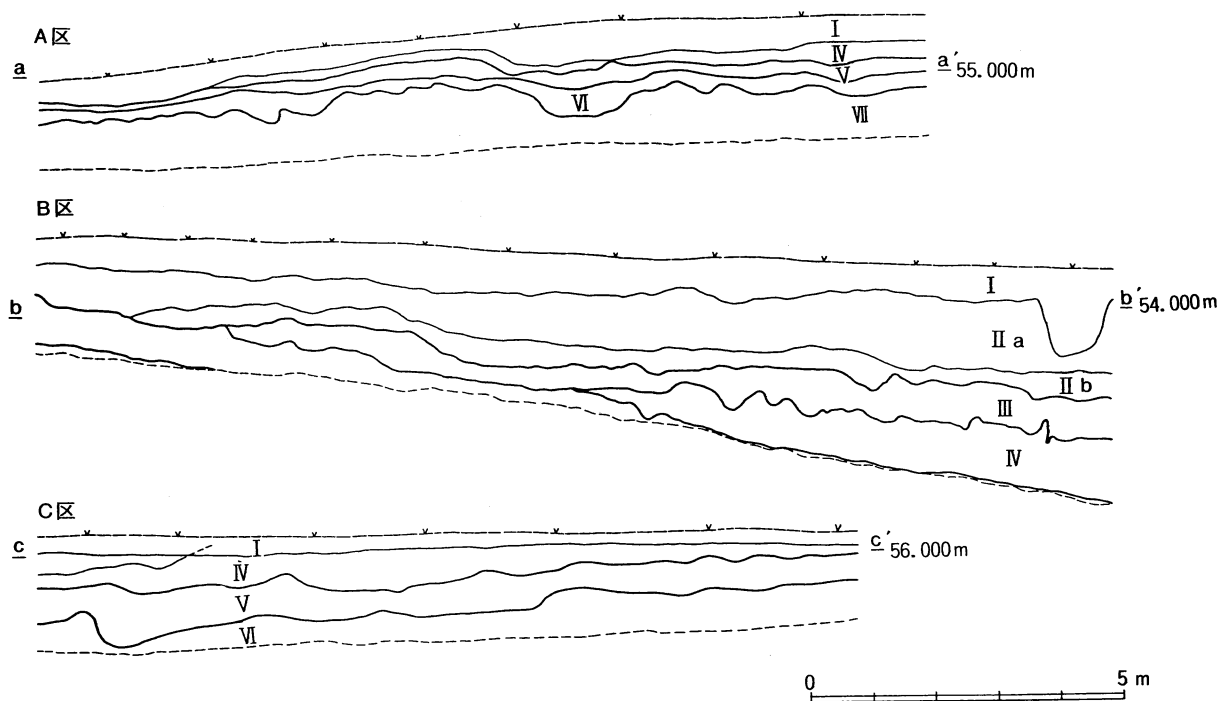
A 区は、表土を除去すると第Ⅳ層アカホヤ層が東側の約 200m² の範囲にしか堆積しておらず、A 地区のほとんどがⅤ層（暗褐色土）上面が露出している状態だった。遺構はⅤ層で縄文時代早期の集石遺構が 27 基、時期が不明の土坑が 2 基、ピットは確認できないが、住居跡の可能性のある竪穴遺構が 4 基検出された。それらの時期は、出土遺物から 1 基は弥生時代、他の 3 基は古墳時代の遺構と考えられる。第Ⅶ層下位の包含層の内容確認のためトレンチ調査を試みたところ、第Ⅷ層褐色土混りの暗褐色土上面



第1図 松元遺跡 遺跡周辺の地形と調査区設定図

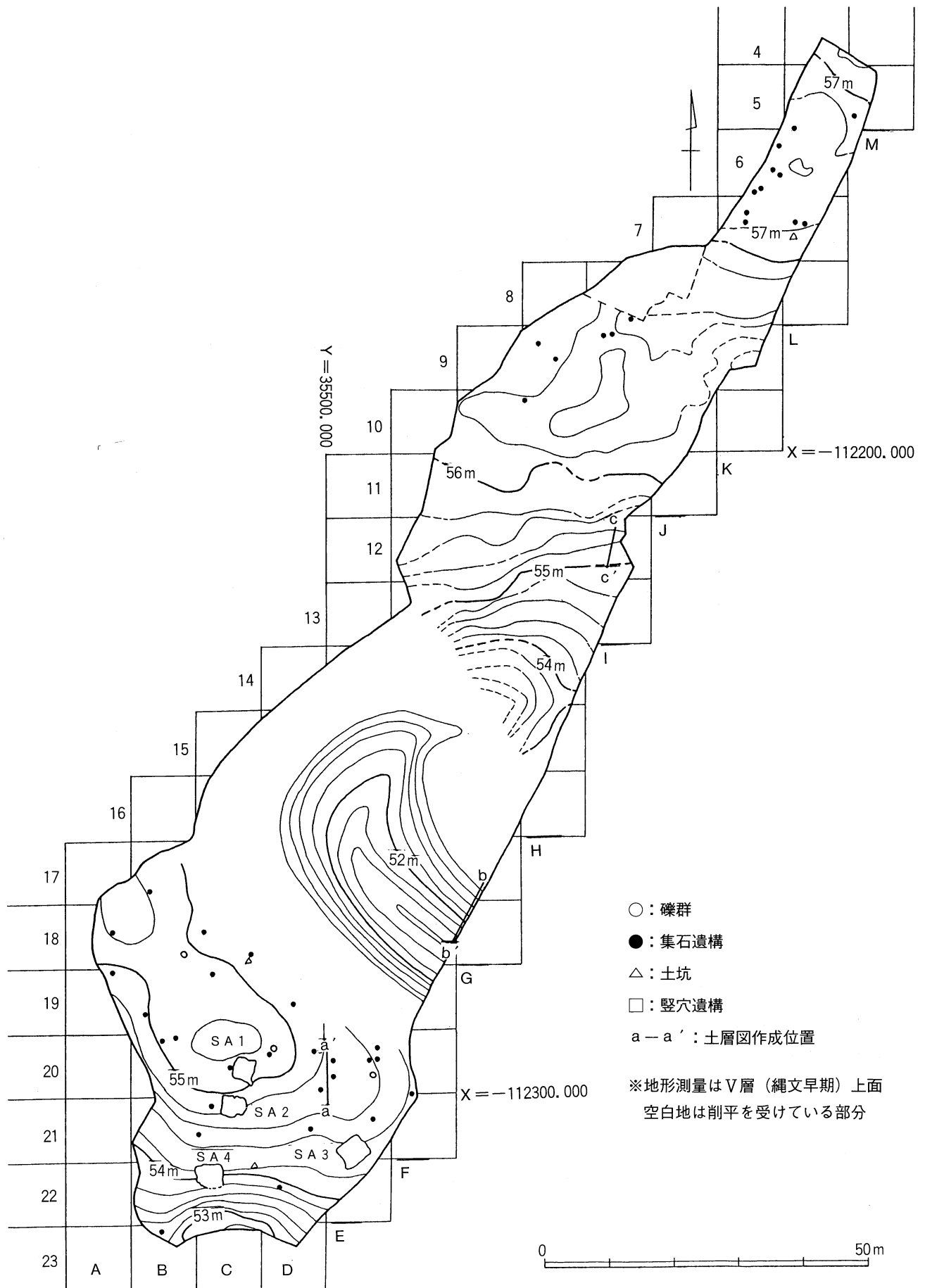
から旧石器時代の遺構と思われる礫群3基を検出した。

B地区は、表土を除去すると中央から東側にかけてII層の黒色土に覆われていたが、その周辺部は削平を受けていた。また、B地区は、A地区とC地区に挟まれた窪地状になっていたため、A地区境からC地区境までトレンチを東端と中央付近に入れて土層状況を確認した。その結果、第IV層アカホヤ上面の高低差を比較するとA区と2.7m、C地区と5.5mの落差があった。また、土層の状況は、削平を受け、第VI層、第VII層が表層になっている部分もあり、遺構は検出されなかった。C地区は、その北半部は尾根状の地形を呈している。表土を除去するとほぼ南側半分には第II層から堆積し、北側は第IV層からの残存を確認した。第V層から縄文時代早期の集石遺構と思われるもの17基、時期不明の土坑1基が検出された。第VI層以下については、トレンチ法で実施したが、遺構などは確認できなかった。



- I 層；表土で暗褐色を呈する。
- II a 層；大隅軽石、新燃岳スコリアを含む黒色土
- II b 層；赤褐色の高原スコリアを含む黒色土
- III 層；粘性がややあって、乾燥すると白っぽくなり、風に舞いやすい白色粒、褐色粒を含む褐色土
- IV 層；アカホヤ
- V 層；粘性はややなく、乾燥するとサラサラしている褐色土
- VI 層；黒色斑状を含み、粘性のある明褐色土
- VII 層；小林軽石をブロック状に多く含み、硬質でかなり締まりのある黒灰色土

第2図 松元遺跡 土層図



第3図 松元遺跡 遺構分布図

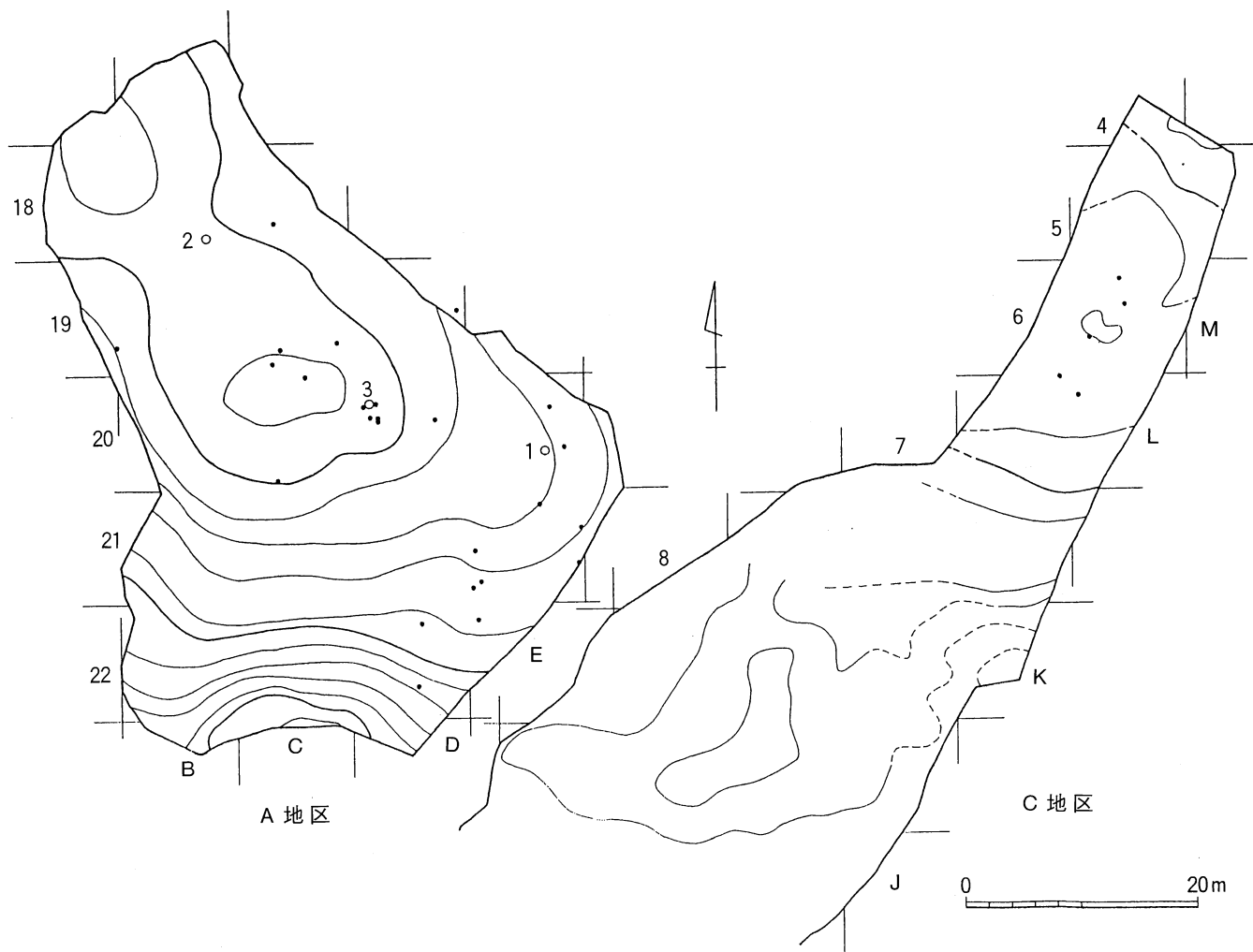
第Ⅱ章 調査の記録

第1節 旧石器時代の遺構と遺物

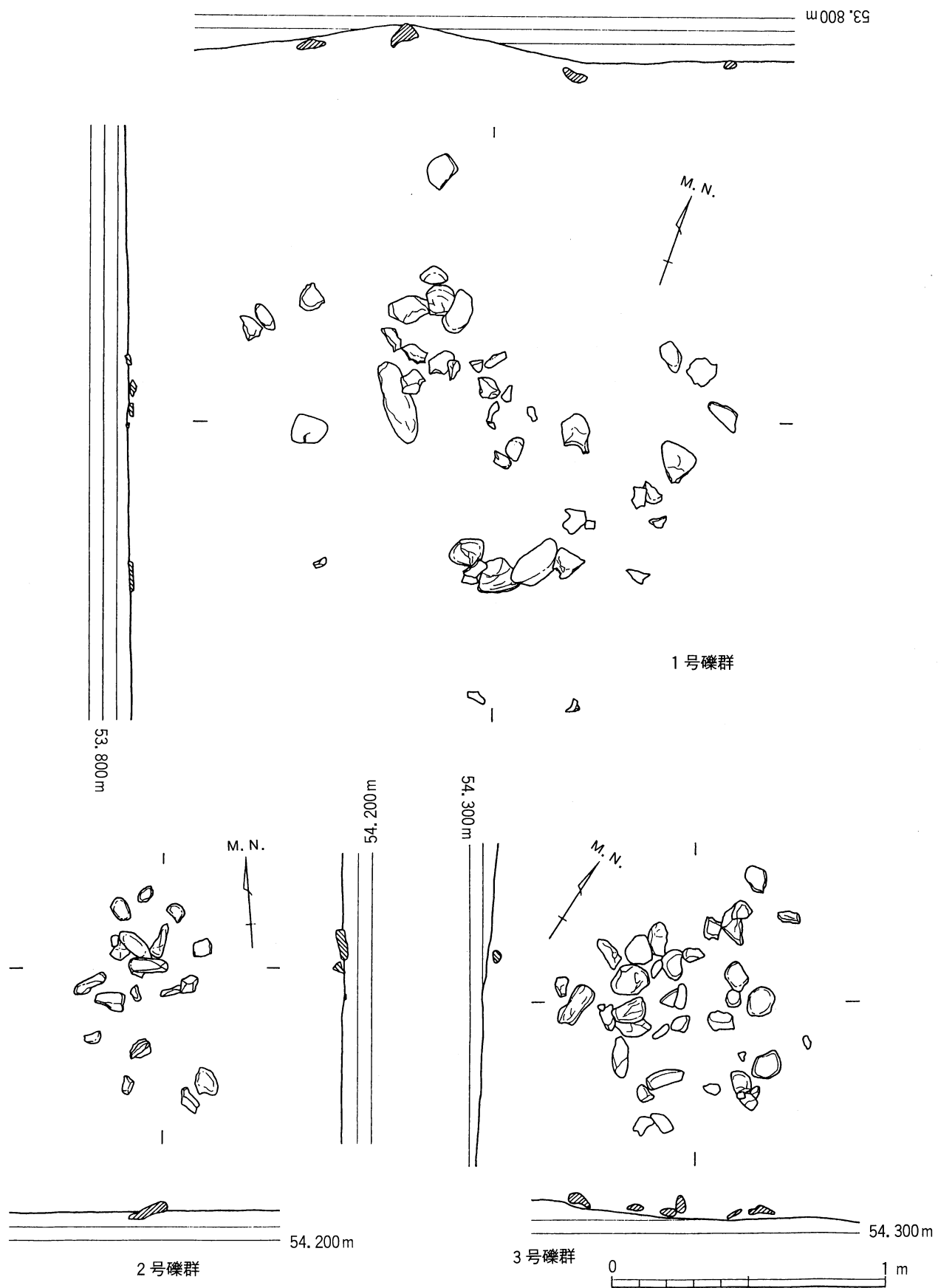
旧石器時代の調査は、A地区ではトレンチ法によって行った。その結果、第Ⅷ層で礫群3基検出され、第Ⅵ～Ⅷ層で遺物が出土している。また、C地区においては第Ⅴ層の縄文時代早期の文化層と部分的に混在してしている。

1 遺構 (第4、5図)

A地区のⅧ層で礫群を3基検出した。1号礫群はE-20グリッドのⅧ層中程で、径200cmの範囲内に不整で集まり具合が疎な状態で検出された。下部に掘り込みはない。2号礫群はB-18グリッドのⅧ層で検出された。径80cmの範囲内に、20個の破碎礫が不整に集石している。赤片しているものは1個だけである。下部に掘り込みはない。3号礫群はD-20グリッドのⅧ層中程から、径100cmの範囲内に不整で集まり具合が疎な状態で検出された。



第4図 松元遺跡 A・C地区の旧石器時代遺構・遺物分布図



第5図 松元遺跡 礫群実測図

2 遺物

旧石器の出土総数は28点である。内訳はナイフ形石器9点、三稜尖頭器3点、スクレイパー2点、頁岩製の細石核2点、黒曜石製の細石核のブランク10点、細石刃1点、使用痕剥片1点の計28点である。

ナイフ形石器（第6図1～6）

ナイフ形石器は9点出土した。1・2は、頁岩製の縦長剥片を素材としている。いずれも二側辺に加工を施したものである。裏面及び表面からの調整が見られ、左右両側縁に刃潰し加工が施されている。断面形は三角形を呈している。刃は左位に設定されている。1はⅥ層、2はⅧ層から検出した。3は頁岩製の横長剥片を素材とし、二側辺に加工を施している。1、2と同様の刃潰し加工が施されている。断面形は三角形を呈している。刃は左位に設定されている。A区のⅨ層から出土している。4は、やや不定形な剥片を素材とし、打面側を基部に設定している。打面はわずかに残存する。調整は、基部及び先端部左側に部分的に施される。なお、先端部は欠損している。5は、縦長剥片を素材とし、両側縁に調整加工を施している。調整は、主要剥離面から急角度で施されるが、中には逆からの調整を行うものがある。下半部は欠損している。6は、打面がおおむね台形を呈し、左側に調整加工を施したナイフである。下半部は欠損している。

三稜尖頭器（第6図7～9）

三稜尖頭器は3点出土した。7は、頁岩製の三稜尖頭器である。表面に自然面を持った縦長剥片を素材とし、その調整加工は主に左側縁にみられる。剥片の打面を下位に置き、裏面から調整を加えて形を整えている。断面形は、台形を呈している。8は、縦長剥片の打面を基部にし、稜を境にして両側縁とも外側から調整を加えている。剥離はかなり垂直に近い角度で行われ、その結果断面形は二等辺三角形を呈する。先端は欠損している。9はC区のⅤ層で出土した。砂岩製の三稜尖頭器である。先端部は尖らず、やや丸みをもった形状になっている。調整加工は、表裏両面ともにみられる三面加工が施されている。断面形は、ほぼ三角形を呈する。

スクレイパー（第6図10、11）

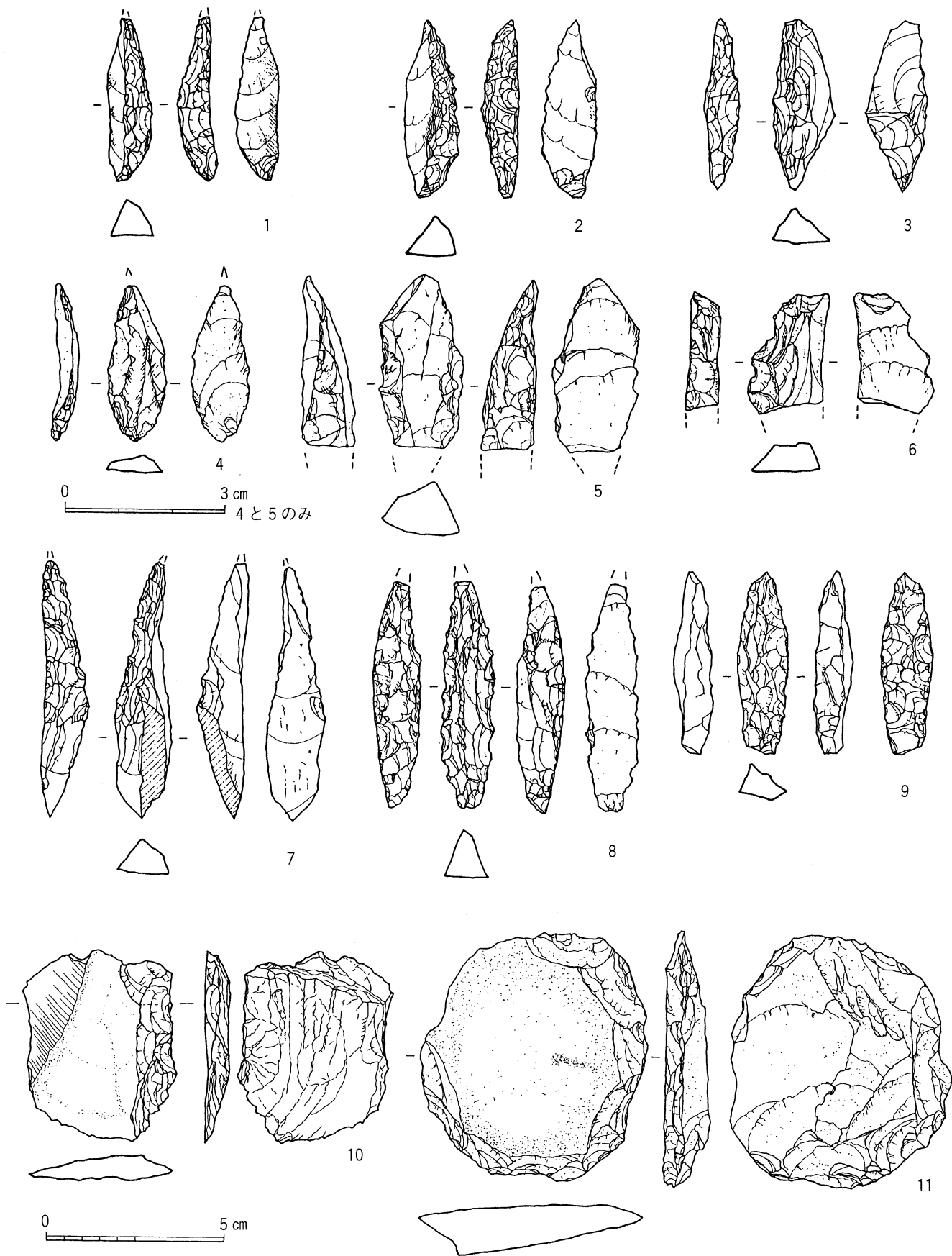
10は、右側縁部に刃部形成の調整剥離がみられ、刃部端を結ぶ線と石器の主軸との関係は、直行している。表面の中央部には3分の2の自然面が残っており、その左側に擦痕がある。素材は薄い縦長剥片である。11は、表側は全周の3/4程度に求心状の剥離が施され、裏側は厚みのある下縁部に刃部調整が行われている。

石核（第7図12、13）

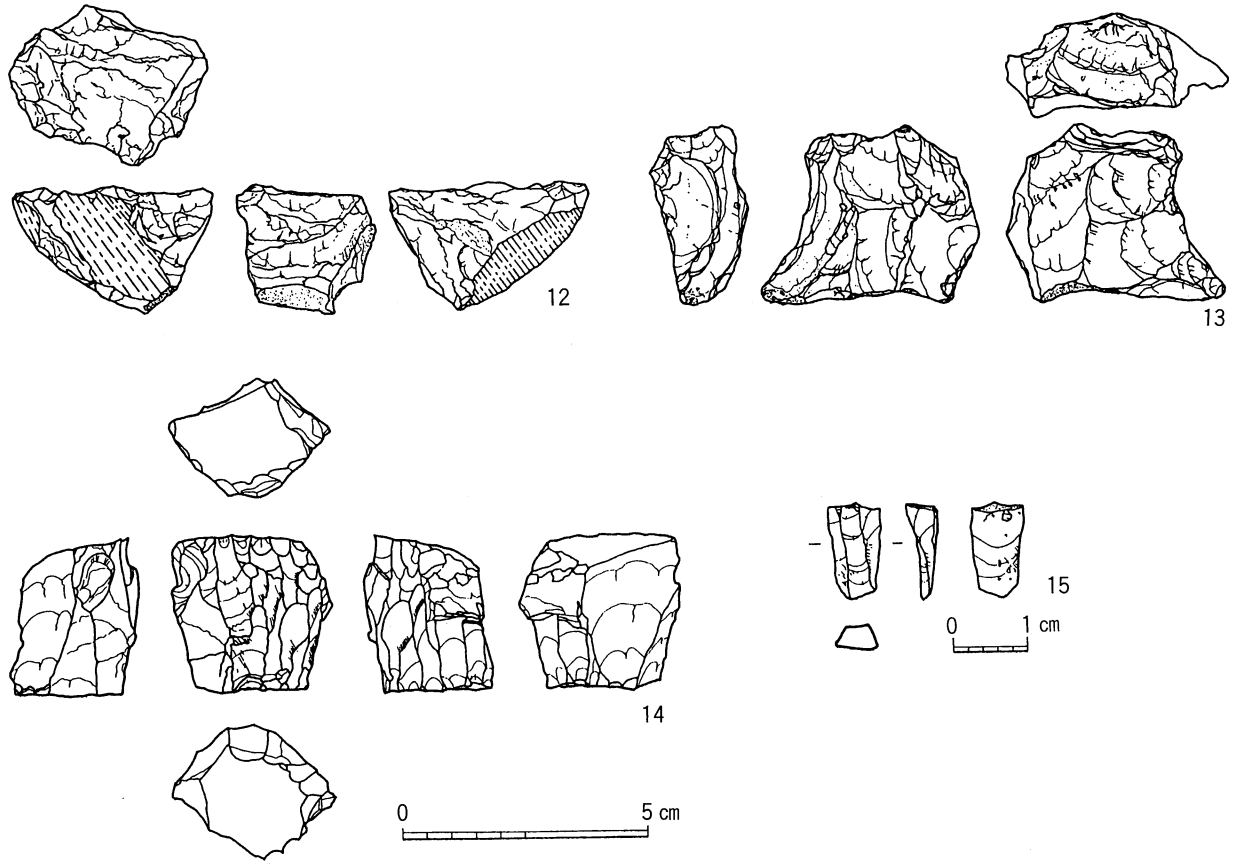
12は全体に小さく、剥片剥離作業がかなり進行している状況が窺える。打面は、単設で、複剥離で構成されているが、打面調整や頭部調整は顕著ではない。13は表、裏ともに剥片剥離作業が見られ、その剥離状況も縁辺部を打面転移することで求心状に剥離が行われていることが窺える。上面にも剥離1枚が見られる。

細石核（第7図14）

頁岩製の細石核では、C区のⅤ層下位から出土した。打面を転移させながら剥離作業を進行させ、上下180度にまで及んでいる。



第6図 松元遺跡 旧石器実測図 (1)



第7図 松元遺跡 旧石器実測図 (2)

第1表 松元遺跡 出土石器計測表 (1)

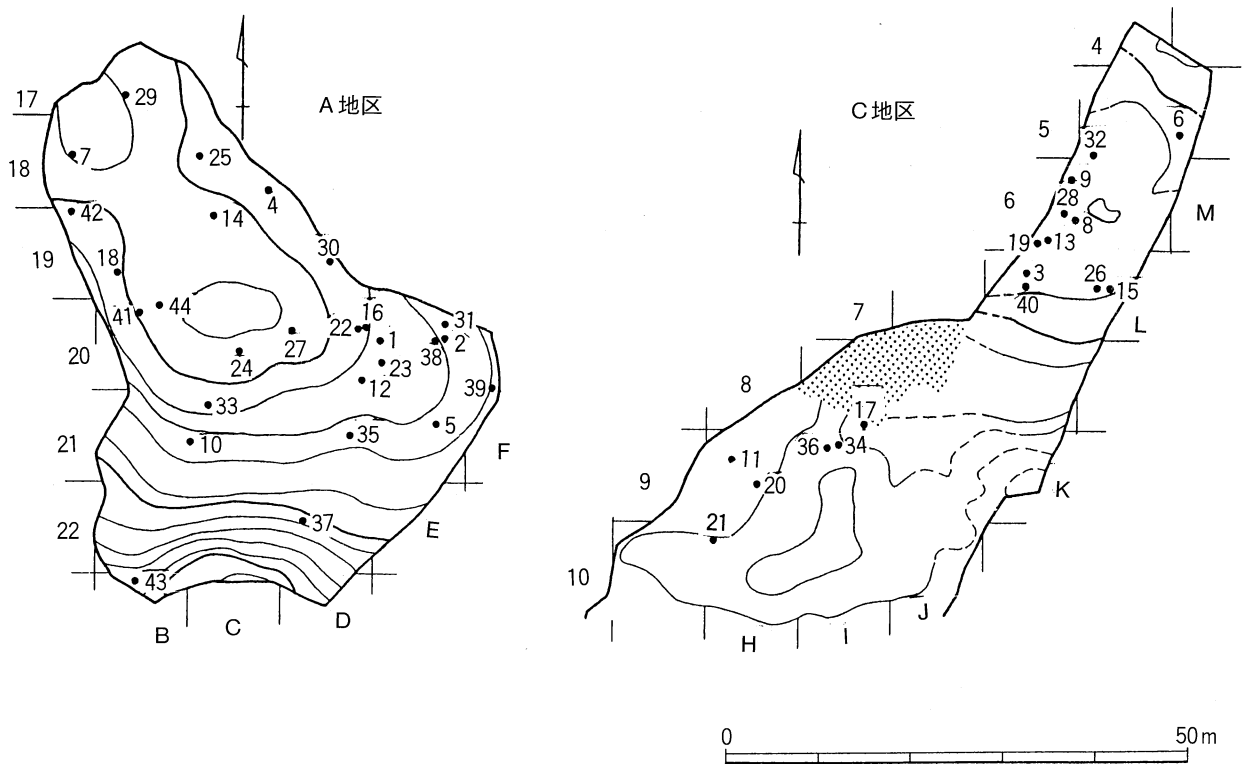
遺物番号	グリット	層位	器種	石 材	計 測 値				備 考
					最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
1	C-20	VI	ナイフ	頁岩	4.7	1.3	1.05	5.3	
2	D-20	VIII	ナイフ	頁岩	5.02	1.59	1.12	7.1	
3	D-20	IX	ナイフ	頁岩	4.9	1.7	1.15	6.9	
4	L-7	V	ナイフ	頁岩	3.0	1.1	0.3	1.0	
5	D-20	VI	ナイフ	頁岩	3.3	1.6	1.0	5.0	
6	B-19	VII	ナイフ	頁岩	3.3	2.1	0.8	8.9	
7	D-19	VI	三稜尖	頁岩	7.3	1.6	1.3	11.9	
8	E-20	V	三稜尖	頁岩	6.4	1.5	1.3	13.1	
9	L-6	V	三稜尖	流紋岩	5.3	1.6	1.1	7.5	
10	C-19	VI	スクレ	頁岩	5.5	4.1	0.65	17.2	
11	D-21	VI	スクレ	頁岩?	6.9	6.4	1.3	70.1	
12	D-22	VI	石核	頁岩	2.4	2.5	4.1	28.2	
13	C区	VI	石核	頁岩?	3.3	4.0	1.8	28.7	
14	K-6	V	細石核	頁岩	3.25	3.28	2.4	31.6	
15	C-19	IV	細石刃	黒曜石	1.28	0.76	0.36	0.2	

細石刃 (第7図15)

細石刃は、わずかに1点しか出土していない。石材は、不純物が少ない良質の黒曜石である。C区のV層より出土した。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、早期の集石遺構が第IV層アカホヤ下の第V層褐色土の中程で44基検出された。A地区では27基検出され東西間の緩斜面に分布が集中し、C地区では17基検出され西側縁辺部に分布が集中している。遺物の分布状況は、A地区では遺構の分布状況に類似し、C地区では東側縁辺部にも分布し、集中区も認められた。



第8図 松元遺跡 A・C地区の縄文時代早期遺構分布図

1 遺構

集石遺構 (第9～20図)

検出された44基の集石遺構を八木澤一郎氏の形態分類基準を参考にして整理してみると以下のとおりとなった。

集石Ⅰ類…掘り込みが無く、平面的に礫が分散してプランが特定できず、配石も無い形態のもの。

(S I 1～S I 8)

集石Ⅱ類…掘り込みと配石は無い。礫の重なりはあまり無いが、円形や楕円形に近い密集がみられる形態のもの。(S I 9～S I 14)

集石Ⅲ類…円形や楕円形あるいはそれに近いプランで礫の密集がみられる。礫の重なりは2～3層で、埋土が1層～2層で、掘り込みがある。配石のない形態のもの。(S I 15～S I 44)

S I 1 (第9図)

A区E-20グリッドのV層中程より検出された。調査中は集石遺構1基と判断していたが、図中央から上半分の集石と右半分の小集石に分けられるようにも見える。そのように捉えると、下の集石は長軸120cm、短軸60cm、右の集石は長軸90cm、短軸35cmが計測される。礫はほとんどが角礫で赤変している。集石内からの遺物や炭化物は検出されなかった。

S I 2 (第9図)

A区E-20グリッドのV層中程より検出された。調査中は集石遺構1基と判断していたが、図中央から左半分の集石と右半分の小集石に分けられるようにも見える。そのように捉えると、左の集石は長軸100cm、短軸40cm、右の集石は不整で長軸約60cm計測される。礫はほとんどが角礫で赤変している。集石内から遺物等は出土していない。

S I 3 (第9図)

C区K-7グリッドのV層中程より検出された。礫が長軸100cm、短軸70cmの範囲に集石し、44個の礫で構成される。集石内から遺物等は出土していない。

S I 4 (第9図)

A区C-18グリッドのV層中程より検出された。調査中は集石遺構1基と判断していたが、図中央から上半分の集石と下半分の集石に分けられるようにも見える。そのように捉えると、上は径約70cm、下は長軸90cm、短軸30cmが計測される。礫はほとんどが赤変している。掘り込みとしては確認できなかったが、床面に凹凸がみられる。集石内から遺物等は出土していない。

S I 5 (第10図)

A区E-21グリッドのV層中程で検出された。礫が長軸100cm、短軸60cmの範囲に集石し、礫の重なりは少ない。遺物は、貝殻条痕文円筒土器の胴部下半と思われる土器片が1点出土している。集石内から炭化物は検出されなかった。

S I 6 (第10図)

C区M-5グリッドのV層中程より検出された。礫が長軸140cm、短軸90cmの楕円状の範囲に集石し、約89個の礫で構成される。礫のほとんどが赤変している。集石内から遺物等は出土していない。

S I 7 (第10図)

A区A-18グリッドのV層中程で検出された。礫が長軸190cm、短軸130cmの楕円状の範囲に集石し、約120個の礫で構成され、それらのほとんどが赤変している。集石内から石皿1点(第34図175)と敲石1点(第33図170)が出土した。下部に掘り込みはない。

S I 8 (第10図)

C区L-6グリッドのV層中程で検出された。礫が径100cmの範囲に集石し、礫のほとんどが赤変している。集石内から遺物等は出土していない。

S I 9 (第11図)

C区L-6グリッドのV層中程で検出された。礫が長軸96cm、短軸60cmの楕円状の範囲に集石し、約45個の礫で構成され、ほとんどが赤変している。集石内から遺物等は出土していない。

S I 10 (第11図)

A区B-21グリッドのV層中程で検出された。礫は長軸100cm、短軸70cmの楕円状の範囲に117個の礫が集石し、礫は拳程の大きさの破碎礫が多い。西側の一部に赤変した礫がみられる。集石内から遺物等は出土していない。

S I 11 (第11図)

C区H-10グリッドのV層中程で検出された。250cm四方の広い範囲に礫が散石状態で検出された。図面のほぼ中央部に径130cmのやや密な部分と図面の左上に径90cm、右上に長軸60cm、短軸55cmの範囲に集石がみられる。したがって、計3基の集石遺構が存在している可能性がある。赤変した破碎礫が全体に多く、下部に掘り込みはない。はっきりした遺構の形状をとらえることが難しい。

S I 12 (第12図)

A区D-20グリッドのV層中程で検出された。礫が径80cmの範囲に集石し、礫のほとんどが赤変している。遺構の西側周辺部で炭化物が検出した。掘り込みはない。

S I 13 (第12図)

C区K-6グリッドのV層中程で検出された。赤変した拳大ほどの破碎礫が径60cmの範囲に集石している。集石内から土器の小片が1点出土したが、文様及び器種とも不明である。掘り込みはないが、床面に凹凸がみられる。

S I 14 (第12図)

A区C-19グリッドのV層中程より検出した。礫が長軸90cm、短軸80cmの範囲に集石している。赤変した円礫、楕円礫が多い。下部の掘り込みはないが、凹凸がみられる。遺物は石鏃1点が出土した。

S I 15 (第12図)

C区L-7グリッドのV層中程より検出した。長軸140cm、短軸100cm、深さ15cmの楕円形の掘り込みを持つものであるが、その中に2カ所の窪みがみられる。よって、2つの掘り込みがある（2基の集石遺構が切り合っている）ともとらえられるため、検討の余地があると思われる。構成している礫は、赤変した円礫が多い。集石遺構内で配石は確認されず、また、遺物等は出土しなかった。

S I 16 (第12図)

A区D-20グリッドのV層中程より検出した。径60cm、深さ15cmのほぼ円形の掘り込みを持つが、配石はない。10cmぐらいの破碎礫が多く、大半が赤変している。遺構内から遺物等は出土しなかった。

S I 17 (第13図)

C区I-8グリッドのV層中程より検出した。直径160cm、深さ15cmの円形の掘り込みを持つ大規模で密な集石遺構である。全体的に大きめの赤変した礫で、20cmを越えるものも多かった。遺構内から土器の小片1点が出土したが、文様及び器種は不明である。床面に凹凸が顕著にみられるため複数の集石遺構の切り合いも考えられる。集石遺構内で配石は確認されていない。遺物は、厚さ6mmの無文の土器小片が1点出土している。

S I 18 (第13図)

A区B-19グリッドのV層中程より検出した。径80cm、深さ10cmのほぼ円形の掘り込みをもち、ほとんどが赤変した破碎礫で構成されている。遺構内で配石は確認されていない。また、遺物は、貝殻条痕文円筒土器の口縁部（第22図21）が出土している。

S I 19 (第13図)

C区K-7グリッドのV層中程より検出した。径約90cm、深さ15cmの円形の掘り込みを持ち、礫は密に集石している。10cm位の破碎礫が多く、全体の半分が赤変していた。配石はない。遺構内から土器片が2点(第22図24、25)出土し、24は外面に撚糸文が、25は太めの2条の沈線文と撚糸文がみられる。いずれも内面はナデ調整である。

S I 20 (第14図)

C区H-9グリッドのV層中程より検出した。本遺跡では最大規模の直径約200cm、深さ10cmの浅い円形の掘り込みがみられる。床面に凹凸があり複数の集石遺構が切り合っている可能性もあるが、礫の分布状況からは判断しがたい。礫は密に集積し、2層位の重なりである。ほとんどの礫が赤片していた。遺物等は出土していない。

S I 21 (第14図)

C区H-10グリッドのV層中程より検出した。径約60cm、深さ10cmの浅い円形の掘り込みを持つ小型の集石遺構である。10cm程の赤変した礫がほとんどで、総数も75個と少ない。遺構内で配石は確認されず、また、遺物等も出土していない。

S I 22 (第14図)

A区D-20グリッドのV層中程より検出した。長軸60cm、短軸40cm、深さ15cmの浅い楕円状の掘り込みをもつ小規模の集石遺構である。一部の礫は赤変していた。遺物等は出土していない。

S I 23 (第15図)

A区E-20グリッドのV層中程より検出した。長軸160cm、短軸120cm、深さ20cmの楕円形の掘り込みを持っているが、掘り込み中央部の密集より図面中央より上半分と下半分に分かれて、集石状況がみられる。不整な集石状況である。礫は円礫が多く、大半が赤変している。

S I 24 (第15図)

A区C-20グリッドのV層中程より検出した。直径60cm、深さ15cmの浅い円形の掘り込みを持っている。礫の集石状態は中央部は密であるが、全体的には疎である。礫は全体的に赤変している。遺構内で遺物等は出土していない。

S I 25 (第16図)

A区C-18グリッドのV層中程より検出した。長軸200cm、短軸150cm、深さ15cmのほぼ楕円状に浅い掘り込みがあり、礫の集石状況や断面の状況などから複数の集石遺構が切り合っている可能性もある。礫は密に集石している。配石はない。規模は、本遺跡最大規模の類に入る。北側の埋土中から炭化物が少量検出されている。

S I 26 (第16図)

C区L-7グリッドのV層中程より検出した。長軸180cm、短軸120cm、深さ15cmの楕円状の浅い掘り込みであるが、礫の集石状況や断面の状況などから複数の集石遺構が切り合っていると思われる。また、図面北側にはもう1基の集石遺構もみられる。礫は5~10cm位の破碎礫が多く、大半が赤変している。遺構の中央の埋土中で炭化物が少量検出された。遺構内で配石は確認されず、また、遺物等も出土していない。

S I 27 (第17図)

A区D-20グリッドのV層中程より検出した。径100cm、深さ15cmの浅い掘り込みを持っている。礫は散石状態であるが、ほぼ中央にやや密な部分がある。円礫が多く、ほとんどが赤変している。遺物等は出土していない。

S I 28 (第17図)

C区L-6グリッドのV層中程より検出した。長軸110cm、短軸80cm、深さ15cmのはっきりした掘り込みを持ち、密な集石である。礫の大半が赤変している。20~30cmの礫が目だった。遺物等は出土していない。

S I 29 (第17図)

A区B-17グリッドのV層中程より検出した。長軸100cm、短軸70cm、深さ10cmの掘り込みがある。20~30cm位の破碎礫が多く、大半が赤変している。遺物等は出土していない。

S I 30 (第17図)

A区D-19グリッドのV層中程より検出した。長軸70cm、短軸50cm、深さ10cmの楕円状の浅い掘り込みである。密に集石し、5~15cmぐらいの破碎礫及び楕円礫が多い。外面に条痕文、内面はヘラナデ調整のある貝殻条痕文円筒土器片(第22図22、23)が遺構上部から出土している。

S I 31 (第17図)

A区E-20グリッドのV層中程より検出した。長軸60cm、短軸45cm、深さ10cmの小規模な掘り込みを持ち、不整で集まり具合が疎な集石状況である。一部に赤変した礫がみられた。遺物等は出土していない。

S I 32 (第17図)

C区L-5グリッドのV層中程より検出した。径70cm、深さ10cmの小規模な掘り込みを持ち、5~15cmぐらいの破碎礫が不整に集積している。一部に赤変した礫がみられた。遺物等は出土していない。

S I 33 (第18図)

A区C-21グリッドのV層中程より検出した。径180cm、深さ20cmの掘り込みを持つ大規模な集石遺構である。20~30cmの礫も目立った。埋土中から黒曜石の小片と文様及び型式は不明の土器の小片3点が出土した。床面に凹凸がみられ、複数の集石遺構の切合いの可能性もある。

S I 34 (第18図)

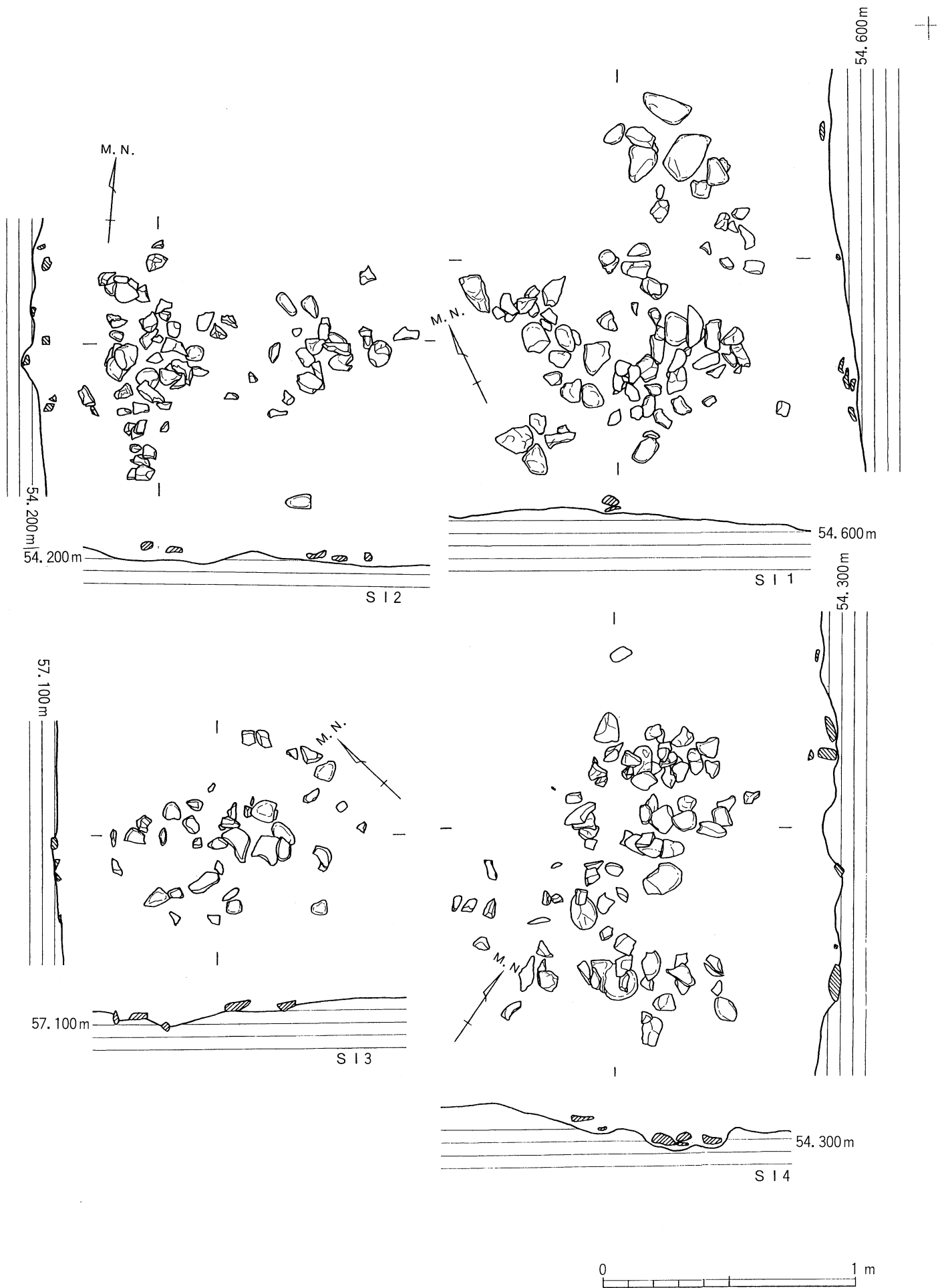
C区I-9グリッドのV層中程より検出した。長軸100cm、短軸70cm、深さ20cmの掘り込みを持っている。5~10cmの破碎礫が多く、赤変しているものは少ない。遺物等は出土していない。

S I 35 (第18図)

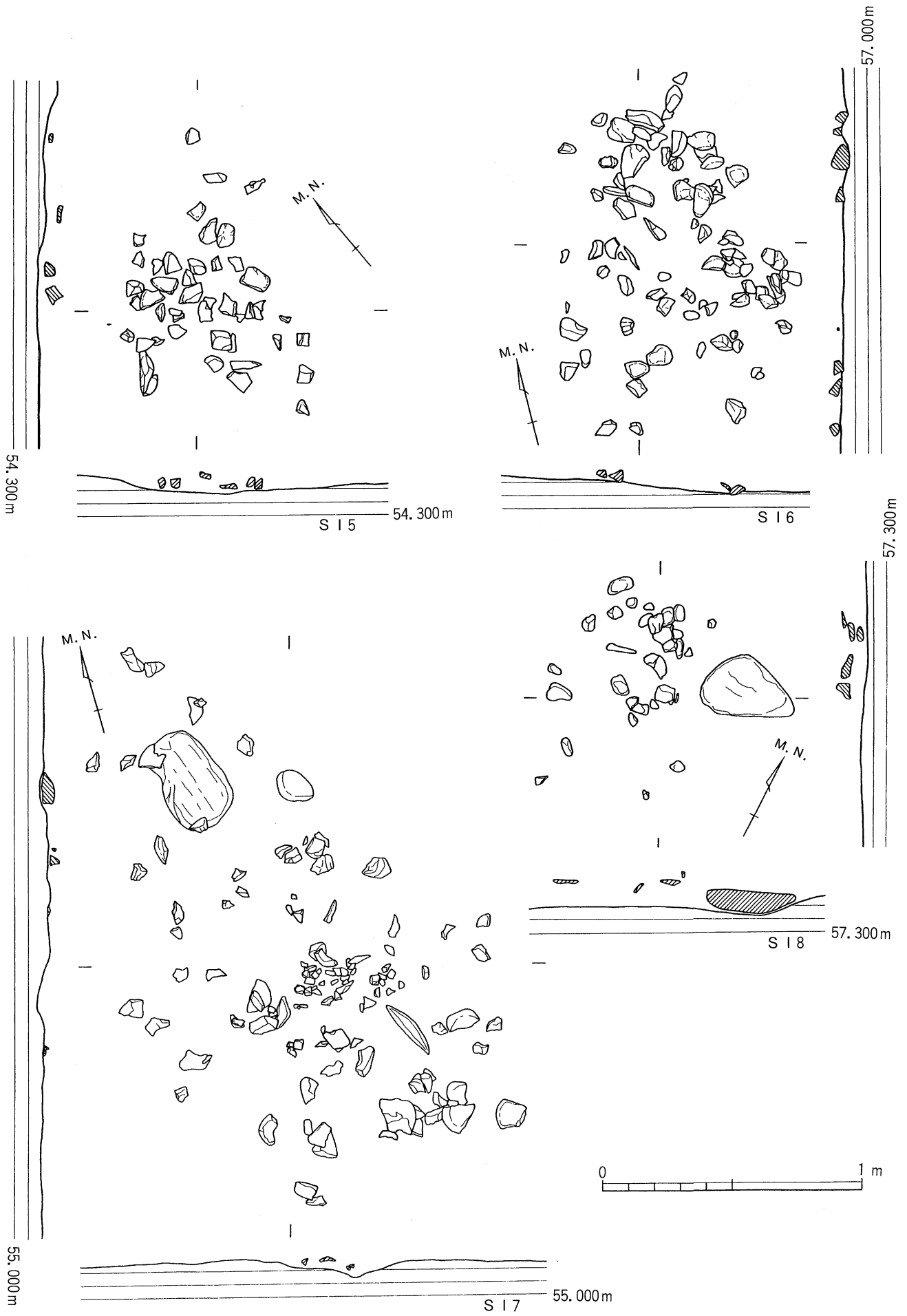
A区D-21グリッドのV層中程より検出した。長軸90cm、短軸60cm、深さ10cmの小規模な掘り込みを持っている。礫の数は少ないが、全体的に赤変している。遺物等は出土していない。

S I 36 (第19図)

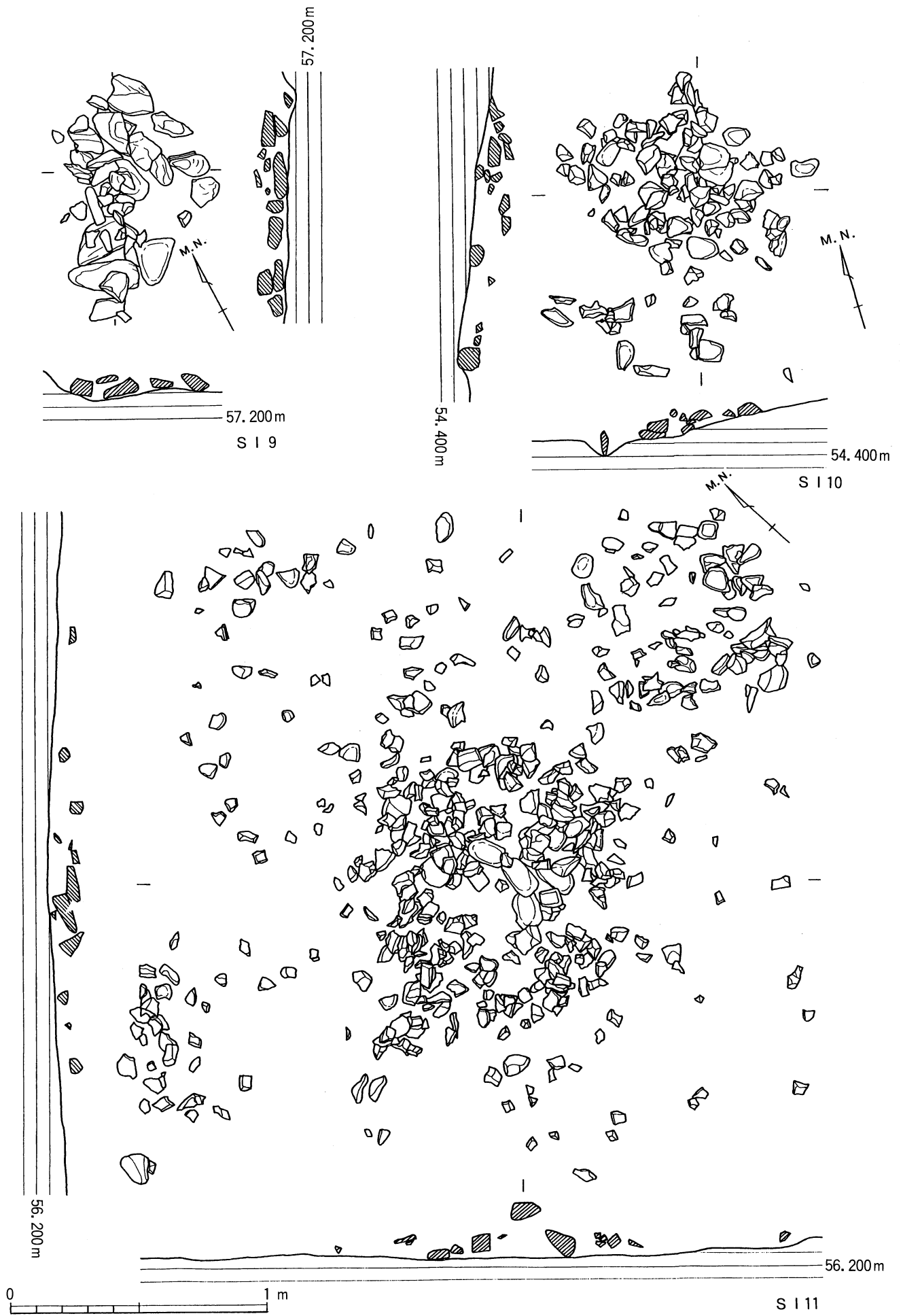
C区I-9グリッドのV層中程より検出した。深さ最大15cmの不規則な掘り込みを持ち、床面に凹凸があり、複数の集石遺構の切合いの可能性もある。礫は、不整で散石した状態で検出した。赤変している礫が多く、床面の一部から炭化物が集中して検出されている。



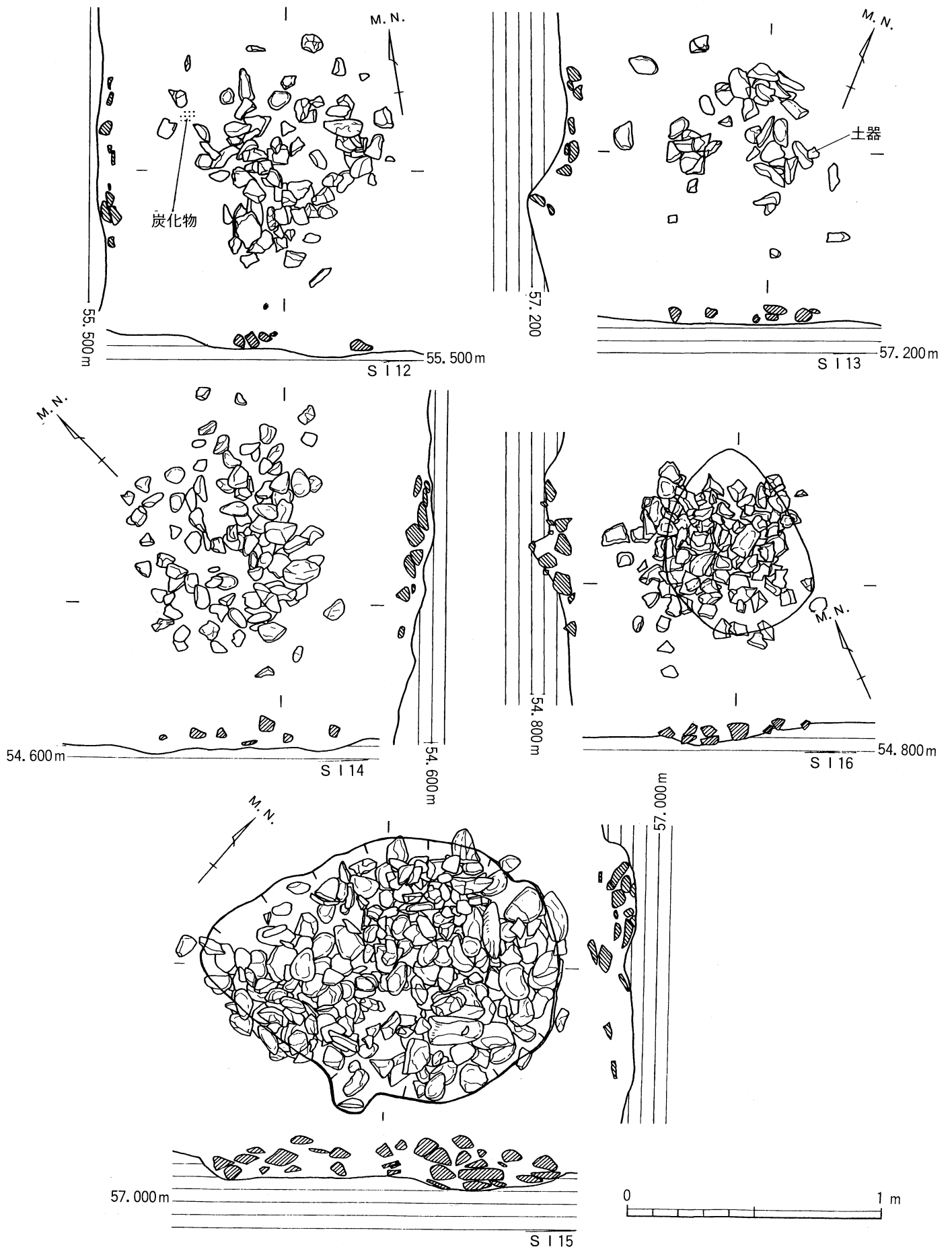
第9図 松元遺跡 集石遺構実測図 (1)



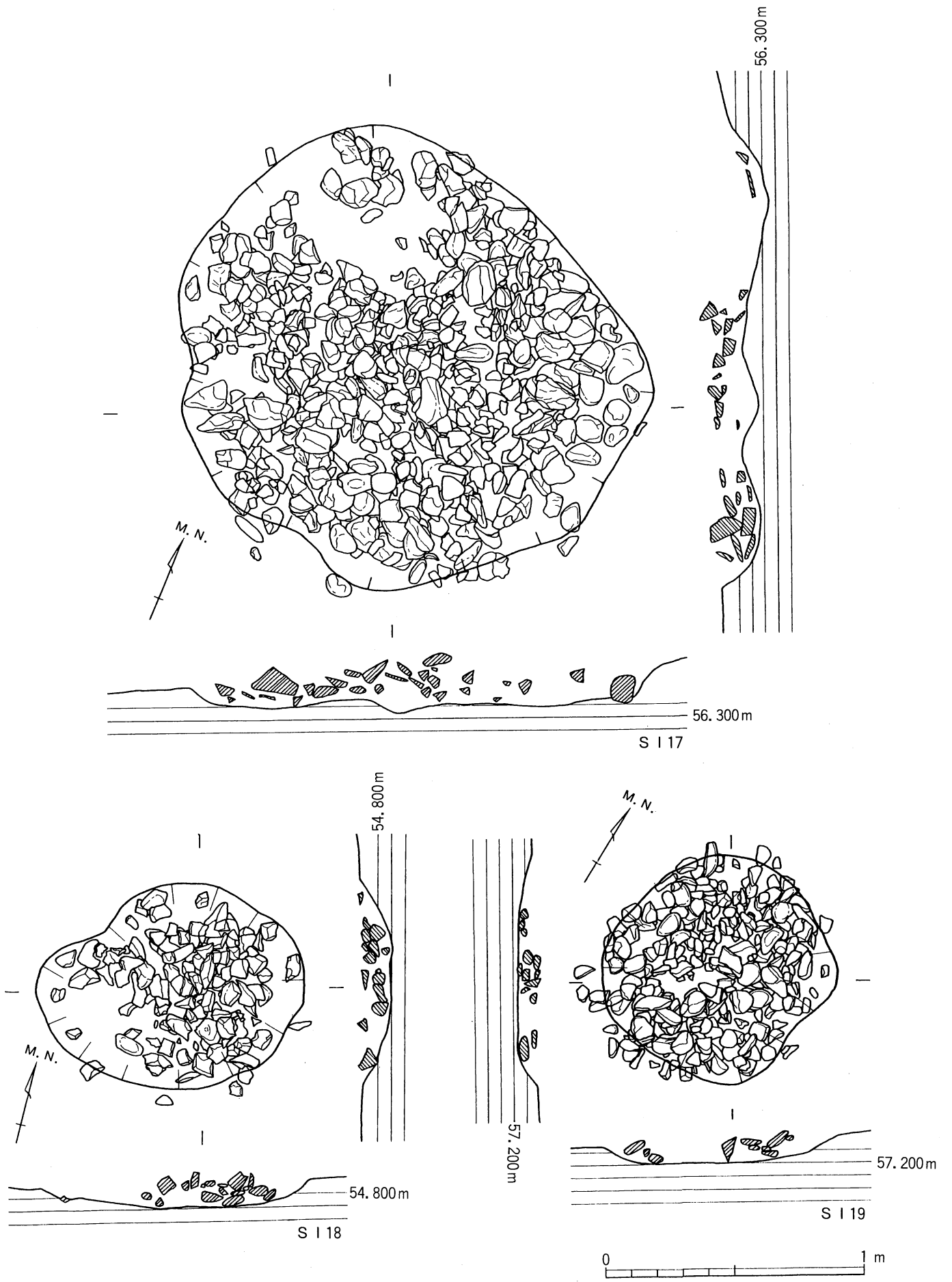
第10図 松元遺跡 集石遺構実測図 (2)



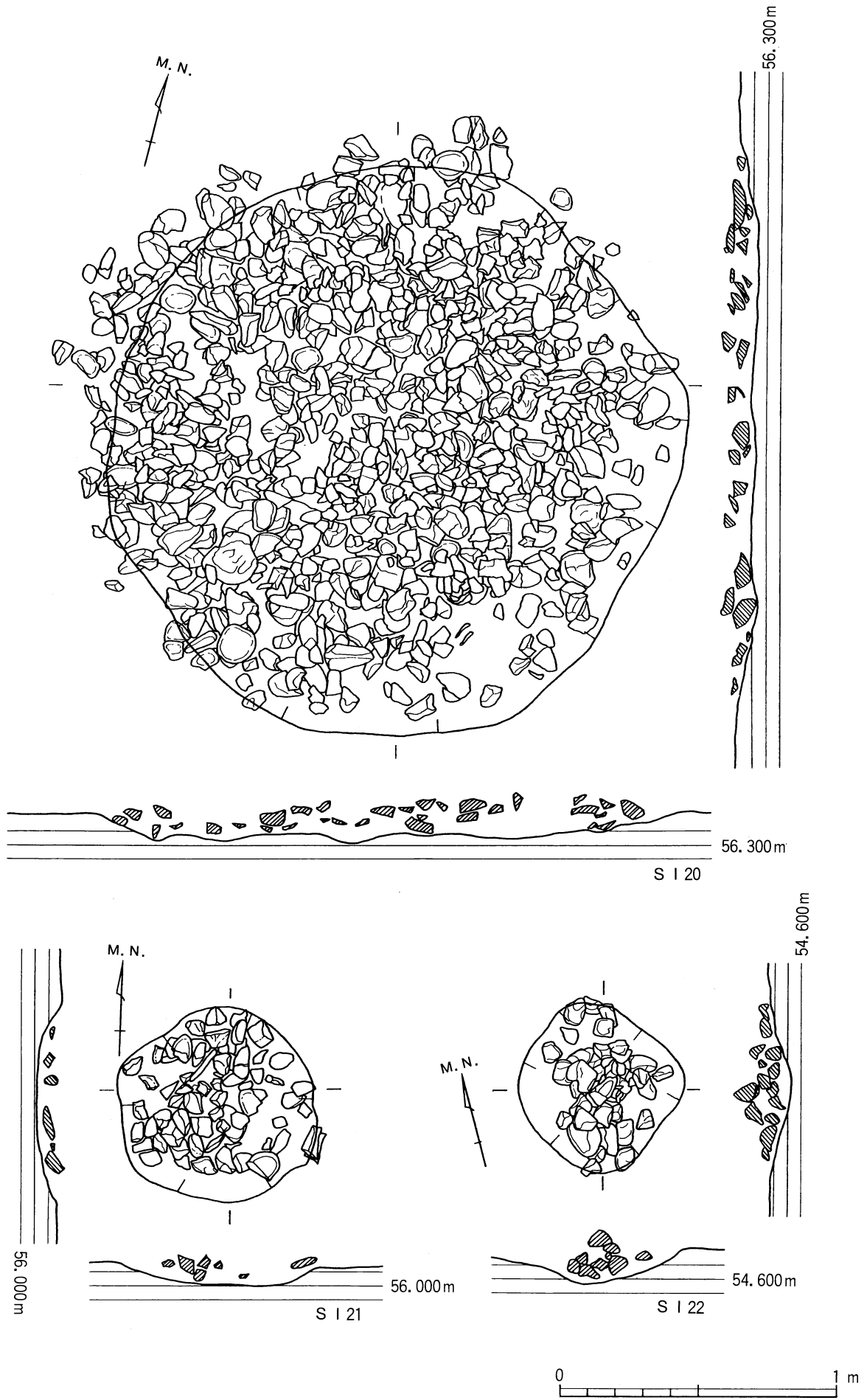
第11図 松元遺跡 集石遺構実測図 (3)



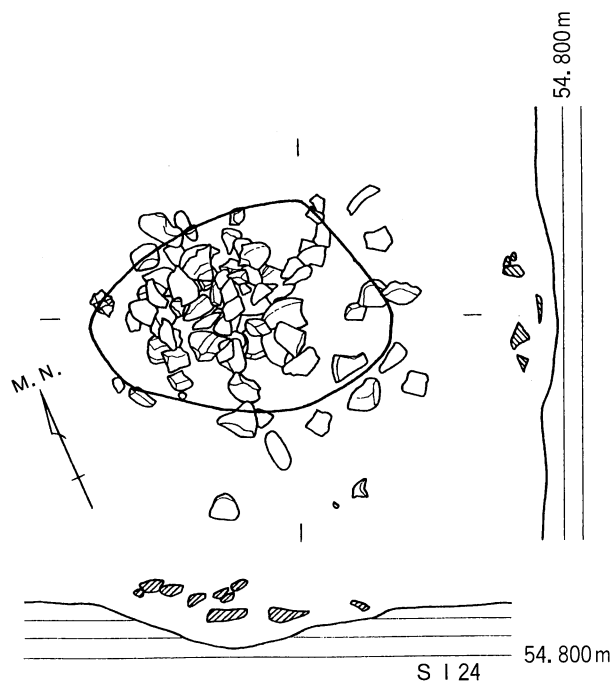
第12図 松元遺跡 集石遺構実測図 (4)



第13図 松元遺跡 集石遺構実測図 (5)



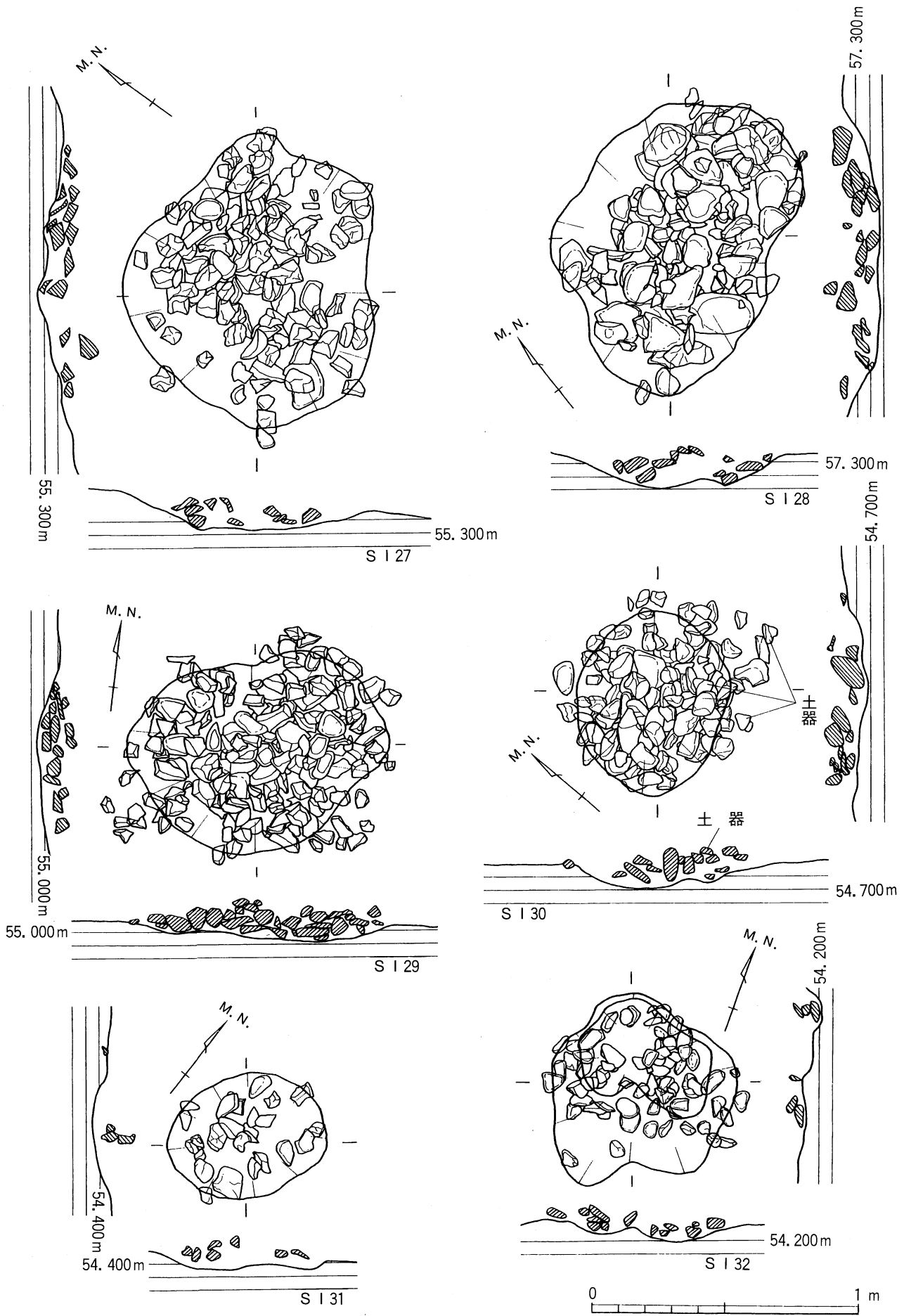
第14図 松元遺跡 集石遺構実測図 (6)



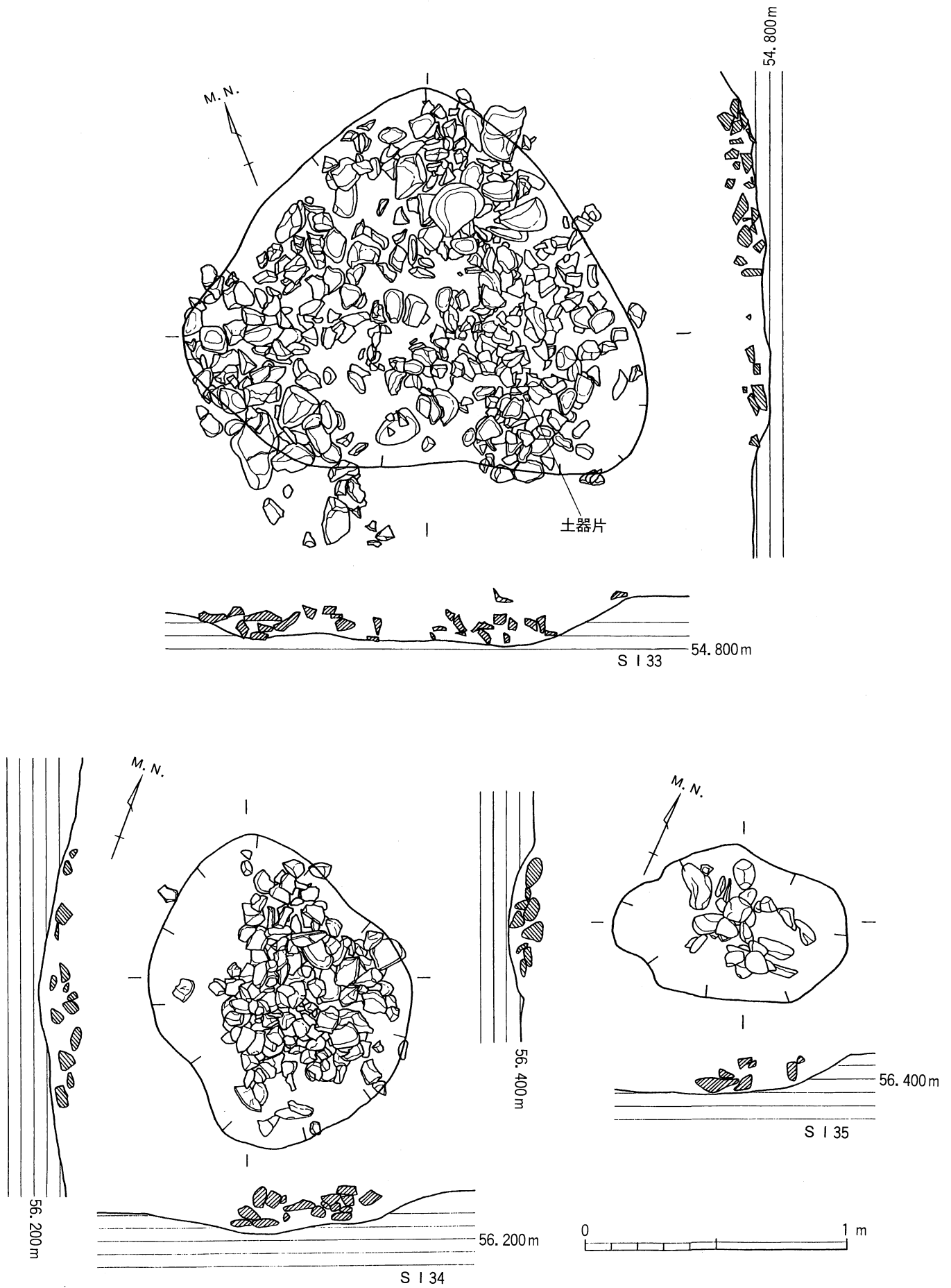
第15図 松元遺跡 集石遺構実測図 (7)



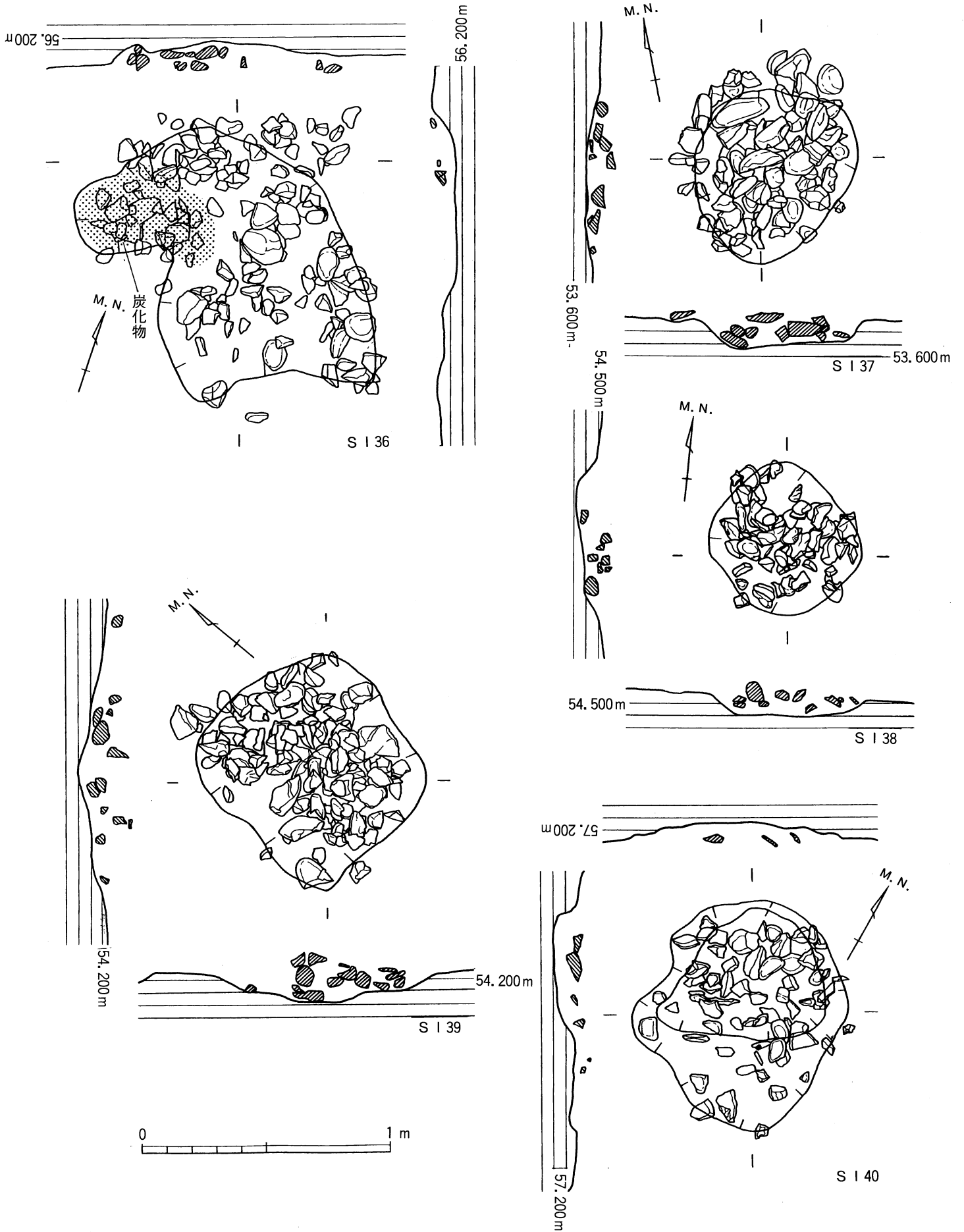
第16図 松元遺跡 集石遺構実測図 (8)



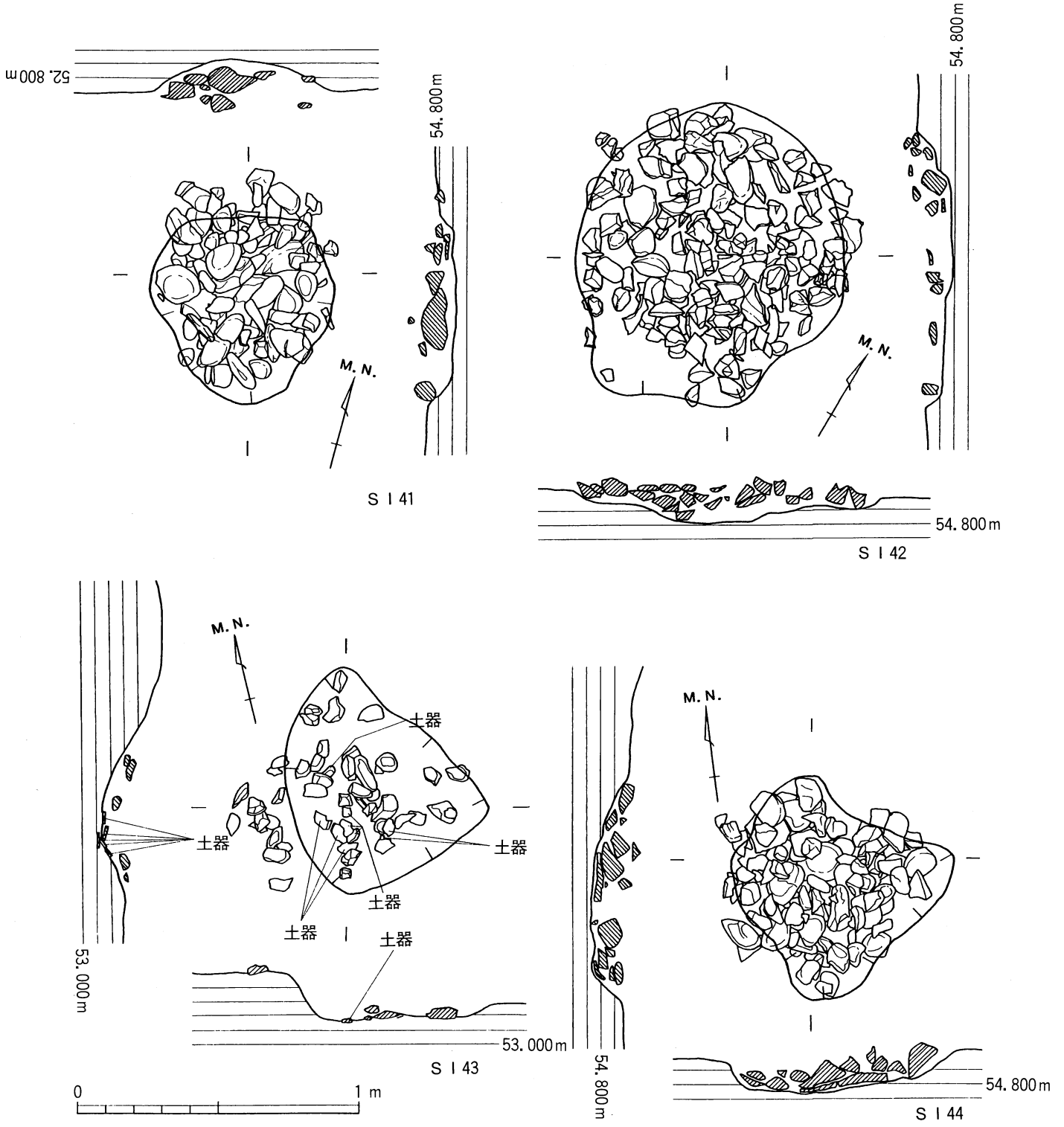
第17図 松元遺跡 集石遺構実測図 (9)



第18図 松元遺跡 集石遺構実測図 (10)



第19図 松元遺跡 集石遺構実測図 (1)



第20図 松元遺跡 集石遺構実測図 (12)

S I 37 (第19図)

A区D-22グリッドのV層中程より検出した。径80cm、深さ15cmの掘り込みを持ち、10~20cmの赤変した破碎礫を中心に密に集石している。遺物等は出土していない。

S I 38 (第19図)

A区E-20グリッドのV層中程より検出した。径60cm、深さ10cmの小規模の掘り込みを持っている。10~15cmの赤変した破碎礫で構成されている。遺物等は出土していない。

S I 39 (第19図)

A区F-21グリッドのV層中程より検出した。70×80cm、深さ10cmの隅丸形状の掘り込みを持つ、床面は2段掘り風となっている。ほとんどが赤変した破碎礫で構成されている。

S I 40 (第19図)

C区K-7グリッドのV層中程より検出した。径90cm、深さ10cmの浅い掘り込みを持っている。礫は、10~15cmの破碎礫が中心で、そのほぼ半数が赤変している。遺構内より黒曜石の石核1点と文様及び形式不明の土器片1点が出土した。

S I 41 (第20図)

A区B-20グリッドのV層中程より検出した。径60cm、深さ10cmの掘り込みを持ち、赤変した円礫を中心に密に集石している。遺物等は出土していない。

S I 42 (第20図)

A区A-19グリッドのV層中程より検出した。径100cm、深さ12cmの2段掘り風の浅い掘り込みを持っている。5~15cmの赤変した破碎礫を中心に構成されている。遺物等は出土していない。

S I 43 (第20図)

A区B-23グリッドのV層中程より検出した。長軸80cm、短軸70cm、深さ13cmの掘り込みを持つが、疎な集石状況で礫の数も少ない。遺構内より土器片が10点出土した。それらは、外面は貝殻条痕文、内面はヘラナデ調整の貝殻条痕文円筒土器片(第22図16~20)や文様の不鮮明な小片であった。

S I 44 (第20図)

A区B-20グリッドのV層中程より検出した。径80cm、深さ15cmの掘り込みを持ち、中心部が特に密な集石状況で、全部の礫が赤変している。遺物等は出土していない。

2 遺物

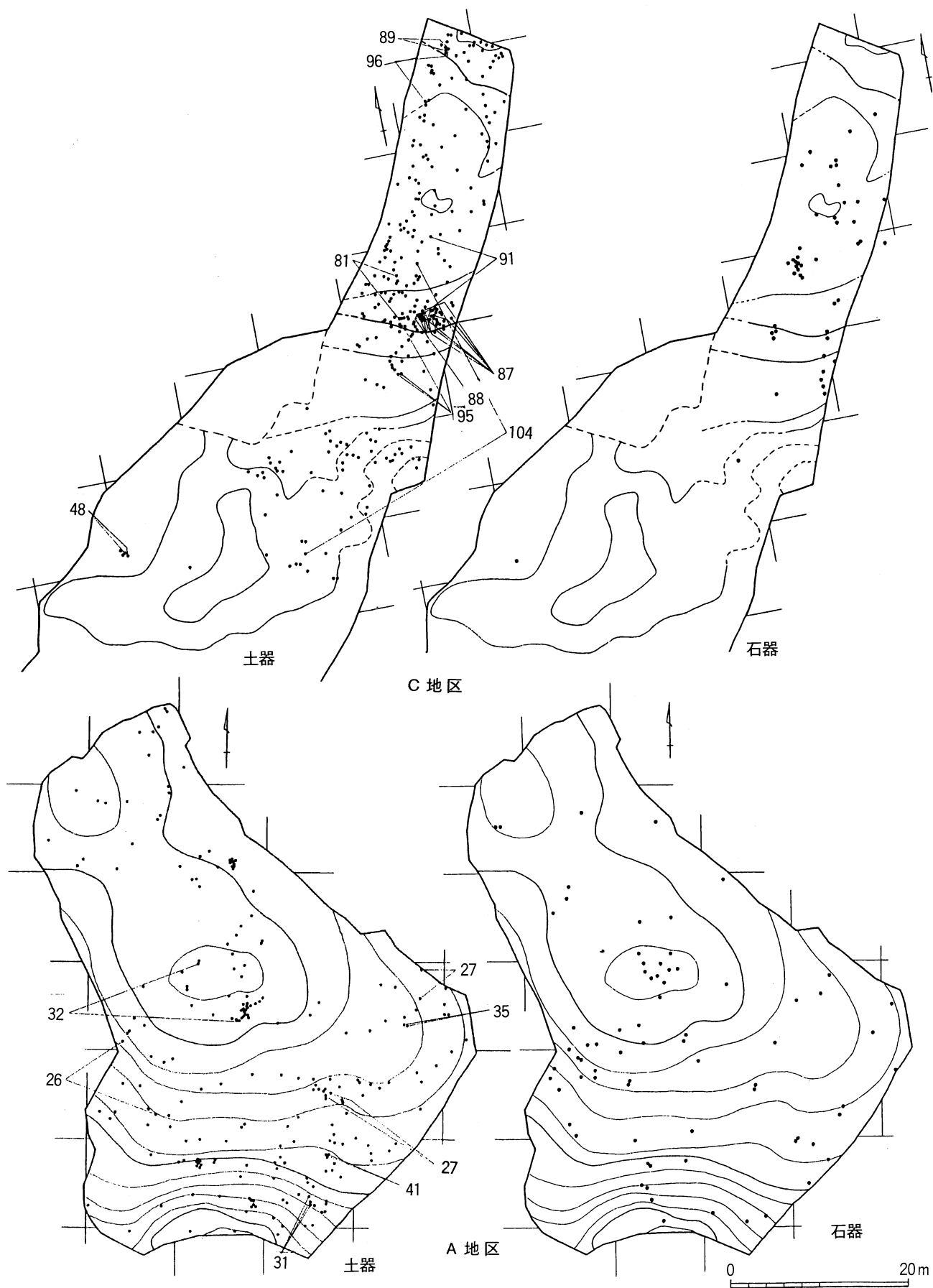
早期の集石遺構に伴う遺物の出土状況は、ほぼ遺構の分布状況に類似しているが、C地区においては、ほぼ全域で出土し、一部では土器の集中区が認められた。

(1) 土器

出土した遺物は、土器は貝殻条痕文円筒土器、塞ノ神式土器、平椀式土器、轟A式土器などがあり、以下のように分類して報告する。

I類土器 (第22~24図16~57)

右下がりの貝殻条痕文を地文とする貝殻条痕文円筒土器である。ただし、条痕文は胴部下半部にはなく、胴部下半部はナデ調整の場合が多い。口縁部は丸く仕上げ、口唇部及び内面はヘラ様のもの等を使



第21図 松元遺跡 A・C地区の縄文時代早期遺物分布図

用して丁寧に仕上げている。器壁の厚さは10mm前後と厚く、色調は淡黄褐色系で焼成はやや甘く堅固なイメージはない。文様帯は口縁上部にあり、文様によって次のように細分できる。

- a類 (16、26～34) ; 口縁部に刺突文がある。その間隔が広いもの、狭いものがある。
- b類 (17、35～39) ; 口縁部に貝殻による押し引き文がある。
- c類 (40、42) ; 口縁上部に貝殻腹縁により水平方向の短沈線風の文様が施文されるもの。
- d類 (18、21～23、42～57) ; 文様帯がなく条痕文のみのもの。

Ⅱ類土器 (第25図58～60)

綾杉状条痕文土器。貝殻腹縁による条痕文を地文とするが、条痕は綾杉になっている。

Ⅲ類土器 (第25図61～63)

平椀式系土器で、口縁部が肥厚し口唇部には刻み目が施してある。口縁部外面の文様は、列点文、凹線による羽状文、波状文またはその組み合わせ文様を施す土器である。

- a類 (61) ; 高橋信武氏が平椀Ⅱ式土器と呼ぶ土器である。器形は、厚い口縁部、狭まった頸部、膨らみを持った胴部に分かれ、口縁下端と頸部との境が段状になっている。口縁部下端に刻み目、胴部に直線と列点文を斜行させた文様がある。
- b類 (62、63) ; 高橋信武氏が平椀Ⅲ式土器と呼ぶ土器である。口縁部はⅡ式よりも幅広くなり、厚さは頸部と比較した時Ⅱ式ほどの差はない。頸部上部から口縁部にかけて内湾している。

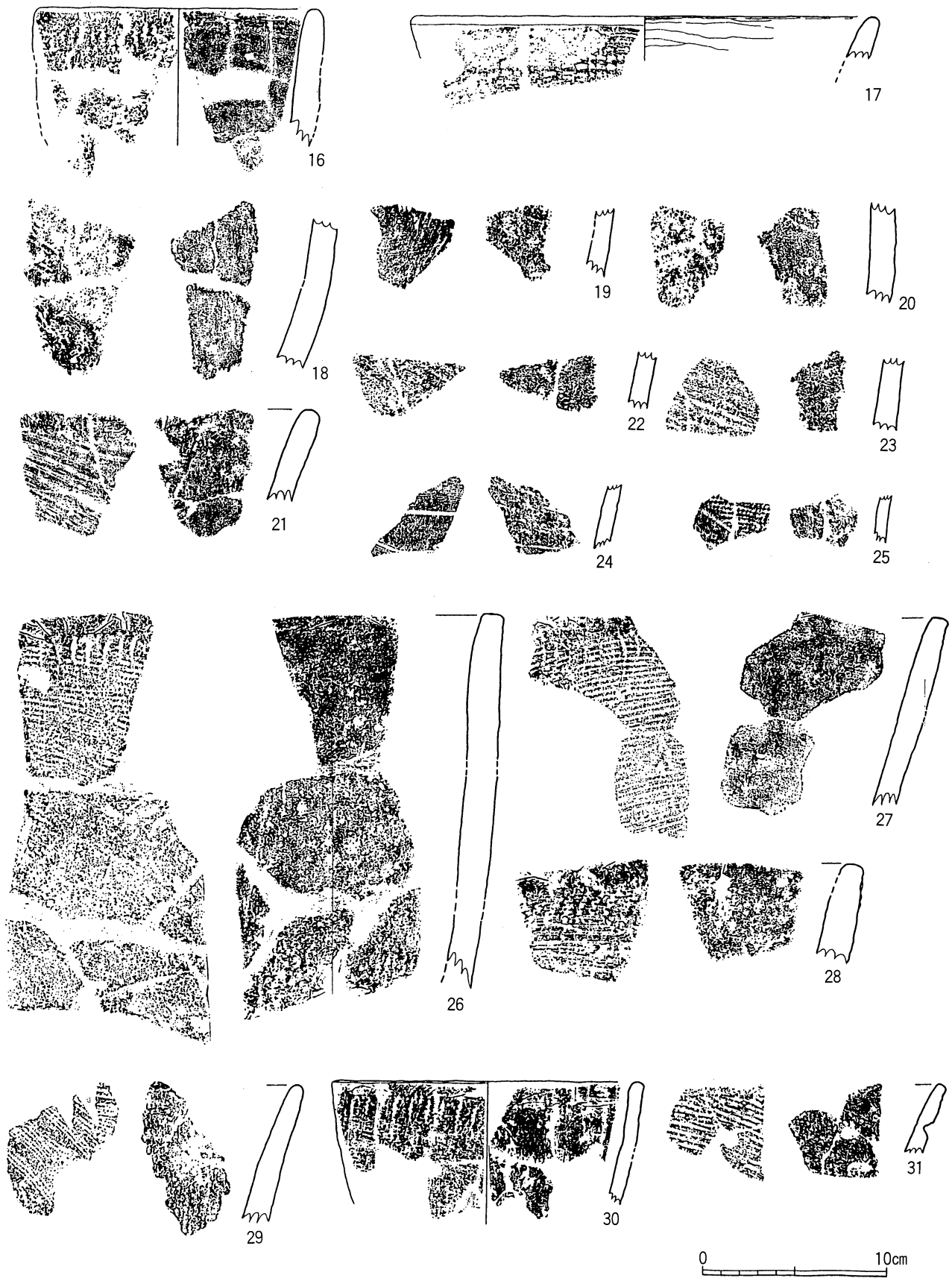
Ⅳ類土器 (第22図24、25、第25～28図64～107、111、112)

器形は頸部が「く」の字に屈曲し、胴部はやや膨らんだ円筒形、底部は若干上底または平底を呈するものと思われる。撚糸文・縄文・沈線文・連続刺突文などを組合わせた文様が施される土器で塞ノ神式系の土器である。これらを高橋信武氏の分類を参考にして以下のとおりに整理した。

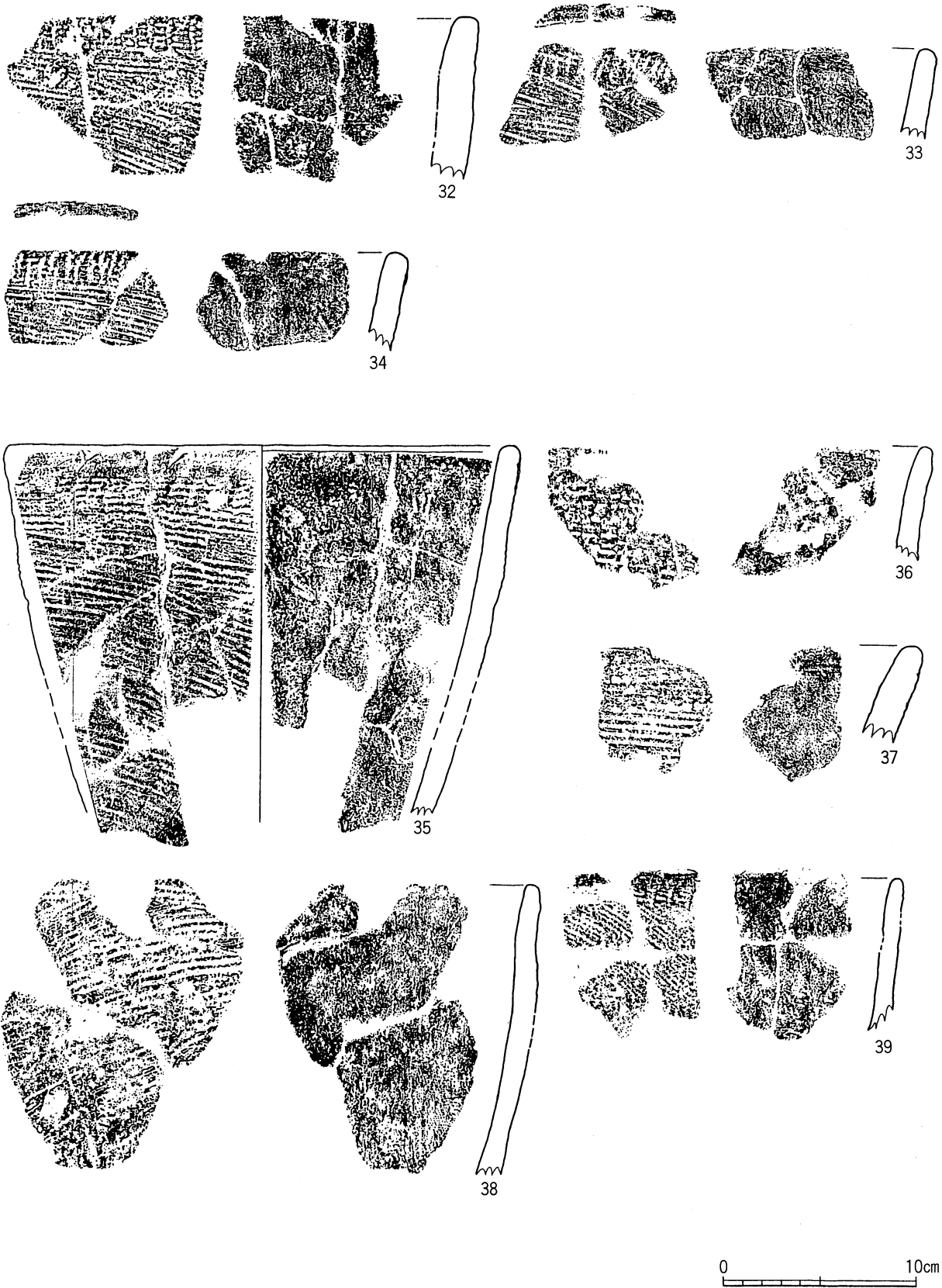
- a類 (24、25、64～75) ; 器形は、口縁部が「く」の字に大きく開く。内面はナデで条痕はない。文様は列点文、撚糸文、沈線文がある。口唇部外端に浅い刻みがあるものと無いものがある。
- b類 (76、77) ; 口縁部は頸部との境で内寄りに屈折している。刻目細隆起突帯が数条巡る。高橋信武氏の言う塞ノ神Ⅰ式土器古段階に相当すると思われる。
- c類 (78～86) ; 口縁部が「く」の字に大きく開く。ヘラ状工具による列点文がみられ、沈線文があるものと無いものがある。細分すると、C字型の連続刺突文がみられるもの(78、80)、ヘラ状工具による連続刺突文と棒状工具による沈線がみられるもの(79、81、83～86)、先端が三角形のヘラ状工具による連続刺突文が施されているもの(82)に分けられる。
- d類 (87～97) ; 撚糸文、縄文を沈線で区画している。高橋信武氏の言う塞ノ神Ⅱ式に相当すると思われる。
- e類 (98～107) ; 口唇部及び口縁～頸部にかけて貝殻列点文、刺突文がみられる。高橋信武氏の言う塞ノ神Ⅲ式中段階に相当すると思われる。
- f類 (111、112) ; ほぼ直口口縁のような円筒形で、口縁部は沈線文による斜向文が入り、胴部は貝殻条痕文である。高橋信武氏の言う塞ノ神Ⅲ式土器新段階に相当すると思われる。

底部 (第28図108～110)

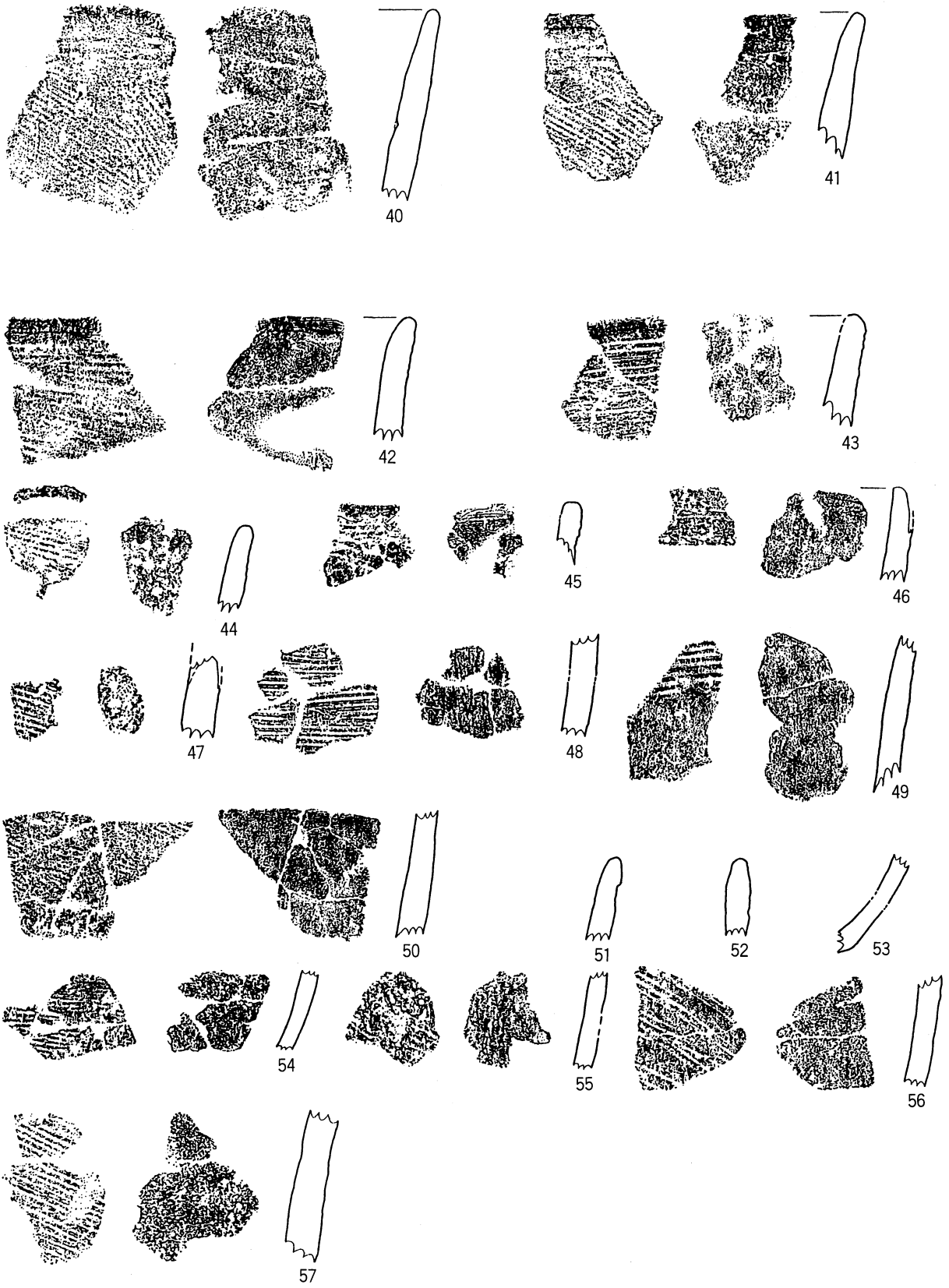
108、109、110は、比較的器壁が薄く、若干上げ底または平底に近いもので、これらはⅣ類の底部と



第22図 松元遺跡 縄文土器実測図 (1)

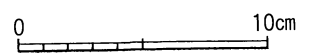
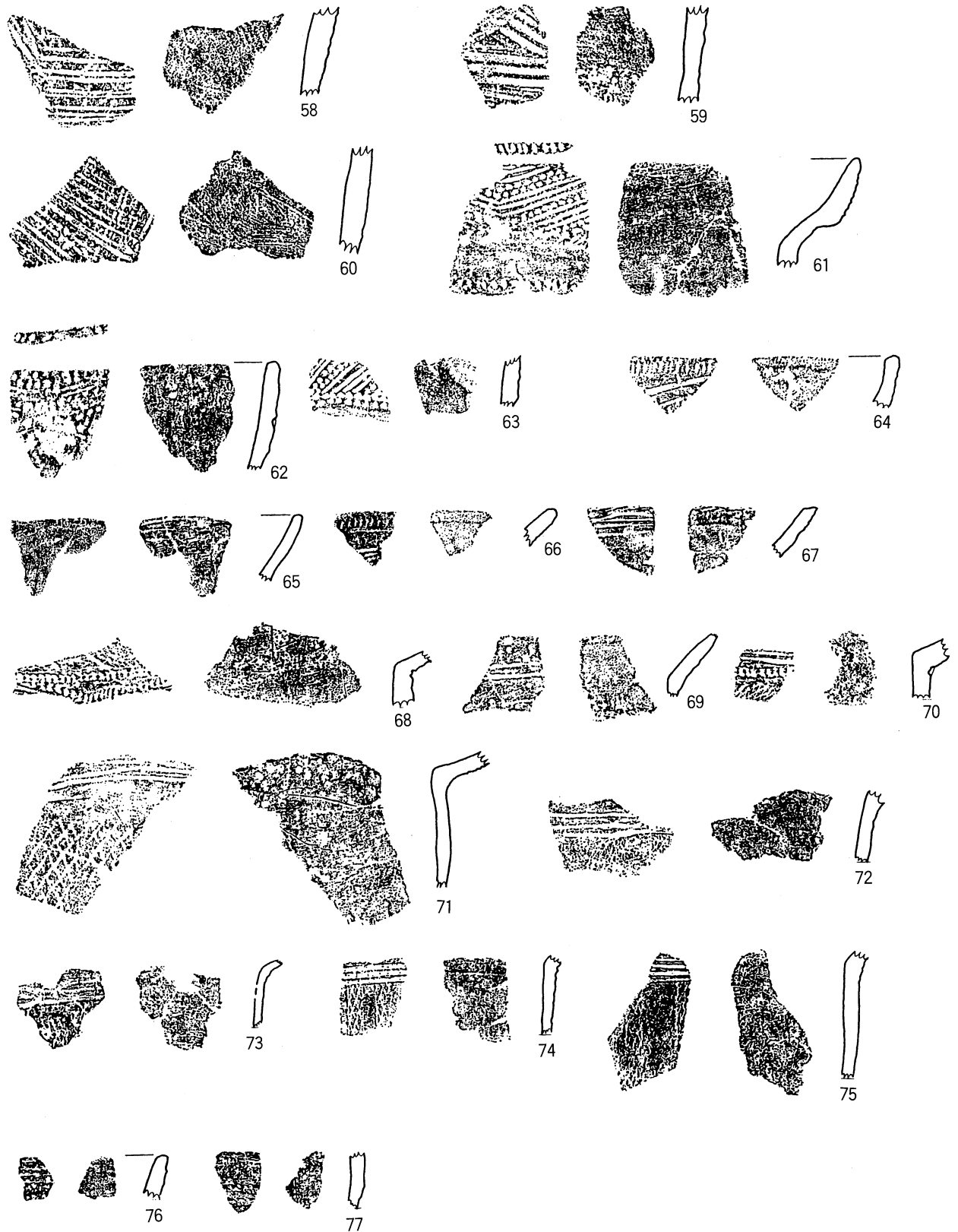


第23図 松元遺跡 縄文土器実測図 (2)

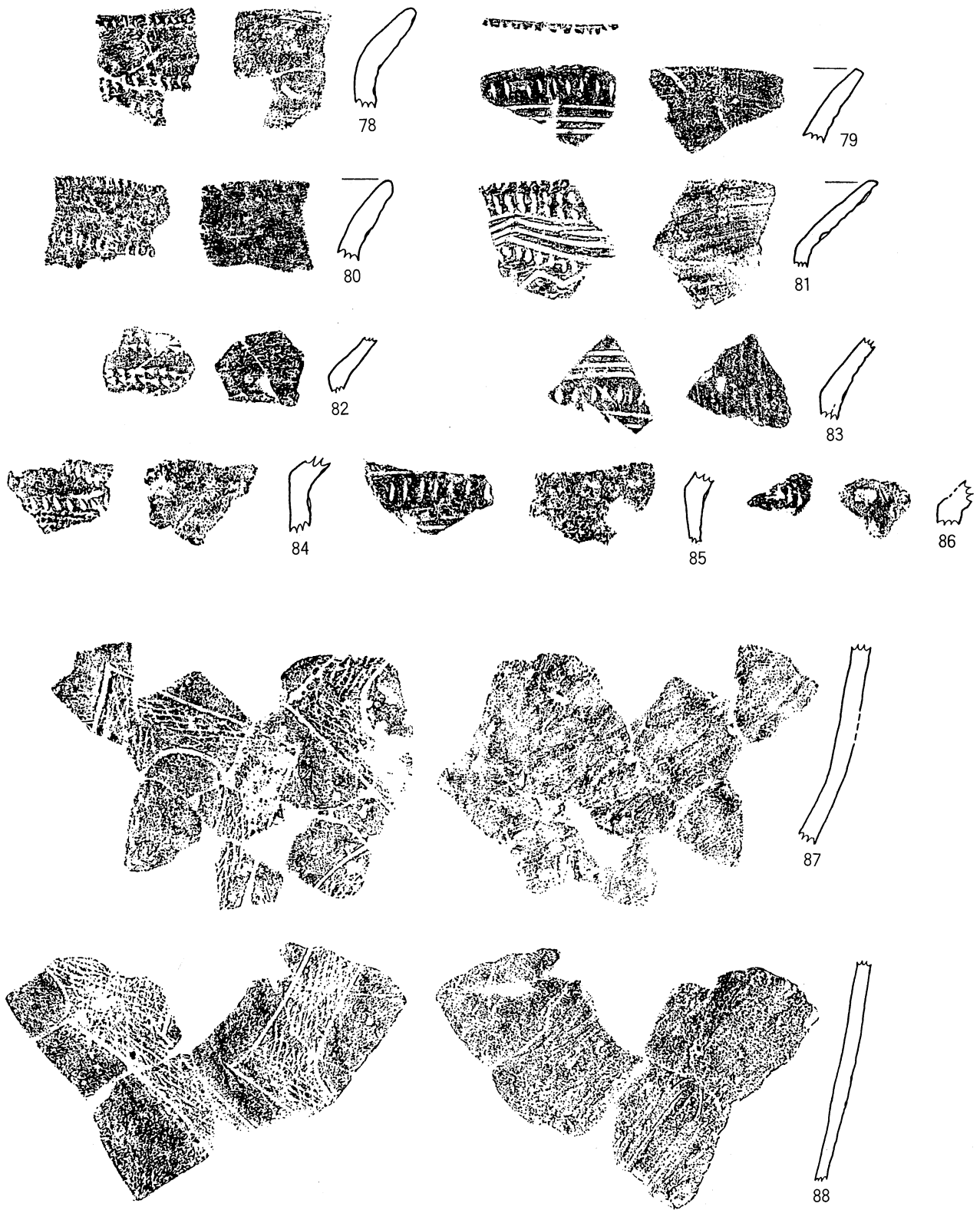


0 10cm

第24図 松元遺跡 縄文土器実測図 (3)

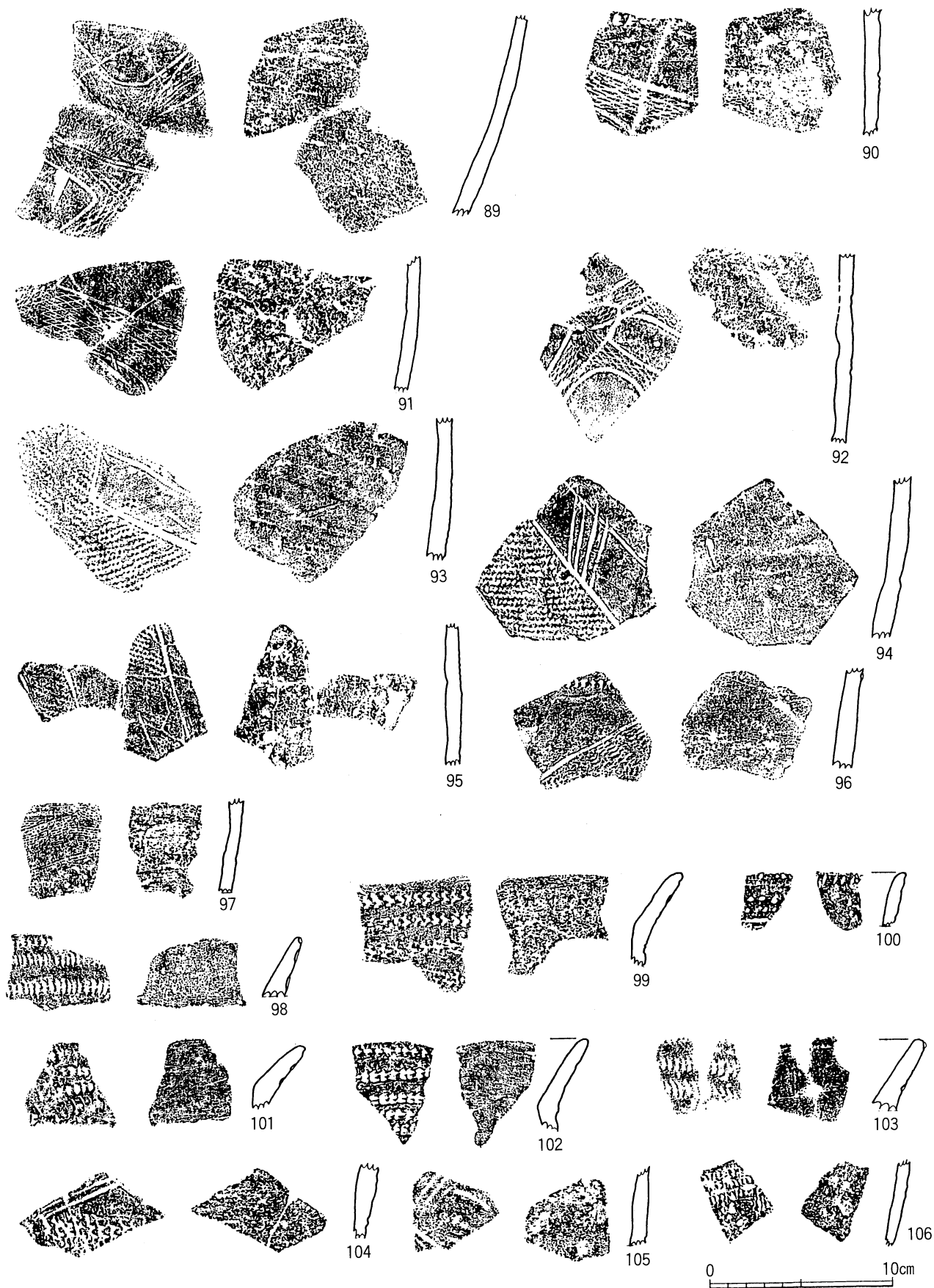


第25図 松元遺跡 縄文土器実測図 (4)

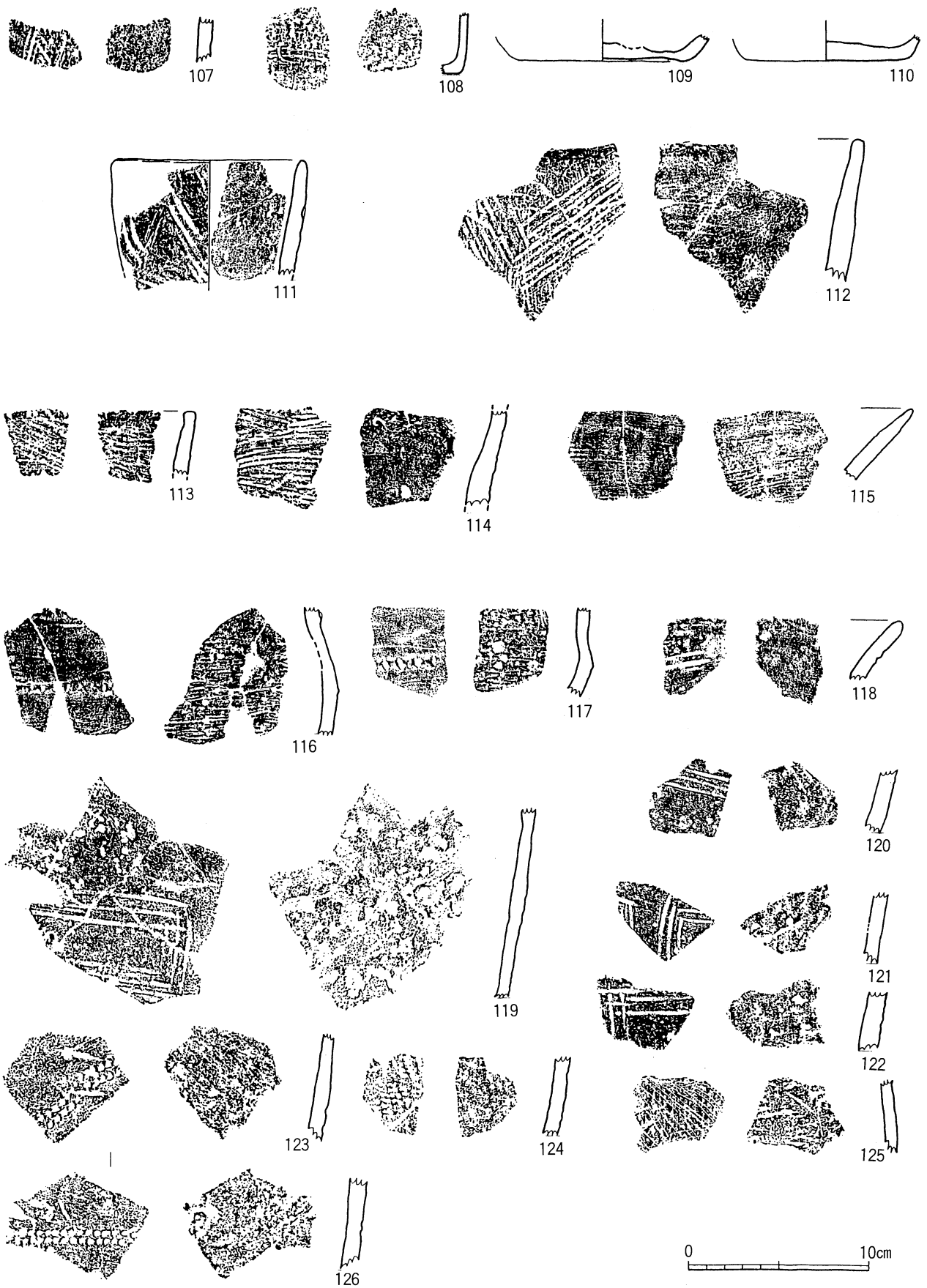


0 10cm

第26図 松元遺跡 縄文土器実測図 (5)



第27図 松元遺跡 縄文土器実測図 (6)



第28図 松元遺跡 縄文土器実測図 (7)

第2表 松元遺跡出土土器観察表 (1)

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
16	S I 43	縄文土器	深鉢	15.2			口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色砂粒 (1mm以下)、灰色砂粒 (2mm以下)	
17	S I 43	縄文土器	深鉢	24.8			押し引き刺突文	横方向のヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黄褐色砂粒 (3mm以下)、灰褐色砂粒 (2.5mm以下)、黒色光沢粒 (2mm以下)、透明光沢粒 (1mm以下)	
18	S I 43	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	丁寧なナデ	浅黄	浅黄	茶色粒 (3mm以下)、透明光沢粒、黒色光沢粒、灰白粒 (2mm以下)	
19	S I 43	縄文土器	不明				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	黒色、白色、半透明粒 (1.5mm以下)	
20	S I 43	縄文土器	不明				風化著しい	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色、半透明粒 (2mm以下)、褐色粒 (2.5mm以下) 少、灰色、黒色 (1mm以下)	
21	S I 18	縄文土器	深鉢				斜方向に貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白粒 (2mm以下)、黄橙色粒、透明光沢粒 (1mm以下) 少	
22	S I 30	縄文土器	深鉢				斜方向に貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	淡茶色粒 (2mm以下)、透明光沢細砂粒	
23	S I 30	縄文土器	深鉢				斜方向に貝殻条痕文	ヨコナデ	にぶい黄橙	浅黄	柱状の黒色光沢粒、透明光沢粒 (0.5mm以下)、白色粒 (1.5mm以下)	
24	S I 19	縄文土器	深鉢				撚糸文、ナデ	ナデ、風化著しい	明赤褐	明赤褐	1mm以下の黒色光沢粒、褐色細粒	
25	S I 19	縄文土器	深鉢				沈線、ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄橙	2mm以下の褐色粒、1mm以下の黒色光沢粒少量	
26	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻腹縁による連続刺突文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	茶褐色の砂粒 (3mm以下)、透明光沢粒、黒色光沢粒 (2mm以下)、灰白色、黒褐色の砂粒 (1mm以下)	
27	A区V層	縄文土器	深鉢				横方向の貝殻条痕文の上から貝殻腹縁による連続刺突文、その下に貝殻条痕文	ヘラミガキ	にぶい黄	にぶい黄橙	褐色砂粒、灰色砂粒、透明光沢粒 (1mm以下)	
28	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部には貝殻条痕文の上から貝殻腹縁による連続刺突文、その下に貝殻条痕文	口唇部はヘラミガキ、削りの後、丁寧なナデ	灰黄	灰黄	灰白砂粒、透明光沢粒、黒色光沢粒 (1mm以下)	
29	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に二条の刺突文、その下に貝殻条痕文	風化気味、ナデ?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢粒、灰色粒多 (微細~1mm程)	
30	A区VI層	縄文土器	深鉢	17			縁による連続刺突文	ヨコナデ、丁寧なナデ	にぶい橙	灰褐	灰白、褐灰の微細粒 (1mm以下)	
31	A区VI層	縄文土器	深鉢				口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ヘラミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白、灰褐色の微細粒 (1.5mm以下)	部分的にスス附着 (外面)
32	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	丁寧なナデ	浅黄	浅黄	透明光沢粒 (1mm以下)、黒色光沢粒、灰色砂粒 (2mm以下)	
33	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻腹縁による連続刺突文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ヘラミガキ	にぶい黄橙	褐灰	透明光沢粒 (2mm以下)、黒色光沢粒、灰白粒 (1mm以下)	
34	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ヘラミガキ	にぶい黄橙	褐灰	白色光沢粒、灰白粒、透明光沢粒 (1mm以下)	
35	A区V層	縄文土器	深鉢	44.8			口縁部に貝殻腹縁による刺突文、その下に貝殻条痕文	ミガキ若しくは丁寧なナデ	黄灰	暗灰黄	無色透明の砂粒 (1mm以下)、黒色、白色の砂粒 (1mm以下)	
36	A区VI層	縄文土器	深鉢				押し引き文?	ミガキ	暗灰黄	灰黄褐	黒色光沢粒 (2.5mm以下)、白色粒 (3mm以下)	
37	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に貝殻条痕文の上を斜方向の押し引き文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ヘラミガキ	浅黄橙	灰白	黒色光沢粒 (1.7mm以下)、透明光沢粒 (1mm以下)	一部にスス附着 (外面)
38	A区VI層	縄文土器	深鉢				貝殻腹縁による押し引き文、その下に斜方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白、黒褐色の微細粒	
39	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に貝殻腹縁による押し引き? その下に斜方向の貝殻条痕文	丁寧なナデ	橙	橙	透明光沢粒、黒色光沢粒 (1mm前後)	
40	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に横方向の貝殻条痕文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	灰色粒 (4.5mm以下)、乳白色粒 (3mm以下)、黒色光沢粒、半透明粒	
41	A区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に横方向の貝殻条痕文、その下に斜方向の貝殻条痕文	ナデ	にぶい橙	浅黄	褐色粒 (5mm以下)、半透明粒、灰色粒、白色粒 (2mm以下)	
42	B区III層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒色微細粒、透明光沢粒、灰色粒 (1mm前後) 少	

第3表 松元遺跡出土土器観察表 (2)

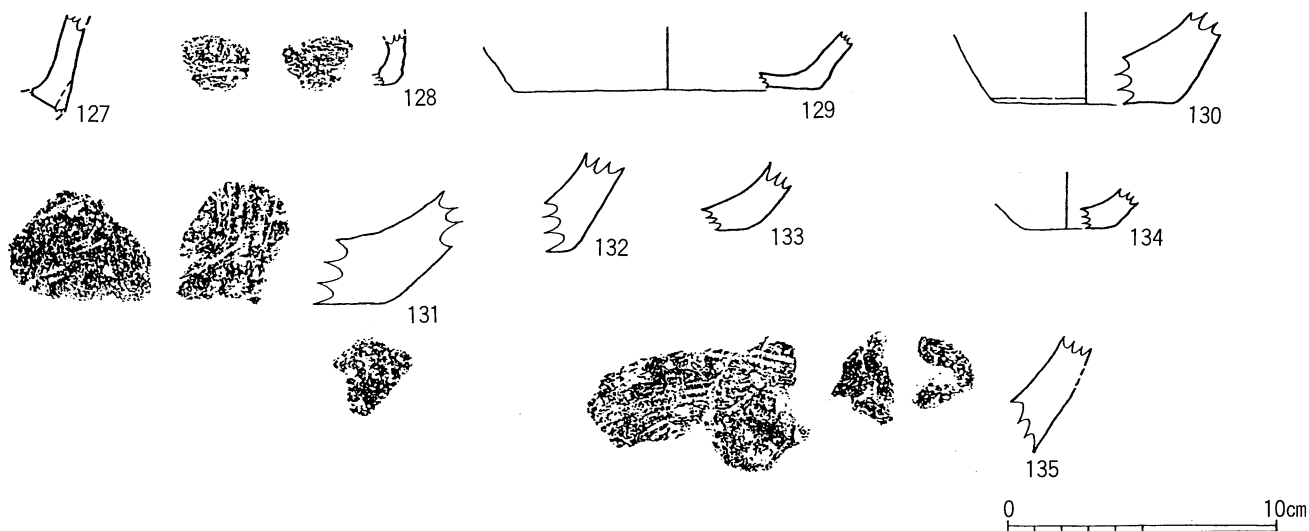
番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
43	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色微細粒、赤色酸化鉄	
44	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	風化著しい	橙	にぶい黄橙	透明光沢粒、黒色細粒、灰色粒(1mm以下)	
45	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻腹縁による条痕	ナデ	赤褐	にぶい黄橙	白色、灰色、褐色粒透明光沢粒、黒色光沢粒(1mm以下)	
46	A区V層	縄文土器	深鉢				斜方向に貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢粒、黒色粒、白色粒(1mm以下)	
47	A区V層	縄文土器	深鉢				斜方向に貝殻条痕文	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白色粒、半透明粒(2mm以下)	
48	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ミガキ又は丁寧なナデ	浅黄	黄灰	透明光沢粒、灰白粒(1mm以下)	
49	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文、ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色粒(0.4mm以下)、褐色粒、黒色光沢粒(2mm以下)、透明光沢粒(1mm以下)	
50	A区VI層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白色粒、透明光沢粒(1.5mm以下)、褐色粒(1mm以下)	
51	A区V層	縄文土器	深鉢				凹線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	柱状の黒色光沢粒(0.5mm以下)、白色粒(1mm以下)	
52	A区V層	縄文土器	深鉢				風化著しい	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	黒色光沢粒、透明光沢粒(1.5mm以下)、白色粒(1mm)	
53	A区VI層	縄文土器	深鉢				ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	透明光沢粒、黒色光沢粒(1.5mm以下)、灰白色粒(2mm以下)	
54	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	明赤褐	明赤褐	黒色光沢粒、透明光沢粒(1mm以下)	
55	A区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色微細粒、黒色光沢粒、灰色微細粒(1mm以下)	
56	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色、白色、灰色微細粒	
57	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい黄橙	灰色粒(3mm以下)多、透明粒(1~2mm)	
58	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白色粒(5mm以下)、黒色光沢粒(1mm以下)、透明光沢粒(2mm以下)	
59	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰色粒(2.5mm以下)、黒色光沢粒、半透明粒(1mm以下)	
60	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒、半透明粒(3mm以下)、黒色粒(0.5mm以下)	
61	C区V層	縄文土器 平格式土器	深鉢				斜方向の連続刺突文、沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色光沢粒(3mm以下)、灰白粒(2mm以下)	
62	C区V層	縄文土器 平格式土器	深鉢				口唇部に斜方向の刻み、口縁部に連続刺突文その下に連続刺突文、沈線文、ナデ	横ナデ	淡黄	にぶい黄橙	白色透明粒、黒色粒(2mm以下)	
63	C区V層	縄文土器 平格式土器	深鉢				斜方向の連続刺突文、沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色光沢粒(1.5mm以下)、灰白粒(1mm以下)	
64	C区V層	縄文土器 塞ノ神	深鉢				口唇部に刻み、口縁部に連続刺突文、その下に斜方向の沈線文、ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢微細粒(少量)	スス付着微量(外面)
65	C区V層	縄文土器	不明	10.1			タテナデ、指あさえ	ナデ	橙	にぶい黄橙	白色粒(1mm以下)少量	
66	C区V層	縄文土器	深鉢				口縁部に連続刺突文その下に沈線文	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	黒色光沢粒、透明光沢粒、灰色粒(1mm以下)	
67	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文、ナデ	口唇部に刺突文ナデ	橙	橙	灰褐色粒(1.5mm以下)、灰白粒(2mm以下)、黒色光沢粒、透明光沢粒(1mm以下)	
68	C区V層	縄文土器	深鉢				頸部に刺突文、その下に燃糸文、ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒(2mm以下)白色半透明粒(1mm以下)	
69	C区V層	縄文土器 塞ノ神	深鉢				沈線文 横ナデ	横ナデ 口縁部に指頭痕?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢微細粒	
70	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文 頸部に連続刺突文 燃糸文、ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	灰白粒(3mm以下)、黒色光沢粒(2mm以下)、黒褐色粒(4mm以下)透明光沢粒(1mm以下)	
71	C区V層	縄文土器	深鉢				口縁部~頸部は沈線、横ナデ、胴部は網目燃糸文	風化著しい	にぶい黄橙	淡黄	灰白粒(2mm以下)、透明光沢粒(1mm以下)	スス付着?(外面)
72	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線、燃糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色粒(2mm以下)、光沢粒(1.5mm以下)少、褐色砂粒(1mm以下)	
73	C区V層	縄文土器	深鉢				頸部に沈線文、その下に燃糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐色粒(2mm以下)、柱状光沢粒(2mm)、光沢微細粒(少)	
74	C区V層	縄文土器	深鉢				頸部に沈線文、その下に燃糸文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒、透明光沢粒、灰色粒、黒褐色粒(1mm以下)	

第4表 松元遺跡出土土器観察表 (3)

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
75	C区V層	縄文土器	深鉢				頸部に刺突文、その下に捺糸文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒(0.5mm)	
76	C区III層	縄文土器	深鉢				微隆起突帯	ナデ	灰オリーブ	オリーブ黄	黒色光沢粒、透明光沢粒、黒褐色粒(1mm以下) 灰白色粒(2mm以下)	
77	C区V層	縄文土器	深鉢				微隆起突帯、ナデ	ナデ	灰オリーブ	灰オリーブ	透明光沢粒、黒色光沢粒、灰白粒(1mm以下)	
78	C区V層	縄文土器	深鉢				口唇部に刻み、その下に連続刺突文、横ナデ	横ナデ	黄橙	黄橙	灰褐砂粒(1mm以下)	
79	C区V層	縄文土器	深鉢				口唇部に押し刻み、口縁部に刺突文、その下に沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢粒(1.5mm以下)、黒色光沢粒、灰白粒(1mm以下)	
80	C区V層	縄文土器	深鉢				口唇部に刻み、C字型の連続刺突文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒、半透明光沢粒、灰白粒(1.5mm以下)	
81	C区V層	縄文土器	深鉢				口唇部に刻み、ヘラ状工具による連続刺突文、その下に棒状工具による沈線文	ナデ	橙	にぶい橙	黒色粒(1mm)	
82	C区V層	縄文土器	深鉢				連続刺突文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	透明光沢粒(1.5mm以下)、黒色光沢粒、灰白粒(1mm以下)	
83	C区V層	縄文土器 壺ノ神	深鉢				沈線、頸部に刺突文 ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	柱状の黒色光沢粒(0.5mm以下)	
84	C区V層	縄文土器 壺ノ神	深鉢				連続刺突文、沈線、捺糸文、ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	黒色微細粒、透明光沢粒(1mm以下)	
85	C区V層	縄文土器 壺ノ神	深鉢				沈線 頸部に爪型刺突文、ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢微細粒、白色半透明粒(1mm)	
86	C区V層	縄文土器	深鉢				頸部に刺突文、ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	褐灰粒(6mm以下)、透明光沢粒(1mm以下)、灰色微細粒	
87	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線と網目捺糸文	削り	にぶい橙	にぶい黄橙	褐色粒(3mm以下)、灰白色粒(2mm以下)、黒色光沢粒、透明光沢粒(1.5mm以下)、黒色粒(1mm以下)	
88	C区V層	縄文土器	深鉢				ヨコナデ、沈線、捺糸文	斜方向の削り	にぶい橙	にぶい橙	白色粒(0.5~3mm)、透明光沢粒(0.5~1mm以下)、黒色光沢粒(1mm位)	スス付着(外面)
89	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線区画の捺糸文	ナデ?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢微細粒、白色粒(1mm)少、黒色細粒	
90	C区V層	縄文土器	深鉢				連続刺突文、横ナデ 沈線、捺糸文、	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒(0.5~4mm)、黒色粒(1mm位)、半透明粒(1.5mm以下)	
91	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線区画の捺糸文	風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄	黒色光沢微細粒、透明光沢粒、灰色粒(1mm前後)	
92	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線区画の捺糸文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒(4mm以下)、灰白粒(3mm以下)、透明光沢粒、黒色粒(1mm以下)	
93	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線、縄文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒(2mm以下)	
94	C区IV層	縄文土器 壺ノ神	深鉢				沈線、縄文、ナデ	粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤褐色粒(2mm以下)	
95	C区V層	縄文土器 壺ノ神	深鉢				沈線区画の捺糸文	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	黒色光沢粒、透明光沢粒(1mm以下)	
96	C区V層	縄文土器	深鉢				連続刺突文、沈線、捺糸文、ナデ	ナデ	明黄褐	橙	黒色粒(4mm以下)、白色粒(1mm以下)、透明光沢粒、黒色光沢粒、黒褐色茶色粒(2mm以下)	
97	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線、捺糸文、ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色砂粒(1mm以下)、白色粒(2.5mm以下)	
98	C区V層	縄文土器	深鉢				口唇部に刻み、口縁部に連続刺突文、ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	灰白粒、透明光沢粒(2mm以下)、茶褐色粒(3mm以下)、黒色光沢粒(1mm以下)	
99	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻腹縁による連続刺突文、横ナデ	横ナデ	にぶい橙	橙	灰白、灰黄、黒褐色砂粒(3mm以下)多	
100	C区V層	縄文土器	深鉢	14.6			口唇部に刻み、口縁部はヨコナデ、その下に刻みのある微隆起突帯、連続刺突文 沈線	口唇部に斜方向の刻み目、ヨコナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	灰褐色(1mm以下)、黒褐色砂粒	
101	C区V層	縄文土器	深鉢				連続刺突文、ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	白色透明粒(1~2mm)、柱状の黒色光沢粒(微細~1mm)、白色粒(微細~2mm)	
102	C区V層	縄文土器	深鉢				口縁部~頸部に連続貝殻刺突文、ナデ	ナデ	橙	橙	透明光沢粒、褐色粒、透明光沢細粒(1mm以下)	スス付着(外面)
103	C区V層	縄文土器 壺ノ神	深鉢				口唇部に刻み、その下に連続爪型刺突文 横ナデ	横ナデ	灰褐	にぶい黄橙	白色粒、褐色粒、透明光沢細粒(1mm以下)	
104	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線、貝殻刺突文	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	黒色光沢微細粒、透明光沢粒、白色粒(1mm以下)	
105	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	半透明粒(1.5mm以下)、白色粒、黒色粒(1mm以下)	
106	C区V層	縄文土器	深鉢				刻み目のある微隆起突帯、横ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	乳白色、黒色光沢微細粒	スス付着(外面)

第5表 松元遺跡出土土器観察表 (4)

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
107	C区V層	縄文土器	深鉢				綾杉文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色、灰色、白色粒(2.5mm以下)	
108	C区V層	縄文土器	深鉢・底部				貝殻条痕文、ナデ 風化著しい	風化著しい、風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢粒(1mm以下)、柱状黒色光沢粒(1.5mm以下)、半透明粒(2mm以下)	スス附着(内外面)
109	C区V層	縄文土器	深鉢・底部				粗いナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	浅黄砂粒(1.5mm以下)、光沢砂粒(1mm以下)	炭化物附着(内面)
110	C区V層	縄文土器	深鉢・底部		9		ナデ	粗いナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	灰オリーブ光沢砂粒(2mm以下)	
111	C区V層	縄文土器	深鉢				斜方向の沈線、横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	柱状黒色光沢粒、白色粒(1mm以下)	
112	C区V層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰色粒(2mm以下)	
113	C区VI層	縄文土器 轟A式	深鉢				貝殻条痕文	口唇部は横ナデ貝殻条痕文、指押さえあり	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰白砂粒(1.5mm以下)	
114	C区V層	縄文土器 轟A式	深鉢				貝殻条痕文	丁寧な横ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙	灰褐色の石粒あり(4mm大)	
115	C区III層	縄文土器	深鉢				貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色細砂粒(少量)	スス附着(内外面)
116	C区III層	縄文土器	不明				連続刺突文のある突帯、横方向のナデ	横方向の貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	半透明粒、灰色粒(1.5mm以下)少、黒色粒(0.5mm以下)	スス附着(外面)
117	C区III層	縄文土器	不明				刻み目突帯、ナデ	貝殻条痕文、風化気味	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色半透明粒(1.5mm以下)	スス附着(外面)
118	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文、横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	柱状黒色光沢粒、透明光沢粒(1mm以下)	波状口縁
119	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色粒、灰色粒、半透明光沢粒(2mm以下)	
120	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文、ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	黒色光沢粒、灰白粒、透明光沢粒(1mm以下)	
121	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文、ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒(0.5mm以下)少	
122	C区V層	縄文土器	深鉢				沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	黒色光沢粒、灰白粒(1mm以下)、透明光沢粒(1.5mm以下)	
123	C区V層	縄文土器	深鉢				連続刺突文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明光沢粒、灰褐色粒、黒色光沢粒(1mm以下)	
124	C区V層	縄文土器	深鉢				爪あるいは工具による連続刺突文、縄文、沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰色粒、黒色光沢粒、半透明粒(1.5mm以下)、	
125	C区V層	縄文土器	深鉢				細目の沈線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒褐色粒(3mm以下)、灰褐色粒(2mm以下)黄橙砂粒(1mm以下)	
126	C区V層	縄文土器	深鉢				連続刺突文、ナデ	ナデ	浅黄	浅黄	透明光沢粒、灰白粒、黒褐色粒(1mm以下)	
127	C区V層	縄文土器	深鉢・底部				ナデ	横ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	白色粒(1~5mm)、褐色粒(1~2mm)、黒色光沢粒(3mm)、透明光沢粒(1mm以下)	
128	C区V層	縄文土器	深鉢・底部				粗いナデ	粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒褐色の微細粒	
129	A区V層	縄文土器	深鉢・底部				撚糸文、沈線文、ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒、褐色粒(0.5mm以下)少	
130	A区V層	縄文土器	底部		6.6		ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白色粒、透明粒、黒色細粒(1mm以下)	
131	A区V層	縄文土器	底部				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	白色粒(1mm以下)、黒色微細粒	
132	A区V層	縄文土器	底部		5.6		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	白色粒(1.5mm以下)	
133	A区V層	縄文土器	底部				ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰色、白色、半透明粒(2.5mm以下)	
134	A区V層	縄文土器	底部		3.6		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白色粒(1mm以下)	
135	A区VI層	縄文土器	底部				ナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	黄灰浅黄橙	白色粒(1.5mm以下)多、茶色粒(3.5mm程)少	



第29図 松元遺跡 縄文土器実測図 (8)

考えられる。

V類土器 (第28図113~114)

IV~V層から出土した土器で、口唇部外端に刻み目がみられ、外面に斜行する貝殻条痕文が顕著に施されている。内面は貝殻条痕による整形の後、ナデ調整を行っている。器面の内外に貝殻条痕を顕著に残す轟式土器で、アカホヤ火山灰降灰以前の轟A式土器と思われる。色調は黒褐色で焼成もよく堅固である。

VI類土器 (第28図115~118)

III層から出土した土器で、胴部が段状に屈曲する器形をなし、微隆起突帯上に刻みが施されている。内面に貝殻条痕を顕著に残すが、外面は貝殻条痕による整形の後、丁寧なナデ仕上げになっている。V類と同じ轟式系土器で、アカホヤ火山灰降灰後の轟B式土器と思われる。

その他の土器 (第28図119~126)

119~122は、胴部に沈線の幾何学模様の一部がみられる。内外面ともナデ調整である。これらはいずれもIV類に近い器形になると思われる。123、124は、外面にナデ調整の上に棒状工具による連続刺突文が2条に施されている。内面はナデ調整である。これらは、いずれもIII類土器に近い器形になると思われる。125は、外面に串状の工具のようなもので細目の沈線文が不均等の間隔で施されている。126は外面に爪あるいは工具による連続刺突文、その下に縄文、沈線が施されている。内面はナデ調整である。

底部 (第29図127~135)

127~129は、C区V層から出土し、いずれも器形は深鉢と考えられる。内外面とも風化が著しいが、ナデ調整のようである。130~134はA区V層から、135はA区VI層から出土し、器形は不明である。いずれも風化が著しいが、内外面ともナデ調整のようである。

(2) 石器

石器は148点出土している。出土層はすべてV層出土であり、縄文時代早期のものである。その内訳は、二次加工剥片22点、使用痕剥片31点、石斧4点、砥石1点、頁岩の石核1点、黒曜石の石核21点、スクレイパー8点、石鏃30点、尖頭器状石器1点、石製品1点、石皿2点、敲石3点、磨石3点、石鏃の未成品4点である。

石鏃 (第30図)

石鏃は、未製品4点を含めて34点出土した。その石材ごとの内訳は黒曜石29点、チャート3点、頁岩1点、砂岩質1点で、黒曜石が使用頻度では高い比率を示している。石鏃34点を形状において整理してみると、分類可能な石鏃19点、一部が欠損していて分類できない石鏃11点、石鏃の未成品4点となった。したがって、19点についてⅠ類は二等辺三角形、Ⅱ類は正三角形に分類できる。さらにその基部の作り出しの状況でa：平基なもの、b：浅く挟れるもの、c：V字状に挟れるもの、d：U字状に挟れるものの4つに分類できる。

Ⅰ類 a (136) ; 全体形が二等辺三角形を呈する平基の石鏃である。資料点数は2点である。出土地点は、A区で2点が出土した。

Ⅰ類 b (137~140) ; 全体形が二等辺三角形を呈する凹基(浅い挟り)の石鏃である。資料点数は6点である。出土地点は、A区で2点、B区で1点、C区で3点が出土した。

Ⅰ類 c (141~143) ; 全体形が二等辺三角形を呈する凹基(V字形の挟り)の石鏃である。資料点数は3点である。出土地点は、A区で2点、B区で1点が出土した。

Ⅰ類 d (144~146) ; 全体形が二等辺三角形を呈する凹基(U字形の挟り)の石鏃である。資料点数は4点である。出土地点は、C区で4点が出土した。

Ⅱ類 a (147) ; 全体形が正三角形を呈する平基の石鏃である。資料点数は2点である。出土地点は、A区で2点が出土した。

Ⅱ類 b (148、149) ; 全体形が正三角形を呈する凹基(浅い挟り)の石鏃である。資料点数は2点である。出土地点は、A区で2点が出土した。

未成品 ; 出土資料の中に調整加工途中と類推されるものが3点あった。いずれもA区から出土しており、石材は黒曜石であった。

所属不明の石鏃 ; 欠損によって石器の全体を類推できず、分類できなかった資料である。資料数は12点である。出土地点は、A区から9点、C区から3点が出土した。石材はいずれも黒曜石であった。

尖頭器状石器 (第30図150)

150は全体的に調整は粗く、尖頭状をなすとは言え先端は鋭利さに欠ける。左側縁は折断面をなし、右側縁が鋸歯状に整形されている。

スクレイパー (第30~31図151~154)

スクレイパーは21点出土した。石器組成に占める割合は、12%である。石材はいずれも頁岩であった。151は、礫を分割した際に生じた分割剥片を素材としている。大半は自然面を残し、厚みがある。左側縁に刃部調整を施している。152は、上部は欠損しているもののほぼ全周にわたって調整加工が施

されていると考えられる。左側縁および下縁部は、比較的急角度に調整が行われるが、右側縁は平坦である。153は、両側縁部にまで刃部形成の調整剥離が及んでいる。刃部端を結ぶ線と石器との関係は、直交している。素材は、分厚な縦長剥片である。154の表面は、自然面で覆われ、裏側に刃部調整を入念に行っている。上下両縁辺に連続的に調整が行われるが、厚みのある上縁に丁寧な調整が観察される。

石核 (第31図155~165)

155~165から黒曜石製の石核である。155は剥片素材ではあるが、打面転移を行わずに最大幅である上部を打面として剥片剥離を行っている。頭部調整が顕著である。156、164は、打面転移が素材の周縁に沿って行われ、求心状に剥片剥離を行っている。157は、打面がわずかに残存するが、素材そのものは力が下方にまで抜けきれず、ステップ状をなしている。剥片剥離は、表面のみに施される。162は、表面と裏面で打面の設定が異なっている。剥片を素材とした石核である。158は、剥片素材の石核である。剥片剥離は片面のみに行われ、剥離方向も上部からの一方向で限定される。表側のみに剥離作業を行っている。159は、打面を上部縁辺に設定している。表側のみに剥離作業を行っている。160は、剥片剥離が両面に行われ、求心状に進行している様子が窺える。161は、表面に上下方向からの剥片剥離が行われたことが窺える。163は、表及び横に剥片剥離が行われている。表は上下方向から、裏は、下方より剥離されている。165は、表面のみに剥片剥離が行われ、求心状に剥離痕が構成されていることが窺える。

局部磨製石斧 (第32図166~168)

局部磨製石斧は、3点出土した。166、168は頁岩製、167は砂岩製と思われる。166は、C区のV層で出土した。石器の全体形は長方形を呈し、右側縁部の中央部を中心に、剥離調整による緩やかな曲線が形成されている。基部及び両側縁に敲打痕が認められる。両刃の局部磨製石斧である。167は、C区のIV層から出土した。石器の全体形はほぼ長楕円形を呈し、基部及び両側縁に敲打痕が認められる両刃の局部磨製石斧である。168は、刃部付近しか残存しないので、具体的な記述は難しいが両面に研磨調整が施され、両刃の石斧である。刃部は偏りのある「U」形を呈するが、鋭利さに欠ける。

磨石・敲石 (第33図169~174)

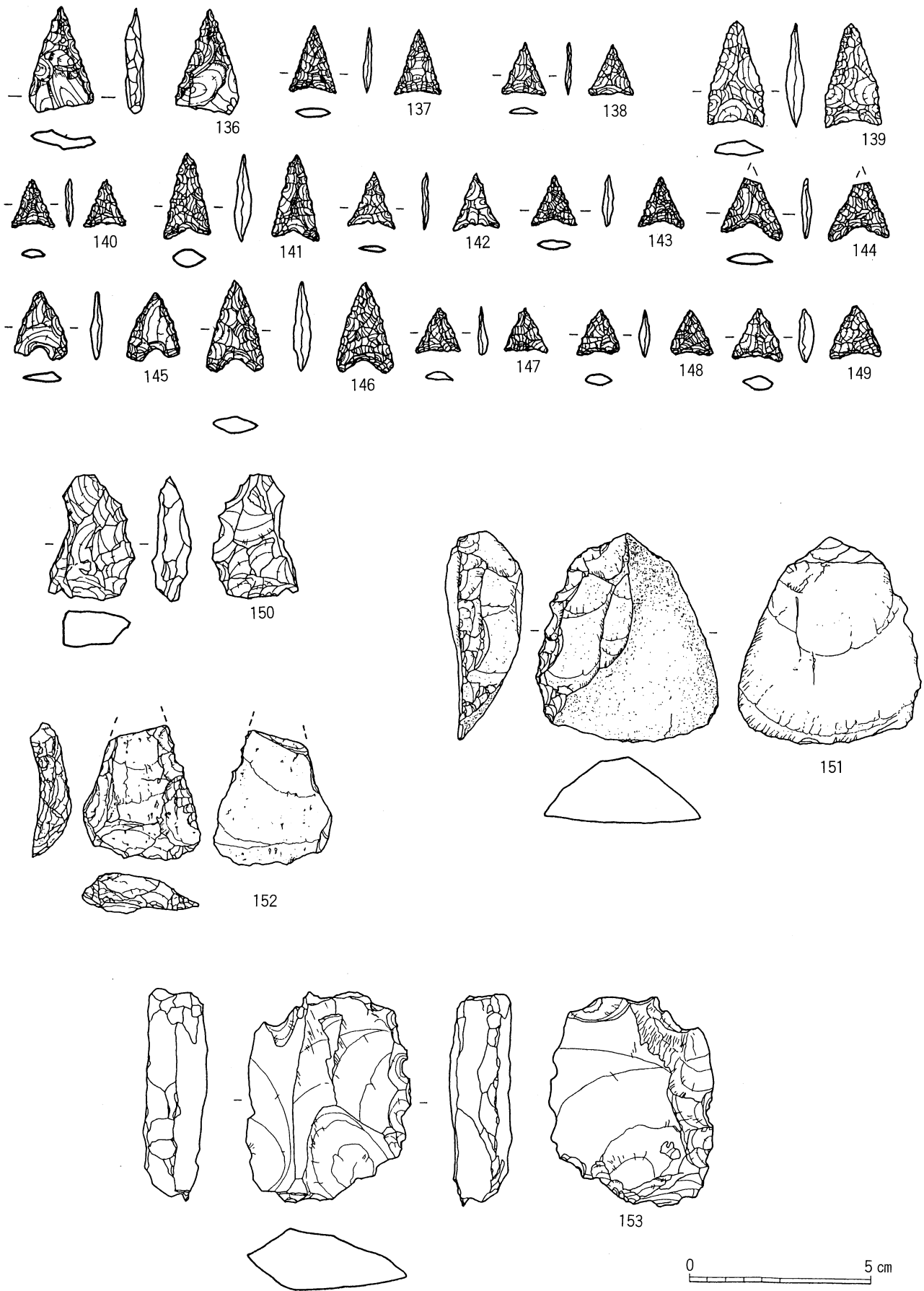
磨石・敲石は、磨石19点、敲石3点の合計22点である。磨石は、A区から2点、C区から17点、うち15点が北側に散在して出土した。敲石は、A区から2点、C区から1点出土した。石材は、砂岩6点、凝灰岩15点、ホルンフェルス1点である。磨石・敲石の形状は、円形(171,172,174)、楕円形(173)、変形楕円形(169,170)などがある。敲打痕の部位は、上下両端にみられるもの(169,170)、上下両端と両側にみられるもの(171)、表裏面にみられるもの(173,174)がある。

石皿 (第34図175)

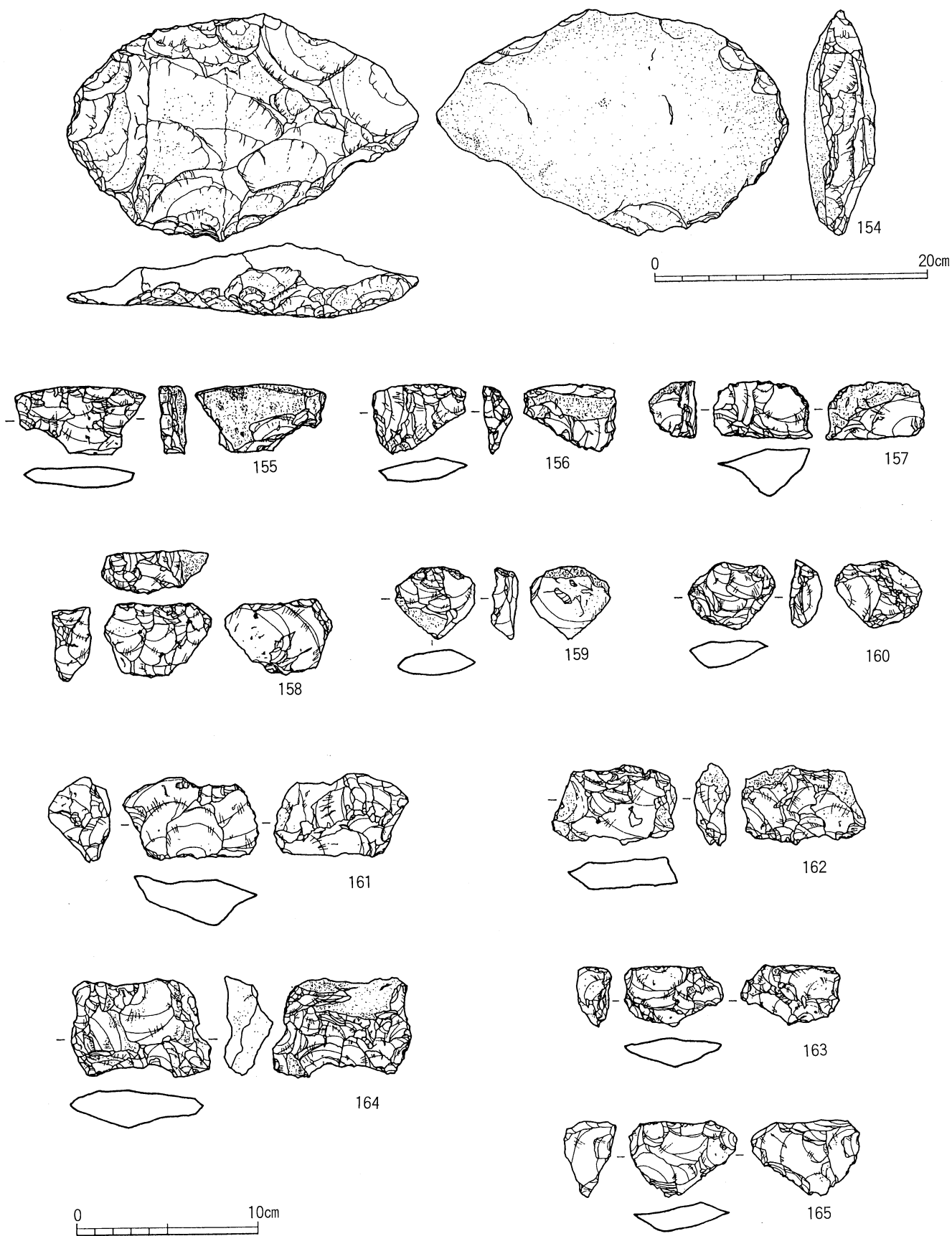
石皿は2点出土した。A区の集石遺構(S I 7)から1点(175)、C区の包含層から1点出土した。175は、片面に上下方向に磨り減った面がはっきりと残っている。

二次加工剥片 (第34図176)

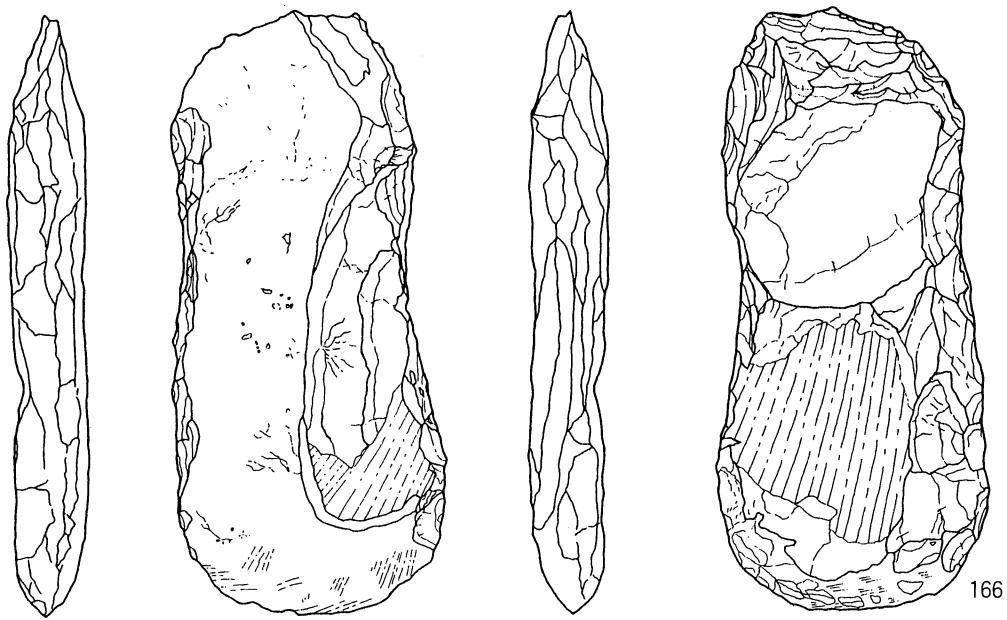
二次加工剥片は、18点出土した。176は縦長剥片を素材としている。二次加工が右側縁にみられる。石質は珪岩と思われる。



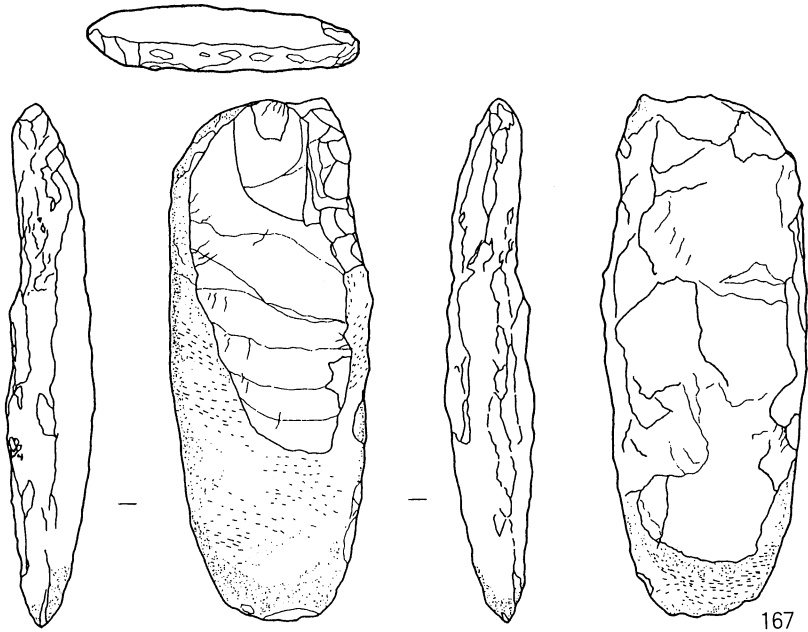
第30图 松元遺跡 石器実測图 (1)



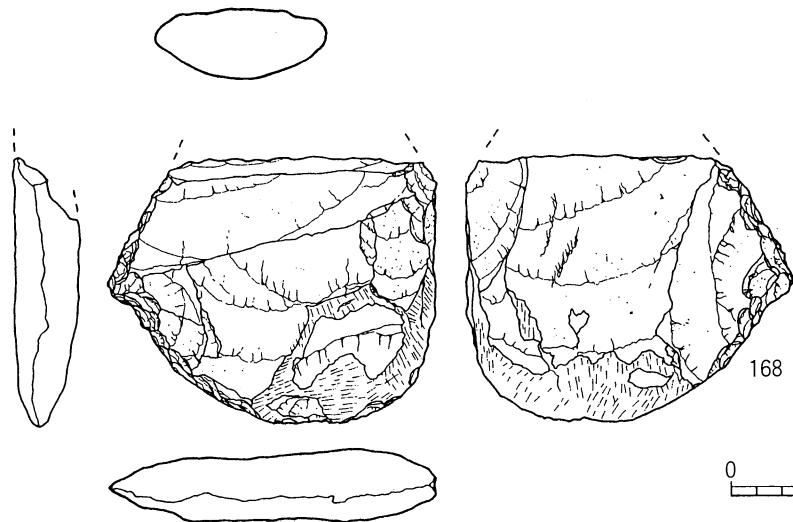
第31图 松元遺跡 石器実測図 (2)



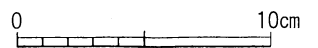
166



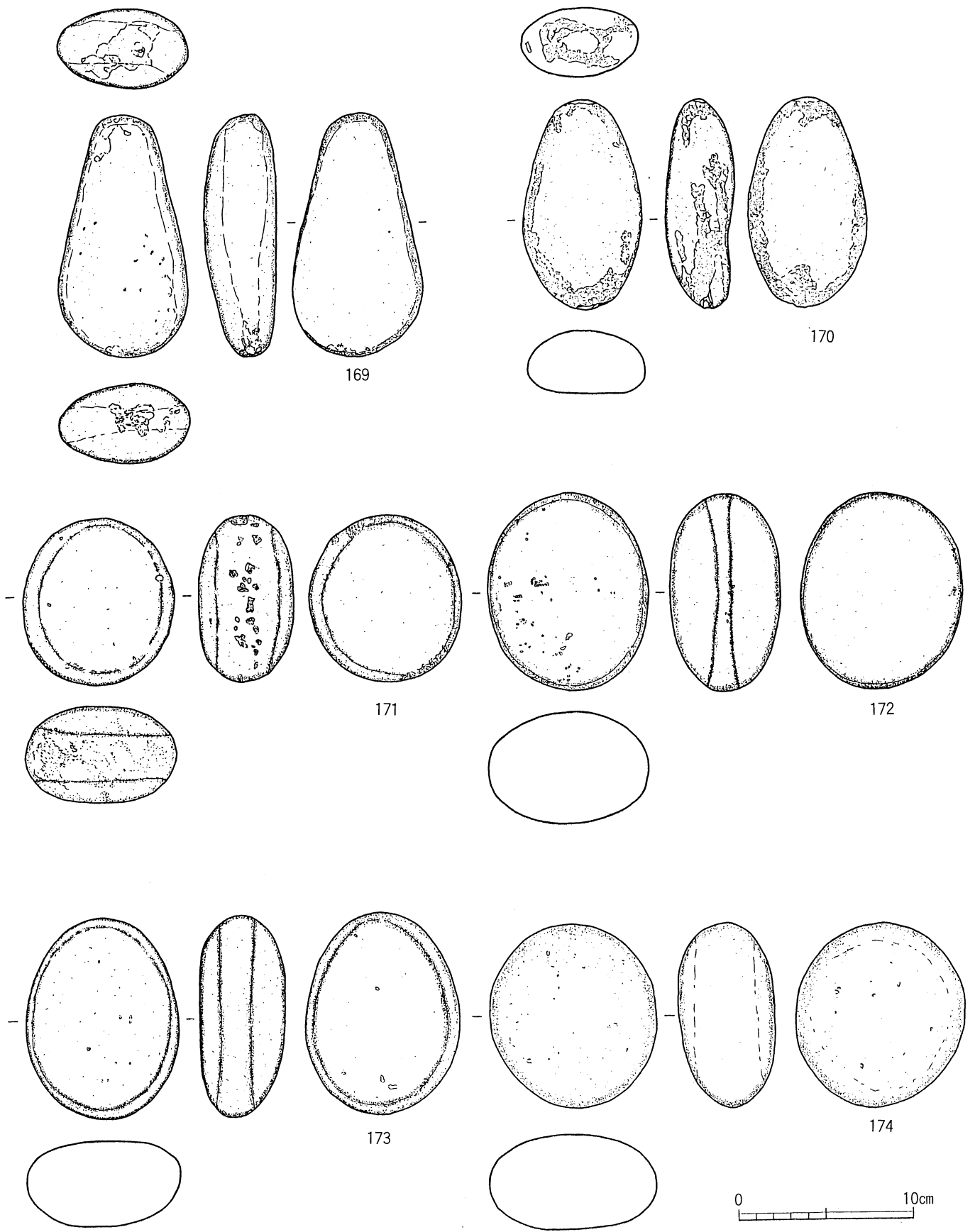
167



168



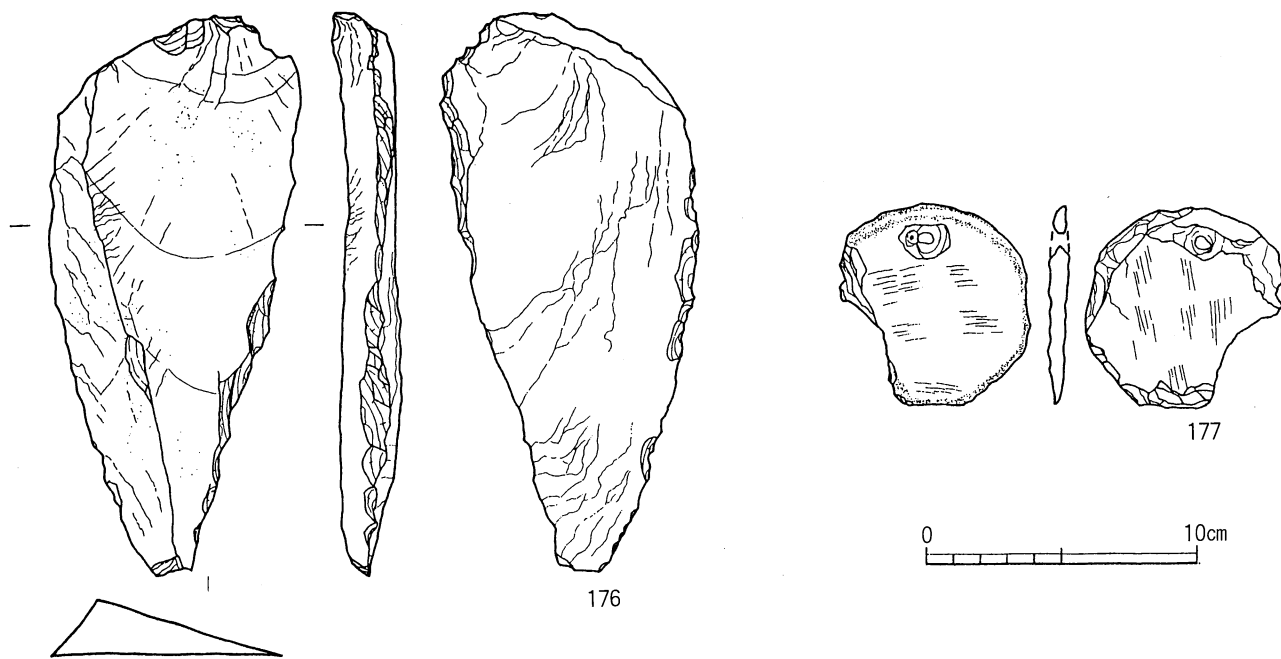
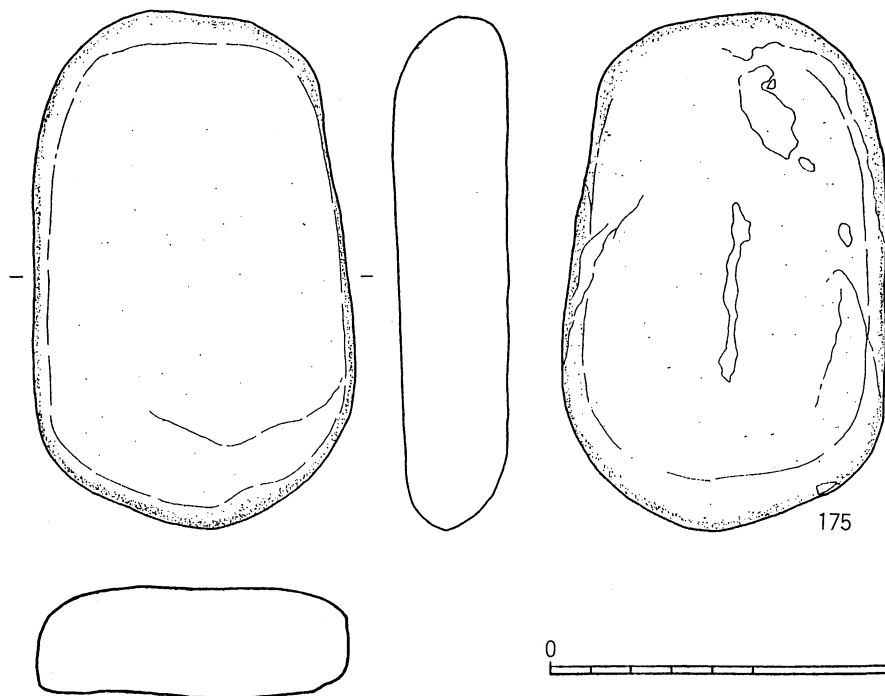
第32図 松元遺跡 石器実測図 (3)



第33图 松元遺跡 石器実測図 (4)

石製品 (第34図177)

177は、器種がはっきりしないため石製品とした、形状が不定形で、表裏に擦痕があり、穿孔が1個みられ、表の穿孔の同心円内に1カ所失敗した痕跡が残っている。石質は頁岩と思われる。



第34図 松元遺跡 石器実測図 (5)

第6表 松元遺跡出土石器計測表(1)

遺物番号	グリット	層位	器種	分類	石 材	計 測 値				備 考
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
136	C-20	V	石鏃	I a	チャート	2.95	1.8	0.5	2.5	
137	C-21	V	石鏃	I b	チャート	1.85	1.35	0.22	0.3	
138	F-17	Ⅲ	石鏃	I b	黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.2	
139	K-8	V	石鏃	I b	頁岩	2.4	1.6	0.5	1.9	
140	E-22	V	石鏃	I b	黒曜石	1.35	1.2	0.2	0.1	
141	C区	Ⅳ	石鏃	I c	チャート	2.4	1.35	0.49	0.8	
142	S I 14	V	石鏃	I c	黒曜石	1.55	1.3	0.2	0.2	
143	A区		石鏃	I c	黒曜石	1.4	1.3	0.28	0.3	
144	G-13	Ⅳ	石鏃	I d	黒曜石	1.7	0.3	1.75	0.5	
145	L-7	V	石鏃	I d	頁岩	1.9	1.48	0.33	0.8	
146	H-13	V	石鏃	I d	黒曜石	2.5	1.6	0.5	1.2	
147	C-20	V	石鏃	Ⅱ a	黒曜石	1.3	1.2	0.25	0.2	
148	F-21	V	石鏃	Ⅱ b	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.3	
149	S A-4		石鏃	Ⅱ b	黒曜石	1.5	1.4	0.4	0.6	
150	G-13	V	尖頭状		チャート	3.5	2.1	1.0	8.1	
151	M-6	V	スクレ		頁岩	5.7	5.0	1.9	51.7	
152	M-6	V	スクレ		黒曜石	3.7	4.0	0.9	11.4	
153	M-5	V	スクレ		頁岩	5.85	4.5	1.65	50.4	
154	L-8	V	スクレ		砂岩?	6.1	9.7	1.9	107.7	
155	C-21	Ⅶ	石核		黒曜石	1.9	3.6	0.6	4.7	
156	D-23	V	石核		黒曜石	1.9	2.6	0.7	2.7	
157	C-20	V	石核		黒曜石	1.6	2.5	1.3	5.3	
158	S A 3	V	石核		黒曜石	2.0	3.0	1.1	6.5	
159	F-20	V	石核		黒曜石	2.1	2.2	0.7	2.9	
160	A区		石核		黒曜石	1.8	2.3	0.8	3.0	
161	F-20	V	石核		黒曜石	2.2	3.4	1.7	10.7	
162	S I 40	V	石核		黒曜石	2.2	3.3	1.0	6.4	
163	C-20	V	石核		黒曜石	1.7	2.8	0.9	3.4	
164	L-6	V	石核		黒曜石	3.2	3.8	1.1	9.8	
165	S A 4	V	石核		黒曜石	2.0	3.0	1.5	5.5	
166	K-7	V	局磨斧		頁岩	12	5.3	1.5	129.5	
167	C区	Ⅳ	局磨斧		砂岩	10.4	4.05	1.8	99.2	
168	D-22	V	局磨斧		頁岩	5.3	6.5	1.4	51.9	
169	C区	V	敲石		砂岩	14.12	7.55	4.3	565.6	
170	S I 7	V	敲石		砂岩	12.2	6.9	3.85	429.5	
171	L-7	V	磨石		尾鈴酸性岩	4.75	8.9	5.59	707.9	
172	C-20	V	磨石		尾鈴酸性岩	11.62	9.35	6.45	980	
173	L-5	V	磨石		尾鈴酸性岩	11.75	8.98	5.05	770.5	
174	L-6	V	磨石		尾鈴酸性岩	10.7	9.76	5.55	833	
175	S I 7	V	石皿		砂岩	38.45	20.5	8.6		
176	L-6	V	二次剝		シルト岩	9.90	4.75	0.9	50.3	
177	K-8	V	石製品		頁岩	2.0	3.8	0.35	7.4	
187	S A 2		石皿		砂岩	35.9	18.45	7.25		
188	S A 2		砥石		砂岩	7.38	8.22	4.6	452	

第3節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、A区のV層上面から竪穴遺構が1基が検出された。遺物の出土は少ないが、接合復元できた甕が1点、口縁部や底部が出土した。遺構は長方形を基調とするプランであり、遺構内でピットは数個検出されているけれどもその配置から柱穴としては判断しがたいので、ここでは一応竪穴遺構として報告するが、竪穴住居跡である可能性は高い。

1 遺構と遺物

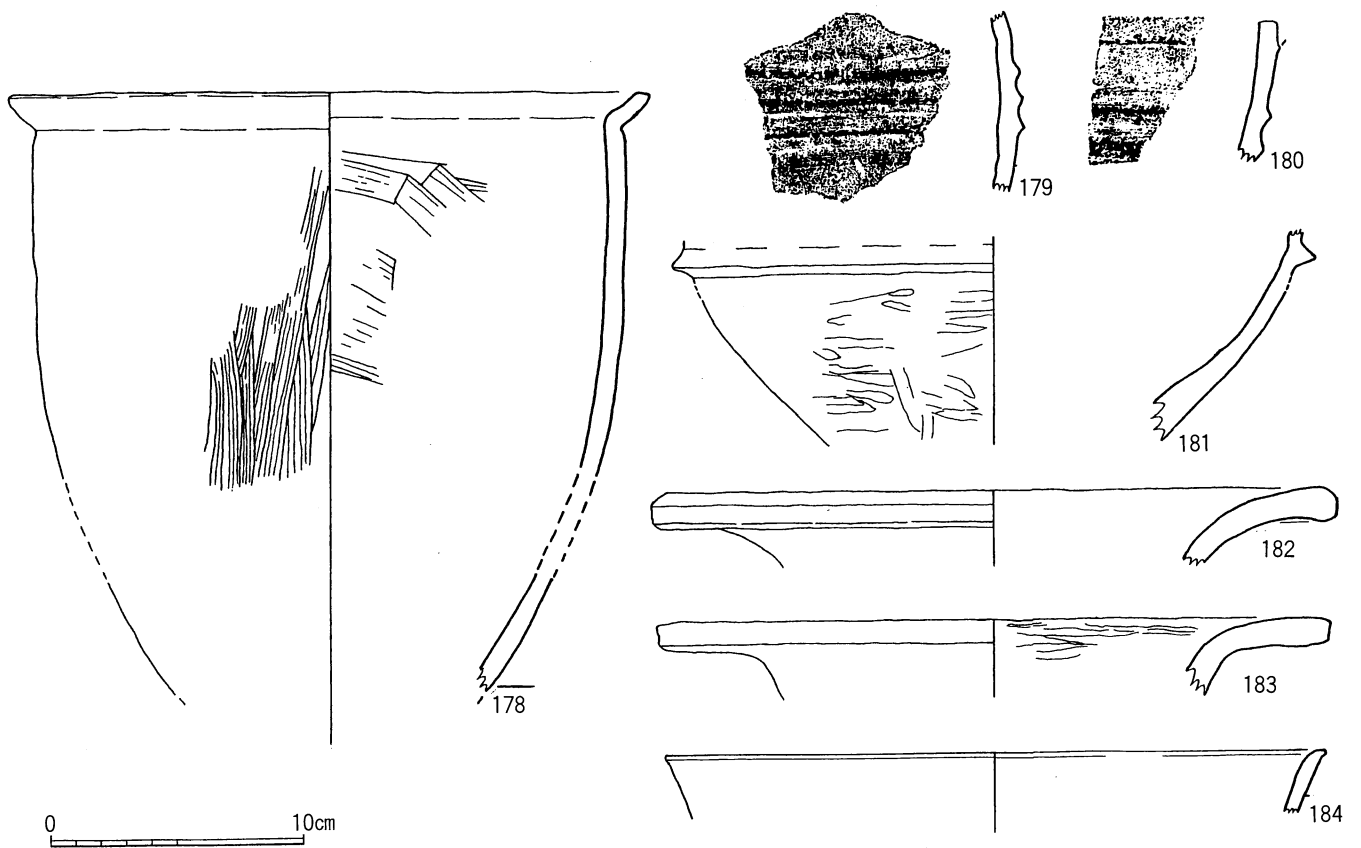
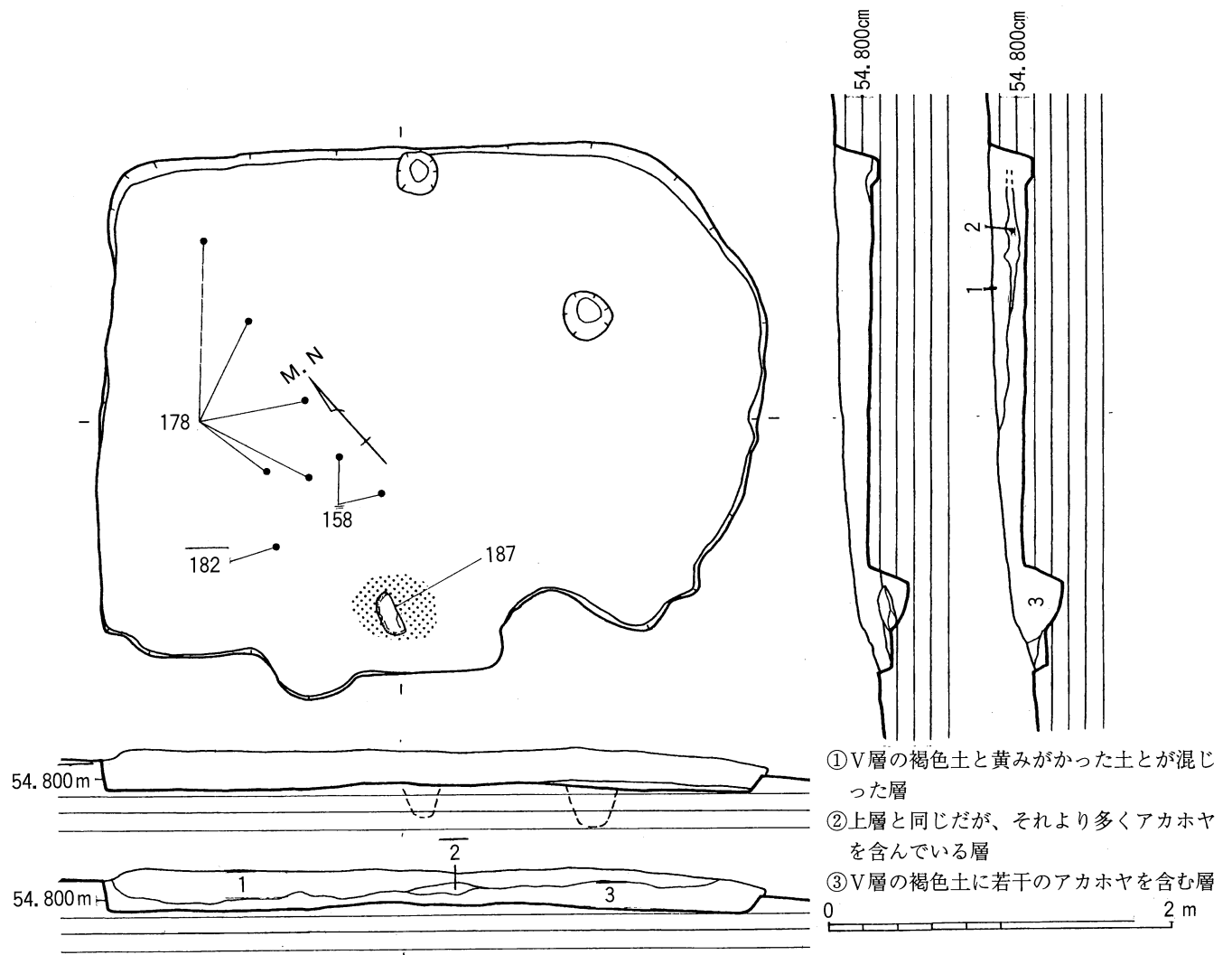
SA2 (第35、36図)

SA2は、SA1の南側隣に位置し、頂部付近の南緩斜面に立地する。遺構のプランは、西半が方形状、東半が円形状を呈している。ピットは東壁際で1個、その南1mでもう1個検出されている。西壁際近くには5mm大の炭化物のまとまりがみられ、その部分で石皿も出土している。この上部では甕(178)が出土している。規模は、長軸が3.80m、短軸3.10m、深さは約18cmである。埋土は3層に分かれ、1層はV層の褐色土の中に若干の黄色みがかかった黄褐色土が混入し、2層は1層にアカホヤが混入している。3層は褐色土に若干のアカホヤが混入している。

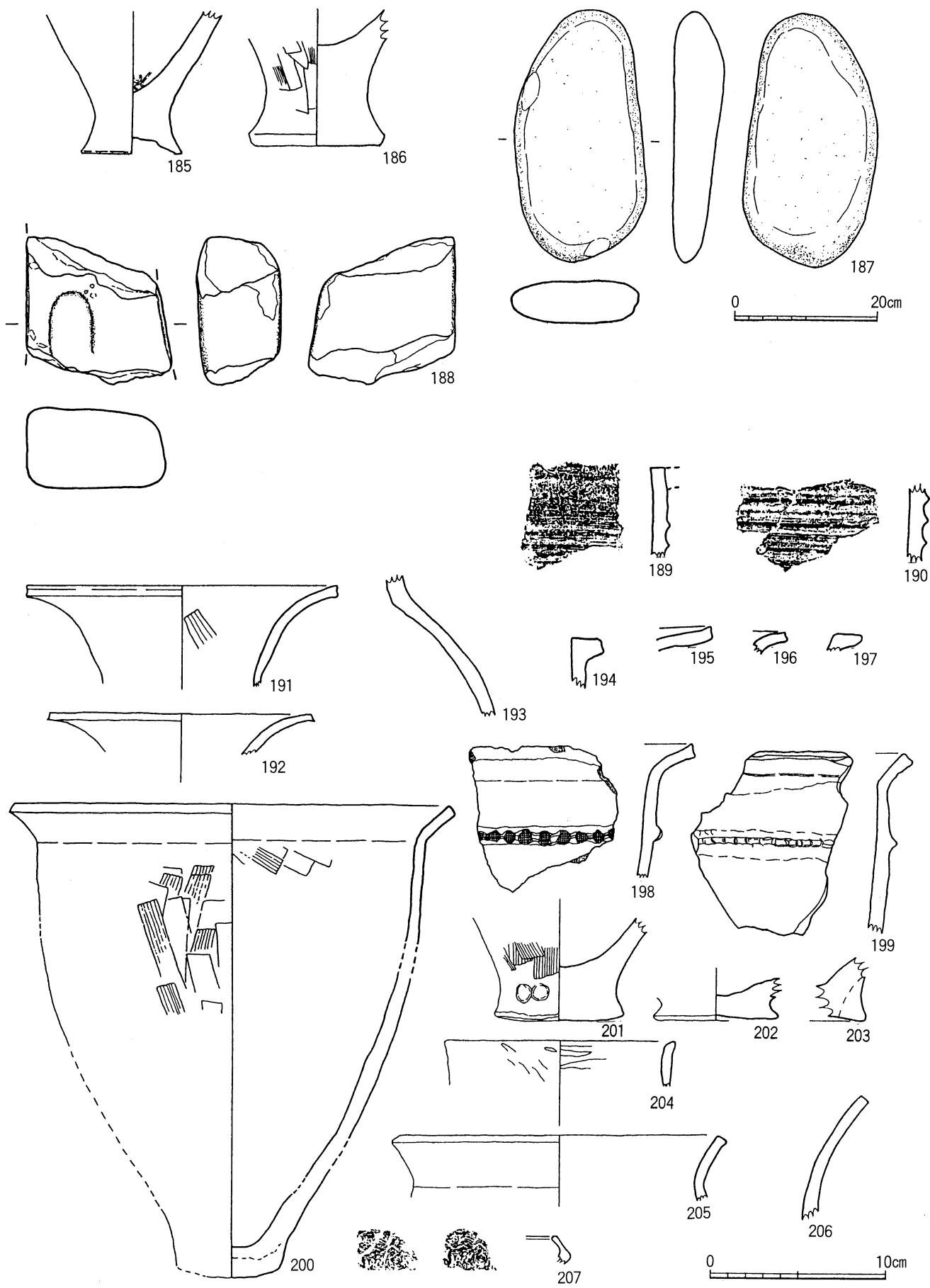
遺物は弥生土器の甕、壺など17点が出土し、器形が復元できたのは1点であった。178は、甕で口縁部の調整はナデで、短く「く」の字に外反する。外面は風化が著しいがハケ目調整が見られる。内面の下位はナデ調整である。179、180は、刻目突帯を持ち、内面の調整はナデである。181は、壺で外面に突帯をもち、ミガキ調整である。182、183は、壺で強く外反する口縁部である。184は甕の口縁で、内外面とも調整はナデである。185、186は甕の底部である。186の外面の調整はナデ、内面の調整は粗いナデと下部に指頭圧痕が見られる。185の外面の調整はハケ目の下にナデ、内面は風化が著しいが、調整はナデで、炭化物の付着が見られる。床面から石皿が1点(187)出土した。

2 包含層の遺物 (第36図189～207)

191、192は、壺で口縁部はラッパ状に強く外反する。口唇部に浅いくぼみがある。189、190は甕で口縁部下及び胴部に数状の突帯を持っている。189は口縁部に突帯を張り付けた逆L字状口縁で粘土の接合面が残っている。内外面とも調整はナデである。193は、壺の肩部で、外面の調整はミガキ、内面は粗いナデである。194は、甕の逆L字形(状)の口縁部である。内外面とも調整は、指押さえの後ナデである。195は甕の口縁で口縁端部がわずかに立ち、口唇が軽く窪みその下に沈線がある。196は甕の口縁で、口縁端部がわずかに立ち、口唇が軽く窪んでいる。197も甕の口縁部である。198、199は甕で、口縁部が「く」の字状になり、直下に一条の刻目突帯が付いている。端部は上方へわずかに立ち上がり、口唇部は若干窪んでいる。201は甕の底部で充実した厚みがある。底は平底である。202、203も甕の底部で、上げ底になっている。200、205は甕で、口縁部が「く」の字状になり端部が上方へわずかに立つが、口縁直下に突帯はみられない。204は壺で、口縁部が直線的に外傾している。内外面の調整はミガキである。206は甕の口縁部で、口縁部がラッパ上に開く形態と考えられる。207は複合口縁壺の口縁部である。



第35図 松元遺跡 SA 2 遺構実測図と出土遺物実測図



第36図 松元遺跡 S A 2 遺構出土遺物及びその他弥生土器実測図

第7表 松元遺跡出土土器観察表 (5)

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
178	SA2	弥生土器	壺	24.8			口縁部ナデ、ハケ目、風化著しい	口縁部ナデ、下位にハケ目、ナデ?	橙	橙にぶい黄橙	茶、灰、褐、黒色粒(1~3.5mm)多	
179	SA2	弥生土器	壺? 甕?				突帯、横ナデ	風化著しい、ナデ	にぶい橙	橙	透明光沢粒、白色粒(1mm以下)、灰色粒(1~3mm)少、黒色微細粒	
180	SA2	弥生土器	不明				突帯、横ナデ	風化著しい、横ナデ	橙	橙	柱状黒色光沢粒(1mm以下)	スス付着(外面・内面)微量
181	SA2	弥生土器	壺				突帯、ミガキ	ナデ、風化著しい	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐色粒、灰色粒、黒色粒(1.5mm以下)、透明光沢粒(1mm以下)	
182	SA2	弥生土器	壺	25.9			風化著しいナデ?	風化著しいナデ?	橙	橙	柱状黒色光沢粒、白色粒(1mm以下)、褐色粒(2mm以下)、透明光沢微細粒、灰色微細粒	
183	SA2	弥生土器	壺	26.8			ナデ、風化気味	ミガキ、風化気味	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐色粒、灰色粒(2mm以下)、黒色粒、透明光沢粒(1.5mm以下)	
184	SA2	弥生土器	甕	13.1			ナデ	ナデ	にぶい橙	浅黄橙	茶褐色粒、黒色粒、光沢粒(3mm以下)、透明光沢粒(2mm以下)	
185	SA2	弥生土器	甕・底部		5.7		ナデ、風化著しい	粗いナデ、底周辺に指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰褐色粒(3mm以下)、茶色粒(2.5mm以下)、黒色粒(2mm以下)、灰白粒(1.5mm以下)、透明光沢粒(1mm以下)	
186	SA2	弥生土器	甕・底部		7.1		ハケ目、横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色粒(2mm以下)、灰色光沢粒(3mm以下)、灰褐色粒、灰白粒(1mm以下)	炭化物付着(内面)
189	B区Ⅲ層	弥生土器	甕				突帯、ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	白色、褐色粒(3mm)、白色、灰色、茶色、黒色、半透明(2mm以下)	
190	B区Ⅲ層	弥生土器	甕				突帯、横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	黒色粒、赤褐色粒(3mm以下)、灰色粒(1.5mm以下)、透明光沢粒(1mm以下)少	
191	A区V層	弥生土器	壺	17.8			指押え、一部タテ方向のナデ	ハケの後ナデ	黄	灰黄	透明光沢粒、褐色粒、灰色粒(1mm以下)、光沢黒色微細粒	
192	C区Ⅲ層	弥生土器	壺	15			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	茶色、褐色、白色(3.5mm以下)	
193	A区V層	弥生土器	壺・肩				ヘラミガキ	粗いナデ	浅黄橙	灰白	灰色粒(2mm以下)、褐色粒(1.5mm以下)	黒斑(内面)
194	B区Ⅲ層	弥生土器	甕				ナデ	指押えの後横ナデ	にぶい橙	にぶい褐	灰色粒(4.5mm以下)少、うすい灰色、白色、半透明、黒色粒(3mm以下)	
195	A区V層	弥生土器	甕				口唇部に浅い沈線、ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒色粒(1mm以下)、褐色粒(1.5mm以下)多	
196	A区Ⅱ層	弥生土器	甕				ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐色粒(2mm以下)、黒色光沢粒(1mm以下)	
197	A区V層	土師器	甕				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黒色、灰色、褐色粒(2mm以下)	
198	C区V層	弥生土器	甕				貼付突帯、その上に連続押圧文、横ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	柱状黒色光沢粒、透明光沢粒、金色光沢粒(1mm以下)	
199	C区Ⅲ層	弥生土器	甕				口縁部に沈線、胴部に刻み目突帯、ナデ、ハケ	ナデ	橙	明褐	灰色、黒色、白色、半透明粒(3mm以下)	
200	C区Ⅲ層	弥生土器	甕	25	6	27.3	口縁部は横ナデ胴部は縦、斜方向のハケ目、底部はナデ	口縁部は横、斜方向のナデ、その下にハケ目、胴部~底部は縦、斜方向	橙	にぶい橙	褐灰、灰白、黒色粒(2mm以下)	部分的にスス付着(外面)、部分的に炭化物
201	C区Ⅲ層	弥生土器	甕・底部		7.4		ナデ、ハケ目、指頭痕	ナデ	にぶい黄橙	オリブ黒	黒色透明砂粒(1mm以下)、黒色砂粒(2mm以下)	スス付着(内面)
202	B区Ⅲ層	弥生土器	甕・底部		7.2		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	褐灰	褐色粒(5mm以下)、灰色粒(3mm以下)	
203	A区Ⅲ層	弥生土器	甕・底部				ナデ		浅黄	灰オリブ	灰色粒(1mm)、黒色光沢微細粒	
204	B区Ⅱ層	土師器	壺	13.1			ミガキ、風化著しい	ミガキ	橙	黄橙	灰褐色微細粒	
205	B区Ⅱ層	土師器	甕	38			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐色粒(5mm以下)、灰褐色粒(4mm以下)、灰色粒(2mm以下)、透明光沢粒赤色粒(1mm以下)	
206	B区Ⅲ層	弥生土器	甕				ハケ、ナデ?	ハケ	にぶい黄橙 灰黄褐	黄灰	白色粒(1mm前後)、黒色光沢微細粒	

第4節 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、A区の頂部付近から南緩斜面において、竪穴遺構が3基検出されている（第3図）。3基の遺構は、各々20mほど距離をおいて分布している。検出面はIV層アカホヤ面からV層褐色土上面である。遺構内からは甕、壺、高杯、椀等が出土している。遺構内等から柱穴が検出されていないのでここでは竪穴遺構として報告しているが、プラン、規模などから竪穴住居跡である可能性は高い。

1 遺構と遺物

S A 1（第37、38図208～216）

A区のほぼ中央の丘上部（標高約55m）にあり、弥生時代のS A 2の北隣に位置する。遺構は方形プランで、ピットは遺構内北西部で1個検出されている。遺構の中央部においては焼土面があり、炭化物も多く含まれており、この部分は炉跡の可能性が考えられる。規模は、長軸が3.60m、短軸3.20m、深さは8cmほどである。埋土は、深さが浅いため1層のみ確認され、若干黄味を帯びた褐色土であった。

遺物は、96点出土し、器形の復元できたものは5点で残りは土師器小片である。208は甕で、頸部がくの字状に屈曲し、最大径が口縁部にある。外面の調整は、口縁部に指押さえと口縁～胴部上位迄に粗いハケメ、その下は丁寧なナデがみられる。内面調整はナデである。209、210は壺で同一固体と思われる。頸部がくの字に屈曲し、内面の稜は明瞭でない。外面の調整に工具によるナデがみられ、内面は指ナデの調整がみられる。211は壺の口縁で口径約19.4cmと推定される。口唇部に浅い窪みがある。212は甕の口縁から胴部である。胴部から頸部にかけて屈曲し、口縁部にむけてやや外反する。最大径は口縁部であり、胴部の最大径は中央よりも上位にある。213も212と同様の形態のものと考えられる。215は216同一固体の高杯脚部は脚柱部から裾部まで外反して広がると考えられる。214は甕の底部であげ底である。内面の下部に工具によるナデの調整がみられる。

S A 3（第38～40図217～235）

S A 3は、S A 1の南東20mほどのところに位置する。遺構は方形プランで、ピットは西壁際で1個、中央部でもう1個検出されている。北東角の壁際近くには炭化物のまとまりがみられた。規模は、長軸が4.40m、短軸3.50m、深さは約35cmである。埋土は3層に分かれ、1層は高原スコリアを含み粘性のある黒色土、2層は茶褐色土、黒褐色土が混入し、粘性のある黒色土、3層は褐色土である。

遺物は85点ほどの土師器片が出土し、器形が復元できたものは8点である。218は壺の頸部から底部である。頸部が屈曲し、頸部内面の稜が明瞭で長胴である。内面の頸部直下付近に、指頭圧痕と粘土のつなぎ目がナデ消されずに残っている。217も同形態の壺と考えられる。219は外面の調整にタタキ痕のある甕の胴部である。220～222は底部で丸底である。223は甕で口縁上部は欠損しているが、頸部がくの字に屈曲し、口縁部が最大径になる形態と思われる。224～228は椀の口縁～胴部である。224は口径12.7cmで口縁部はやや膨らみを持ち、外反気味である。225は口径12.8cm、底径5cm、器高5.9cmで口縁部が内湾する。226の口径は13.3cmで口唇部が外反する。227は、内湾せず胴部から緩やかに外反している。228は口径12.1cmで口縁部が内湾し、内面に口唇部の稜が明瞭にある。229、230は椀の底部である。231の外面の底部中心付近に指押さえによる調整がみられる。232～234は同一固体の高杯と考えら

れる。232は杯部と口縁部の境に段をもち、口唇部を丸く仕上げている。233、234は、裾部が脚柱部から緩やかに大きく屈曲している。235は、須恵器の駄である。口径10.7cm、外面の頸部に横書きの波状文の文様が施されている。

S A 4 (第40図236)

検出された竪穴遺構の中では最も南にあり、標高の低いところに位置する。弥生時代のS A 2の南隣になる。遺構は方形プランを基本とし、西壁は240cm幅で外へ80cmほど張り出している。ピットは南壁際で2個検出されている。また、南壁際近くには炭化物の集中区が2か所みられた。規模は、長軸が4.30m、短軸3.40m、深さは約30cmである。埋土は褐色土の中に若干の黄色みがかかった黄褐色土が混入土であった。

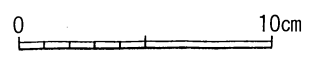
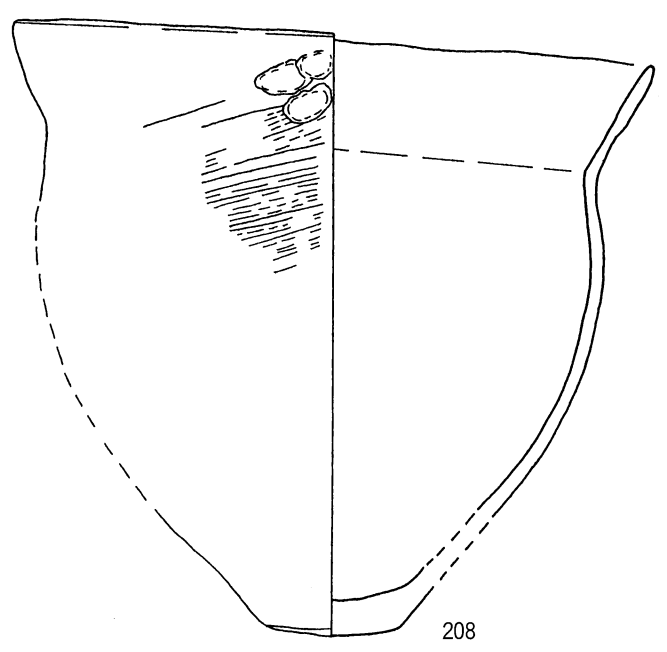
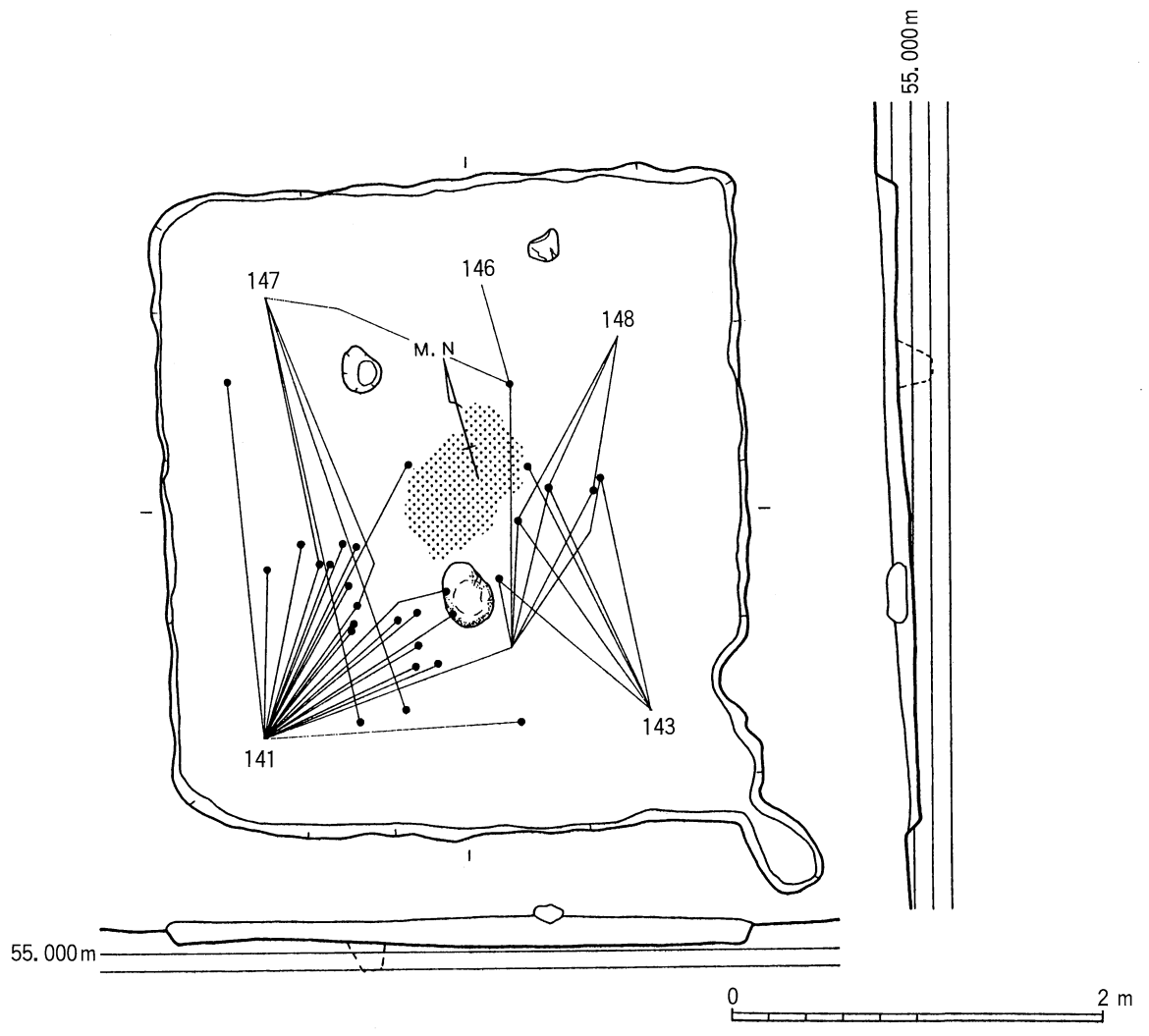
遺物は土師器片が11点出土し、器形復元できたのは236の1点だけであった。236は椀で口径11.6cm、器高5cmである。底部が最も厚く、次第に薄くなり口縁部へ至る。口縁部はわずかに内湾する。

2 包含層の遺物 (第41図237~258)

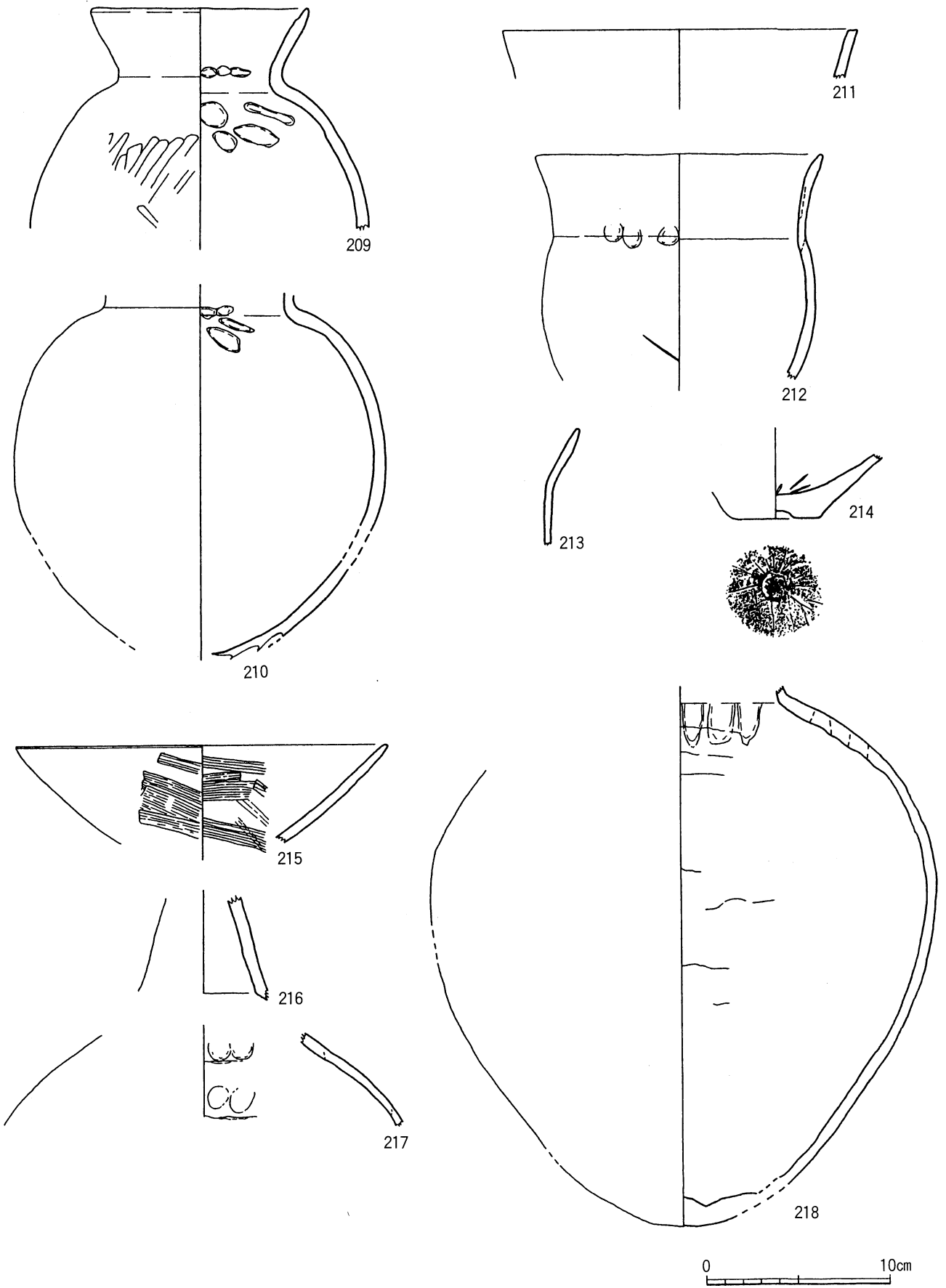
包含層から出土した古墳時代の遺物は、土師器壺、甕、高坏、椀、須恵器坏身などある。237、240は壺で頸部が屈曲する形態と思われる、237は頸部内面の稜が明瞭である。238、239、241は、甕の口縁部~胴部で、頸部に明瞭な稜を持たずに緩やかに外反する口縁部である。242、243は甕の頸部~胴部で、最大径が胴部にある。244、245は甕の底部で、胴部と底部の境に明瞭な段を持たない平底である。246~250は椀で、246は胴部から口縁部にかけて緩やかに外反するが、他は内湾し、内面の口唇部に稜が明瞭にある。252は椀の底部の一部で、外面に線刻と思われるものがある。251は高坏の脚部で、脚柱部から裾部にかけて緩やかに大きく屈曲する形態のものと考えられる。253、254は器種不明の底部である。255は器台の口縁部である。256は須恵器で、口径11.8cmの蓋受けのある杯身である。受け部が水平に突き出し、浅い窪みがみられる。257は須恵器の器種不明の胴部片で、調整は外面に平行タタキ、内面に同心円紋の当て具痕がみられる。258は轆の羽口の一部で、炭が部分的に付着し、内面は高温による赤変がみられる。

第5節 時期不明の遺構

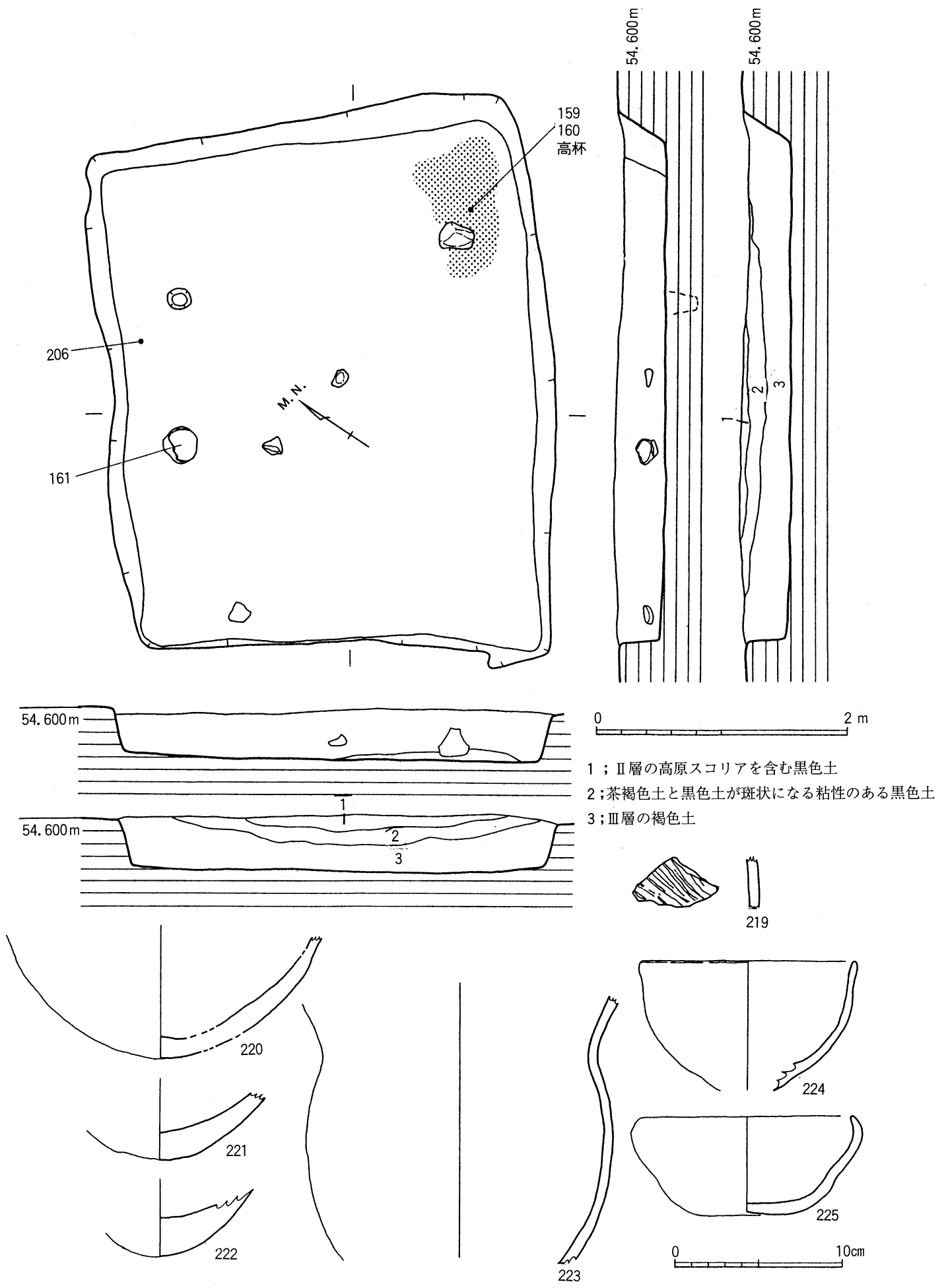
時期を特定できなかった遺構は、A区のS C 1、S C 2、C区のS C 3である。いずれも遺物を伴わない土坑である。S C 1は長方形の土坑である。A区北東部のV層上面で検出された。埋土はV層の褐色土と若干の黄色みがかかった黄褐色土が混じった1層のみである。規模は主軸長170cm、最大幅70cm、最大深32cmである。S C 2は、ややいびつな円形の土坑である。S A 4の東側に位置し、埋土はV層とVI層である。規模は径140cm、最大深20cmである。S C 3は、楕円形の土坑である。C区の褐色土と若干の黄色みがかかった黄褐色土が混じった1層のみである。規模は長軸140cm、短軸80cm、最大深25cmである。



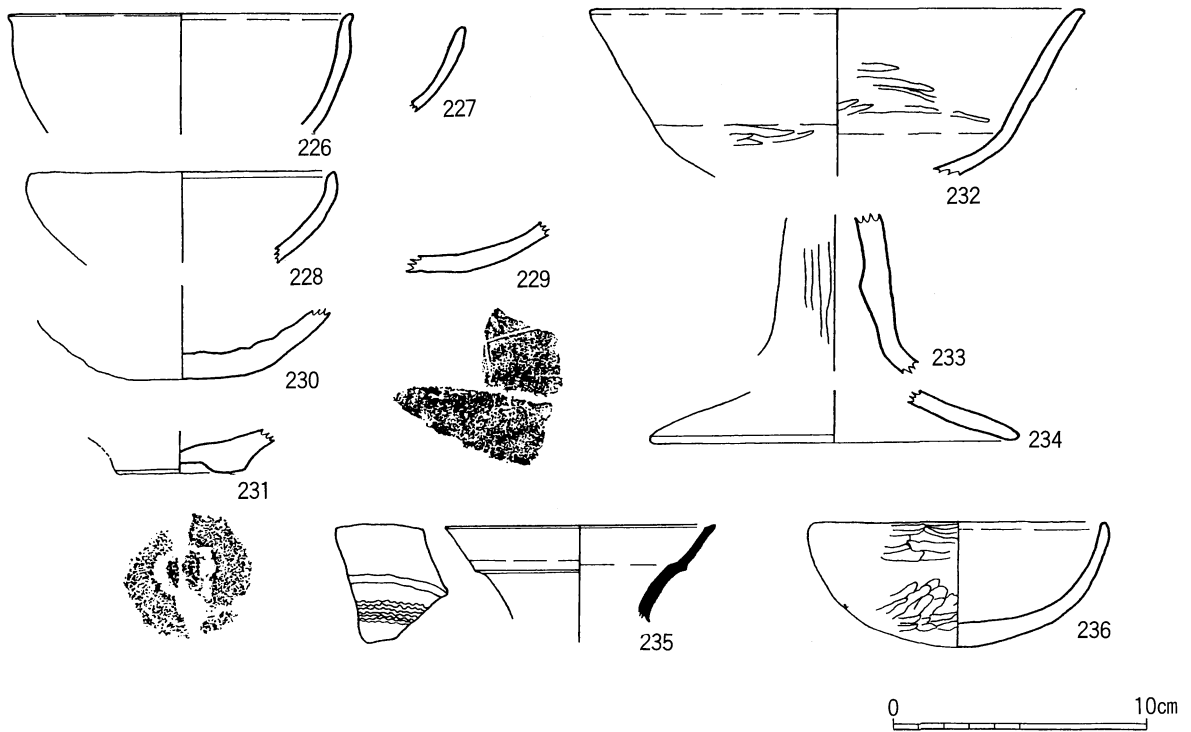
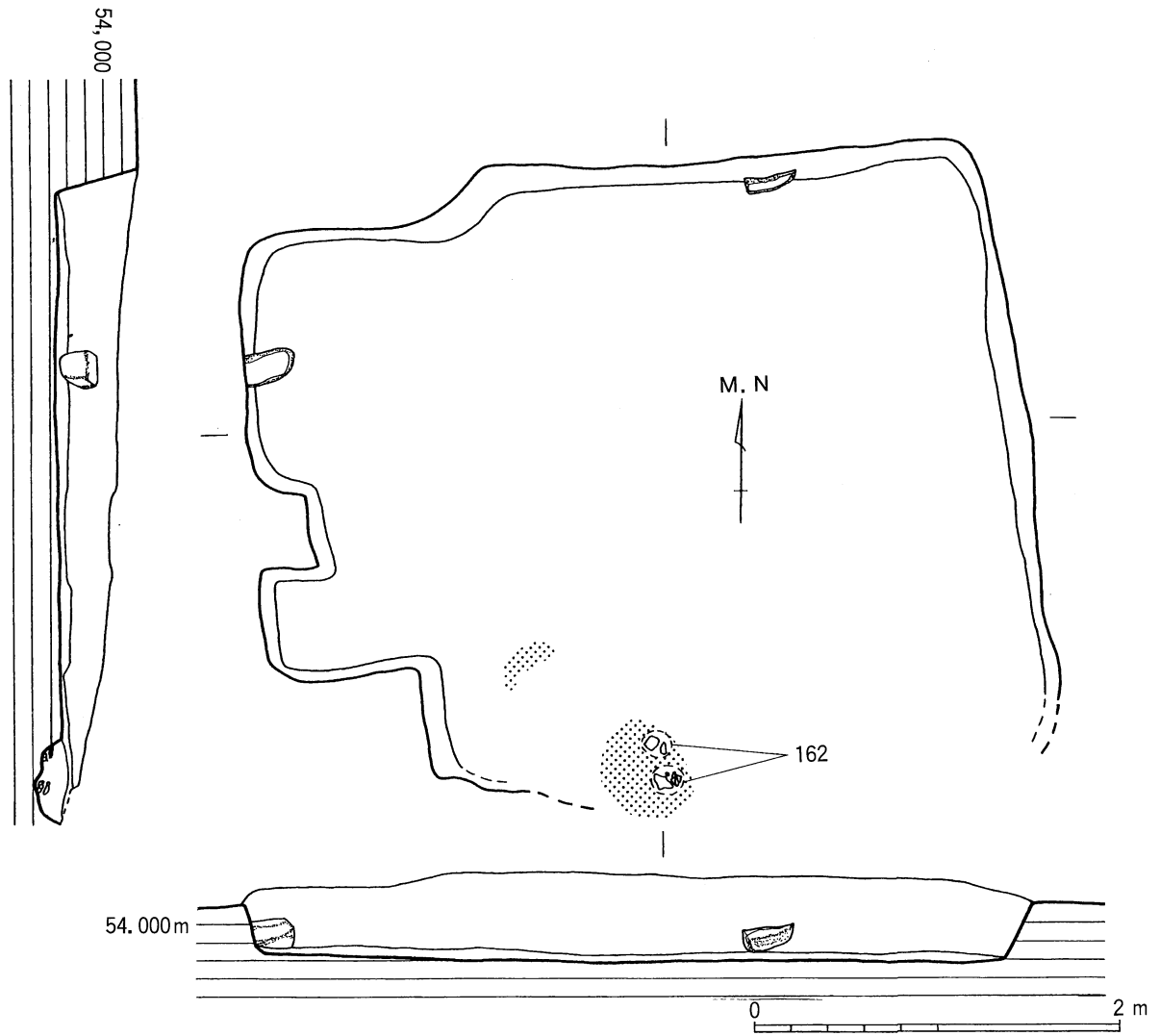
第37図 松元遺跡 SA1遺構実測図と出土遺物実測図



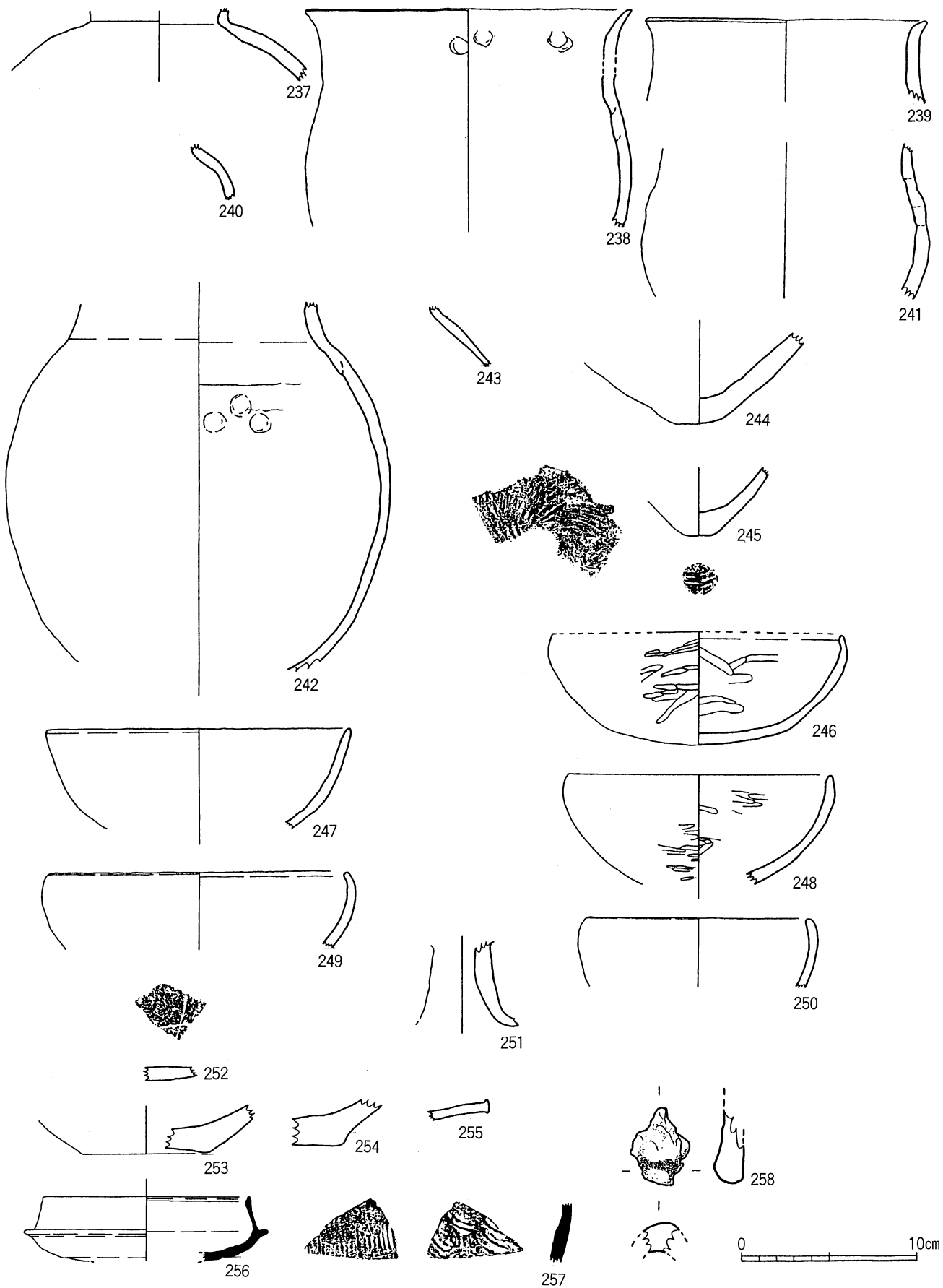
第38図 松元遺跡 SA1及びSA3出土遺物実測図



第39図 松元遺跡 SA3遺構と出土遺物実測図



第40図 松元遺跡 SA 4 遺構と SA 3・4 出土遺物実測図



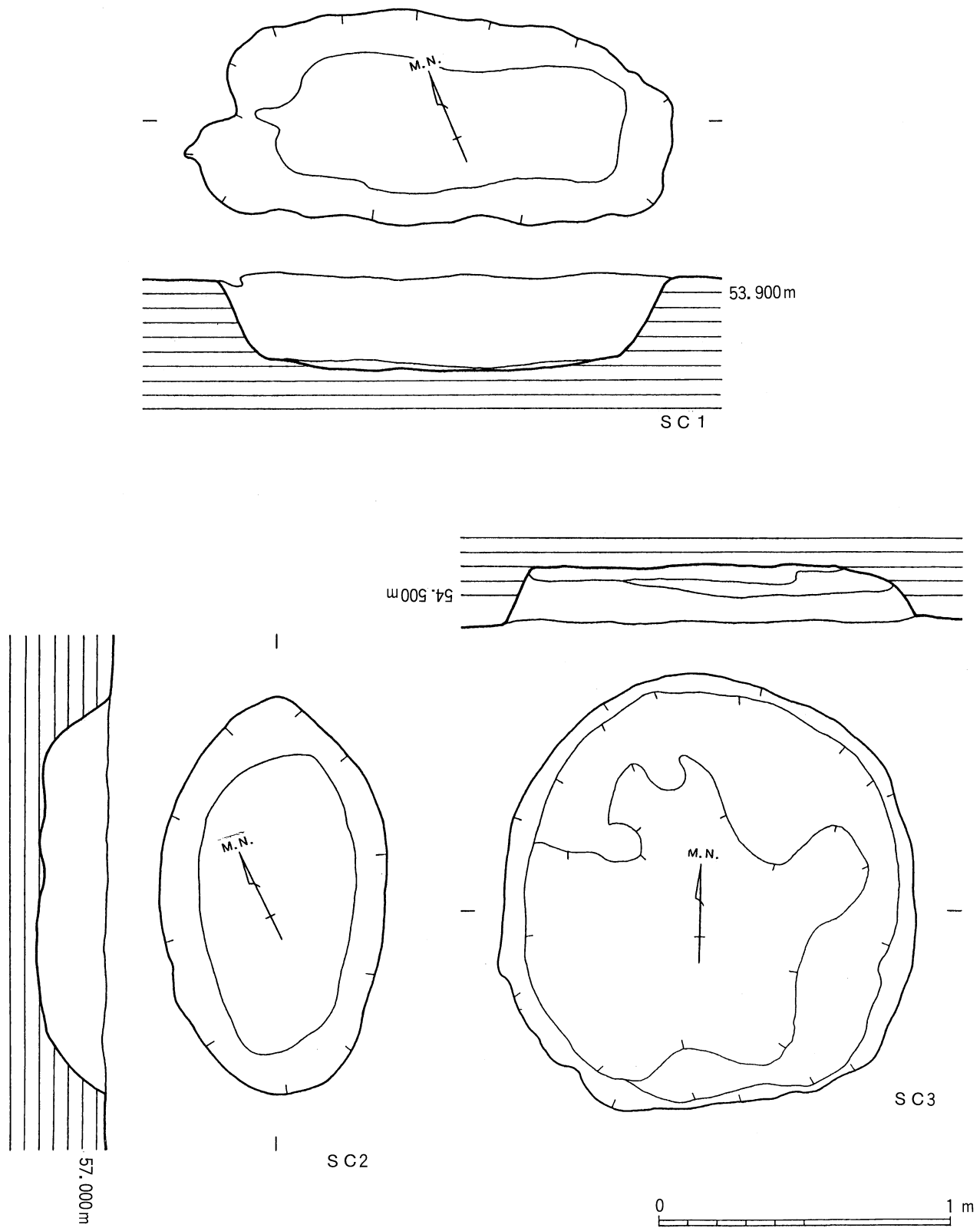
第41図 松元遺跡 その他古墳時代の遺物

第8表 松元遺跡出土土器観察表 (6)

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
207	SA3	弥生土器	壺				櫛描波状文	風化著しい	橙	橙	灰色粒 (1mm以下)	
208	SA1	土師器	甕	24.9	5.6	24.2	口縁部に指押さえ、頸部付近と底部にタタキ痕、その他は丁寧なナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙 黄橙 黄褐	灰色粒 (1~6mm)、赤褐色粒 (2mm以下)、黒色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒 (1mm以下)	
209	SA1	土師器 (口縁-胴部)	壺	11.8			ナデ、指押え胴部は斜方向の工具ナデ	ナデ、頸部付近は指ナデ	明赤褐	橙	褐色粒 (1~9mm) 多	胴部にスス付着 (外面)
210	SA1	土師器 (頸部-底部付近)	壺				ナデ	ナデ、部分的に指押え	明赤褐	にぶい褐	褐色粒 (1~6mm) 多	胴部にスス付着 (外面) 胴部にスス付着 (内面)
211	SA1	土師器	壺	9.7			ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐色、黒色、灰色、半透明粒 (1.5mm以下)	
212	SA1	土師器	甕	15.8			ナデ、指頭痕、工具痕?	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白粒 (3mm以下) 灰褐色砂粒	スス付着
213	SA1	土師器	甕				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰白、黒褐色砂粒 (1mm以下)	スス付着 (外面)
214	SA1	土師器	甕		4.8		ナデ	工具によるナデ	橙	にぶい橙	灰白粒 (3mm以下)、灰褐色砂粒	スス付着 (外面)
215	SA1	土師器 (高坏 (坏部?))		20.4			横、斜方向のハケ目	口唇部は横ナデ、斜方向のハケ目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	透明、灰色、褐色砂粒 (2mm以下)	スス付着 (外面) 黒斑 (内面)
216	SA1	土師器 (高坏 (脚部))					ナデ	粗いナデ	にぶい橙	橙	褐色粒 (5mm以下)、灰色、白色、黒色、半透明粒 (3mm以下)	
217	SA3	土師器	甕				ナデ	指押えの後ナデ	橙	橙	灰白、黒褐色微細粒 (1mm以下)	スス付着 (外面)
218	SA3	土師器	壺				ナデ? 風化気味	丁寧なナデ、指押え底部は未調整	明黄褐	にぶい黄橙		底部に黒斑 (内、外面)
219	SA3	土師器	甕				タタキ痕あり	ナデ	明黄褐	明黄褐	透明光沢微細粒、柱状黒色光沢粒、灰色微細粒	
220	SA3	土師器 (壺? (底部))					タタキの後ナデ	ナデ、底部付近指頭圧痕	浅黄橙	黄橙	灰白、透明粒、茶褐色 (2mm以下)、透明光沢粒、黒色光沢粒 (1mm以下)	炭化物付着 (内面)
221	SA3	土師器	壺				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰色、褐色、半透明粒 (4mm以下)	
221	SA3	土師器	碗		5.2		ナデ、指押さえ	ナデ、工具痕あり	にぶい黄橙	にぶい黄橙	柱状黒色微細粒、透明光沢粒 (1mm以下)、灰褐色粒 (2mm以下)	
222	SA3	土師器	壺				丁寧なナデ	ナデ、指押さえ	にぶい黄橙	橙	黒色、灰色、白色、褐色 (4mm以下)	
223	SA3	土師器	甕				ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	黒色粒、灰色粒 (3mm以下)、褐色粒 (4mm以下)、透明光沢粒 (1mm以下)	スス付着 (外面)
224	SA3	土師器	碗	12.7			口唇部はナデ、口縁部はハケ目痕あり、その下はナデ、風化気味	ハケ目痕? ナデ、風化気味	橙	橙	透明光沢粒 (1mm以下)、灰褐色粒 (2mm以下)	
225	SA3	土師器	碗	12.8	5	5.9	ヘラミガキ?、風化著しい	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	透明光沢粒、褐色の酸化鉄を微量、灰褐色粒 (1mm以下)	
226	SA3	土師器	碗	13.3			ナデ	横ナデの後丁寧なナデ	にぶい橙	橙	透明光沢粒、灰色粒 (1mm以下)、柱状黒色微細粒	
227	SA3	土師器	碗	13.2			口唇部はナデ、ミガキ	ミガキ?	橙	橙	灰色、黒褐色の微細粒	
228	SA3	土師器	碗	12.1			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	柱状黒色微細粒、透明光沢粒 (1mm以下)、灰褐色粒 (2mm以下)	
229	SA3	土師器	碗				ミガキ?、凹線刻あるいは窯印?	ミガキ	橙	橙	灰色、黒褐色砂粒 (1mm以下)	
230	SA3	土師器	碗		4.4		ナデ	ナデ、風化著しい	橙	橙	灰白、黒褐色微細粒 (1mm以下)	
231	SA3	土師器	甕底部		5.2		ナデ、指頭痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	柱状黒色微細粒、透明光沢粒 (1mm以下)、灰褐色粒 (1mm以下)	高台風
232	SA3	土師器	高坏 (坏部)				ミガキ、口唇部はナデ 磨耗著しい	ミガキ、磨耗著しい	明黄褐	にぶい黄橙	灰色粒 (2.5mm以下)、褐色粒、黒色粒 (1.5mm以下)、透明光沢粒 (1mm以下) 少	
233	SA3	土師器	高坏 (脚部)				ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰色粒 (3mm以下)、褐色粒、透明光沢粒 (1mm以下) 少	
234	SA3	土師器	高坏 (裾部)				ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	黄褐色粒、褐灰色粒 (1.5mm)、光沢粒 (0.5mm)	スス付着 (外面)
235	SA3	須恵器	はそう	10.7	14.6		ナデ、櫛描波状文	ナデ	暗灰	淡黄	精良	
236	SA4	土師器	碗	11.6		5	口唇部はナデ、口縁部はヘラミガキ、その下は横ナデ、ヘラミガキ	ナデ、風化気味	橙	にぶい黄橙	黒色粒、黒色光沢粒、透明光沢粒、灰色粒 (1mm以下)	
237	B区Ⅲ層	土師器	壺				ナデ	指押えの後ナデ	浅黄橙	灰黄	灰色、褐色粒 (4mm)、透明光沢粒 (1mm以下)、黒色微細粒	

第9表 松元遺跡出土土器観察表 (7)

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整等		色調		胎土	特記事項
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
238	B区Ⅲ層	土師器	甕				ナデ	粗いナデ	にぶい 橙	にぶい 黄橙	褐色、灰色砂粒 (5mm以下) 多	スス付着 (外面)
239	B区Ⅲ層	土師器	甕	15.8			ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	橙	赤褐色粒 (3mm以下)、黒色粒 (2mm以下)、 灰色粒 (1mm以下)	スス付着 (外面)
240	B区Ⅲ層	土師器	壺				ナデ、風化気味	ナデ、風化気味	橙	橙	灰色粒 (1mm)	
241	B区Ⅲ層	土師器	甕				ナデ	ナデ	橙	にぶい 黄橙	にぶい橙色粒 (5mm)、灰色粒 (3mm以下)、 褐色粒 (4mm以下)	スス付着 (外面)
242	B区Ⅲ層	土師器	甕				ナデ	ナデ、風化気味	橙	橙	黒色粒、灰褐色粒 (2mm以下)	
243	A区Ⅴ層	土師器	甕(布留式系)				ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	灰色、半透明、白色粒 (3.5mm以下)	
244	B区Ⅱ層	土師器	甕? 底部				ナデ	ナデ風化著しい	橙	にぶい 橙	灰色粒 (2mm以下)、黒色粒 (1mm以下)	
245	B区Ⅱ層	土師器	甕・ 底部		1.6		タタキ、風化気味	ナデ指押さえ風化気味	橙	橙	灰色、茶褐色、灰白粒 (2mm以下)、茶色粒 (1mm以下)	
246	B区Ⅲ層	土師器	碗	16.5		6.1	ミガキ	ミガキ	橙	にぶい 橙	柱状黒色光沢粒、透明光沢粒、灰色粒 (1mm 以下)、茶色粒 (3mm以下)	
247	B区Ⅲ層	土師器	碗	17.2			粗いナデ、風化気味	ナデ、風化気味	橙	明黄褐	透明光沢粒、黒色光沢粒、灰褐色 (2mm以下)	
248	B区Ⅲ層	土師器	碗	15			口縁部はナデ、その 下はミガキ	ミガキ	にぶい 橙	橙	灰色砂粒 (1mm以下)	部分的に炭 化物付着痕 (内面)
249	B区Ⅲ層	土師器	碗? 鉢?	16.7			ナデ	ナデ	橙	橙	透明光沢粒 (1.5mm以下)、黒褐色粒茶褐色 粒、黒色光沢粒、赤色粒 (1mm以下)	
250	B区Ⅲ層	土師器	碗	12.5			ナデ	口縁部はナデ、その 下はミガキ	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	灰白粒、透明光沢粒 (1mm以下)、黒色光沢 微細粒、黒褐色微細粒	スス付着 (外面)
251	B区Ⅱ層	土師器	高坏 (脚部)				ナデ	ナデ	にぶい 黄橙	橙	黒色微細粒 (1mm以下)	
252	B区Ⅱ層	土師器	碗				ナデ、線刻	ナデ	橙	黄橙	灰褐色微細粒	
253	B区Ⅲ層	土師器	不明 底部		7		ナデ、風化気味	ナデ、風化気味	橙	橙	灰色粒 (3mm以下)、透明光沢粒 (1mm)	
254	B区Ⅲ層	土師器	不明 底部				ナデ	ナデ	橙	灰	灰色粒 (2~3mm)、透明光沢粒 (1mm以下) 少	
255	B区Ⅱ層	土師器	器台				ナデ	ナデ	橙	にぶい 橙	褐色粒 (2mm以下)、灰色粒 (1mm以下)	
256	B区Ⅲ層	須恵器	坏身				ナデ、ヘラ削り	回転ナデ	オリ ブ灰	灰	精良	
257	S A3	須恵器	不明				平行タタキ	同心円紋の当て具痕	灰	灰	精良	
258	B区Ⅴ層		輔の 羽口						灰黄	橙		スミ付着



第42図 松元遺跡 土坑実測図

第6節 自然科学分析調査

1 土層とテフラ

(1) はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、霧島火山や桜島火山などから噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで年代の不明な土層の認められた松元遺跡において地質調査を行い土層についての記載を行うとともに、屈折率測定を行って示標テフラの層位を求めて、土層の形成年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、T-1、T-5、T-6、17Eグリッドの4地点である。

(2) 土層の層序

1) T-1

この地点では、下位より黒褐色土（層厚5cm以上、XⅢ層）、成層したテフラ層（層厚18cm、XⅡ層）、暗灰褐色砂質土（層厚13cm、XⅠ層）、灰色がかった褐色土（層厚38cm、X層）、若干色調の暗い褐色土（層厚16cm、Ⅸ層）、褐色土のブロック混じり暗褐色土（層厚27cm、Ⅷ層）、橙色軽石混じり黒褐色土（層厚19cm、軽石の最大径7mm、Ⅶ層）、若干色調の暗い褐色土（層厚27cm、Ⅵ層）、褐色土（層厚21cm）が認められる（第43図）。

これらのうち、XⅡ層の成層したテフラ層は、下部の黄色細粒火山灰層（層厚3cm）と上部の黄色軽石（最大径12mm）混じりでかすかに成層した黄色粗粒火山灰層（層厚15cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から約2.4~2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰に同定される。またⅦ層中に含まれる軽石は、その層位や岩相などから、約1.4~1.6万年前に霧島火山から噴出した霧島小林軽石に由来すると考えられる。

2) T-5

この地点では、下位より黄橙色軽石混じり黒褐色土（層厚16cm、軽石の最大径5mm）、黒色がかった暗褐色土（層厚18cm）、暗褐色土（層厚11cm）、褐色土（層厚21cm）、灰色土（層厚3cm）、成層したテフラ層（層厚18cm）、橙褐色土（層厚4cm）、褐色土（層厚15cm）、暗灰色土（層厚6cm）、褐色スコリア混じり暗灰色土（層厚14cm、スコリアの最大径5mm）、暗褐色表土（層厚34cm）が認められる（第43図）。

これらのうち、Ⅶ層中に含まれる軽石は、その層位や岩相などから、Kr-Kbに由来すると考えられる。またその上位にある成層したテフラ層は、下部の褐色火山豆石混じり黄橙色軽石層（層厚3cm、火山豆石の最大径3mm）と上部の橙色細粒火山灰層（層厚15cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井, 1978）に同定される。

3) T-6

谷部に位置するこの地点では、K-Ahより上位の土層をよく観察することができた（第43図）。ここでは、K-Ahの上位に、下位より褐色土（層厚29cm）、暗褐色土（層厚9cm）、黒灰褐色土（層厚12cm）、褐色土（層厚34cm）、暗褐色土（層厚8cm）、黒褐色土（層厚6cm）、褐色スコリアを多く含

む黒褐色土（層厚10cm、スコリアの最大径9mm）、白色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色スコリア混じり暗灰褐色土（層厚21cm、スコリアの最大径6mm）、成層したテフラ層（層厚3cm）、暗灰褐色土（層厚23cm）、黒色がかった暗褐色土（層厚13cm）、暗褐色表土（層厚21cm）が認められる（図3）。これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄灰色軽石層（層厚2cm、軽石の最大径10mm、石質岩片の最大径4mm）、褐色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm）から構成されている。

4) 17-E グリッド

この地点では、暗灰褐色土（層厚10cm）の上位に白色細粒火山灰層（層厚0.2cm）が認められる（第43図）。

(3) テフラ検出分析

1) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表10に示す。試料番号3には、発泡の良い暗灰色のスコリアが比較的多く認められた。スコリアの最大径は、3.3mmである。このスコリアは、その特徴から9～13世紀に霧島火山高千穂峰から噴出した霧島高原スコリアに由来する。

また試料番号1には、発泡のあまり良くない褐灰色軽石（最大径3.1mm）が多く含まれている。この軽石は、その特徴から1717（享保2）年に霧島火山新燃岳から噴出した霧島新燃享保テフラに同定される。

2) 屈折率測定結果

屈折率測定の結果を表11に示す。T-6の試料番号2には白色の軽石（最大径1.5mm）が比較的多く含まれている。その火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.510-1.515である。重鉱物としては斜方輝石のほか、単斜輝石やカンラン石が含まれている。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.705-1.715である。若干rangeが広いのは、異なるテフラに由来する斜方輝石が若干混じっているためと考えられる。

一方、17-Eグリッドの試料番号1にも、白色の軽石（最大径1.5mm）が比較的多く含まれている。その火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.510-1.515である。また重鉱物としては、斜方輝石のほかに単斜輝石やカンラン石が認められる。斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.707-1.715（中央値：1.710-1.715）である。これらの特徴は、1471（文明3）年に桜島火山から噴出した桜島文明軽石の特徴と一致する。

(4) 小結

松元遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より始良Tn火山灰（AT, 約2.4～2.5万年前, X II層）。霧島小林軽石（Kr-Kb, 約1.4～1.6万年前, VII層）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約6,300年前）、霧島高原スコリア（Kr-ThS, 9～13世紀）、桜島文明軽石（Sz-3, 1471年）、霧島新燃享保テフラ（Kr-SmK, 1717年）を認めることができた。

第10表 T-6 のテフラ検出分析結果

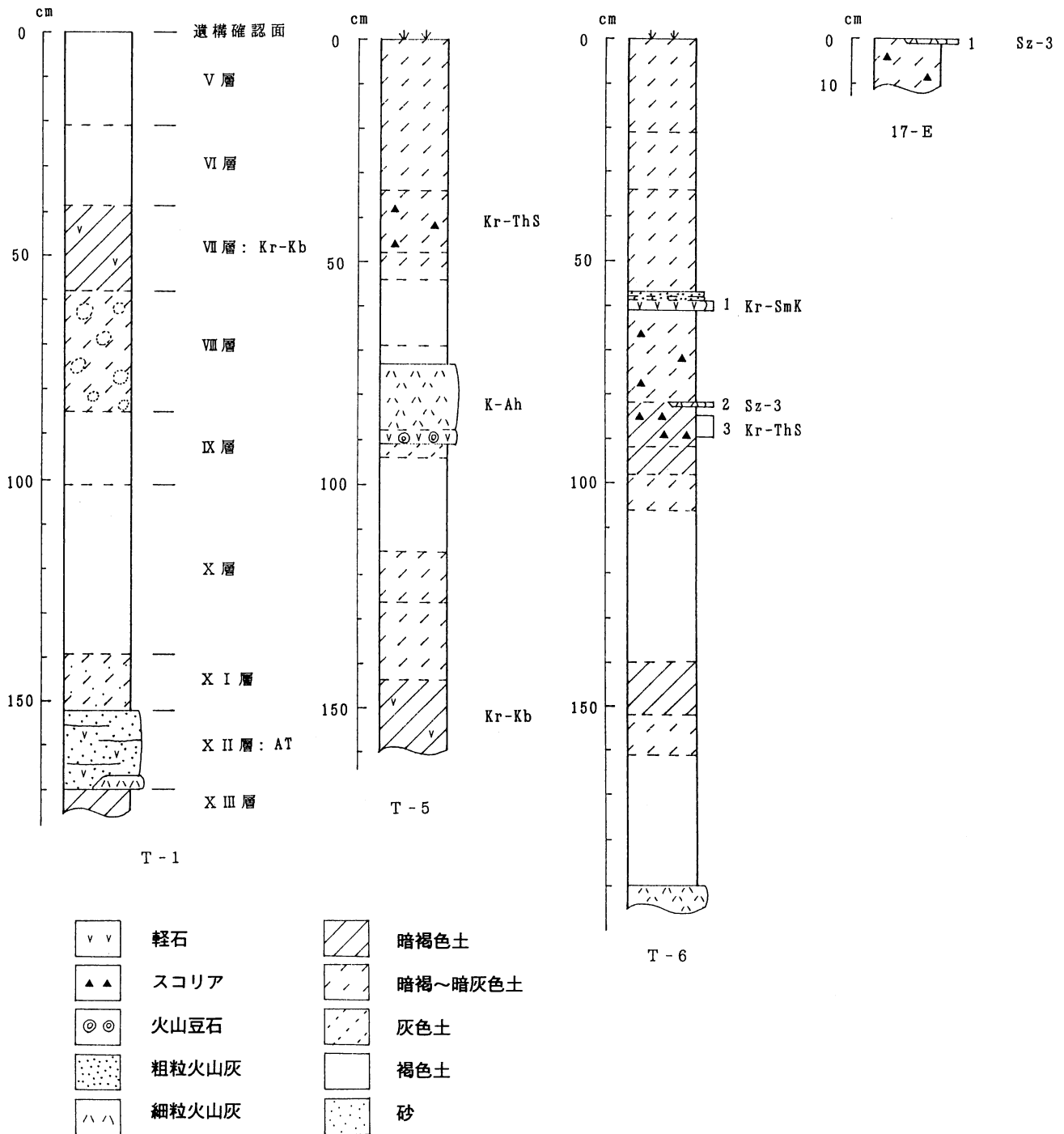
試料	軽石・スコリア		
	量	色調	最大径
1	+++	褐灰	3.1
3	++	褐灰	3.3

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない. 最大径の単位は, mm.

第11表 屈折率測定結果

地点	試料	重鉱物	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)
T-6	2	opx>cpx>ol	1.510-1.515	1.705-1.715
17-E	1	opx>cpx>ol	1.510-1.515	1.705-1.715 (1.710-1.715)

ol: カンラン石, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石. 測定は位相差法(新井, 1972)による. ()は中央値.



第43図 松元遺跡 各グリッド土層柱状図

2 植物珪酸体分析

(1) はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

(2) 試料

調査地点は、T-1、T-5、T-6の3地点である。試料は、AT直下層から現表土までの層準から計27点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

(3) 分析結果

1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表12および第44図、第45図に示した。

[イネ科]

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (ススキ属など)、ウシクサ族、ウシクサ族 (大型)

穎の表皮細胞由来：オオムギ族 (ムギ類)

[イネ科-タケ亜科]

機動細胞由来：メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、マダケ属型 (マダケ属、ホウライチク属)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

[シダ類]

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、その他

2) 植物珪酸体の検出状況

① T-1 地点 (第44図)

AT直下のXⅢ層 (試料10) からV層 (試料1) までの層準について分析を行った。その結果、AT直下のXⅢ層 (試料10) およびAT直上のXI層 (試料9) では、ウシクサ族や棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。X層 (試料7、8) では、クマザサ属型やミヤコザサ節型などが出現している。IX層 (試料6) からⅧ層 (試料4) にかけても同様の結果であるが、Kr-Kb混のⅧ層 (試料3) からⅥ層にかけてはクマザサ属型が比較的多く検出された。V層 (試料1) ではクマザサ属型が減少してウシクサ族が増加し、ススキ属型やネザサ節型などが検出された。また、シイ属などの樹木 (照葉樹) 起源の植物珪酸体も出現している。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には、他の分類群よりも過大に評価する

必要がある。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、VI層より下位ではクマザサ属型が卓越していることが分かる。

②T-5地点（第45図）

Kr-Kb混層（試料12）からKr-ThS混層（試料1）までの層準について分析を行った。その結果、Kr-Kb混層（試料12）ではクマザサ属型や棒状珪酸体が比較的多く検出され、ネザサ節型やミヤコザサ節型なども検出された。Kr-Kb直上層（試料11）ではクマザサ属型が大幅に増加しており、密度は37,000個/gにも達している。また、ススキ属型やウシクサ族なども検出された。K-Ahの下層（試料7～9）では、クマザサ属型が減少し、ヨシ属やメダケ節型が出現している。また、ブナ科（シイ属）やクスノキ科などの樹木（照葉樹）起源の植物珪酸体も検出された。K-Ah層（試料6）でもほぼ同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。K-Ah直上層（試料5）では、ネザサ節型やシイ属が比較的多く検出され、ススキ属型やウシクサ族、クスノキ科なども検出された。Kr-ThS混層（試料1）にかけてもおおむね同様の結果である。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、K-Ahの下層より下位ではクマザサ属型が卓越しているが、それより上位ではネザサ節型が優勢となっていることが分かる。

③T-6地点（第45図）

Kr-ThS直下層（試料9）から現表土（試料1）までの層準について分析を行った。その結果、Kr-ThS直下層（試料9）およびSz-3直下層（試料7）では、ススキ属型やウシクサ族、棒状珪酸体、クスノキ科が比較的多く検出され、メダケ節型、ネザサ節型、シイ属なども検出された。Kr-SmK直下層（試料5）から現表土（試料1）にかけてもおおむね同様の結果であるが、Kr-SmK直下層（試料5）ではオオムギ族（ムギ類の穎の表皮細胞）、現表土（試料1）ではイネが検出された。

（4）植物珪酸体分析から推定される植生・環境

始良Tn火山灰（AT，約2.4-2.5万年前）直下のXⅢ層の堆積当時は、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったものと推定される。X層から霧島小林軽石（Kr-Kb，約1.4-1.6万年前）より上位のVI層にかけては、クマザサ属を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生が継続されたと考えられ、とくにKr-Kb混層とその上層ではクマザサ属の生育が旺盛であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標とされている。ここでは、クマザサ属が卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）の下層では、クマザサ属が減少してススキ属やウシクサ族、メダケ節などが見られるようになり、周辺ではシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が成立したものと推定される。また、部分的にはヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたものと推定され

る。このような植生変化は、完新世における気候の温暖・湿潤化に対応しているものと考えられる。

その後、K-A hの堆積によって当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、K-A h直上層では比較的早い時期にネザサ節などのイネ科植物およびシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が再生・拡大したものと推定される。このような植生の回復と拡大には、平均気温が現在よりも約2℃前後高かったとされる当時の高温・多湿な気候環境が大きく影響したものと考えられる。

霧島新燃享保テフラ（K r-S m K, 1716年）直下層の時期には、T-6地点の周辺でムギ類が栽培されていたと考えられ、現表土では比較的最近まで稲作が行われていたものと推定される。遺跡の立地や周辺の植生から、ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）と考えられる。

第12表 松元遺跡における植物珪酸体分析結果

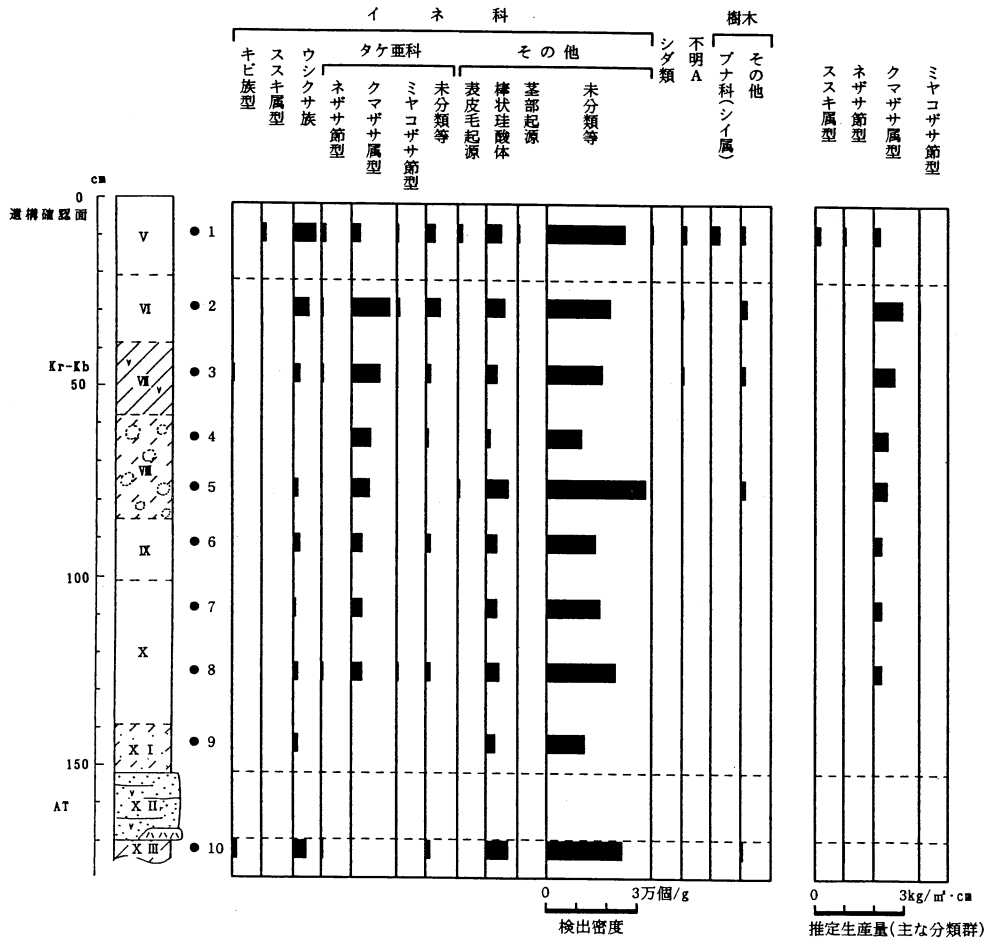
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	T-1										T-5												T-6					
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	3	5	7	9	
イネ科																												
イネ																							44					
オオムギ類(穎の表皮細胞)																							7					
キビ族型	7										7												7					
ヨシ属											7												7					
ススキ属型	15										7												7					
ウシクサ族	75	52	22		15	22	7	15	15		37	13	7	7	6	8		7	22	7	15		44	22	15	75	51	
ウシクサ族(大型)											22												44					
タケ亜科																												
メダケ節型											7												15					
ネザサ節型	15	5	7					7		7	184	144	140	26	98	8		7	7		8	28	117	119	89	188	44	
クマザサ族型	30	120	95	65	60	37	37	37		7	15	7	22		6			52	53	138	185	370	78	29	7			22
ミヤコザサ節型	7	10						7													15	28						
マダケ属型											7												7					
未分類等	30	47	15	7		15		15		15	15	7	15	7	12		7				28	15	21	15	7	7	30	
その他のイネ科																												
表皮毛起源	15				7						7	7						15		15	7		37		7		15	
棒状珪酸体	52	62	37	14	75	37	37	44	30	74	125	98	96	73	98	15	87	60	87	142	30	114	161	186	156	360	197	
基部起源	7																											
未分類等	261	212	184	115	328	162	177	228	126	252	598	557	655	470	427	54	233	400	233	513	400	363	527	498	462	735	577	
シダ類	7																											
不明A	15	5	7																									
樹木起源																												
ブナ科(シイ属)	30										59												59					
クスノキ科											15												15					
マンサク科(イスノキ属)											15												15					
その他	15	21	15		15					7	37	37	37	37	37	37	37	37	37	37	7	8	7	37	37	37	37	37
植物珪酸体総数	575	543	389	201	500	272	259	353	170	414	1166	1067	1221	833	806	155	520	620	576	919	898	640	1083	1017	893	1538	1133	

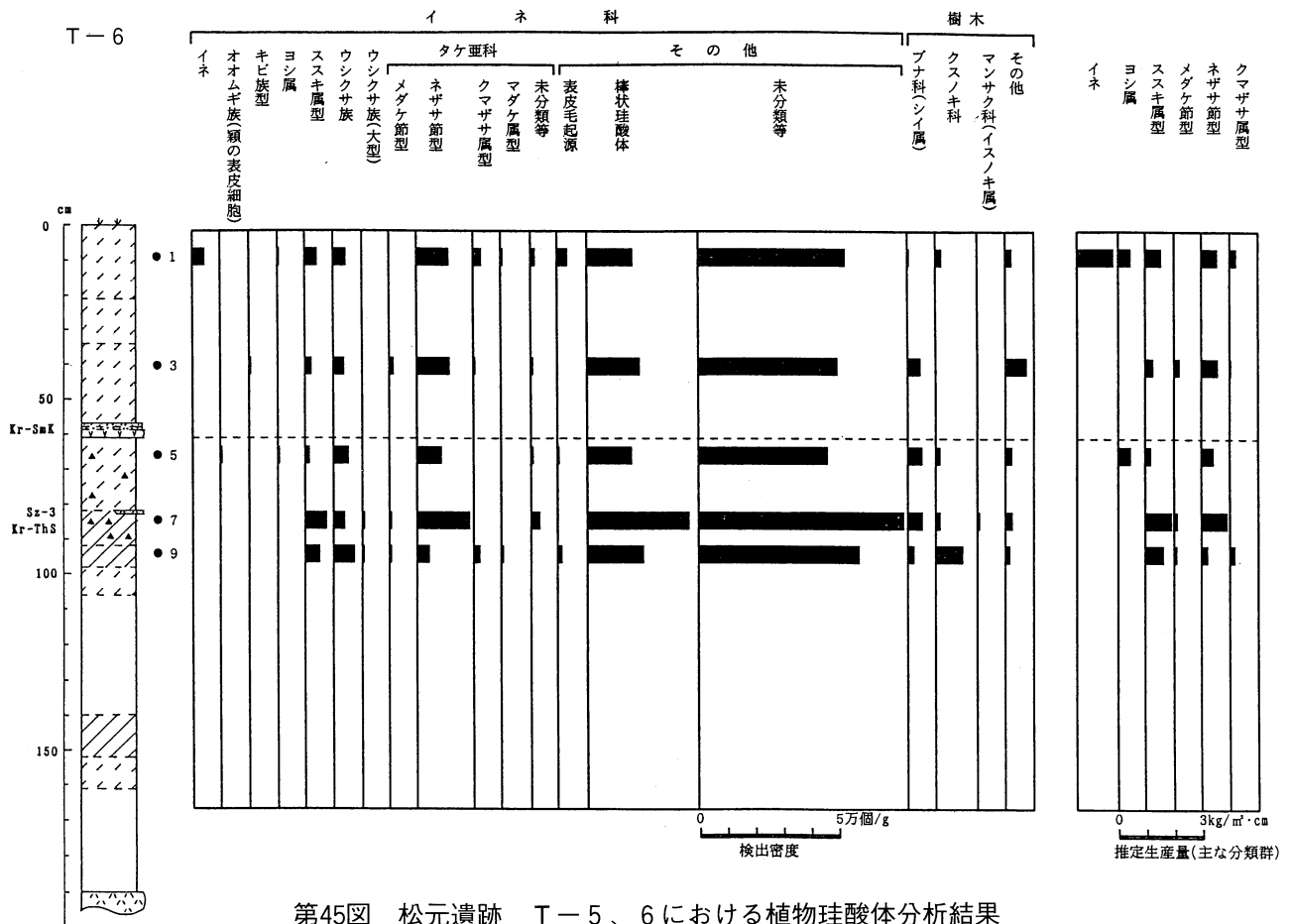
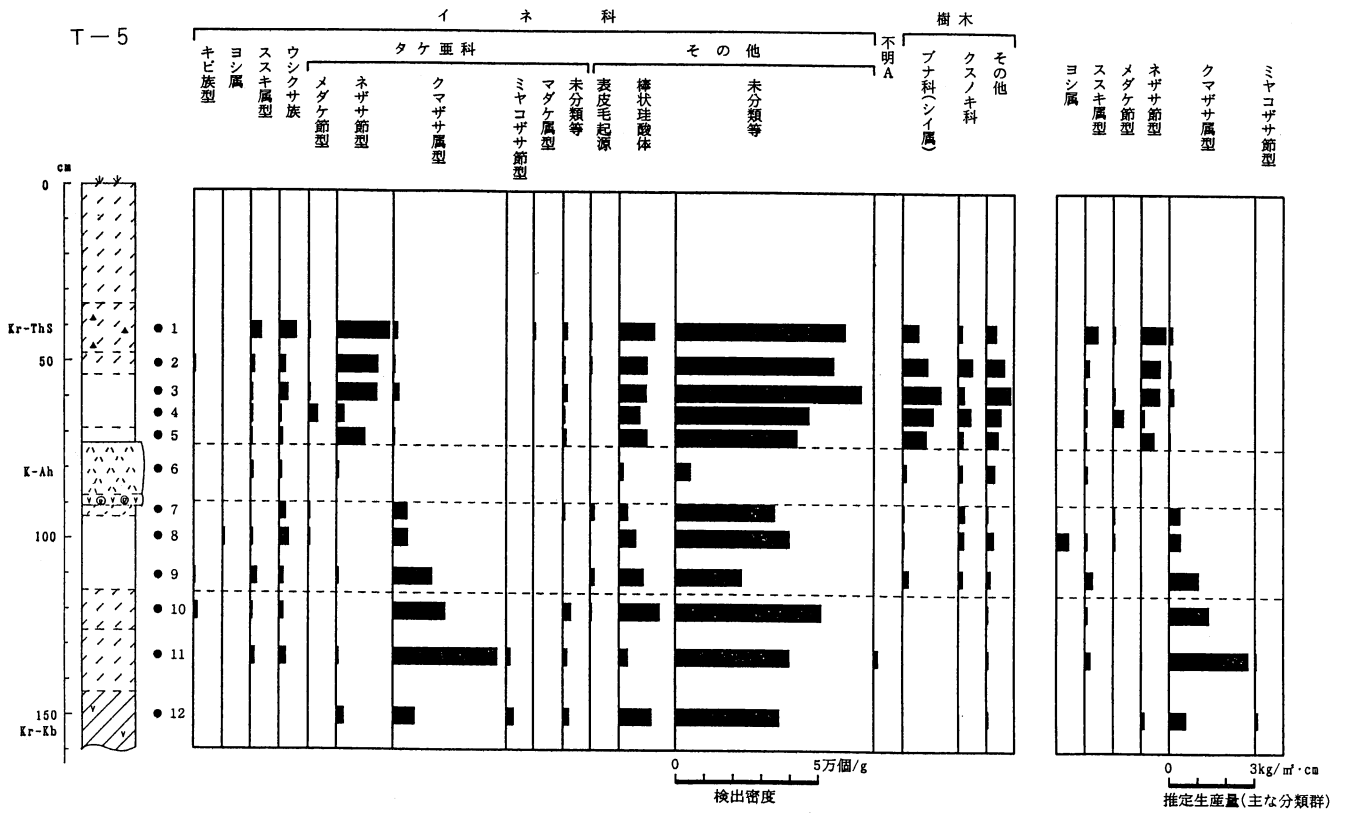
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ																							1.29				
ヨシ属																							0.46				
ススキ属型	0.19										0.46	0.16	0.09	0.08	0.08	0.10		0.08	0.27	0.09	0.19		0.54	0.28	0.18	0.93	0.63
メダケ属											0.09												0.17				
メダケ節型	0.07	0.02	0.04					0.04		0.04	0.89	0.69	0.67	0.13	0.47	0.39				0.03	0.04	0.14	0.56	0.57	0.43	0.90	0.21
ネザサ節型	0.22	0.97	0.72	0.49	0.45	0.28	0.28	0.28			0.11	0.05	0.17		0.05		0.39	0.40	1.04	1.39	2.77	0.59	0.22	0.06			0.16
クマザサ属型	0.02	0.03								0.02													0.05				
ミヤコザサ節型																							0.09				

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



第44図 松元遺跡 T-1における植物珪酸体分析結果



第45図 松元遺跡 T-5、6における植物珪酸体分析結果

第Ⅲ章 まとめ

松元遺跡は、旧石器時代の礫群3基、縄文時代早期の遺構44基、南側斜面から住居跡の可能性のある
 竪穴状遺構4基、時期不明の土坑3基を検出した。竪穴状遺構の時期は、弥生時代中期が1基、古墳時
 代中期～後期が3基である。出土遺物は、旧石器時代と縄文時代の石器、縄文時代早期を中心とする土
 器、弥生土器、土師器、数点の須恵器であった。

旧石器時代

石器の出土分布は、南側のA区に多く見られ、礫群3基もA区出土であったことからA区での活動が
 盛んであったと考えられる。出土点数は少ないが、石器の種類もナイフ形や三稜尖頭器、スクレイパー
 が中心で、狩猟生活の営みがあったことを窺わせる。C区の北側では細石核や剥片が出土しており、石
 器の製作加工をした場所の可能性も考えられる。

縄文時代

集石遺構が44基と多く検出され、遺構内から貝殻条痕文土器片が出土していることから縄文時代早期
 の時期のものと考えられる。石鏃の分類別の分布状況縄文土器の分類別の分類状況の表を比較してみ
 ると、A区のV層で出土されなかった石鏃の種類はI d型がなく、一方C区では出土が確認されている。
 B区の谷間を挟んでA区とC区では出土した土器から時期差がはっきり分れるのではないかと考える。
 すなわち、A区ではI類の貝殻条痕文円筒土器の時期、C区ではIV類の塞ノ神系の土器の時期が最も生
 活活動が盛んであったと考えられる。したがって、石鏃のI d型は、塞ノ神系土器の時期に伴うもの
 ではないかと推察ができると思うが、出土数も少ないため、今後調査される他の資料の検討課題として考
 えたいと思う。

弥生時代と古墳時代の竪穴遺構

柱を検出できなかったため住居跡としてのせなかったが、遺物が床面近くで同時期のものがまとまって
 検出されたことや炭化物の範囲がみられるなどその可能性が高いと思われる。また、検出された位置も
 時期差があるにもかかわらず偏っており、弥生時代を真ん中に隣り合わせになっている。地形から見
 ると緩斜面に沿うように並んでいる。それらについては、今後の検討に期待したいと考える。

第13表 縄文土器分類別分布状況表

	I				II	III		IV						V	VI
	a	b	c	d		a	b	a	b	c	d	e	f		
A 区	8	5	2	15											
B 区	A区より			1											
	C区より														
C 区	2	1		4	3	1	2	14	2	9	11	10	2	2	4

第14表 石鏃分類別分布状況表

		石 鏃					
		I				II	
		a	b	c	d	a	b
A 区		2	2	2		2	2
B 区	A区より		1				
	C区より						
C 区			3	1	4		

- 参考文献 宮崎県教育委員会「学頭遺跡・八児遺跡」 1995.3
 熊本県教育委員会「白鳥平B遺跡」熊本県文化財報告第142集 1994
 高橋信武「平椀工器と塞ノ神式土器の編年」『先史学・考古学論究Ⅱ』熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集 龍田考古会 1997
 新富町教育委員会「上蘭遺跡F地区・溜水第二遺跡」新富町文化財調査報告書第18集
 宮崎県教育委員会「天神河内第1遺跡」大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1991
 八木澤一郎「南九州の集石遺構」『縄文通信No 8』南九州縄文研究会 1994



松元遺跡 A・B 地区遠景（北西より）



A 地区遺構分布状況



C地区第V層遺物分布状况



C地区第V層遺構分布状况



B地区東壁土層



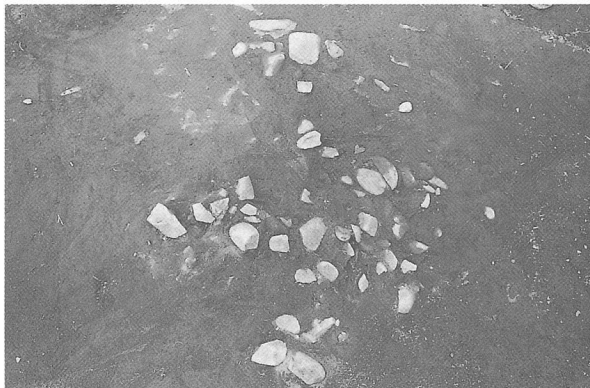
B地区H-13区土層



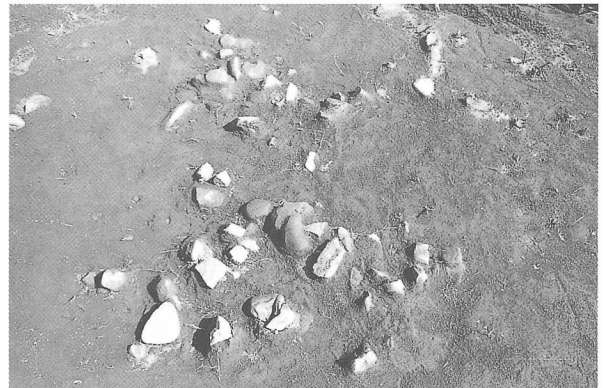
1号礫群



3号礫群



S I 1



S I 2



S I 3



S I 8



S I 12



S I 13



S I 17



S I 17半截



S I 20検出状況



S I 20



S I 21



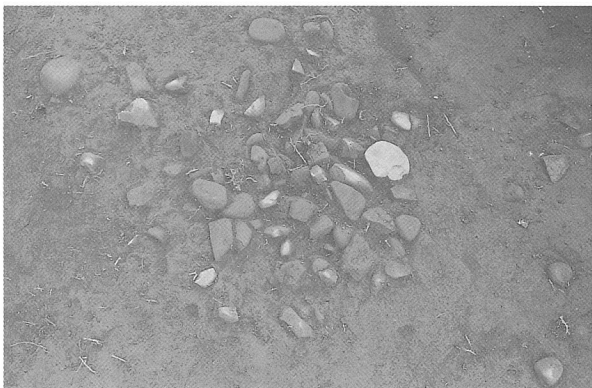
S I 38



S I 34



S I 35



S I 40



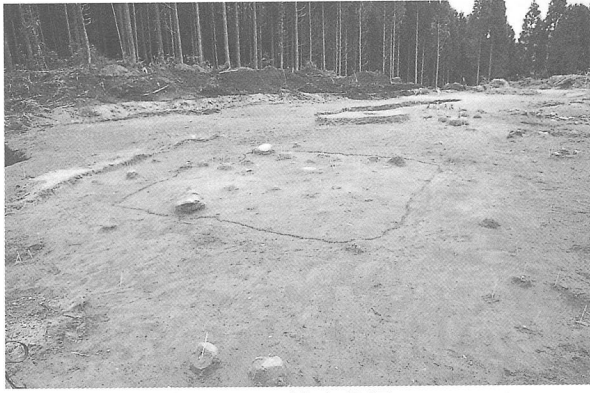
S I 42



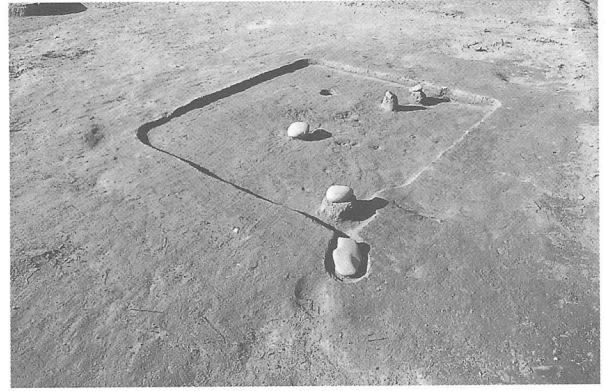
S A 2



S A 4



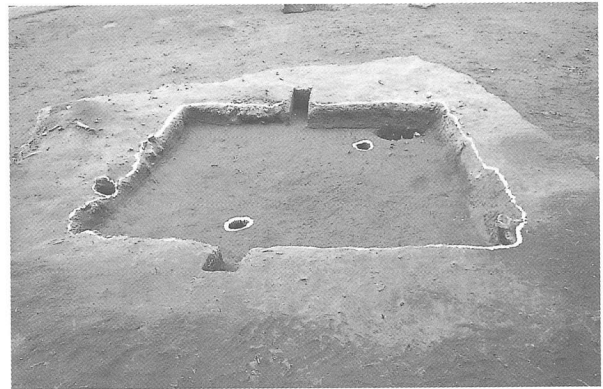
S A 1 検出状況



S A 1



S A 3 遺物出土状況



S A 3



S C 3 検出状況



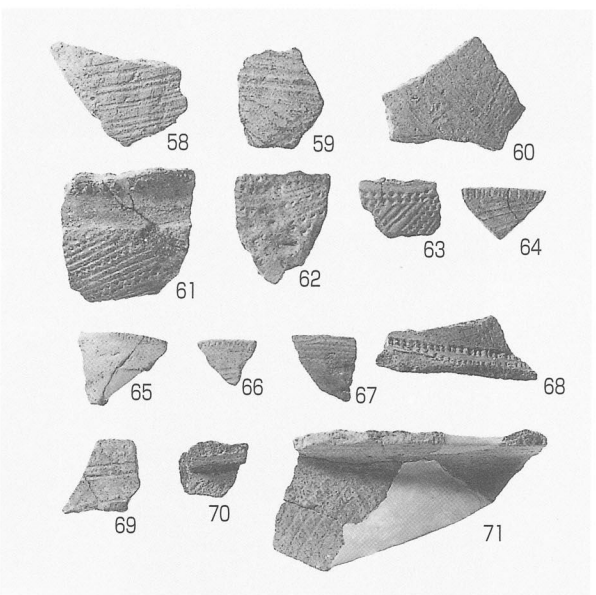
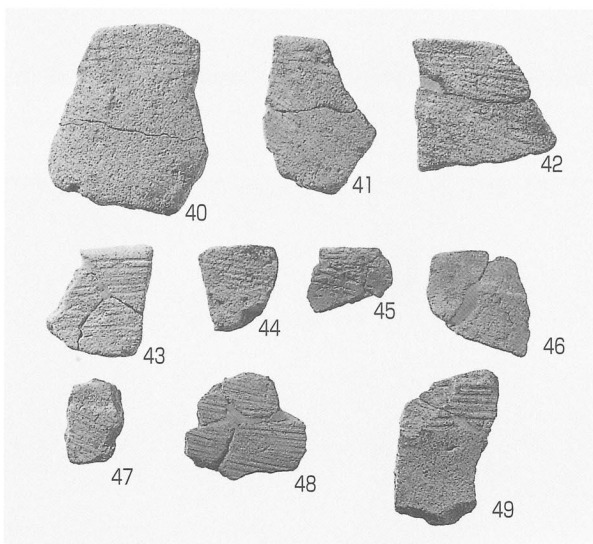
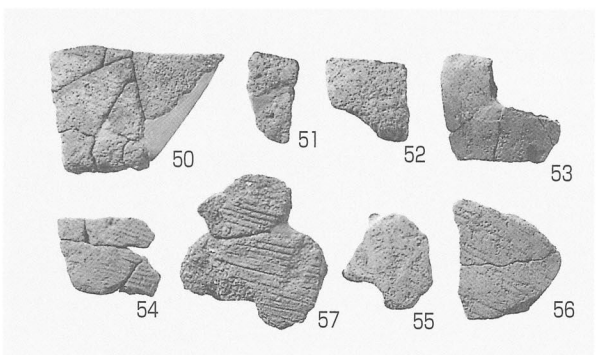
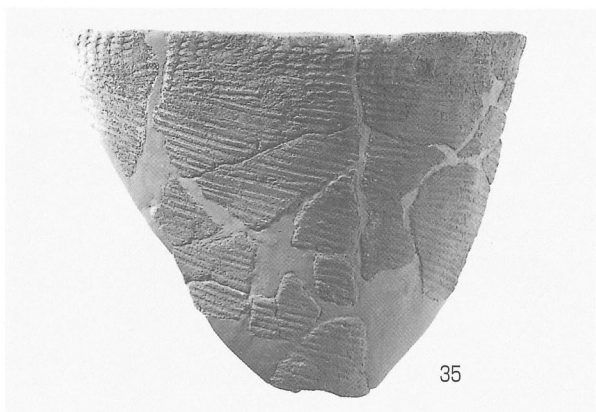
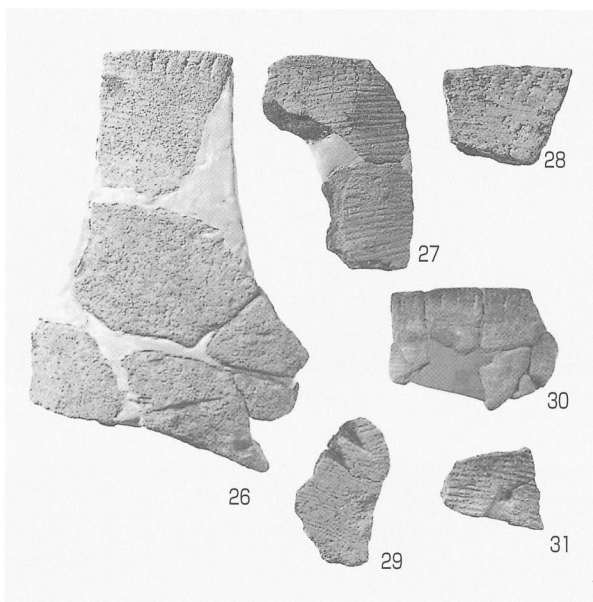
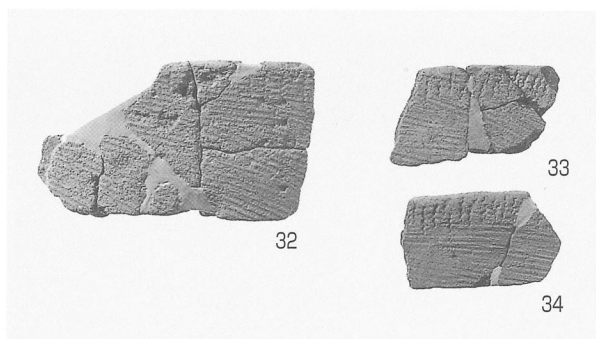
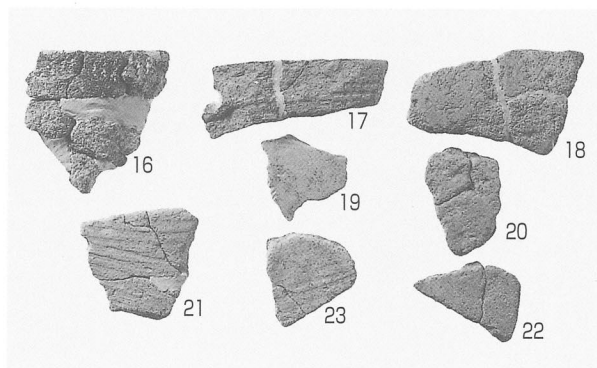
S C 3

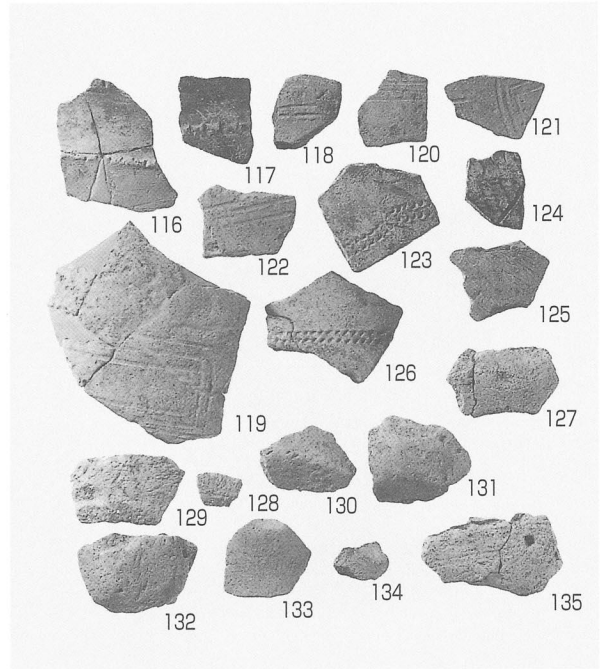
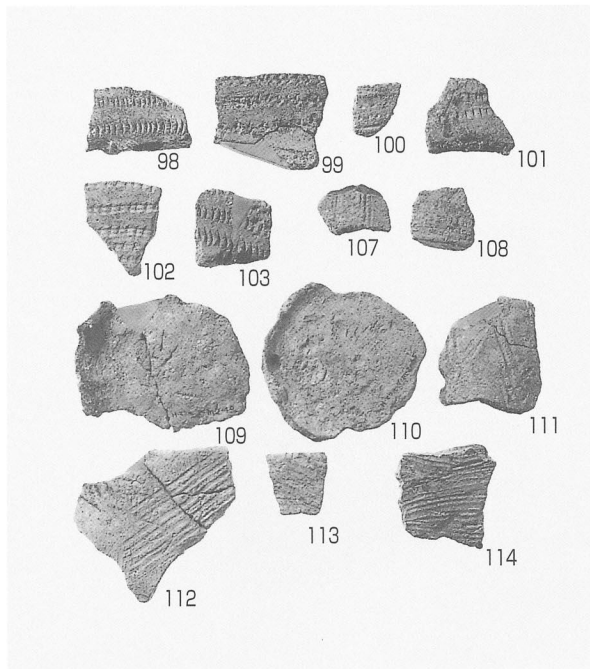
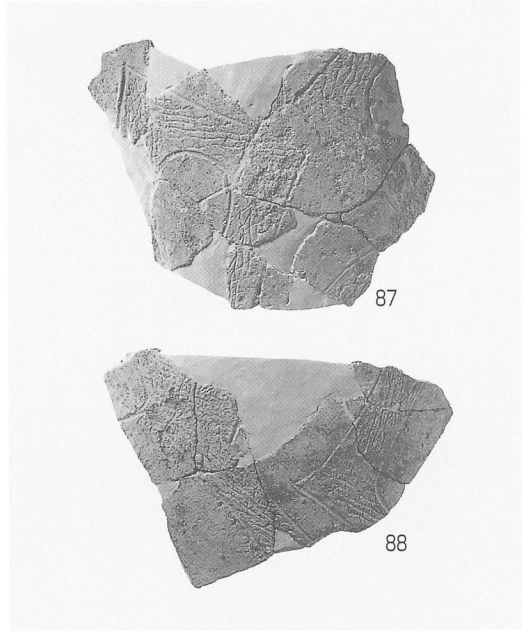
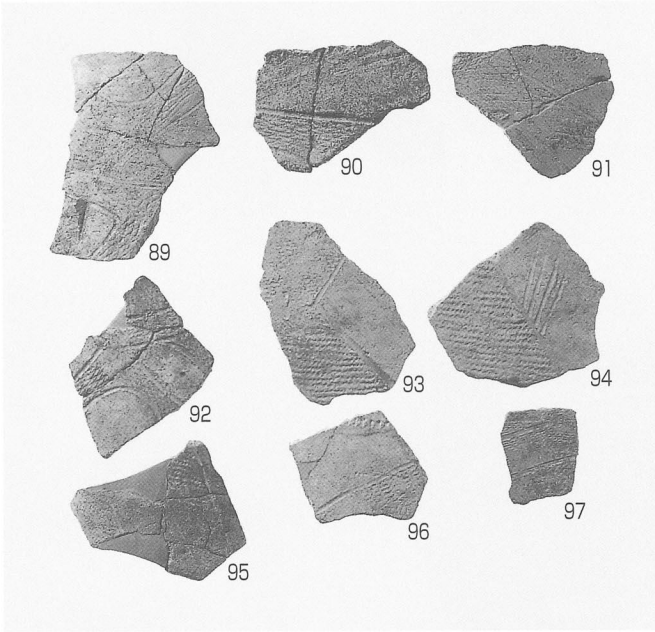
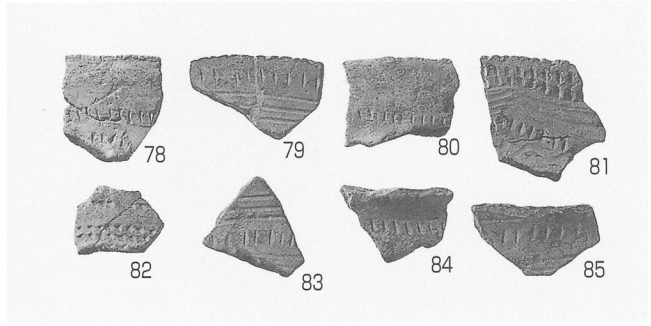
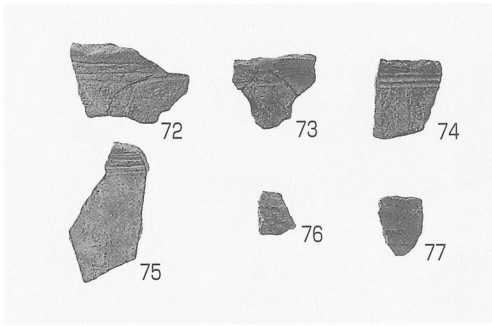


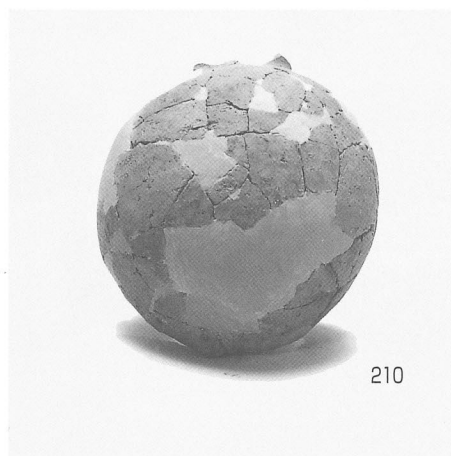
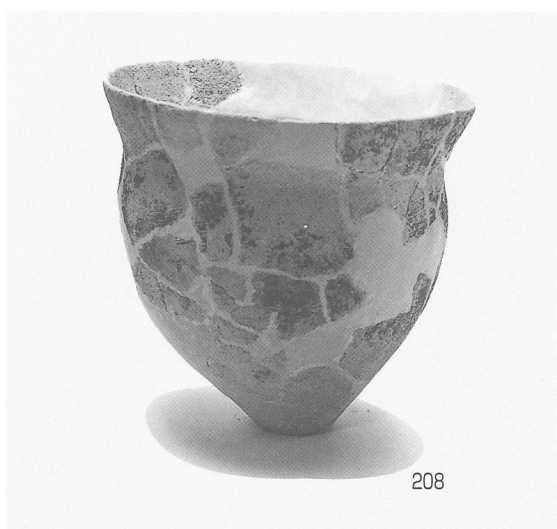
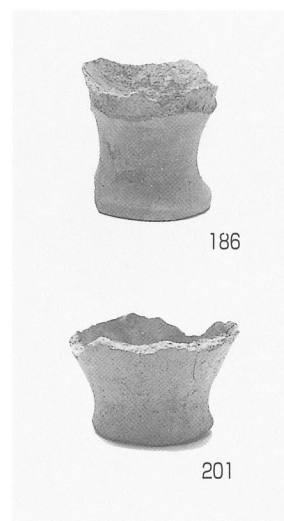
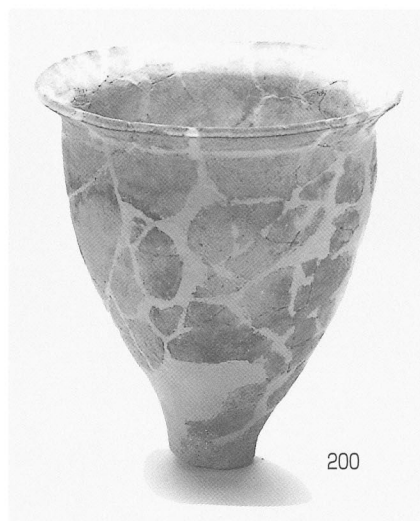
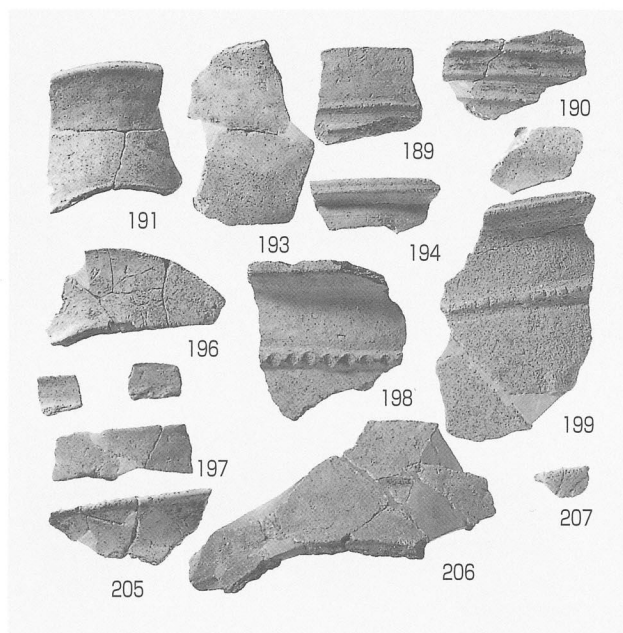
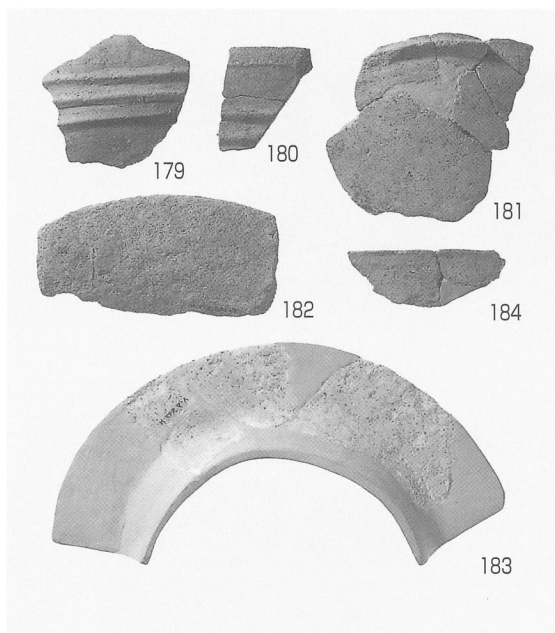
S C 1 検出状況

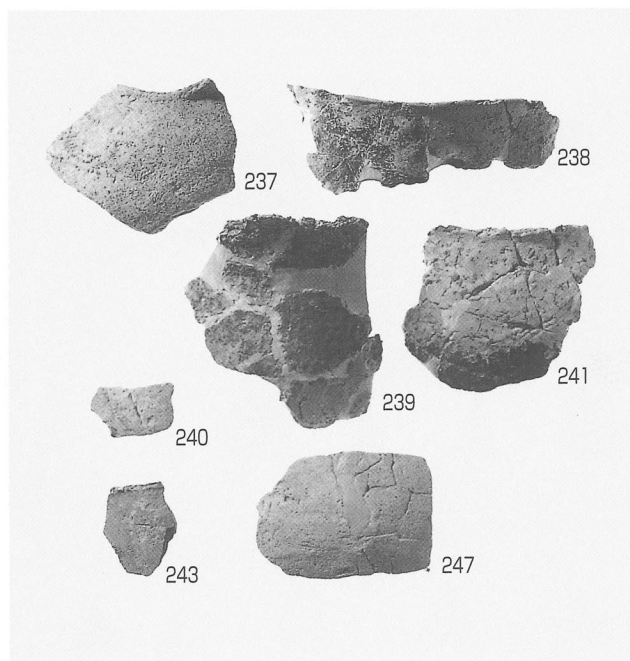
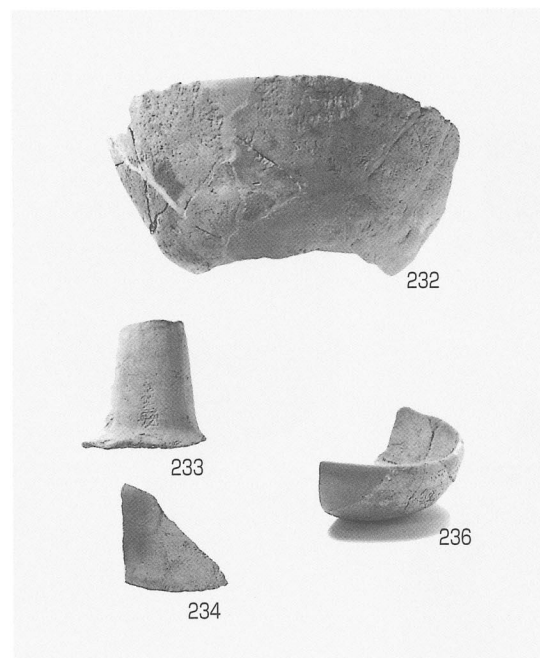
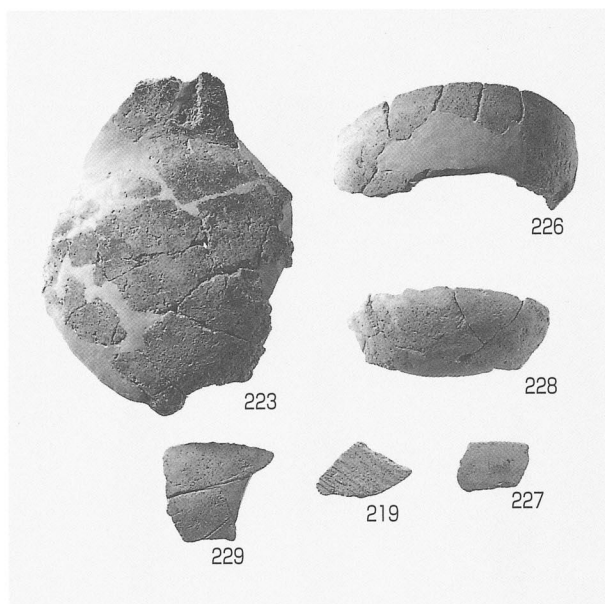
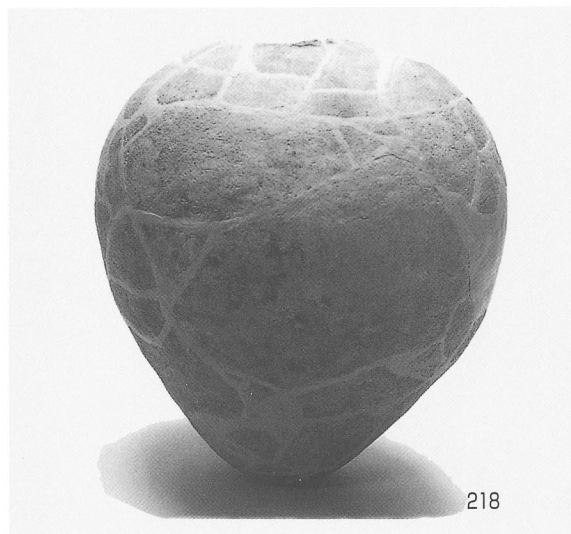
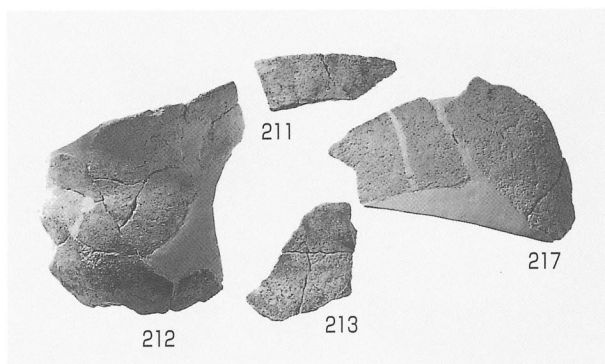


S C 1

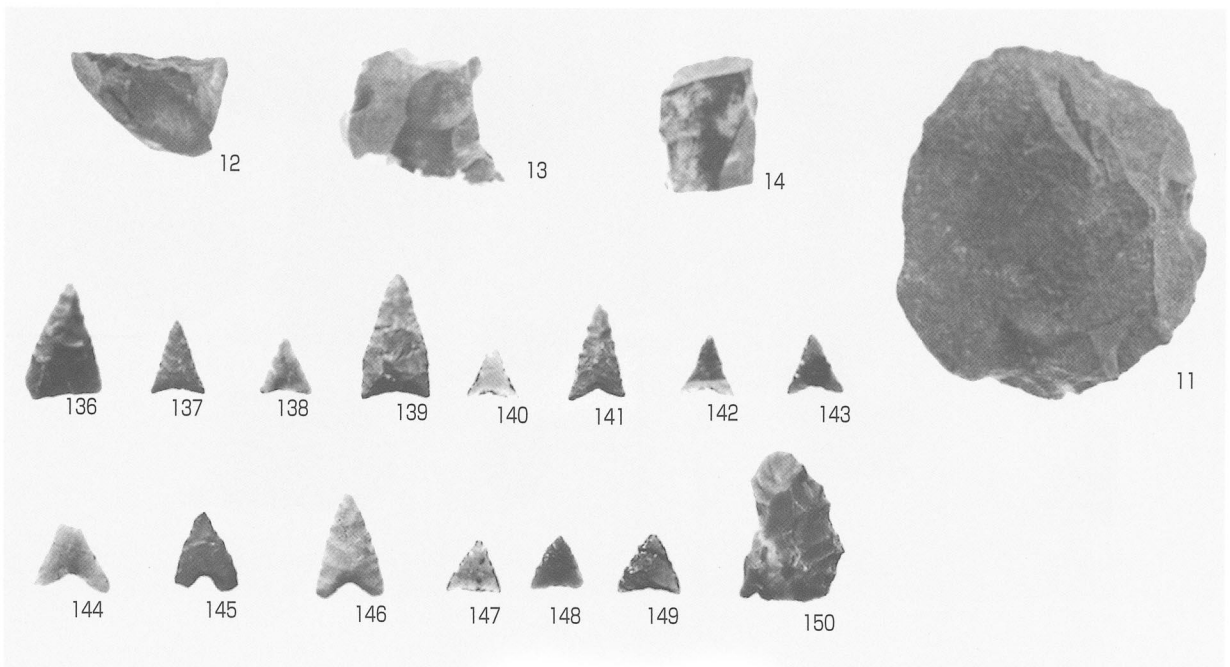
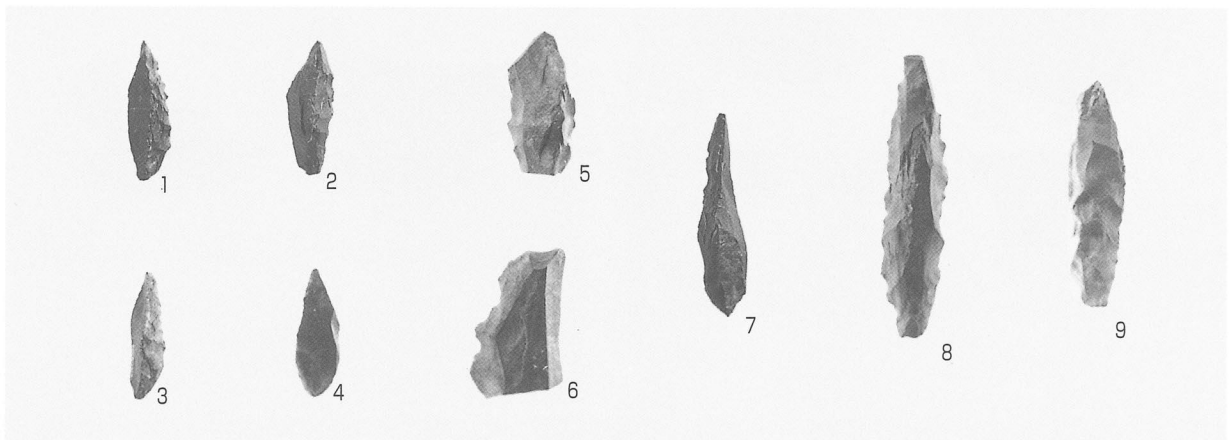
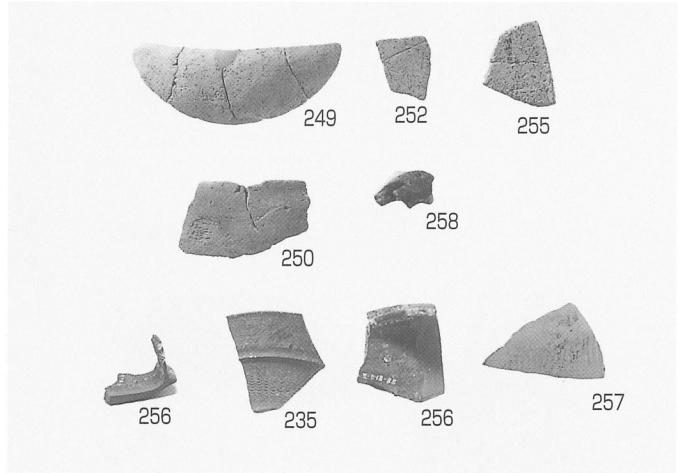
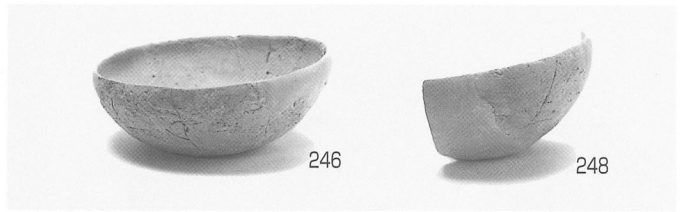


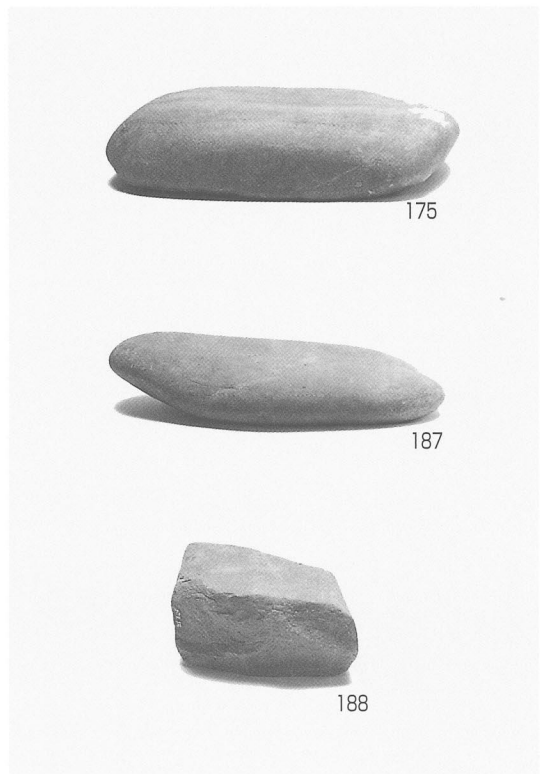
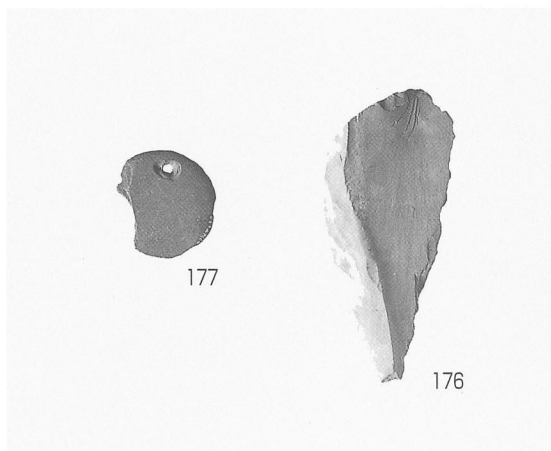
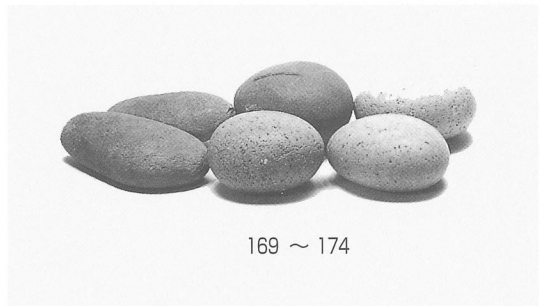
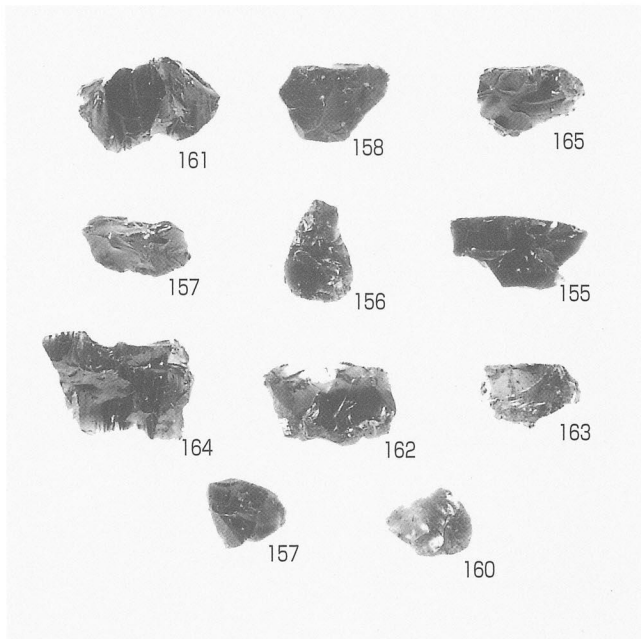
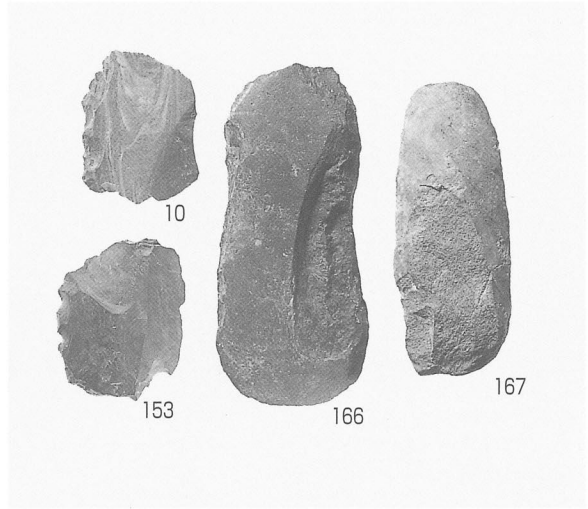
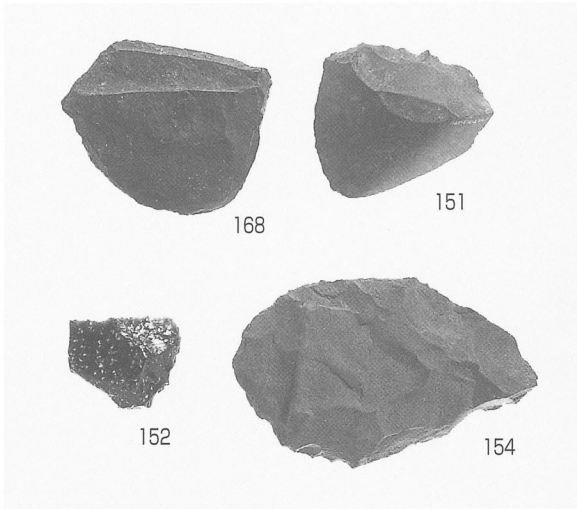






图版
10





第三編 井手口遺跡

第I章 遺跡の概要

第1節 遺跡周辺の地形と調査区の設定

井手口遺跡は、宮崎県東諸県郡国富町大字木脇字井手口に所在する。

地理的には、北、東、および南西から西にかけての三方の丘陵に囲まれた低地に立地しており、遺跡中央には北から南に向かって幅約5mの大淀川水系岩知野川が流れている。その流れに沿うように、北西から南東にゆるやかに傾斜をなす棚田状の水田が低地全域に開けている。ただし、遺跡北西側には長らく休耕田となっている区域があり、これは、地主の話によると「ぬかるみがひどく耕耘機も沈むので耕作に適さない」というほど保水性が高いことが原因らしい。

遺跡の標高は約21m前後で、本遺跡との比高差約30mの北東側および南西側の段丘上には、それぞれ松元遺跡、木脇遺跡がある。松元遺跡は本書にも収録されており、旧石器時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が、また、木脇遺跡では、旧石器時代から古代にいたる多くの遺構・遺物が検出されている。さらに、その南西の低地には、本遺跡と同様の低湿地調査区を含む、本書収録の塚原遺跡があるが、これら周辺の遺跡の概要については、第一編および各遺跡の報告を参照されたい。

本遺跡は、このように弥生時代以降の遺跡に挟まれた低湿地にあることから、調査前より水田跡の存在が期待されていたが、調査対象区域約8,000㎡の中で最終的に調査区として設定したのは、西北部のA・B区約1,400㎡で、試掘調査や自然科学分析の結果をもとに、最も水田跡の検出が期待できる範囲を選定している。調査区設定に至る詳細は、第3節で述べる。

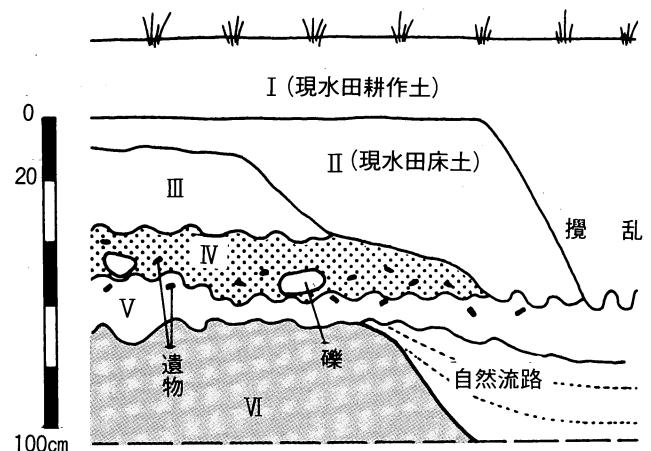
第2節 遺跡の基本層序

本遺跡は丘陵間の低湿地にあることから、水と土砂の流入の影響が激しく、土層の堆積状況が安定していないうえ、現代の水田面から基盤層までが比較的浅いため攪乱を受けている箇所も多い。そのため、ここでは基本層序を模式図で表す(第1図)。実際の堆積状況については、調査区中央の東西断面を示した第4図を参照されたい。

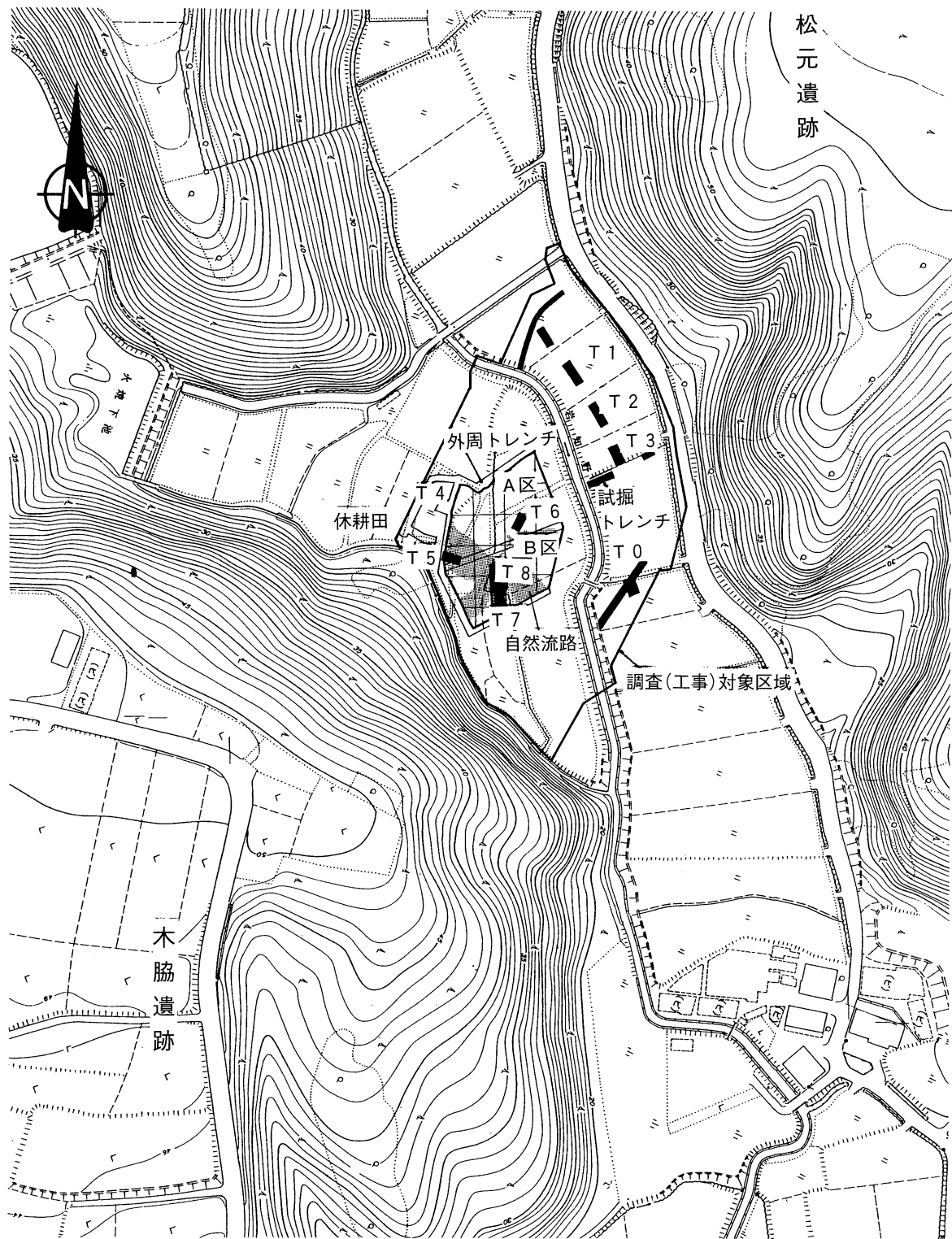
第I層は、現水田耕作土。第II層は、現水田床土に当たり、暗黄灰褐色土で細砂礫を含み粘性はない。

第III層は、暗灰褐色土でよくしまっている。

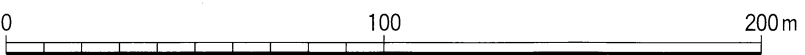
第IV層は、黒褐色土で「高原スコリア」(テフラ分析による同定。10~13世紀降灰か。霧島御鉢起源。)が混入する層である。水流あるいは耕作による上下層との攪乱箇所も随所に見られ、A区北西部やB区では、攪乱のためか色調が薄く灰色がかっており、桜島文明軽石(1471年・文明3年、桜島より噴出。)とみられる白色の軽石も含む。また、A区東半部では残存状況が悪い。



第1図 井手口遺跡 基本土層模式図



※木脇遺跡・松元遺跡の調査範囲・調査成果については、同遺跡の発掘調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第43集および本書）を参照のこと。



第2図 井手口遺跡 周辺地形図（1：2000）

古墳時代～中世の遺物を包含する層で、高原スコリア以外に文明軽石を含むとしても、中世あるいはそれ以降の層である。

第V層は、灰色シルト質土で黒色砂礫を含み粘性が認められる。A区東南部およびB区北東端部では、主に上層部で須恵器片などの遺物が包含される。この層の上面が地表面であった時期の遺物であろう。

第VI層は、青灰色粘質土でグライ化した層である。ただし、かつての地表面に当たる上層部は白色化して鉄分が斑状に凝集しているのが観察される。

B区の南側では、岩知野川護岸工事の際にV～VI層まで及ぶ掘削・攪乱を受けている。

第3節 調査の経過と概要

調査の内容は「水田跡の調査」になることが予想されていたので、まず、水田の存在の可能性を調べるため、試掘調査を実施し、合わせて自然科学分析を委託した。その結果、岩知野川西岸側を中心に水田遺構存在の可能性が十分考えられる量のイネのプラント・オパールが黒褐色土層（IV層）から検出された。また、この層はテフラ分析の結果、「高原スコリア（基本土層の記述参照）」を含む層であることが確認されたことで、「中世の水田遺構」の存在が期待されることとなった。

試掘調査時には、トレンチT4・5・7・8の断面で、腐植層と粘土・砂層が互層（ラミナ状堆積）になった埋土の入る「落ち込み」がIV層の下位に存在することが確認されていたが、これが遺構か否かを判定するためT7～8間を重機でさらに下方に掘り下げたところ、深さ約3mで断面がゆるやかなV字をなすものであることが判明した。他のトレンチ断面の状況と合わせると、おそらく北西から南東方向に流れていた自然流路（旧河道）の跡であろうと推測された。そこで、この流路の調査対象としての比重を判断する材料を得るため、流路底部で出土した流木の「放射性炭素による年代測定」を委託した。その結果、「暦年代で575年（測定誤差を含む年代幅は535～620年）」、すなわち6世紀後半代を中心とした「古墳時代」の自然流路であることが判明した。一般的に「流路」には、流木の他、「木器」などの遺物が流入していることがある。そのため、水田遺構調査後、可能な限り流路の調査も行うこととした。ちなみに、年代測定と同時に流木2点の樹種鑑定も委託したが、これは、当時の周辺の植生や用材としての可能性について参考資料を得るために実施したものである。鑑定の結果、樹種はスダジイとサクラであり、古墳時代の当時、周辺には照葉樹林が存在していたことがうかがえる。

調査範囲の選定にういては、水田遺構の検出を主眼におき、試掘調査の結果によってその可能性が期待される岩知野川西岸側を調査対象区とした。対象区内には、東端から西端に向かう長いトレンチを南北幅内にほぼ等間隔に4本配してトレンチ間の三区画を北からA・B・D区とし、最北端のトレンチの北側をC区とした。トレンチ断面の土層の観察結果から、調査区は、IV層の残存状態がより良いA・B区にまず限定し、D区への調査区拡張は、A・B区の調査成果如何によって検討することとした。A・B区間のトレンチは、以下、「中央トレンチ」と呼称する。C区は耕作土下にすぐVI層が現れたため調査対象から除外した。

調査開始にあたっての懸案は、なにより「排水対策」であるため、上記のトレンチと連結する排水用トレンチを西側外周に設定し、調査面への水分の浸透を防いだ。そうして、まずA区西半部から調査を開始し、III層下位までを重機により除去した後、人力によって掘り下げを行ったが、天候によりぬかるみ、あるいはひび割れる粘質土の扱いに苦慮した。次いでB区西半部、同東半部、A区東半部と試行錯誤を試みながら調査を進めた。調査区では、国土座標に基づく10mグリッドを設定している。

調査の結果、中央トレンチ南壁土層断面上では、数か所の棚田状の段差が検出でき（第4図↓印）、プラント・オパール分析結果と合わせ、水田遺構の存在が確認された。しかし、面的な遺構を検出することはできなかった。

水田跡の調査のために遺物包含層であるIV層を掘り下げていく際には、当然ながら遺物も同時に出土するが、A区東半部においては、IV層の堆積状況が悪く水田跡の調査が望めないため、必然的にIV・V層の遺物包含層の調査が主体になった。ここでは、他所では見られない遺物の集中出土が見られた。

すでに試掘時に確認されていた自然流路Aについては、調査の間に、B区西端部から自然流路Bが合流していることが判明した。自然流路Aの掘り下げは、諸条件を鑑みて、T7～8から中央トレンチまでの範囲に止め、流路Bについては合流地点の断面と検出面の輪郭を記録したのみであった。この両流路の合流地点では、弥生～古墳時代の土器を中心とした遺物が集中して出土している。

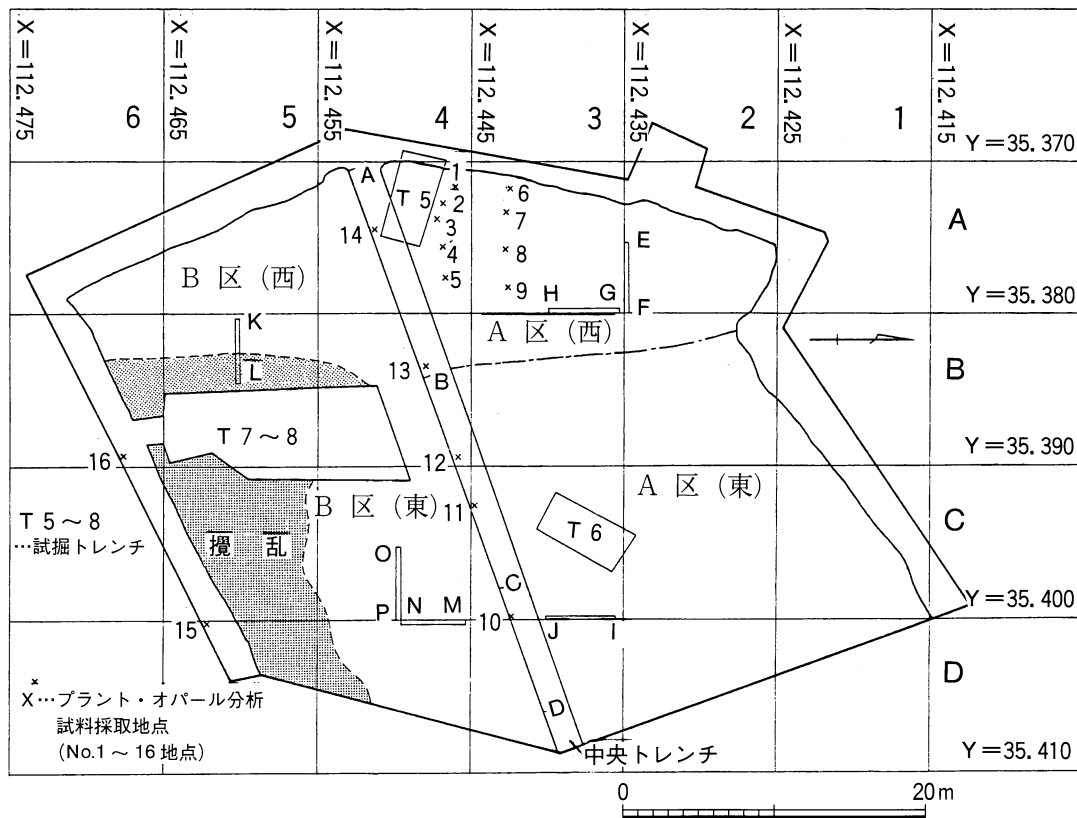
この他、流路Aと繋がり、中央トレンチに沿って東に深くなる自然流路Cも検出されているが、土層断面で確認されている東端部から南東方向へ延びるであろう遺構輪郭は確認するに至らなかった。

第Ⅱ章 調査の記録

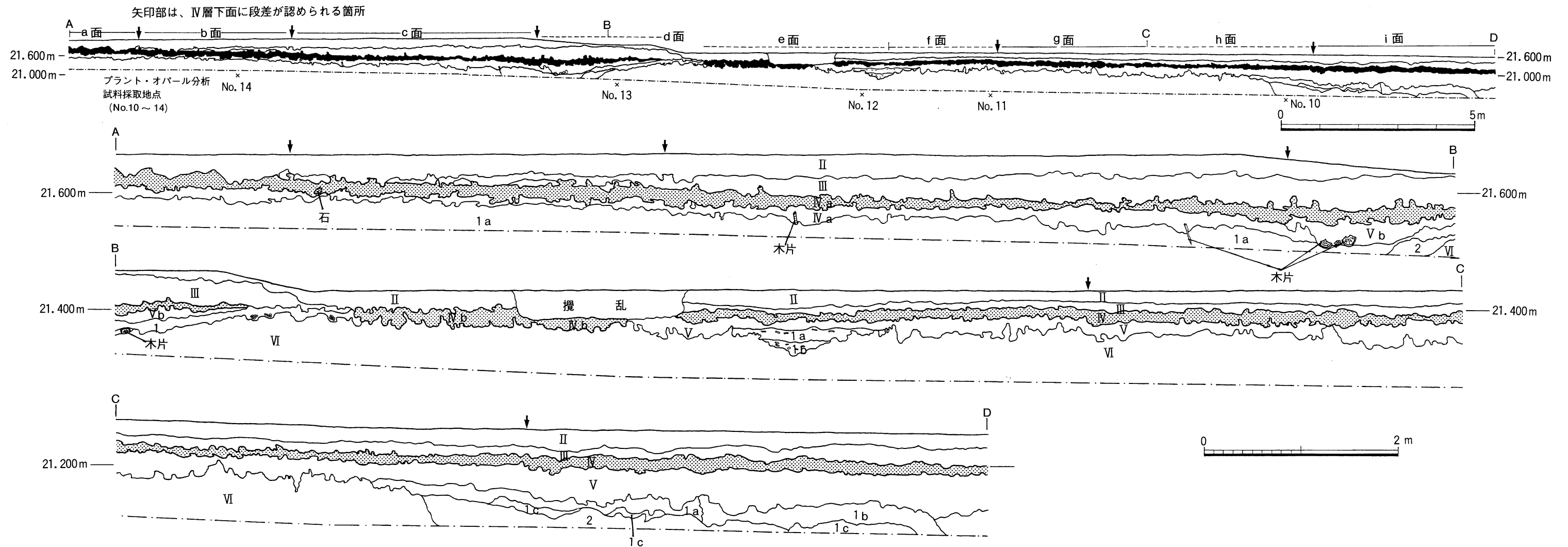
ここでは、発掘調査と遺物整理の結果について報告するが、時代の旧新に沿わずに、以下、水田跡、自然流路、包含層の順に報告したい。

第1節 水田跡の調査

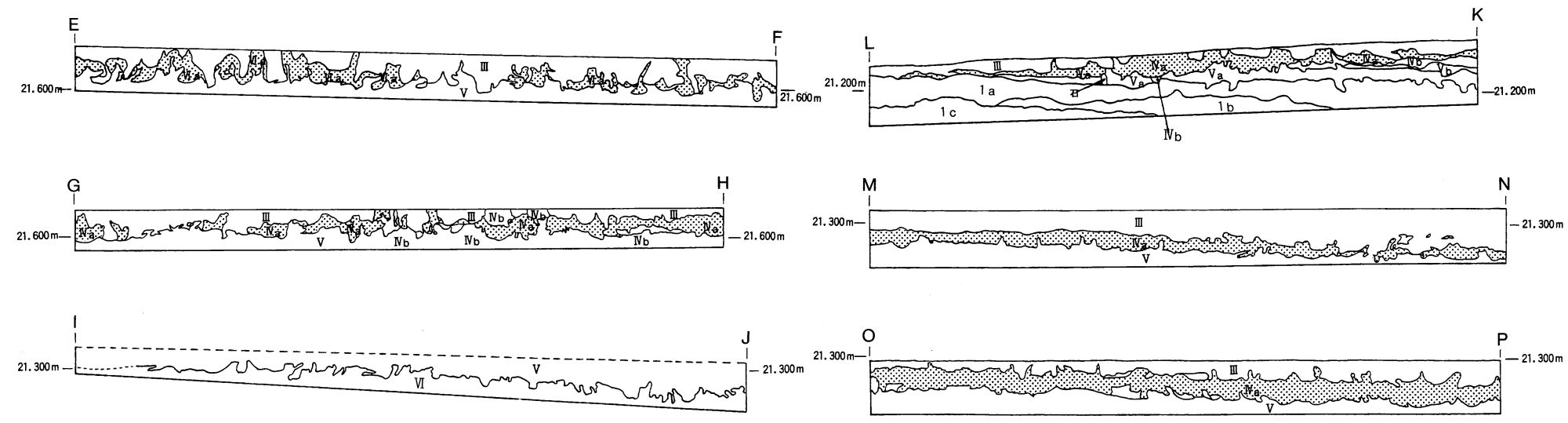
本遺跡の立地や水田跡の調査の経過と概要については前章ですでに述べたとおりである。



第3図 井手口遺跡 調査区グリッド配置図 (1:500)



第4図 井手口遺跡 中央トレンチ南壁 (B区北辺) 土層断面実測図 上:連続図 (1:100) 下:分割図 (1:40)



第5図 井手口遺跡 サブトレンチ土層断面実測図 (1:40)

- | | | |
|-------|---------|-------------------------------------|
| I層 | 耕作土層 | (攪乱) |
| II層 | 暗黄灰褐色土 | 粗砂・細砂礫を含む。粘性はない。 |
| III層 | 暗灰褐色土 | 白味がかかった粗砂及び、乳青色の砂礫を含む。よくしまり粘性はない。 |
| IV-a層 | 黒褐色土 | 高原スコリア混入層。白色粒と乳青色の砂礫が所々に入る。灰・黒色斑あり。 |
| IV-b層 | 〃 | 高原スコリアがマーブル状に混ざる。 |
| V層 | 灰色シルト質土 | 黒色砂礫を含み、やや粘性がある。 |
| V-a層 | 〃 | 灰白色土と黒色土がマーブル状に混ざる。 |
| V-b層 | 〃 | 植物遺体や木片を含み、所々に青灰色細粒や砂質のベルトが入る。 |
| VI層 | 青灰色粘質土 | 粘性が強く軟質でグライ化している。 |
| 1 a層 | 明灰色粘質土 | 植物の細片を多く含む粘質土。 |
| 1 b層 | 〃 | 植物の細片を多く含む、木片が横になった状態で混入する。 |
| 1 c層 | 〃 | ややシルト質で、木片・小枝等を多く含む、上層よりやや紫色がかる。 |
| 2層 | 褐灰色土 | 粘質層に青灰色や緑灰色の細粒が、幾重にも層を成してラミナ状に入る。 |

自然科学分析の結果を受け、IV層を鍵層として水田跡の調査を行うこととなったが、宮崎平野大淀川流域の低湿地調査例は極めて少なく、低湿地の土層堆積状況の実態や調査の方法は未知の部分が多いため、わずかな段差であろう畦畔や疑似畦畔を検出することは、容易でないことが予想された。

遺構を検出するには、まず、IV層が調査区内各所でどのように堆積しているかを把握しておく必要がある。これについては、10mグリッド、さらには必要に応じてそれらを4分割した5mグリッドに沿ったサブトレンチを設定し、掘り下げて土層断面を観察して精査することにした(第3・5図)。

また、平面観察においては、連続する土色の変化点を水糸でつないで水田区画の手がかりを探したり、掘り下げた面が乾燥する前にローリングタワーからの土色確認を頻繁に行うなどの工夫を試みた。

その結果、中央トレンチ土層断面上では、IV層下面で、わずかではあるが棚田状に疑似畦畔が段差を成している部分(第4図↓部)が数か所確認できた。これら段差間の、ほぼ水平な平坦面a~i各面が水田面に相当している。それらのIV層下面レベルを見ると、a層が最も高く、次いでb面とf面、c面とg・h面、d面とi面のそれぞれが同一レベルになっており、西から東へ連なる水田面レベルを追って見ていくと、西端部aから中央付近cまで徐々に下がり、eを隔ててfでまた上がり、東端部のiに向かって徐々に下がっているという状況である。eは現代の水田耕作によって上下に激しく攪乱されている。これら棚田状のIV層水田面についてはプラント・オパール分析も実施しており、7地点の試料全てにおいて、稲作が行われていたと判断できる量のイネのプラント・オパールが検出されている(第4図および第Ⅲ章参照)。

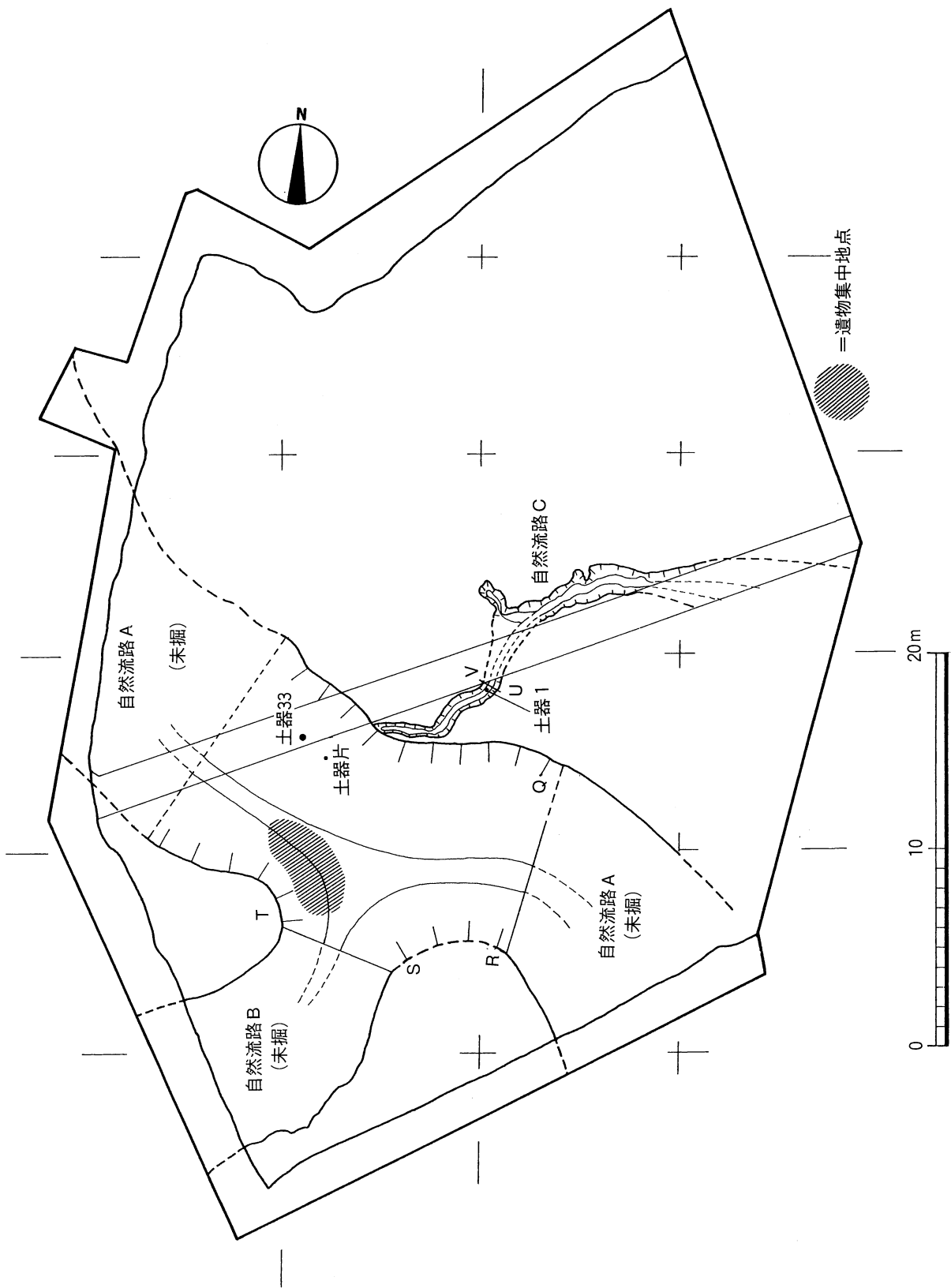
これを基に、中央トレンチ南北両側を中心に、疑似畦畔の精査と検出を試みたが、土層の状態や掘り下げ傾斜の設定が検出に適しなかったのか、残念ながら、確実な水田面の遺構や、水田に付随する人畜の足跡や稲株跡を確認するには至らなかった。ただ、確証がないものの、A区西半部南側のA3・4、B4グリッドでは、IV層掘り下げ面で疑似畦畔らしき下位層の帯状の高まりや、水田区画の違いを示す可能性のある、面的な土色の違いが観察されている。遺構か否かの問題は別にしても、A3・4グリッド面において実施したプラント・オパール分析では、土層断面のみならず、平面的にもIV層が水田跡であることが立証されている(第3図および第Ⅲ章参照)。

A区西北端部およびA区南側中央(B3グリッド東部~C3グリッド北西部)のVI層上面では、牛の足跡が検出されている(図版3)が、足跡内にIV層土の他にIII層あるいはII層とみられる黄褐色土も含まれることや、VI層面が現水田面から浅い位置にあることから、IV層の水田面より新しい時期(近現代か)の水田に伴うものと判断した。

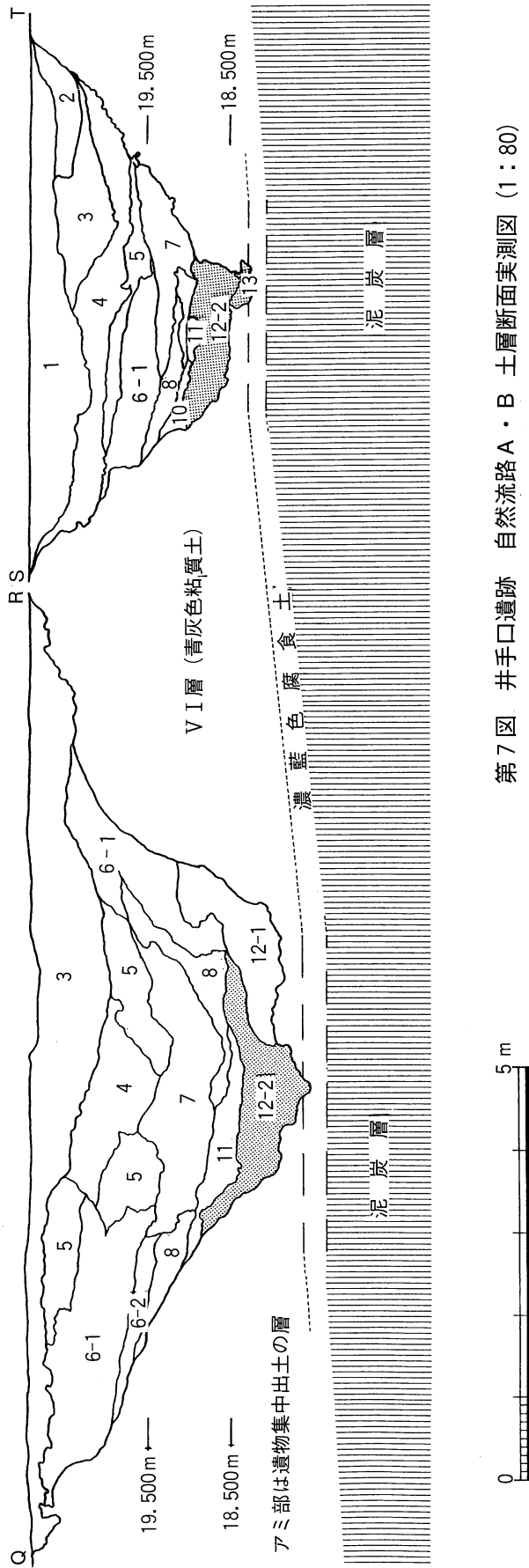
第2節 自然流路の調査

調査区内では、流路Aとこれに合流するB、そしてCの3条の自然流路が検出された(第6図)。

流路はすべてVI層を掘り削り流れていたものであり、埋没した後、上部にV層が堆積している。第I章第3節で述べたように、出土流木の年代測定の結果、流路Aには古墳時代後期の年代が与えられており、Aに合流するBも同時期であろう。また、Cについても西端部がAと連結しており、ほぼ同時期とみられる。これらの流路が「自然遺構」であるとした根拠は、まず断面形状に人為的な遺構とする積極的な理由が無いことと、とくにAのような規模の大きい流路を人力で掘削したとすると相当な労力が必要であり、また、これだけの流路を開削するだけの理由、つまり「同時期の大規模な水田がある」な



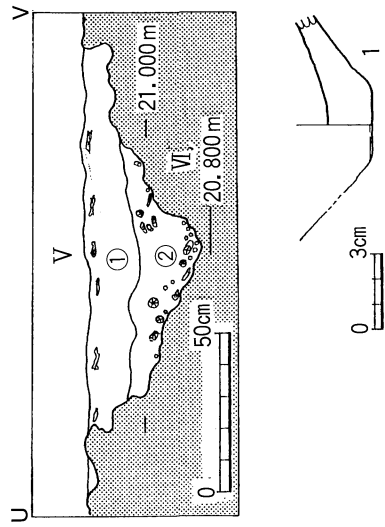
第6図 井手口遺跡 自然流路A・B・C遺構配置図 (1:300)



第7図 井手口遺跡 自然流路A・B土層断面実測図(1:80)

- | | | | | | |
|------|----------|-------------------------|-------|-------|----------------------|
| 1層 | 明灰色シルト質土 | 植物遺体を含む。シルトと砂の互層がラミナ状。 | 8層 | 灰白色粘土 | 粘性が強くグライ化している。 |
| 2層 | 暗褐色土 | 黒みを帯び、粘性がある。木の葉の炭化物を含む。 | 9層 | 泥炭 | 軟質で木片炭化物を多く含む。 |
| 3層 | 褐色土 | 植物及び木の細片を多く含む粘質層。 | 10層 | 灰色粘質土 | 粘性が強く微細な炭化物をラミナ状に含む。 |
| 4層 | 黒灰色土 | 小礫とともに植物及び木の細片を含む。 | 11層 | 泥炭 | 軟質で植物性炭化物を多く含む。 |
| 5層 | 明灰色シルト質土 | 粘性は弱く軟質。層面がマーブル状。 | 12-1層 | 礫混入土 | 中礫を多く含む砂質土。 |
| 6-1層 | 灰白色シルト質土 | 粘性は弱く軟質。層面がマーブル状。 | 12-2層 | 礫混入土 | 遺物を含む層。小礫と砂からなる。 |
| 6-2層 | 暗白色シルト質土 | 粘性は弱く軟質。炭化物をまばらに含む。 | 13層 | 砂質土 | 小礫と砂が密に堆積している。 |
| 7層 | 黒色土 | 炭化した植物遺体を多く含む、ラミナ状。 | | | |

- ① 明灰色粘質土。
植物細片を多く含む、褐色がかっている。
上面に、木片が横になった状態で混入する。
- ② 上層よりやや紫色がかかる。シルト質で、植物細片や木片・小枝等を多く含む。底部で第IV層を巻き上げた痕跡があり、一部に摩耗した遺物の流れ込みが見られる。
- 第VI層 青灰色粘質土
粘性が強く軟質でグライ化している。上部には鉄分の沈着が多く見られる。青色よりも白色味が強い。



第8図 井手口遺跡 自然流路C土層断面および出土遺物実測図

ど、が無いことである。以下、自然流路A、B、A・Bの遺物、Cの順に報告する。

1 自然流路A (第4・6・7図、図版4・5)

自然流路Aは、調査区西部において、北西から南東に向けて流れる大型の旧河道である。幅約10m、深さ約3mの規模で、北側断面(A4グリッド位置)での深さ約2.5m、南側断面での深さは約3.4mを測る。遺構形状を見ると、南西(右岸)側が大きく曲がるため、より強い水流の影響を受けたであろう南西側は急激に落ち込むが、北東側(左岸側)はゆるやかに浅くなっている箇所も見られる。この流路には、木脇遺跡の所在する西側台地の崖面下から、自然流路Bが合流している。

埋土は、上半部が腐植層の入る軟質層で、流木も入り込んでいる。下半部は礫・砂質土・粘質土が堆積しており、非常に短期間の間に、かなりの水流によって運ばれた土砂や植物が、重いものから順に堆積していったことが看取される。

遺物は、古墳時代の土器片を中心にして、流路Bとの合流地点の壁面下面に集中して出土している他、流路Cとの合流地点から約1m北側の壁面で、古墳時代の壺の破片(接合して器形ほぼ復元。第10図33)や土器片がへばりつくような状態で出土している(第6図)。遺物の内容については後述する。

集中出土の遺物中には、小型丸底壺のように完形に近いものも見られ、土器片の摩耗度や破損度は、推測される水流の激しさとは反対に、意外にも比較的低い。遺物の集中には、水流以外の原因も考えられるようである。

2 自然流路B (第6・7図、図版5)

本流路は、木脇遺跡のある南西側台地直下から自然流路Aに流れ込むもので、幅約6m、深さは合流地点で約2.7mである。流路Aとの合流地点の断面や遺構輪郭のみの確認で、流路本体の掘り下げを行っていないため詳細は不明であるが、合流地点の底面礫層の中から多くの遺物が集中して出土した。この礫層は、流路側面を一部削り取るような形で堆積しており、流路Aと同様、かなり強い水流の影響を受けたことが推測される。

3 自然流路A・B 出土遺物 (第9~12図、図版6・7)

自然流路A・Bでは、旧石器時代から古墳時代までの遺物が出土している。以下、概要を述べるが、個別の所見については遺物観察表(第1表~)を参照されたい。

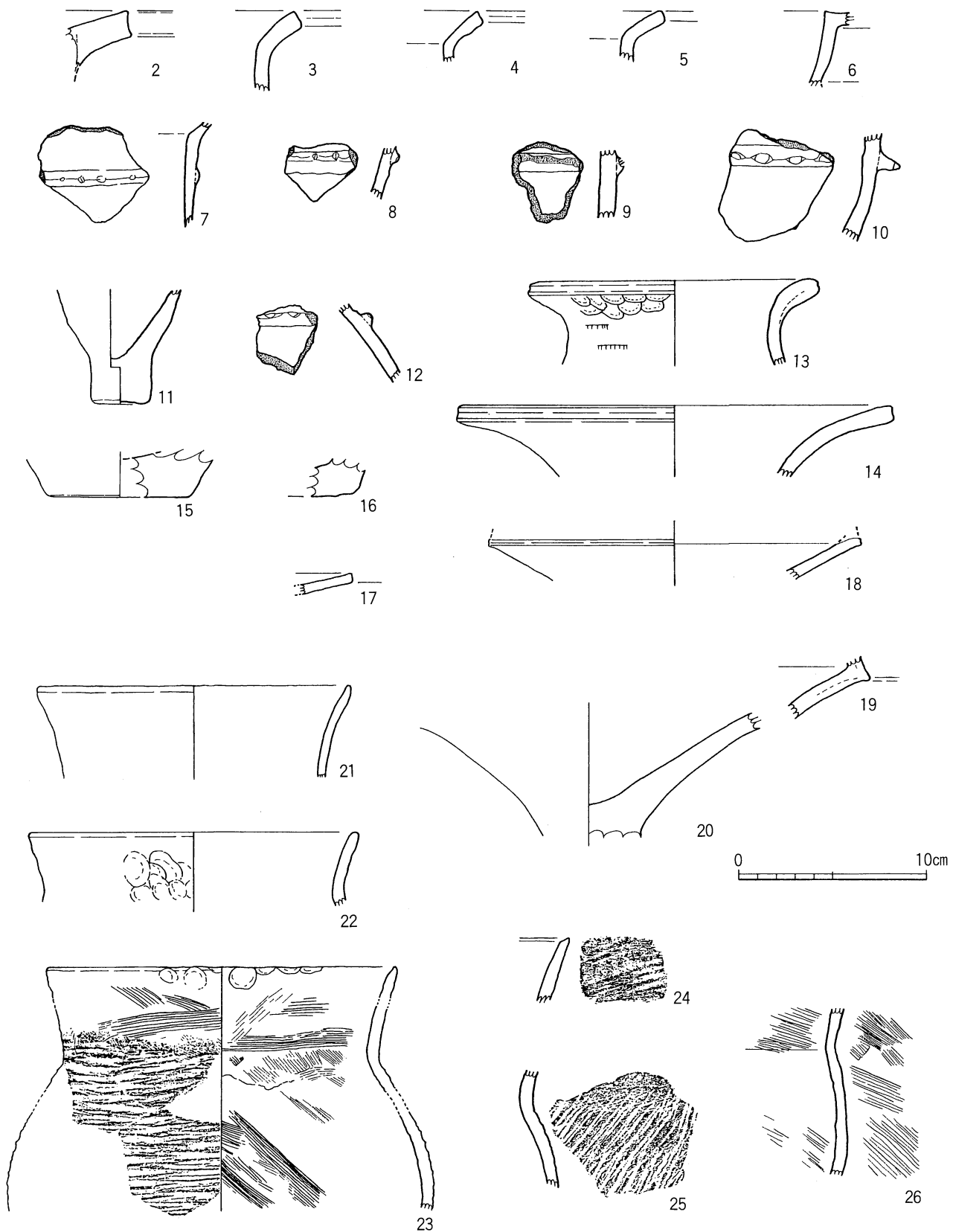
旧石器時代の遺物は尖頭器基部1点(64)、縄文時代はスクレーパー1点(66)とわずかで、遺物の大半は弥生~古墳時代の土器片である。

弥生時代の遺物は2~17で、中期の甕口縁部(2~6)、同じく中期甕の刻み目突帯の付く頸部(7)、胴部(8~10)、中期小型甕底部(11)、中期肩部(12)、口唇部に凹線のある壺口縁部(13・14)、壺底部(15・16)である。9と16は同一胎土で、同一個体の可能性が高い。17は高坏または器台の口縁部である。

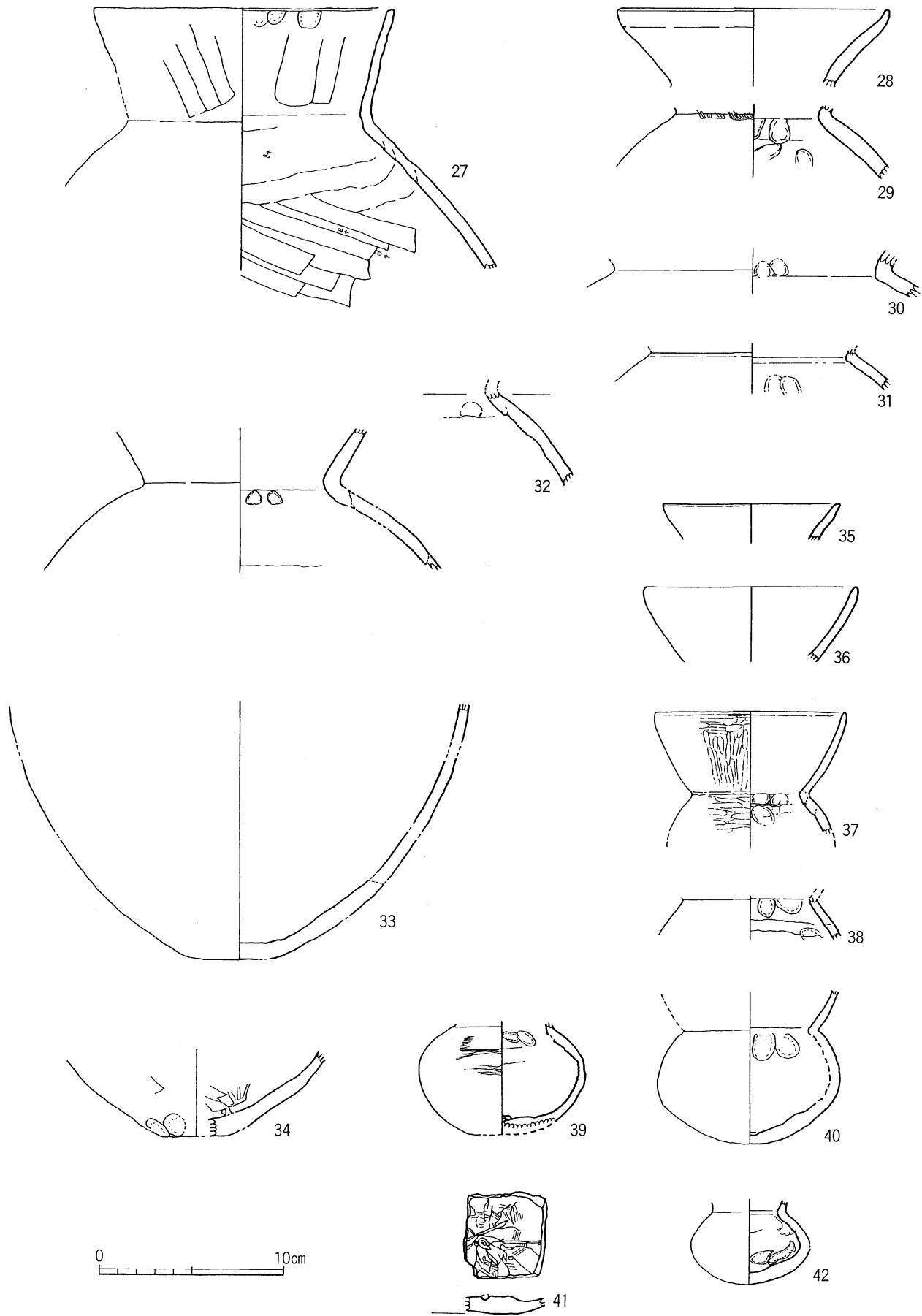
弥生時代終末から古墳時代前期にかけての遺物として18・19の複合口縁片がある。壺か。19は20と近似の胎土である。20は外反するが壺底部か。内面はていねいなナデで、19と同一個体の場合は器台とも考えられる。弥生時代の遺物には、これら土器の他、63の磨製石鏃1点がある。

古墳時代の遺物は、甕(21~26)、壺(27~42)、高坏(43~54)があるが、住居跡で出土する土器の一般的な組成と比べ、ここでは小型丸底壺(35~41)が多いことが注目される。

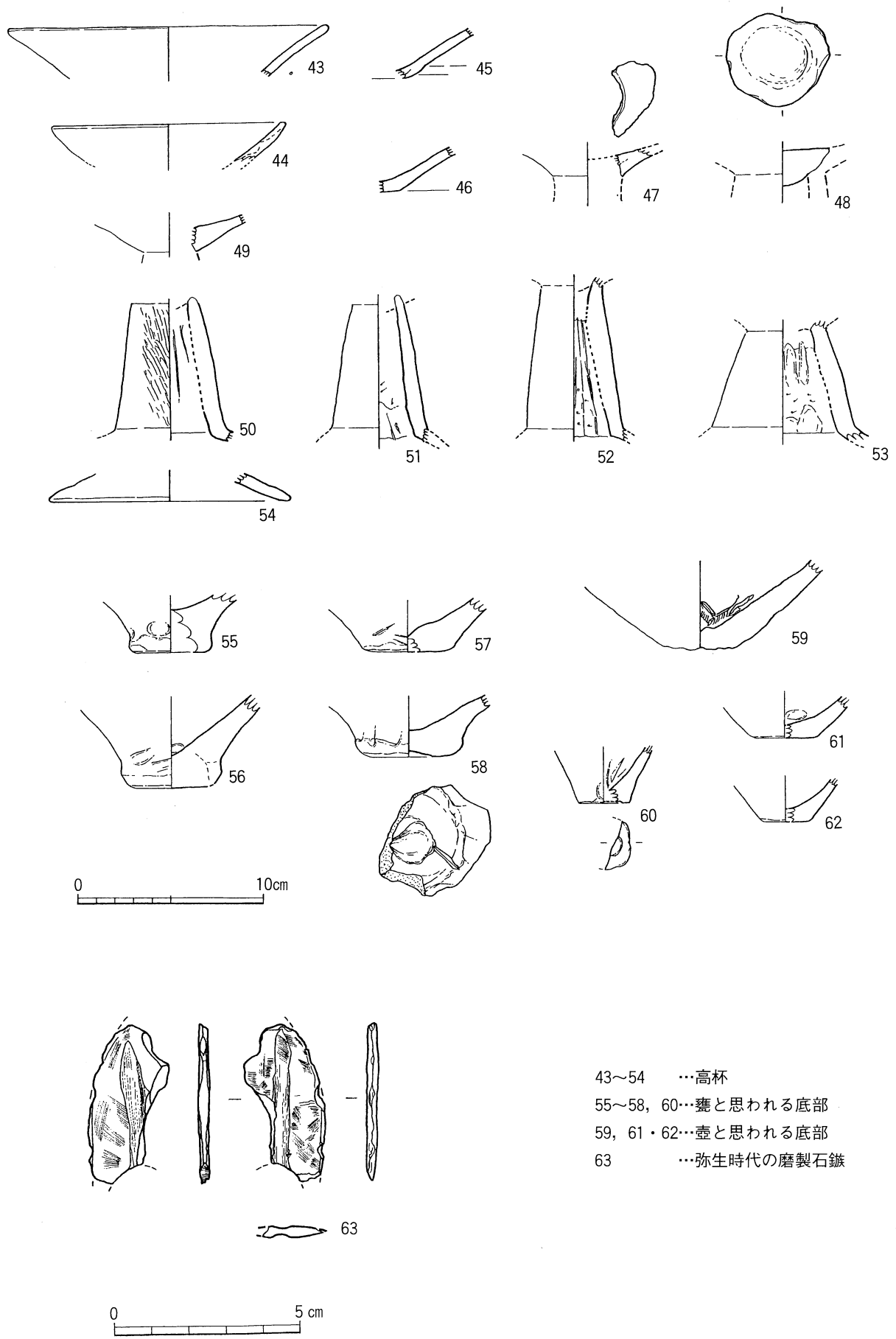
甕は、口縁部が上方にのびる形で、23~25はタタキ調整である。壺は、小型丸底壺以外については、



第9図 井手口遺跡 自然流路A・B出土遺物実測図 (1)

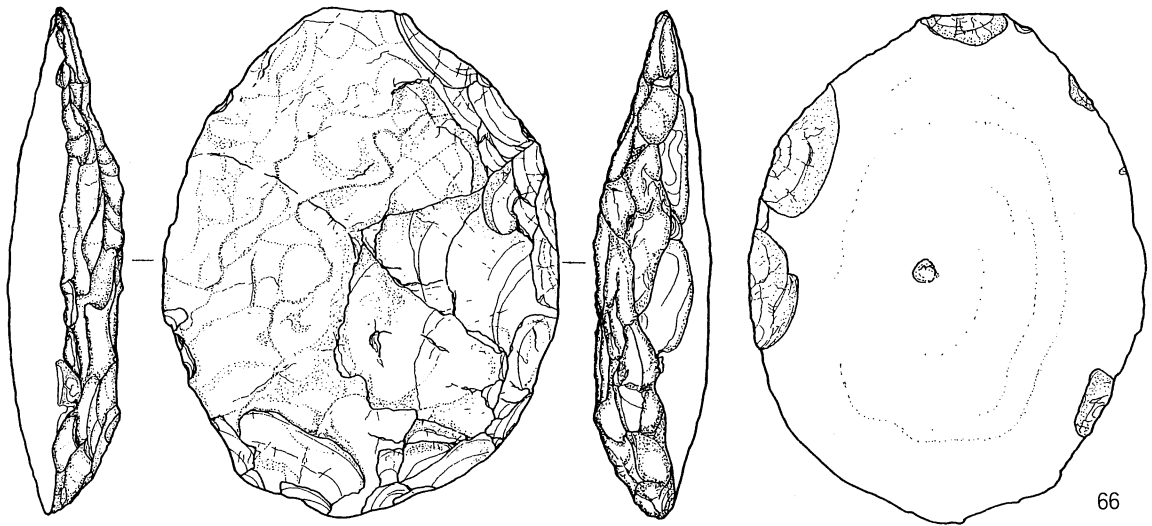
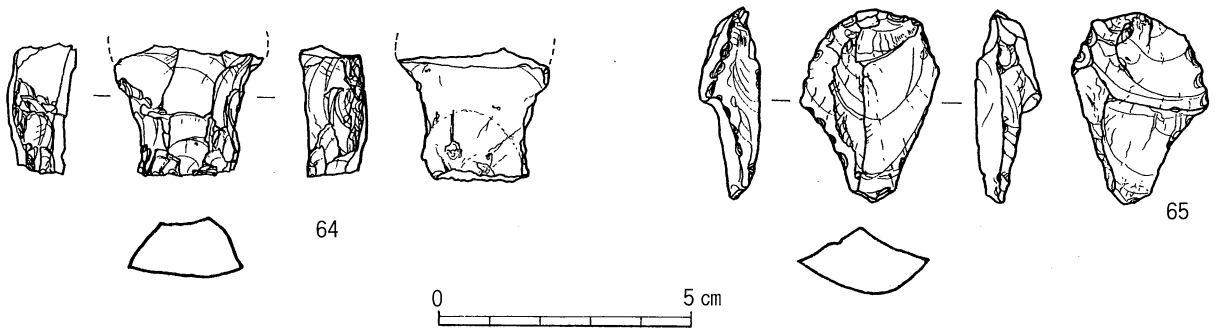


第10図 井手口遺跡 自然流路A・B出土遺物実測図 (2)

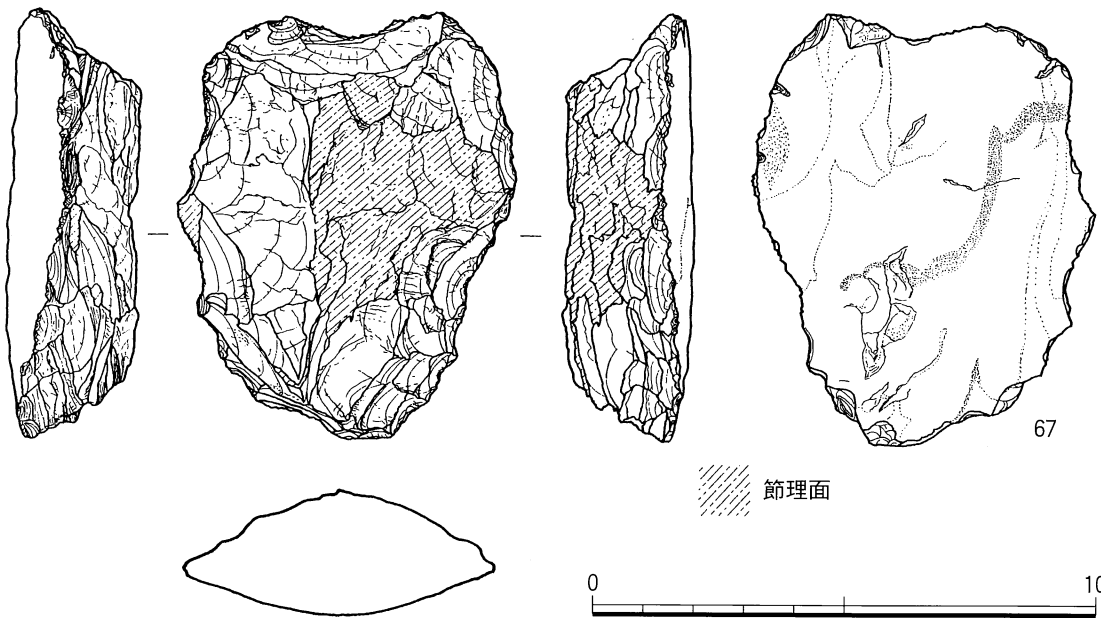


43~54 …高杯
 55~58, 60…甕と思われる底部
 59, 61・62…壺と思われる底部
 63 …弥生時代の磨製石鏃

第11図 井手口遺跡 自然流路A・B出土遺物実測図 (3)



64・66…自然流路A・B内出土
65・67…包含層出土



第12図 井手口遺跡 包含層および自然流路出土石器実測図

33のように、外方に直行気味にのびる口縁と、上半に最大径がくる倒卵形の胴部をもつ器形になると思われる。ただし、28の口縁部は、口縁端部がゆるやかに屈曲して上方にのびる稀に見る形である。28・29は同一個体と考えられる。高坏は、脚部以外は小破片の状態のため、全体の器形が難しい。脚部は中位がやや膨らむ、いわゆるエンタシス状を呈し、古墳中期の器形の特徴をもつ。製作技法は、脚部と坏部の接合面に48のような扁平な半球状の粘土を充填する方法を用いている。44は、小さな径や坏部が浅くなる傾き具合から、高坏の坏部とするのに若干疑問があるが、内外面ともミガキ調整で、裾部とするには口縁部が華奢であるため、ここでは坏部として掲載している。

弥生時代または古墳時代の時代分別ができないものとして、底部（55～62）がある。55・56は甕の底部でくびれ部を持つ。57・58は甕または壺の底部である。58は底面の中央が凹む。59は壺の底部である。60～62は小型の壺とみられるが、60については甕の可能性もあり、底面中央が58と同様凹む。

4 自然流路Cと出土遺物（第4・6・8図、図版5）

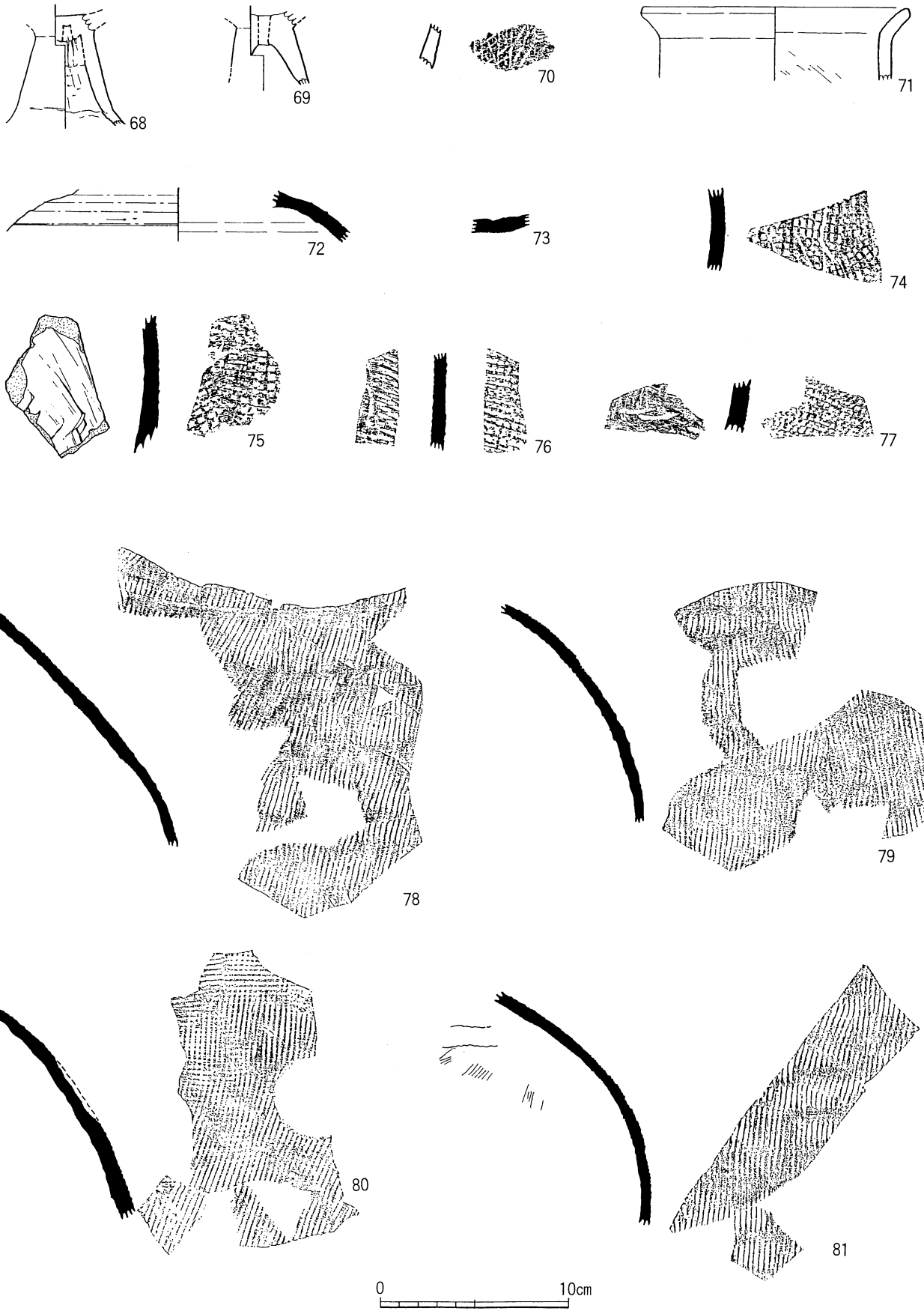
調査区中央にトレンチを設定した際に、トレンチとはほぼ重なるような形で西から東に流れる幅約1.4mの溝状の遺構が確認され、自然流路Cとした。西端側に向かって幅が狭くなり、自然流路Aと繋がっている。深さは中央付近で約40cmを測るが、西端とやや大型の流路に変化する東端部との間には1m以上の落差がある。埋土には木片や植物細片を多く含む部分も見られた。

遺物は、中央付近底面から古墳時代とみられる壺底部が1点（第8図1）のみ出土している。

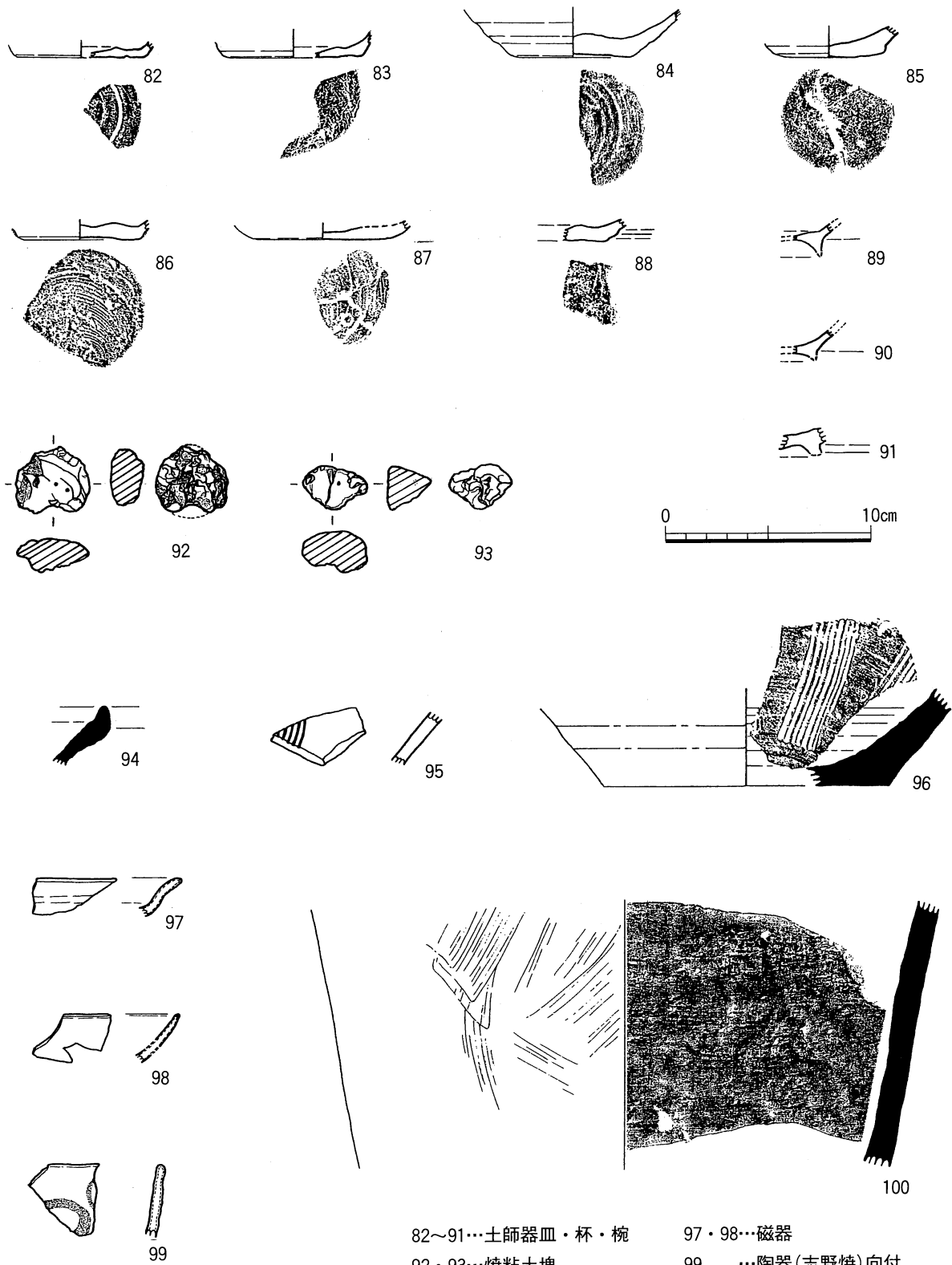
第3節 遺物包含層と出土遺物

本遺跡の遺物包含層はⅣ層で、古墳時代から中世までの遺物が出土している。この他、Ⅴ層上層でも古墳時代の須恵器片などが出土しているが、これらは、Ⅳ層最下層のものと接合しているため（後述）、Ⅴ層の粘土層の上層が軟質であった時期に上部から入り込んだものと考えている。Ⅰ～Ⅲ層では、近世～近代のものを主体に遺物が出土している。重機による剥ぎ取り時に出土したものや、トレンチの排土中から出土した遺物については層位が不明である。これら包含層の遺物は、概して摩耗が激しく、図化しえたもののみ第12～15図に掲載した。

包含層出土遺物でもっとも古いものは、65の旧石器時代の二次加工のある剥片（今峠型ナイフか）1点で、次いで67の縄文時代の頁岩製スクレーパー1点である。弥生時代の遺物は無く、古墳時代の遺物は、68・69の高坏脚部、70の叩き調整の甕片の3点が出土している。72～81は、須恵器であるが、全体の器形が不明なため、古墳時代か古代かを判断しにくい。78～81の甕胴部は、自然流路C東部周辺のⅣ層最下層およびⅤ層上層出土の破片が接合したものである。叩き目の形状が共通するため、これら4点は同一個体の可能性が高い。71は摩耗が激しいため判断しにくい。71は古代の土師器の小型甕と思われる。82～91は古代～中世の土師器坏底部で、Ⅳ層を中心に出土している。85はヘラ切り離し。89～91は高台付きの坏であるが、全体に摩耗が激しく、高台形状は不確定である。92・93は焼粘土塊。94は中世須恵器で東播系の鉢口縁部である。95は在地系の須恵質土器の播鉢、96は備前焼の播鉢である。99は志野焼の向付口縁で、B区西半部より出土。97・98は輸入青磁である。これらはA区東半部北端部のⅣ層中から出土。100は暗茶褐色の鉄釉陶器で、叩き成形ののち表面を刷毛様の工具でナデている。内面には格子状の当て具の痕跡が残る。産地は不明である。107の銭貨は中世（15世紀）の明銭「洪武通宝」である。101の鉄製鋤先および102の銀製簪は、近世末～近代のものか。103～106の棒状鉄器および108の火縄銃弾丸は時期不明。

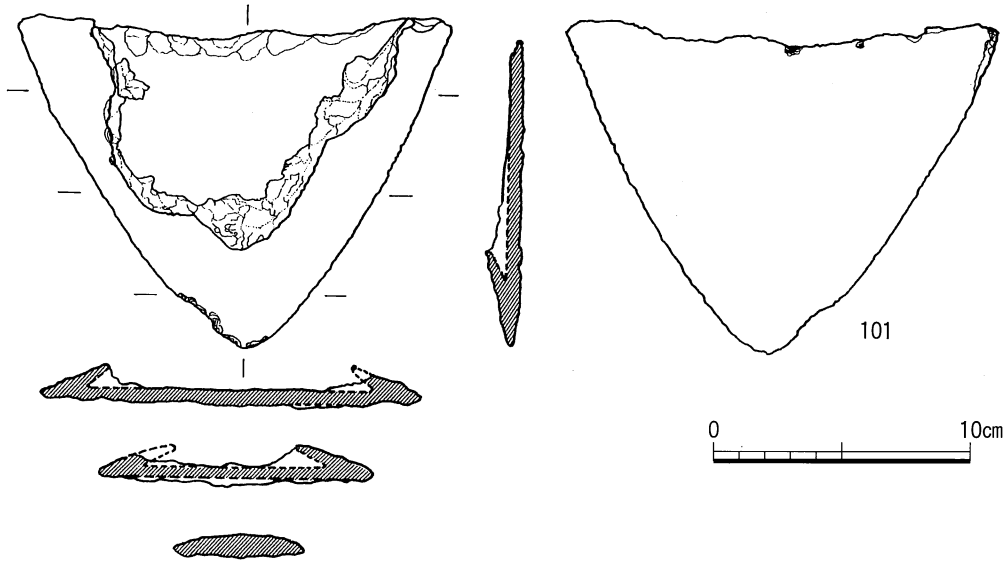


第13图 井手口遺跡 包含層出土遺物実測图 (1)

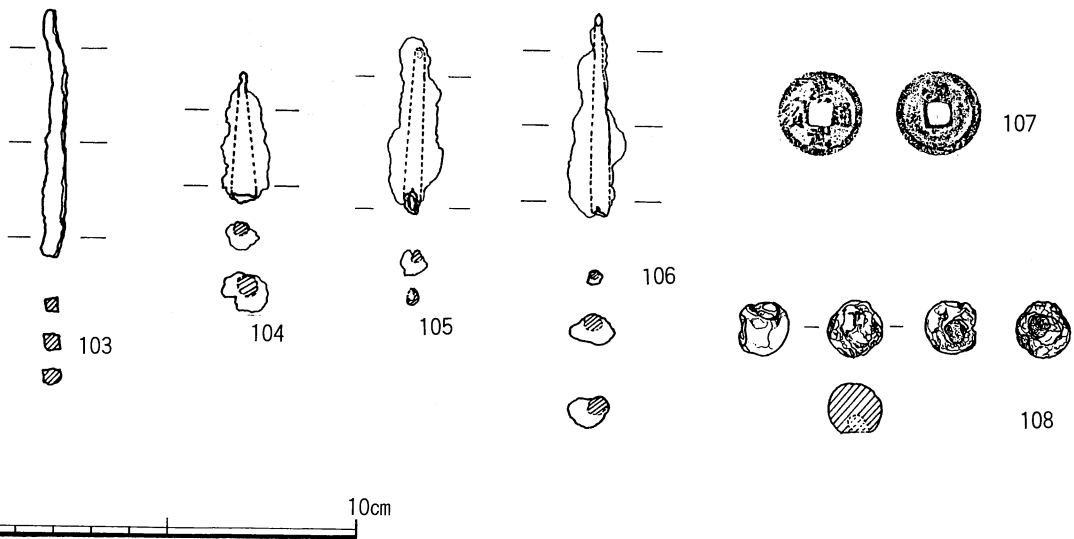
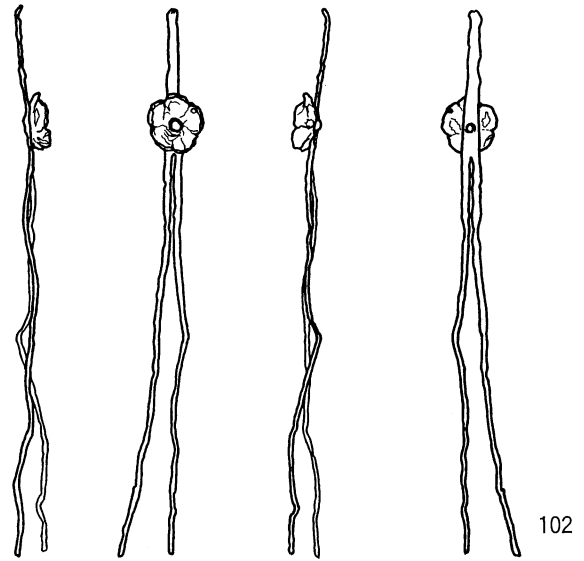


- | | |
|----------------|---------------|
| 82~91…土師器皿・杯・椀 | 97・98…磁器 |
| 92・93…焼粘土塊 | 99 …陶器(志野焼)向付 |
| 94 …須恵器 乙ね鉢 | 100 …陶器 甕 |
| 95 …須恵質土器 播鉢 | |
| 96 …陶器 播鉢 | |

第14図 井手口遺跡 包含層出土遺物実測図 (2)



- 101 …鉄製鋤先
- 102 …銀製簪
- 103~106…不明鉄器
- 107 …銭貨 (洪武通宝)
- 109 …弾丸



第15図 井手口遺跡 包含層出土遺物実測図 (3)

第1表 井手口遺跡出土遺物観察表 (1)

※法量の () 内数値は復元推定値

挿図 番号	遺物 番号	出土位置	種 別	器種	法量 (cm)			器 面 調 整		色 調		胎 土	特記事項
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
8	1	自然流路 C	土器	壺か 底部	-	(2.7)	-	風化著しく調整 不明	風化著しく調整 不明	浅黄橙 7.5YR (8/3)	灰 7.5Y (6/1)	2mm以下の灰白色粒を含む 2.5mm以下の褐色及び灰色の礫を多 く含む	
9	2	自然流路 A・B	土器	甕 口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙 7.5YR (8/3)	浅黄橙 10YR (8/3)	4mm以下の茶・灰・黒・褐色礫を含む 2.5mm以下の白色・1mm以下の黒色光 沢粒を含む	
9	3	自然流路 A・B	土器	甕 口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙 2.5YR (7/6)	橙 2.5YR (7/6)	3mm以下の灰・黒色小礫を多く含む 2mm以下の白色半透明の粒を少量含 む	
9	4	自然流路 A・B	土器	甕 口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	明褐灰 7.5YR (7/1)	にぶい褐 7.5YR (6/3)	2.5mm以下の灰色小礫を含む 2mm以下の灰白色粗砂を含む	
9	5	自然流路 A・B	土器	甕 口縁部	-	-	-	ナデ風化著しい	ナデ風化著しい	にぶい橙 7.5YR (7/4)	灰 5YR (5/1)	1mm~2mmの灰色・茶色の粗砂を含む	
9	6	自然流路 A・B	土器	甕 口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 5YR (7/4)	にぶい橙 7.5YR (7/3)	3mm以下の黒褐色礫・2mm以下の褐色 粗砂を含む 1.5mm以下の透明光沢粒を少量含む	
9	7	自然流路 A・B	土器	甕 胴部	-	-	-	ナデ 貼付刻み目突帯 風化著しい	ナデ風化著しい	にぶい褐 7.5YR (6/4)	にぶい褐 7.5YR (6/4)	1mm~2mmの褐・灰色粗砂を含む	
9	8	自然流路 A・B	土器	甕 胴部	-	-	-	横ナデ 貼付刻み目突帯 風化著しい	ナデ風化著しい	灰黄橙 10YR (6/2)	灰黄橙 10YR (6/2)	1mm以下の灰褐色・黒色粗砂を含む	
9	9	自然流路 A・B	土器	甕 胴部	-	-	-	横ナデ貼付刻み 目突帯 風化著しい	ナデ 風化著しい	橙 7.5YR (6/6)	褐灰 10YR (6/1)	7mm以下の白色礫・3mm以下の灰色礫 を含む 1mm以下の透明・黒色光沢粗砂を含 む	
9	10	自然流路 A・B	土器	甕 胴部	-	-	-	横ナデ 貼付刻み目突帯 風化気味	ナデ	浅黄橙 7.5YR (8/3)	灰白 2.5YR (7/1)	5mm以下の黒褐色・灰色礫を含む 3mm以下の茶褐色・黒色礫を含む	
9	11	自然流路 A・B	土器	甕 底部	-	3.0	-	ナデ風化著しい	ナデ風化著しい	浅黄橙 7.5YR (8/3)	にぶい赤褐 2.5YR (5/4)	3mm以下の礫を含む 1mm以下の透明・黒色光沢粒を含む	
9	12	自然流路 A・B	土器	壺 胴部	-	-	-	ナデ 貼付刻み目突帯	横ナデ	橙 2.5YR (6/6)	にぶい橙 7.5YR (6/4)	2mm以下の灰・褐色粗砂を含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	
9	13	自然流路 A・B	土器	壺 口縁部	(15.0)	-	-	口唇部横ナデ 指押さえ ハケ目	ナデ 指頭圧痕	橙 2.5YR (6/6)	灰白 5YR (8/2)	2.5mm以下の淡橙・灰の礫を含む 3mm以下の黒色礫を含む	
9	14	自然流路 A・B	土器	壺 口縁部	(23.0)	-	-	ナデ風化著しい	ナデ風化著しい	橙 2.5YR (7/6)	黄灰 2.5YR (6/1)	3mm以下の灰・茶・黒色礫を含む 2mm以下の黒色・透明光沢粒をまば らに含む	
9	15	自然流路 A・B	土器	甕 底部	-	(7.5)	-	ナデ 風化著しい	ナデ風化著しい	暗灰 N (3/0)	黄灰 2.5Y (6/1)	2mm以下の灰色粗砂・1~2mmの黒色 粗砂を含む 1mm以下の透明光沢細粒を少量含む	
9	16	自然流路 A・B	土器	甕 底部	-	-	-	ナデ風化著しい	風化著しく調整 不明	浅黄橙 7.5YR (8/3)	にぶい黄橙 10YR (7/2)	6mm以下の白色光沢礫1個 2mm以下の黒色粗砂を多く含む	
9	17	自然流路 A・B	土師器	高坏 裾部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙 10YR (8/3)	灰5Y (6/1)	2mm以下の褐色粗砂を含む 1mm以下の灰色粗砂を含む	
9	18	自然流路 A・B	土師器	高坏 裾部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰黄 2.5Y (6/2)	黄灰 2.5Y (6/1)	1mm以下の灰色・黒色粗砂を含む 1mm以下の半透明光沢粒を含む	
9	19	自然流路 A・B	土器	壺 口縁部	屈曲部 径 (20.0)	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR (7/2)	灰白 10YR (7/2)	2.5mm以下のオリーブ黒色礫を含む 2mm以下の灰白色粗砂を多く含む	
9	20	自然流路 A・B	土器	蓋	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR (7/2)	灰白 10YR (8/2)	2.5mm以下のオリーブ黒色粗砂・1mm 以下の黒色光沢粒・2mm以下の灰白 色粗砂を多く含む	
9	21	自然流路 A・B	土師器	甕 口縁部	(16.6)	-	-	ナデ風化著しい	ナデ風化著しい	にぶい黄橙 7.5YR (7/4)	にぶい橙 10YR (7/3)	2mm以下の茶褐色・灰色・黒色粗砂を 含む 1mm以下の黒色・透明光沢粒をまば らに含む	
9	22	自然流路 A・B	土師器	甕 口縁部	(19.0)	-	-	ナデ 部分的にスス付 着	横ナデ風化著し い	浅黄橙 7.5YR (8/4)	黄橙 7.5YR (8/6)	5mm以下の赤褐色・灰色・褐灰色礫を 含む 2mm以下の黒色・透明光沢粒をまば らに含む	

第2表 井手口遺跡出土遺物観察表 (2)

※法量の () 内数値は復元推定値

挿図 番号	遺物 番号	出土位置	種 別	器 種	法量 (cm)			器 面 調 整		色 調		胎 土	特記事項
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
9	23	自然流路 A・B	土師器	甕 口縁部	(18.4)	—	—	口縁部横ナデ 胴部タタキ	ハケ後ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙 7.5YR (7/3)	浅黄橙 7.5YR (8/4)	4mm以下の灰色礫を含む 2mm以下の黒色・透明光沢粒をまばらに含む	
9	24	自然流路 A・B	土師器	甕 口縁部	—	—	—	タタキ	ナデ	にぶい橙 5YR (6/4)	橙 2.5YR (7/6)	4mm以下の茶・灰・褐色の小礫を含む 2mm以下の黒色・透明光沢粒をまばらに含む	
9	25	自然流路 A・B	土師器	甕 頸部	—	—	—	タタキ	ナデ	浅黄 7.5YR (8/4)	橙 5YR (7/6)	3mm以下の灰色礫を含む 1.5mm以下の黒色・透明光沢粒をまばらに含む	
9	26	自然流路 A・B	土師器	甕 頸部	—	—	—	ナデ 全面にスス附着	ハケ調整	にぶい黄橙 10YR (7/2)	灰白 10YR (8/1)	3mm以下の褐灰色・明褐灰色礫を含む 2.5mm以下の赤褐色及び白色光沢粒を含む	
10	27	自然流路 A・B	土師器	壺 口縁部～ 肩部	11.6	—	—	ナデケズリ スス附着 風化著しい	ヘラ状工具によるケズリ 指頭圧痕	橙 2.5YR (7/6)	浅黄橙 7.5YR (8/4)	2mm以下の茶褐色・黒褐色・白色・透明光沢粗砂を含む 1mm以下の赤色・黒色光沢粗砂を含む	
10	28	自然流路 A・B	土器	壺 口縁部	14.6	—	—	横ナデ 部分的にスス附着	横ナデ	灰黄 2.5Y (7/2)	灰黄 2.5Y (7/2)	2mm以下の黒褐色・黒色・透明光沢粒を含む 1mm以下の茶色及び透明光沢粒をまばらに含む	
10	29	自然流路 A・B	土師器	壺 頸部	頸部径 (8.5)	—	—	ナデ ハケ目	ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR (7/3)	灰黄 2.5YR (6/2)	1.5mm以下の透明光沢粗砂を含む 1mm以下の黒褐色粗砂を含む	
10	30	自然流路 A・B	土師器	壺 頸部	頸部径 (15.2)	—	—	ナデ	ナデ ヘラ状工具痕	浅黄橙 7.5YR (8/3)	浅黄橙 7.5YR (8/4)	1mm以下の灰色粗砂を含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	
10	31	自然流路 A・B	土師器	壺 頸部	頸部径 (11.1)	—	—	ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	にぶい橙 5YR (7/4)	にぶい橙 5YR (6/4)	2mm以下の灰色・茶色粗砂を含む 1mm以下の黒色・透明光沢粒を含む	
10	32	自然流路 A・B	土師器	甕 頸部	—	—	—	ナデ 部分的にスス附着	ナデ 粘土のつなぎ目	灰白 10YR (8/2)	浅黄 2.5Y (7/3)	3mm以下の黒褐色礫、2mm以下の茶・白色粗砂を含む 1mm以下の茶色及び黒色・透明光沢粒をまばらに含む	
10	33	自然流路 A・B	土師器	壺 頸部～肩部	頸部径 (10.7)	4.0	—	ナデ 風化著しい	ナデ 指頭圧痕	浅黄橙 7.5YR (8/8)	にぶい橙 7.5YR (7/3)	2mm以下の灰・褐色粗砂を含む	
10	34	自然流路 A・B	土師器	壺 底部	—	(3.7)	—	ナデ	ナデ ヘラ状工具痕	にぶい黄橙 10YR (7/3)	にぶい黄橙 10YR (7/2)	1mm以下の灰色粗砂を含む 0.5mm以下の透明光沢粒を含む	
10	35	自然流路 A・B	土師器	壺 口縁部	(9.6)	—	—	ナデ 風化気味	横ナデ	にぶい黄橙 7.5YR (6/5)	橙 5YR (7/6)	1mm～1.5mmの赤色粗砂を含む	
10	36	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺 口縁部	(11.5)	—	—	ナデ 部分的にスス附着	横ナデ	にぶい黄橙 10YR (7/2)	にぶい黄橙 10YR (7/2)	2.5mm以下の灰色・半透明の粗砂を含む	
10	37	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺 口縁部	(10.2)	—	—	ミガキ	丁寧なナデ	にぶい黄橙 10YR (6/3)	にぶい黄橙 10YR (5/3)	3mm程度の褐色礫を含む 1mm以下の透明光沢粒を含む	同一個体
10	38	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺 肩部	頸部径 (6.4)	—	—	ミガキ	ナデ 粘土のつぎ目 指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR (6/3)	にぶい黄橙 10YR (6/3)	1mm以下の灰褐色粗砂を含む 1mm以下の光沢細粒を含む	図上復元
10	38	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺 肩部	頸部径 (7.3)	—	—	ナデ	ナデ 粘土のつぎ目 指頭圧痕	にぶい黄橙 7.5YR (7/6)	にぶい黄橙 7.5YR (7/6)	1mm以下の灰色粗砂を含む 0.8mm以下の光沢粒を含む	
10	39	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺	頸部径 5.4	胴部 最大径 9.1	—	ナデ 工具によるナデ	縦方向のナデ 指頭圧痕 工具によるナデ	にぶい黄橙 7.5YR (7/4)	にぶい黄橙 5YR (6/6)	2mm以下の黒色・透明光沢粒を含む 1mm以下の高師小僧をまばらに含む	
10	40	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺	頸部径 7.4	胴部 最大径 9.9	—	ナデ 工具によるナデ	縦方向のナデ 指頭圧痕 工具によるナデ	にぶい黄橙 5YR (7/4)	にぶい黄橙 7.5YR (7/4)	4mm以下の高師小僧をまばらに含む 1mm以下の灰色・黒色・透明光沢粒を含む	
10	41	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺	—	—	—	ナデ 風化気味	粗雑なハケ状工具痕	にぶい黄橙 10YR (7/3)	にぶい黄橙 10YR (7/2)	2mm以下の灰色粗砂を含む 1mm以下の黒色・透明光沢粒を含む	
10	42	自然流路 A・B	土師器	小型丸底壺	頸部径 3.9	胴部 最大径 6.5	—	ナデ 工具によるナデ	縦方向のナデ 指頭圧痕 工具によるナデ	にぶい黄橙 10YR (7/3)	浅黄橙 7.5YR (8/4)	3mm以下の灰色礫を含む 2mm以下の透明光沢粒を含む	
11	43	自然流路 A・B	土師器	高杯 杯部	(20.0)	—	—	ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	橙 5YR (7/6)	にぶい橙 5YR (7/4)	1mm以下の半透明光沢粒を含む 2mm以下の黒色光沢粒を含む	

第3表 井手口遺跡出土遺物観察表 (3)

※法量の () 内数値は復元推定値

挿図 番号	遺物 番号	出土位置	種 別	器種	法量 (cm)			器 面 調 整		色 調		胎 土	特記事項
					口径	底径	器高	外 面	内 面	外 面	内 面		
11	44	自然流路 A・B	土師器	高坏 坏部	(12.6)	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙 7.5YR (8/3)	浅黄橙 7.5YR (8/3)	1.5mm以下の黒色・透明光沢粒を含む 1mm以下の赤色粗砂を含む	
11	45	自然流路 A・B	土師器	高坏 坏部	-	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	浅黄橙 7.5YR (8/4)	浅黄橙 10YR (8/3)	1mm以下の黒色・半透明光沢粗砂を含む 1mm以下の灰色・赤色粗砂を含む	
11	46	自然流路 A・B	土師器	高坏 坏部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 5YR (7/4)	にぶい橙 7.5YR (7/4)	3mm以下の半透明礫を含む 2mm以下の灰・黒・褐色粗砂及び黒色 光沢粒を含む	
11	47	自然流路 A・B	土師器	高坏 坏部	-	-	-	ナデ	ナデ	浅黄橙 7.5YR (8/3)	にぶい黄橙 10YR (7/2)	1mm以下の灰褐色粗砂を含む 1mm以下の光沢細粒を含む	
11	48	自然流路 A・B	土師器	高坏 充填用円盤	-	-	-	ナデ	剝離面	灰 5Y (5/1)	橙 7.5YR (7/6)	1mm以下の棒状光沢粗砂を少量含む	
11	49	自然流路 A・B	土師器	高坏 坏部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙 5YR (7/4)	褐灰 7.5YR (6/1)	2mm以下の黒色・半透明光沢粗砂を 含む 1.5mm以下の灰色粗砂を含む	
11	50	自然流路 A・B	土師器	高坏 脚部	-	-	-	ヘラミガキ 風化気味	ナデ 風化気味	にぶい橙 7.5YR (7/4)	にぶい橙 7.5YR (6/4)	5mm以下の褐色・灰色礫を含む 2mm以下の黒色半透明光沢粒を含む	
11	51	自然流路 A・B	土師器	高坏 脚部	-	-	-	ナデ 風化気味	ナデ	灰黄 2.5Y (7/1)	灰 黄 2.5Y (7/1)	2mm以下の黒褐色粗砂を少量含む 1mm以下の黒色半透明光沢粒を含む	
11	52	自然流路 A・B	土師器	高坏 脚部	-	-	-	ナデ 風化気味	ナデ	黄灰 2.5Y (7/2)	灰黄 2.5Y (7/1)	1mm以下の黒色粗砂・高師小僧を含 む 1mm以下の光沢細粒を含む	
11	53	自然流路 A・B	土師器	高坏 脚部	-	-	-	ナデ 風化気味	ナデ 指頭圧痕 風化気味	浅黄橙 10YR (8/3)	浅黄橙 10YR (8/3)	5mm以下の褐色・灰色礫を含む 1mm以下の黒色半透明光沢粒を含む	
11	54	自然流路 A・B	土師器	高坏 裾部	裾部 (12.7)	-	-	ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	橙 5YR (7/6)	にぶい橙 7.5YR (7/4)	1mm以下の赤色粗砂を含む	
11	55	自然流路 A・B	土器	甕? 底部	-	(4.0)	-	ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	にぶい黄橙 10YR (7/3)	にぶい橙 7.5YR (7/4)	0.5mmの茶色の細粒を含む 3mm程度の灰色礫を含む	
11	56	自然流路 A・B	土器	甕? 底部	-	(4.0)	-	斜方向のナデ 風化著しい	ナデ 指押え 風化著しい	橙 2.5YR (7/6)	灰黄橙 10YR (6/2)	2.5mm以下の褐・灰色粗砂を多く含 む 1mm以下の黒色光沢粒を少量含む	
11	57	自然流路 A・B	土師器	甕? 底部	-	(3.9)	-	ナデ	ナデ	灰褐 5YR (6/2)	黄灰 2.5Y (6/1)	2mm以下の褐灰色・灰色粗砂を含む	
11	58	自然流路 A・B	土師器	甕? 底部	-	(5.0)	-	ナデ 風化著しい	ナデ	にぶい黄橙 10YR (7/3)	灰黄 2.5Y (7/2)	2mm以下の灰色粗砂を含む 1.5mm以下の棒状黒色光沢粒を含む	底部に工具 による1mm の沈線あり
11	59	自然流路 A・B	土師器	壺? 底部	-	3.7	-	丁寧なナデ 部分的にスス付 着	ナデ ヘラ状工具痕	灰褐 7.5YR (6/2)	黄灰 2.5Y (6/1)	1.5mm以下の黒色光沢粒・1mm以下の 半透明光沢粒を含む 1mm以下の灰褐色粗砂を含む	
11	60	自然流路 A・B	土器	甕? 底部	-	(3.2)	-	ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	灰白 2.5Y (8/1)	灰白 2.5Y (7/1)	5mm以下の灰・明褐色の礫を含む	
11	61	自然流路 A・B	土師器	壺? 底部	-	-	-	ナデ 黒変部あり	ナデ	にぶい黄橙 10YR (7/2)	黄灰 2.5Y (5/2)	3mm以下の灰色礫を含む 1.5mm以下の半透明光沢粒を含む	
11	62	自然流路 A・B	土師器	壺? 底部	-	(2.8)	-	ナデ 黒変部あり	ナデ	にぶい黄橙 10YR (7/2)	黄灰 2.5Y (7/2)	0.5mm以下の黒・茶・褐色の細粒を含 む	
11	63	自然流路 A・B	石器	磨製石鏃	現存 最大長 5.6	現存 最大幅 2.7	現存 最大厚 0.4						弥生時代
12	64	自然流路 A・B	石器	剥片尖頭器	現存 最大長 2.7	現存 最大幅 3.1	現存 最大厚 1.2						旧石器 流紋岩製
12	65	包含層	石器	二次加工の ある剥片	最大長 3.7	最大幅 2.4	最大厚 1.1						旧石器 流紋岩製

第4表 井手口遺跡出土遺物観察表 (4)

※法量の () 内数値は復元推定値

挿図 番号	遺物 番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		色調		胎土	特記事項
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
12	66	自然流路 A・B	石器	スクレイパー	最大長 10.1	最大幅 7.9	最大厚 2.3						砂岩製 表面やや摩 耗
12	67	包含層	石器	スクレイパー	最大長 8.4	最大幅 6.8	最大厚 2.6						頁岩製
13	68	B区西 IV層	土師器	高坏 脚部	—	—	—	ナデか風化著し い脚部から裾部 に板状工具端部 痕あり	ナデか風化著し い板状工具によ るタテナデ後ヨ コケズリ	浅黄橙 7.5YR (8/6)	浅黄橙 7.5YR (8/4)	1mm以下の黒色光沢粒を含む 2mm以下の灰色及び透明光沢粒を含 む	
13	69	B区西 IV層	土師器	高坏 脚部	—	—	—	ナデか 風化著しい	風化著しく調整 不明	灰黄 2.5Y (7/2)	黄 2.5Y (7/4)	1mm以下の灰色粗砂及び黒色・透明 の光沢粒を含む 2mm以下の茶褐色粗砂を含む	穿孔あり (焼成前)
13	70	A区東 IV層	土器	甕か 胴部	—	—	—	タタキ 風化著しい	ナデか 風化著しい	にぶい黄橙 10YR (7/2)	灰白 10YR (7/1)	2mm以下の茶褐色及び黒褐色の小礫 を含む 1mm以下の黒色及び透明光沢粒をま ばらに含む	
13	71	A区西 IV層	土器	甕 口縁部	(14.1)	—	—	ナデか 風化著しい	ナデか 風化著しい	にぶい橙 7.5YR (7/4)	黒褐 7.5YR (3/1)	5mm程度の薄茶色の礫を少量含む 2.5mm以下の灰色の小礫を含む	
13	72	A区西 IV層	須恵器	壺 肩部	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	灰 N (6/0)	灰 N (6/0)	精良	
13	73	B区西 IV層	須恵器	皿か 底部	—	—	—	ナデ 底面ヘラ切り	ナデ	灰 5Y (6/1)	灰 5Y (6/1)	精良	
13	74	A区西 IV層	須恵器	甕 胴部	—	—	—	格子目タタキ	ナデ	灰 5Y (6/1)	灰 5Y (6/1)	精良	
13	75	A区西 IV層	須恵器	甕 胴部	—	—	—	格子目タタキ	ヘラ状工具によ るナデ	灰黄 2.5Y (6/2)	灰黄 2.5Y (6/2)	精良	
13	76	B区東 IV層	須恵器	甕 胴部	—	—	—	格子目タタキ	平行タタキ	灰 5Y (5/1)	灰 5Y (5/1)	精良	
13	77	A区東 IV層	須恵器	甕 胴部	—	—	—	格子目タタキ	同心円当具痕	灰 N (6/0)	灰 N (6/0)	精良	
13	78	A区東 IV・V層	須恵器	甕 胴部	—	—	—	平行タタキ	ナデ	灰 N (4/0)	灰白 N (7/0)	精良	外面に横ナ デの線が数 本見られる
13	79	A区東 IV・V層	須恵器	甕 胴部	—	—	—	平行タタキ	ナデ	灰白 2.5Y (7/1)	灰 N (6/0)	精良	
13	80	A区東 IV・V層	須恵器	甕 肩部	—	—	—	平行タタキ	ナデ	灰 N (5/0)	灰白 N (7/0)	精良	
13	81	A区東 IV・V層	須恵器	甕 肩部	—	—	—	平行タタキ	ナデ	灰 N (5/0)	灰 N (5/0)	精良	
14	82	A区西 IV層	土師器	皿 底部	—	(6.4)	—	底面ヘラ切り	ナデか 風化著しい	にぶい橙 5YR (7/4)	明褐灰 7.5YR (7/2)	灰褐色の微細砂粒を少量含む	
14	83	B区東 IV層	土師器	皿 底部	—	(6.9)	—	底面糸切り 風化著しい	ナデか 風化著しい	にぶい黄橙 10YR (7/3)	にぶい黄橙 10YR (7/3)	1.8mm以下の灰褐色粗砂を少量含む	
14	84	A区東 IV層	土師器	椀 底部	—	(6.0)	—	底面糸切り 風化著しい	風化著しく調整 不明	浅黄橙 7.5YR (8/4)	浅黄橙 7.5YR (8/4)	1.5mm以下の黒色粗砂を少量含む	
14	85	A区東 IV層	土師器	椀 底部	—	5.5	—	風化著しく調整 不明	ナデか 風化著しい	にぶい橙 5YR (7/4)	浅黄橙 10YR (8/3)	1mm程度の灰色粗砂を少量含む 高師小僧をまばらに含む	
14	86	B区東 IV層	土師器	皿 底部	—	(5.8)	—	底面糸切り 風化著しい	ナデか 風化著しい	明黄褐 10YR (6/3)	にぶい黄橙 10YR (7/3)	精良	
14	87	不明	土師器	皿 底部	—	(6.5)	—	底面糸切り ナデ	ナデか 風化著しい	淡赤橙 2.5YR (7/4)	にぶい橙 5YR (7/4)	1mm以下の茶色の粒を少量含む	

第5表 井手口遺跡出土遺物観察表 (5)

※法量の () 内数値は復元推定値

挿図番号	遺物番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			器面調整		色調		胎土	特記事項
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
14	88	A区西IV層	土師器	碗底部	-	-	-	風化著しく調整不明	ナデか風化著しい	灰黄 2.5Y (6/2)	にぶい黄橙 10YR (7/4)	1mm以下の灰色及び茶色の粗砂を含む	
14	89	B区東	土師器	高台付坏または碗底部	-	-	-	ナデか風化著しい	ナデか風化著しい	橙 5YR (7/8)	橙 5YR (7/8)	2mm以下の褐灰粗砂及び1mm以下の白色粗砂を含む 0.5mm以下の茶褐色の微細粒を含む	
14	90	A区東IV層	土師器	高台付坏または碗底部	-	-	-	ナデか風化著しい	ナデか風化著しい	黄橙 7.5YR (8/8)	橙 5YR (7/8)	2.5mm以下の褐灰色小礫を含む 1mm以下の褐色粗砂・0.5mm以下の赤色粗砂を含む	
14	91	A区東IV層	土師器	高台付坏または碗底部	-	-	-	ナデか風化著しい	ナデか風化著しい	橙 5YR (7/6)	橙 5YR (7/6)	精良	
14	92	B区東IV層	土製遺物	焼粘土塊	最大幅 3.7	最大厚 1.7	-	-	-	黄灰 2.5Y (7/2)	-	5mm以下の高師小僧を少量含む	
14	93	B区西	土製遺物	焼粘土塊	最大幅 3.3	最大厚 2.1	-	-	-	にぶい黄橙 5YR (7/4)	-	2mm以下の高師小僧を少量含む	
14	94	B区西IV層	須恵器	捏鉢口縁部	-	-	-	横ナデ	横ナデ	灰 7.5Y (6/1)	灰白 7.5Y (8/1)	5mm以下の灰色礫を少量含む 1mm以下の黒色及び透明な光沢粗砂を含む	東播系 13世紀
14	95	A区西IV層	須恵質土器	すり鉢胴部	-	-	-	横ナデ	ナデ	灰白 7.5Y (8/1)	灰白 7.5Y (8/1)	精良	中世
14	96	A区東IV層	陶器	すり鉢(備前焼)底部	-	(14.2)	-	ナデ	横ナデ 2cm幅で8条1単位の櫛描文あり	灰 N (5/0)	灰 N (6/0)	5mm以下の灰色礫を少量含む 2mm以下の茶・白・黒・透明な光沢粗砂を含む	中世
14	97	B区東IV層	磁器(青磁)	皿口縁部	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ 7.5Y (6/2)	灰オリーブ 7.5Y (6/2)	精良	中世 中国製 龍泉窯系
14	98	A区西IV層	磁器(青磁)	碗口縁部	-	-	-	施釉	施釉	灰オリーブ 7.5Y (5/2)	灰オリーブ 7.5Y (5/2)	精良	中世 中国製 龍泉窯系
14	99	B区西IV層上面	陶器	向付(志野焼)口縁部	-	-	-	鉄絵(黒褐色)の上に施釉貫入あり	施釉	灰白 2.5Y (8/2)	灰白 2.5Y (8/2)	精良	角筒形の器形 16世紀後半
14	100	A区西II~III層	陶器	甕胴部	-	-	-	ハケ様工具によるナデナデ	当具痕の上をナデ	暗赤灰 10R (3/1)	赤黒 10R (2/1)	1mm程度の白色粗砂を含む 透明な光沢微細粒を極微量含む	産地不明
15	101	A区西II~III層	鉄器	鉄製鋤先	全長 13.0	最大幅 17.1	重量 (316.5)g						近現代のものか
15	102	A区東II~III層	装身具	銀製かんざし	全長 14.4	-	-						
15	103	不明	鉄器	不明工具(釘か)	現存長 6.4	現存最大幅 0.5	-						
15	104	不明	鉄器	不明工具(釘か)	現存長 3.4	現存最大幅 0.6	-						
15	105	不明	鉄器	不明工具(釘か)	現存長 4.4	現存最大幅 0.4	-						
15	106	不明	鉄器	不明工具(釘か)	現存長 5.2	現存最大幅 0.5	-						
15	107	A区西IV層	金属器	銭貨(洪武通宝)	径 2.2	厚み 0.1	-						中国明銭
15	108	B区西III層	金属器	鉛製弾丸(火縄銃)	径 1.4	厚み 1.3	-						発砲時衝撃による凹み有り

第Ⅲ章 自然科学分析調査

本遺跡においては、調査の進行についての参考資料を得るために、自然科学的な手法による分析を外部に委託している。第Ⅰ章で述べたように、試掘調査の段階では、水田遺構存在の可能性について調べるプラント・オパール分析、遺構の年代を決定する鍵になる火山砕屑物を調べるテフラ分析、流路の時期を調べるための放射性炭素年代測定、流木の樹種鑑定、を行った。

また、調査中においても、より詳しいデータを得るために、Ⅳ層の調査面やトレンチ断面でのプラント・オパールの分布状態を調べる分析を実施した。ここでは、以下、この分析結果について株式会社古環境研究所の報告を掲載する。

井手口遺跡におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

(一部編著者により省略・補足)

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (藤原・杉山, 1984)。

井手口遺跡の発掘調査では、霧島高原スコリア混じりの黒褐色土層 (Ⅳ層) で、棚田状の段差が確認されるとともに (第4図)、擬似畦畔状の遺構の可能性のある箇所 (A区南西端部) も検出されており、水田跡の可能性が考えられていた。ここでは、これらの遺構における稲作跡の検証を主目的としてプラント・オパール分析を行った。

2. 試料

調査地点は、B区周辺のNo10～No16地点およびA区南西端部の遺構精査面 (Ⅳ層掘下面) である (第3・4図参照)。試料は、霧島高原スコリア (Kr-Th, 10～13世紀?) 混じりの黒褐色土層およびその上下層から採取された計48点である。各地点における試料採取箇所を分析結果の柱状図右側に示す。

4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検証が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、スキ属型、タケ亜科 (おもにネザサ節) の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第7表および第16・17図に示した。

5. 稲作跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、宮崎県内では密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。第6表に各地点・各層準におけるイネの検出状況を示す。

第6表 井手口遺跡におけるイネのプラント・オパールの検出状況

記号：◎5,000個/g以上，○3,000個/g以上，△3,000個/g未満，

×未検出，－該当試料なし

層準/地点	No10	No11	No12	No13	No14	No15	No16	A区南西端部遺構精査面
高原スコリア直上層 (桜島文明軽石混層)	△	◎	○	△	△	△	○	－
高原スコリア混層 (黒褐色土層)	○	△	△	△	○	△	○	○
高原スコリア直下層	×	△	×	×	×	△	×	－

(1) A区南西端の遺構精査面(第3図, 第17図右下)

A区南西端の調査区(A3・4, B4グリッド)では、霧島高原スコリア混じりの黒褐色土層の遺構精査面から擬似畦畔状の遺構の可能性のある箇所が検出された(図版3)。同遺構検出面から採取した試料No. 1～9の9点について分析を行った結果、すべての試料からイネが検出された。密度は、ほとんどの試料で3,000個/g以上と高い値である。したがって、同検出面では調査区のほぼ全面で稲作が行われていたものと推定される。

(2) No10～No16地点(第3図, 第16・17図)

No10地点では、桜島文明軽石(Sz-3, 1471年)混じりの灰褐色土層(試料1)、霧島高原スコリア(Kr-Th, 10～13世紀?)混じりの黒褐色土層(試料2, 3)およびその下層(試料4～9)について分析を行った。その結果、試料1～試料3からイネが検出された。このうち、霧島高原スコリア混じりの黒褐色土層(試料2)では密度が3,800個/gと高い値である。また、同層の直上層(試料1)よりも密度が高いことから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、霧島高原スコリア混じりの黒褐色土層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

No11～No16地点についても同様にして検討を行った結果、霧島高原スコリア混じりの黒褐色土層では、分析を行ったすべての試料からイネが検出された。密度は、No14とNo16地点では3,000個/g以上と高い値であり、その他の地点でも2,000個/g程度と比較的高い値である。これらのことから、霧島高原スコリア混じりの黒褐色土層では、調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。

高原スコリア直下層では、No11とNo15地点の2地点でイネが検出された。ただし、いずれも密度が1,000個/g未満と低い値であることから、直上層からの混入と考えられる。高原スコリア直下層より下位では、いずれの試料からもイネは検出されなかった。これらの層準では、シイ属をはじめイスノキ属やクスノキ科などの樹木(照葉樹)起源が多く検出されることから、当時の遺跡周辺はこれらの照葉樹林で覆われるような状況であったものと推定される。

6. まとめ

以上のように、畦畔状遺構や棚田状の段差が認められた霧島高原スコリア(Kr-Th, 10～13世紀?)混じりの黒褐色土層(IV層)からは、イネのプラント・オパールが多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。同層では、調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。

参考文献 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール分析による水田址の探査ー. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

第7表 井手口遺跡におけるプラント・オパール分析結果表

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	No.10地点									No.11地点					No.12地点						No.13地点			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4
イネ	23	38	8							53	22	15	8		45	23					15	23		
ヒエ属型	8																							
ヨシ属	8									7	7				7			7			8			
ススキ属型		15	8		30		23	8		8	30		8		7	8	7		8		15	38	45	7
タケ亜科	62	75	55	38	15	30	15	30	23	84	97	45	30		119	61	30	75	85	15	159	53	30	45

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	0.68	1.11	0.23							1.56	0.66	0.44	0.22		1.31	0.68					0.44	0.66		
ヒエ属型	0.65																							
ヨシ属	0.49									0.47	0.47				0.47			0.47			0.48			
ススキ属型		0.19	0.10		0.38		0.28	0.09		0.09	0.37		0.09		0.09	0.10	0.09		0.10		0.19	0.47	0.56	0.09
タケ亜科	0.30	0.36	0.26	0.18	0.07	0.15	0.07	0.14	0.11	0.40	0.47	0.21	0.15		0.57	0.29	0.14	0.36	0.41	0.07	0.76	0.25	0.14	0.21

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

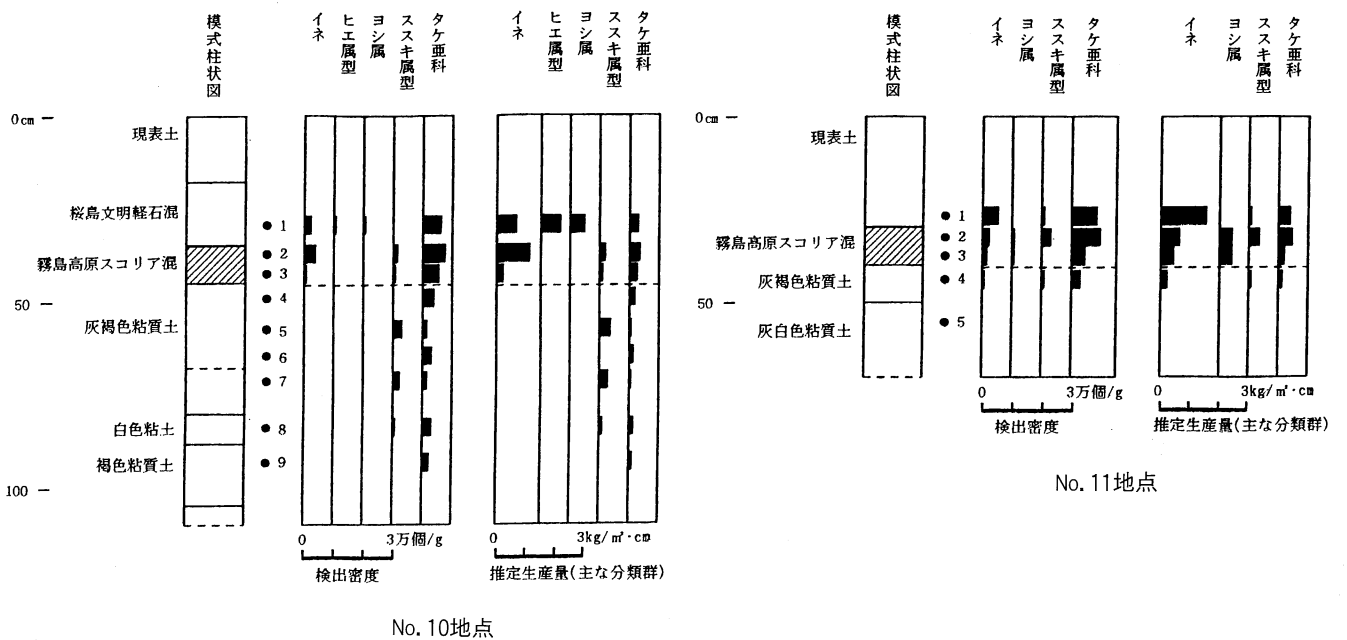
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	No.14地点					No.15地点					No.16地点					A区南西端部遺構精査面								
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ	8	37	23			15	22	15	8		31	30	8			31	30	30	38	30	30	8	8	30
ヒエ属型						7										8								
ヨシ属		7		8		7	7	8								8	8	7				8	8	8
ススキ属型		15	8	8		22	45	8		16	15	52	23		15	23	8	7	15			8	15	15
タケ亜科	147	96	69	45	46	119	97	68	68	32	85	104	75	45	74	77	30	60	68	22	83	85	15	15

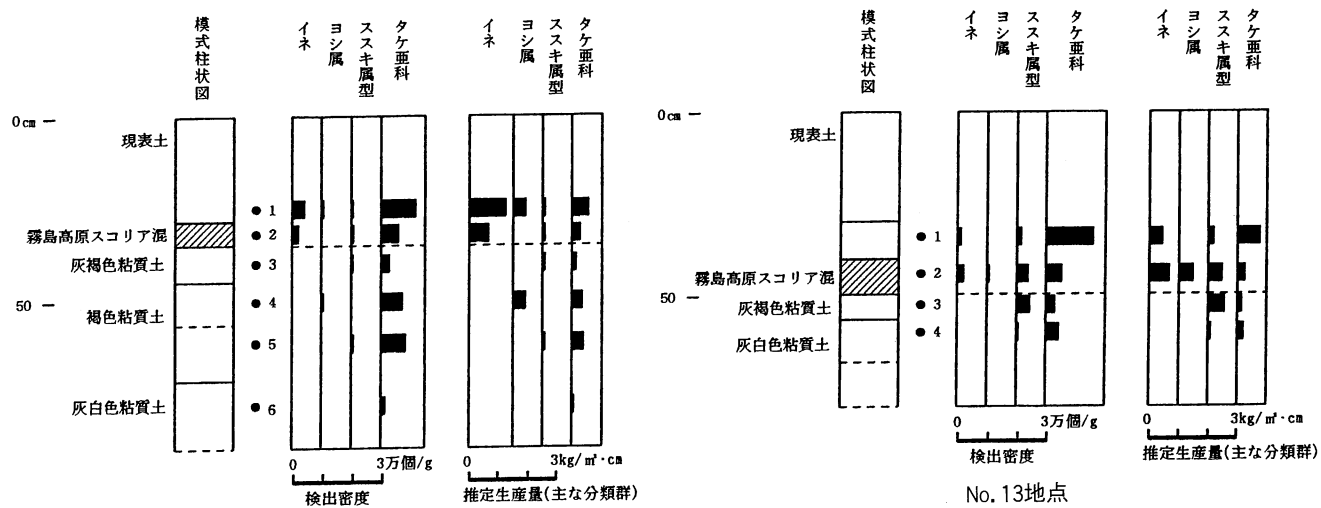
推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	0.23	1.09	0.67			0.44	0.66	0.44	0.22		0.91	0.88	0.22			0.90	0.89	0.88	1.11	0.87	0.89	0.23	0.22	0.89
ヒエ属型						0.63										0.63								
ヨシ属		0.47		0.48		0.47	0.47	0.48								0.48	0.48	0.47				0.48	0.49	0.48
ススキ属型		0.18	0.09	0.09		0.28	0.56	0.09		0.20	0.19	0.65	0.28		0.18	0.28	0.09	0.09	0.19			0.09	0.19	0.19
タケ亜科	0.71	0.46	0.33	0.22	0.22	0.57	0.47	0.33	0.33	0.15	0.41	0.50	0.36	0.22	0.35	0.37	0.14	0.29	0.33	0.11	0.40	0.41	0.07	0.07

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

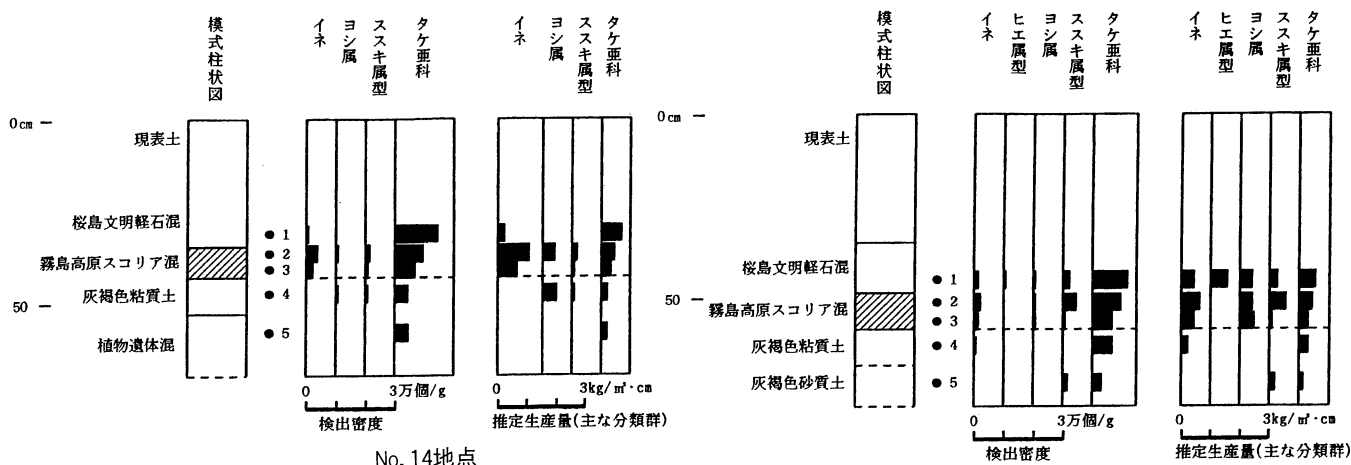


第16図 井手口遺跡 各地点の土層模式柱状図とプラント・オパール分析結果 (1)



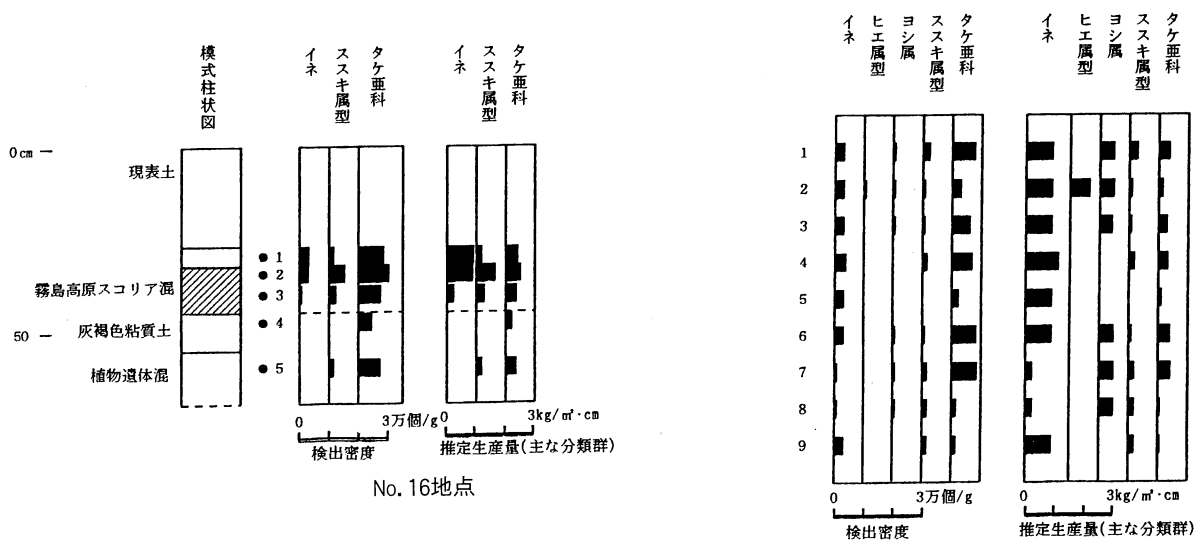
No. 12地点

No. 13地点



No. 14地点

No. 15地点



No. 16地点

A区南西端部遺構精査面 (IV層)

第17図 井手口遺跡 各地点の土層模式柱状図とプラント・オパール分析結果 (2)

第Ⅳ章 まとめ

井手口遺跡では、水田遺構の検出を主眼において調査を進めてきたが、面的には遺構を検出することができなかった。しかし、中央トレンチ土層断面上で、棚田状の段差が認められ、プラント・オパール分析の結果とともに、中世以降の水田遺構の存在については確認できた。

また、弥生から古墳時代の遺物を伴う3条の自然流路を確認した。

自然流路A・Bについて

井手口遺跡では、自然流路Aと自然流路Bが合流する地点で、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多数出土した。しかしながら細片がほとんどで、多くのことを語る資料としては不十分である。ただ、出土した遺物を、器種が明確に判断できることや同一個体でないことなどに配慮しながら口縁部を中心に出土の度合いを調べたところ、本来日常生活に使用する頻度の高い壺や甕に比べ、高杯や小型丸底壺などの出土比率が高くなっており、非日常性の高い遺物の出土傾向が見られた。

また、自然流路Bは、調査区の関係で面的に狭い範囲でしか確認できなかったが、現段階では木脇遺跡の丘陵に向かって直進しているため、流路がさらにのびていくのか、あるいは湧水点など、特異な地形を呈していたのかなどについては不明である。

自然流路Cについて

古墳時代の遺物を伴って検出された自然流路Cは、第Ⅵ層に掘り込まれたもので、直上層は第Ⅴ層である。しかし、水田耕作土の流出といった事態や、第Ⅴ層からも部分的には稲のプラント・オパールが検出されていることなどを鑑みると、水田に伴うものであった可能性も捨てきれない。

第Ⅳ層について

高原スコリアを含む層、第Ⅳ層については、中央トレンチの土層断面上でも観察されたように、水平面と段差といった棚田状の変化点が数か所存在し、稲のプラント・オパールも伴うため、水田遺構が存在することが確認された。

水田跡の時期を決定する遺物を限定するのは難しいが、Ⅳ層中からは、古墳時代、古代、中世の遺物が出土しており（第Ⅱ章第3節）、Ⅳ層中には高原スコリア（10～13C）の他、部分的には桜島文明軽石（1471年）とみられる灰色粗粒も含まれていることから、中世あるいはそれ以降と考えられる。

包含層出土遺物について

Ⅳ層では、上層から中位の遺物は中世のものが中心で調査区内に散在していたが、下層から直下の遺物は流路Cの北側を中心に分布していた。前者は水田が耕作されていた当時に近い時期に、後者は水田耕作以前、高原スコリア降下前の当時の表土面に分布していたものと推測される。

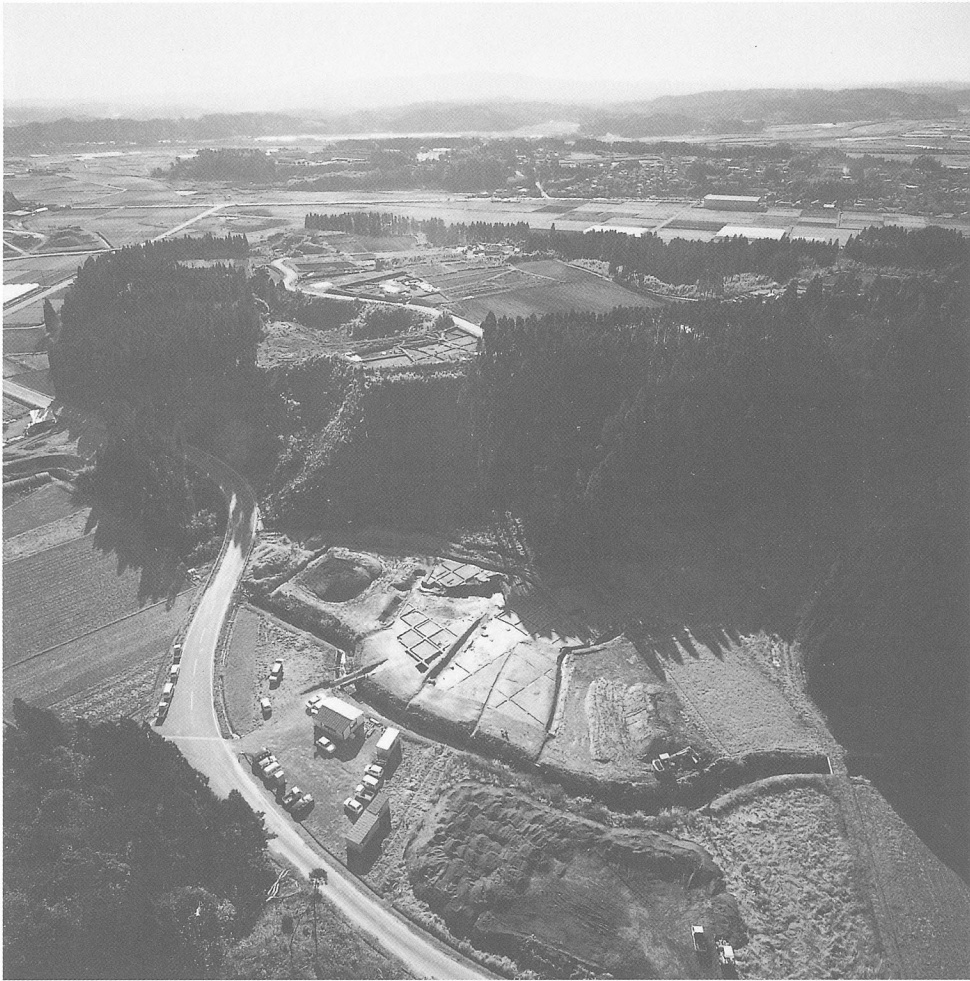
中世の遺物中で、特に注目されるのが99の志野焼向付口縁片である。志野や織部といった安土・桃山時代の茶陶は、入手できる人物が限定されるため、この地の周辺に相当の有力者が存在していたことがう

かがえる。

また、新しい時期の遺物ではあるが、108の銀製簪は、装身具としてだけでなく、明治初頭には兵士が護符代わりに持っていたという記録もあるため、興味深い。

井手口遺跡は、標高50m級の三つの段丘に囲まれた開析谷の合流地点に位置している。しかし、谷部であるが故に、長期にわたって侵蝕作用を受け続け、地形的にも土層の堆積状況においても、かなりの変化を余儀なくされてきたものと思われる。また、出土した遺物も摩耗したものが多く、特に流路内の遺物に関しては、隣接する木脇遺跡を源流として遺跡内に入ったものもあると考えられる。

本遺跡の評価については、本巻に収録された近隣の松本遺跡・塚原遺跡の成果や別途刊行の木脇遺跡の成果報告、また、東九州町屋敷遺跡・内宮田遺跡など、他の宮崎平野内の低湿地遺跡の成果すべてを合わせて論じるべきである。今ここではそれらをじっくり吟味することができないが、本遺跡の調査の成果がどのような位置にあるか、いずれ論ぜられる機会があるものと期待している。



航空写真（北東から）
井手口遺跡を松元遺跡上空から望む
前方台地上に木脇遺跡
さらにその前方には塚原遺跡



航空写真（上空から）
井手口遺跡調査区全景
（調査終了期の状況）



井手口遺跡 調査前の状況（南東より）



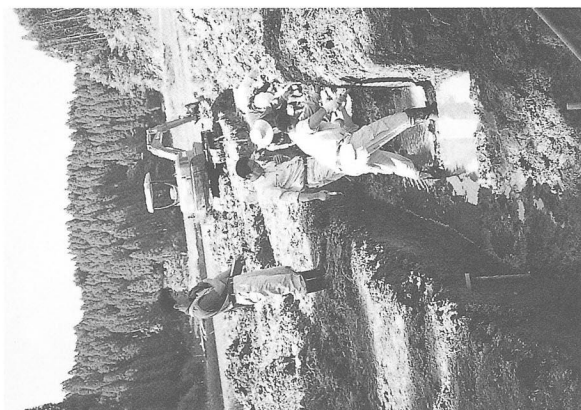
調査区遠景（調査開始時、木脇遺跡より）



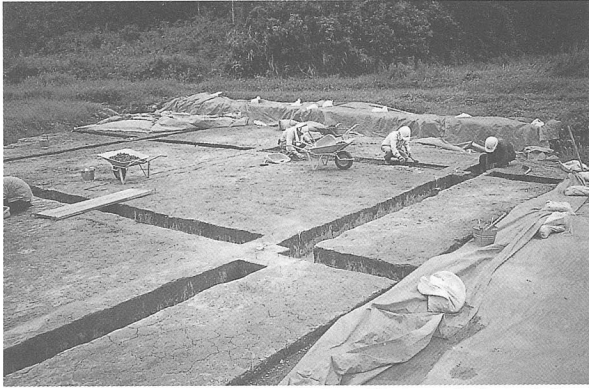
テフラ（火山噴出物）の調査



土層の堆積状況



重機を用いた試掘調査



A区西半部の調査（IV層上面検出、南東から）



IV層面のプラント・オパール分析試料採取（A3・4グリッド）



水田の疑似畦畔検出のためのIV掘下げ（A区A4グリッド）



疑似畦畔？（中央左右方向帯状面、A4グリッド北東部、北西から）



調査区近景（B区、北東から）



調査区近景（中央トレンチをはさみ、右側がA区）



A区東半部 C3グリッド（右写真中央部）
遺物および牛足跡検出状況



A区東半部の調査（IV～V層掘下げ）